

Persona5 —Revealed—

TATAL

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

突如人が変わったようになり、恐ろしい事件を引き起こす精神暴走事件が日夜ニュースを賑わわせている東京。

そんな東京の私立高校、秀尽学園にある日一人の転入生が訪れる。それは精神暴走事件と並んで世間を賑わわせることになる『怪盗団』が人知れず産声をあげた瞬間だった。

怪盗団が進める世直し、『更正』の先に見た偽りの神、優しい嘘で満たされた人々かみの世界。その道筋は今回も変わらない。そのはず、だった。

大衆が集合無意識の奴隷となった世界、自分だけの甘美な夢の偽りの主役となった世界。そのどちらにも染まりきらない不可思議な存在が、神の駒遊びをささやかに乱し、甘美な夢を崩す蟻の巣穴となる、かもしれない。

—————

ペルソナ5の世界観に何も知らない一般転生オリ主をぶちこんでこねこねした二次創作になります。オリ主君はペルソナ使いにはなりませんし、なれません。そもそも原作知識無しです。

シナリオは無印、ロイヤルをこちゃ混ぜて再構成。

ペルソナ5の二次創作に飢えた結果、自給自足することになりました。

TS要素あるためご注意ください。

2023/7/8 追記

ウルト兔 様より支援絵を頂きました！

本作の扉絵、モチーフとしてぴったりの素晴らしい作品です

目次

Reveal the ostentation	149
Unfulfilled ideal	141
134	
Hooking the edge of an idiot	127
Sitting in the easy chair	120
Penetrating ostentation	114
Who is the detective?	106
Rage or glance	96
Pope	
Mercy of Death, kindness of the	89
Not malicious but harmful	82
Interlude — Golden week	75
75	
Collapsing the castle of lust	69
Fist of The High Priests	62
Deepen the bond	55
First declaration	47
Anomen of resistance	40
Intolerable painfulness	32
Evil influence	25
Dark clouds in the sky	18
Unconscious shelter	10
Expected afraid	1
Unexpected encounter	

Interlude—Three women make a	288
Interlude—After a display of	280
Interlude—Are you Wor L?—	273
Interlude—Examination period	267
Raise a sickle—shaped neck	260
Cognitive mystere	251
rupt	
The bank of Gluttony goes bank	242
The ultimatum bank	235
tune	
Revelation of the Wheel of For	228
ridiots?	
Special Providence watches ove	221
Bank of Gluttony	214
In the name of Justice	204
Compound eyes and preening	
198	
The Hanged Man and The Devil	190
Wildcard of judgment	181
Eyesight of judgment	174
Trace tactile of fly	167
Buzzing of fly	159
Detective's right-hand man	

Cinderella or Pretender?	446
e	438
What is pointed out by La Forc	430
Unbidden guest	423
I'm your Wildcard	415
Gleedy eyes	407
Deep dealings	398
Dissonance between them	389
The premeditated murder	381
Timid impress	374
Interlude—To her annoyance	366
Interlude—No way to escape	359
You have no right to interfere	352
Expose invisible symbol	346
Disquieting seed	339
Ear of the devil	331
Eyes of anonymous	324
Weaving spider web	316
ert	309
Like finding a needle in a des	303
The Herophant and Ali Baba	296
Profoundness of ignorance	
arket	

# Unexpected encounter

「転入生の受け入れ、ですか」

「そうだ。来週頭から一人来る予定になっていてな、受け入れと校舎の案内等諸々を頼みたいのだが」

春。始業式や入学式も終わり、桜が学生を優しく迎える季節だ。そんなある日、僕は校長室に呼び出されたかと思えば、開口一番雑用を頼まれていた。

「校長先生、それって一応は先生の仕事では？ いや、校舎の案内とかは生徒がやるのかもしれませんが。受け入れって、生徒会とはいえ一生徒である僕に頼む仕事なんですか？」

僕は顎の下で組んだ手を忙しく組み替えている落ち着きのない校長先生にそう返す。どこからが顎でどこからが首なのか分からない、まるでハンプティダンプティが絵本から飛び出してきたかのような校長先生は、僕の言葉に額に伝う汗をハンカチで拭った。まだそこまで暑くも無いと思っていたけど先生にとってはもう汗をかくような季節らしい。

「そうは言うがね海藤君。君はそこらの大人よりもしっかりしているし、私としても頼りにしているんだよ」

それに今度の生徒は少し厄介な事情もあるし、とぼそぼそと呟いた言葉を僕は聞き逃さなかった。

「厄介な事情とは？」

「うえ!? き、聞こえていたのかい」

「そりゃ目の前にいますからね……。個人情報とかプライバシーってことなら聞きませんけど」

「いや、いや、話しておこう。実はね、来週来る転入生は暴行事件を起こしているな。保護観察中なのだよ」

それって思いつきりプライバシーなんだから話すべきじゃないだろうということを目の前の黄色いハンプティダンプティはあっさりと明かしてのけた。これが仮にも東京の進学校の校長か？ いや、オフレコということなのだろうし、それを明かしてもらえるくらいには

信頼されているのだとポジティブに考えよう。いくら信頼しているも一人の生徒に別の生徒の重大な個人情報<sup>個人情報</sup>を明かすなよというツツコミは我慢した。

「……ハア、分かりましたよ。じゃあ来週は校舎案内します。僕は授業に出なくても構いませんか？」

「あ、ああ、構わんとも。君の成績なら授業なぞ出なくても十分トップだろうからね」

どうせ断ったら校長の横にいる川上という女性教諭が受け入れ担当になるのだろう。見るからにやりたくないという雰囲気を出しているし、この分だと来週もそのまま出迎えそうなので僕が引き受けることにする。いくら前歴持ちだからって転校初日からあからさまに嫌がっちゃ駄目だろう。それで余計に問題行動を起こしたらどうするんだ。

「それじゃあ来週は生徒会室で待機してますよ。朝になったら校門まで出迎えに行きますんで」

「うむ、よろしく頼んだよ海藤徹君」かいとうとわる

その言葉を最後に、僕は息苦しい校長室を後にした。

例えば人生が二度あったとして、一度目の人生を臆気ながらも覚えていたとして。

そんなとき、人は二度目の人生をどのように歩むのだろうか？

そんなことを考えてしまうのは僕がまさしく一度目の人生とでも言うべき記憶をぼんやりながら持ち合わせているからだ。とはいえ、その記憶が少々信用できないのだけれど。三軒茶屋が四軒茶屋だったり、青山が蒼山だったり、僕の記憶と食い違ふところが多々あるのだ。ならば全て僕の妄想なのかと思えば所々合っていたりと、何とも判断に困る。というわけで、僕はこの記憶についてはあまり深く考えずに日々を過ごすことにした。

とはいえ、深く考えないとは言っても小学生の時分にはこの記憶の



影響でアイデンティティを確立してしまい、女子と遊ぶことを恥ずか  
しがる小学生ならではの感覚や、中学生で訪れる反抗期も消え去って  
しまった。むしろ勉強するだけで褒められる学生という身分が楽し  
く、部活なんかにも精を出していたお陰で周りの大人から見れば素直  
過ぎる優等生だったことだろう。

そしてそんな僕は高校進学においては進学実績も良く、家からも近  
い、かつ入試成績で特待生になって授業料免除が受けられるという理  
由でここ、私立秀尽学園高校に進学を決めたのだった。

そんな僕が長々と自分の人生を回想しているのには理由がある。

「……来ない」

そう、転入生が待てど暮らせど来ない。隣に立っていた川上先生な  
んかは朝のホームルームがあるからと早々に引き上げてしまい、時刻  
は既に授業が始まっている十時。校長先生直々に授業公休の許可を  
得ているので授業に出ないことを焦っているわけではないが、ここま  
で来ないと自分が日付を間違えたか、あるいはあのイエローエッグお  
じさんに騙された可能性を疑いたくなる。

「駅からここに来るまでで迷ってるのかなあ。でも昨日挨拶に来たっ  
て言うし、もしかして体調不良で休みとか？」

腕を組んでうだうだと考えを巡らせるも、答えが出る訳も無し。こ  
こは一旦出直すのが吉だろう。そうと決まれば生徒会室で公認サボ  
りを堪能させてもらおう。

そう思い直し、下駄箱前を後にした僕はその足で自分の教室に向か  
うのではなく、生徒会室へと足を運んだ。生徒会室には電気ポットと  
インスタントコーヒーが常備されている。あれやこれやと理由をつ  
けて生徒会に仕事を振って来る校長に対し、せめてこれくらいの役得  
は許してくれとねだった結果だ。自宅から持ち込んだカップにコー  
ヒーを注ぐと、僕は椅子に腰かけて読みかけの本を開いたのだった。

キーンコーンカーンコーン

耳に馴染みどころかタコが出来過ぎて耳の形が変わってしまいそ  
うなくらい聞きなれたメロディに顔を上げて時計を見れば、時計の針  
は昼休みに入ったことを示していた。

「結局午前は来なかったな。この辺りで事故とかあったっけ？」

ポケットに入ったスマホでニュースサイトやSNSを確認するも、学園の近所で事故があったというニュースは無い。という事は巻き込まれた可能性は無しだ。後は道に迷ったという線が濃厚だろうか。例えば遅刻しそうだから焦って近道しようとして変な裏路地に入ったりとかしたのだろうか。

「……ま、気にしても仕方ないか」

昼休みが終わったらまた下駄箱に顔を出してみよう。そう思い直し、カバンから今日の昼ご飯を取り出す。今日は朝にコンビニで買ったサンドイッチだ。行儀が悪いことを承知で本を開いたまま片手でサンドイッチを掴み、口に運ぶ。そもそも片手間に食事が出来るようにということでも生み出された料理なので、これが本来のスタイルなのだとも思うけれど。

「朝から姿が見えないと思ったら、こんなところでサボってたのね」

ただ、そんな優雅な昼休みは早々に終わりを告げる。咎めるような色が滲んだ口調と共に生徒会室に入ってきたのは、我らが秀尽学園の生徒会長である新島真。ちなみにこの学園で生徒会長とは生徒と教師両方から雑用を押し付けられる悲しき中間管理職を指す。

「んぐ、サボりとは心外な。校長先生から直々にご指名を受けて朝から待機してるんだよ」

「ご指名って……、ああ、例の転入生。でも、そんなの朝のうちに終わったはずでしょ？」

僕の対面に腰かけ、可愛らしいお弁当箱を開けながら新島さんは鋭い目でこちらを睨みつける。それに対し、僕は肩を竦めてみせることしか出来ない。

「それが道にでも迷ってるのか午前中は待ちぼうけ喰らっちゃったんだよね。なので午後も引き続き待機ですね」

「ちようど良いサボりの口実にしないで欲しいわ、もう」

呆れたように息を吐くと、新島さんは自分のお弁当を食べ進める。僕はというと二つ目のサンドイッチの包みを破ってパラパラとページを捲り、しばし黙々と各々が食事を進める時間が過ぎた。新島さん

も僕も食事をしているときはあまり話さないタイプだ。

生徒会長である新島さんとは、入学時から何かと関わりがある。僕が特待生ということでライバル視していたのか、入学早々話しかけられ、テストの点数なんかで勝負をしていた。二年生になり、彼女に引つ張られるままに生徒会活動に参入してしまい、気が付けば三年生になって副会長までやらされている。先生方からちよくちよく雑用を振られるくらいで大した仕事は無いので専ら生徒会室でこうやって駄弁っているだけなのだけれど。

「授業抜けてついていけなくなっても知らないわよ？」

「一回抜けたくらいじゃそんなに変わらないと思うよ……って言いたいけど、うちの先生方妙にマニアックなこと話すからなあ。あながち否定できないのが恐ろしい」

お弁当を食べ終えた新島さんに痛いところを突かれた。なんで高校の授業でフロイト心理学の話が出てきたりするんだらうね、うちの学校は。一応私立進学校で学生のレベルも高いからか、先生方はよく張り切ってマニアックな知識を披露し、あまつさえそれをテストに出題してきたりする。普段の予習復習だけじゃ満点は狙えない、というよりは満点なんて取らせてなるものかという先生方のプライドがあるのかもしれない。

「そうだったらノート見せてね、新島さん」

「仕方ないわね。でも次の中間テストは私が勝つわよ」

「そうは問屋がおろさないぞ、とつつあん」

「誰がとつつあんか！ 見てなさい！」

信じて良いか怪しいとはいえ、これでも人生二周目、のはずなのだ。簡単には負けてやれない。いや、割と危ないことがこの二年間何回もあったんだけどね。それに全国模試だと僕より点数良い人何人もいるし。人生何周しても本当に頭の良い人には敵わないんだなってよく分かる。

「それにしても、転校初日からサボりだなんて……。前科持ちとも言うし」

「へいへい会長さん。会っても無いのに決めつけは良くないぜー？」

めつちやくちやイケメンで会長も会ったら惚れるかもよ?。」

「なんでよ。そこまで軽い女じゃないからね、私」

「ま、軽いかどうかはともかくとして。人柄っていうのはきちんと自分の目で確かめないとね」

それだけ言うと僕は席を立つ。時計を見れば昼休みも半ばを過ぎようとしている。実は体調不良で今日は休みなのか、あるいは何かしらのアクシデントで遅れているのかは分からないけれど、もう一度様子を见に行っておくべきだろう。

「それじゃ、鍵はよろしく」

「ええ、分かったわ」

片手をヒラヒラと振りながら生徒会室を後にし、そのまま下駄箱へと歩を進める。そろそろ食事を終えた生徒達が廊下で屯していたり、グラウンドでサッカーなんかをしているのを横目に歩けば、目的地の昇降口にはすぐに辿り着いた。そして予想外なことにそこには先客もいた。いや、その先生の立場を考えると当たり前なのかもしれない。僕は靴を履き替えると、玄関口に佇むその先生の横に並ぶ。

「こんにちは、鴨志田先生」

「む、海藤何の用だ」

腕組みをして校門を睨み付けていた鴨志田先生は僕の挨拶に少し不機嫌そうに口を歪めた。よく鍛えられたガタイと相まってその雰囲気は高校生にぶつけるにはやや恐ろしい。

「校長先生に今日から来る予定の転入生を案内するように頼まれたんですよ。今日は体育もあつたんですし、鴨志田先生も聞いていませんか?。」

「ツチ、そういえばそうだったか。わざわざご苦労なことだな」

午前中には鴨志田先生の担当する体育の授業もあつたから僕が公欠の許可を貰っている連絡は入っているはずだ。それを忘れていたのか、それとも別の考えがあつたのかは分からないが、聞かれたからには素直に答えておく。

「そういえば先生、この間はありがとうございました。陸上部の存続に力を貸してくださって」

「何が力を貸して、だ！ あんな脅すようなことしやがって！」

僕の言葉に鴨志田先生が食って掛かる。バレーボール元オリンピック金メダリストが放つプレッシャー全開で凄まじいと流石に身震いしてしまいそうになるが、努めてにこやかな笑みを絶やさないように意識する。

「まあまあ、そんなに怒らないでくださいよ。僕だって心苦しかったですから」

「フン、お前が校長のお気に入りに入りじゃなけりや」

そう言ったとき鴨志田先生は鼻を鳴らして口を閉ざしてしまった。僕が校長先生のお気に入りに入りじゃなければ何をされていたんだろうか。いや、ロクなことじゃないのはハッキリしているけれども。

それ以上は互いに気にしないように黙って過ごすことしばし、校門に二人の生徒が姿を表した。

一人は金髪で上着の下には派手な色合いのTシャツを来た男子生徒。もちろん転入生ではない。というか僕の顔見知りだし、鴨志田先生のターゲットもこつちだつたんじゃないだろうか。

「午前中を丸々サボりとは、随分な態度だな、坂本オ」

「鴨志田！」

顔を合わせるなり挑発的な口調で男子生徒を煽る鴨志田先生。二人の因縁を知らないわけではないが、もう少し取り繕ってはいただけないものだろうか。転入生の前なんだけどな。特に鴨志田先生はいい大人なんだし、と喉まで出掛かった言葉を押し込めた。

「何か事情があつたのかもしれないですし、昼休みもそろそろ終わりますうだから反省については放課後でも良いんじゃないですか、先生？」

「ハア？ 何を甘いことを」

「もう昼休みも終わりです。先生も午後の授業があるんじゃないですか。僕も残り時間で転入生を案内なんて無理ですし、放課後に坂本君の事情聴取も兼ねて僕が対応しますよ。手に負えそうになかったら鴨志田先生に任せますから」

鴨志田先生と坂本くんの間には身体ごと割り込ませて仲裁する。こ

の二人はまあ相性が悪いから可能な限り離しておかないとこつちが気が気でないのだ。鴨志田先生も時計を見て僕に分があると思つたのか、忌々しそうに僕と坂本くんを睨み付けてから振り返り、肩をいからせて歩いて行ってしまった。

「アザツす海藤センパイ」

「あんまり回数重ねると庇えないから気を付けてね。何か事情があるんだとは思うから、きちんと放課後に聞かせてもらおうよ。ほら、早く教室に行きな」

坂本くんはチョイ、と頭を下げると急ぎ足で昇降口へと向かつていった。それを見送り、僕は残つたもう一人に向き直る。

「と、ごめんごめん。放置しちゃったね。僕は海藤徹。校長先生から君の案内を任せられたんだ。とはいえ名前を聞けてないからまずは聞いてもいいかな」

そう言つて右手を差し出す。そうしながら、不躰にならない程度に相手を観察する。新島さんにはイケメンだったら、なんて言つていたけど。これはある意味予想外だった。

その子は眼鏡の奥の目を揺らがせ、数瞬の悩みを見せた後でおずおずと同じように右手を差し出してきてくれた。

「雨宮、あみやれん雨宮蓮、です」

黒い毛先が少し跳ねた癖つ毛、肩につかない程度に揃えられていて黒染めしたようにも思えない。そして自信無さげに揺れながらこちらを観察している目。校長先生の事前情報から想像していた人物像との食い違いに僕も少し処理時間を要した。

「よろしく、雨宮蓮さん。学年が一つ違うから気が引けるかもしれなけれど、分からないことがあつたら遠慮せずにも何でも聞いてね」

それでも驚きを表に出さないようにしながら微笑む。何にせよ笑顔での対応が大事だ。その気持ち伝わったのかさそうでないのか、こちらを見ていた不安げな目が僅かに和らいだのが分かった。

「よろしく、お願いします」

そう言つて小さく微笑みを浮かべた彼女に、僕は取り敢えずファーストインプレッションは問題無さそうだと内心胸を撫で下ろしたの

だ  
っ  
た。  
。

## Expected afraid

「取り敢えず昼休みも終わるし、職員室までの道すがら簡単に紹介するね」

そう言つて彼女と並んで廊下を歩きながら、中庭を見せたり、道中の教室や階段を示して簡単に案内する。本格的な案内は放課後にするからと、最初は雑談に徹する。玄関口の初対面はなんとかクリアしたが、そこから更に距離を縮めるのは中々骨が折れる。何より相手がまだこちらを警戒しているのだから。その理由は僕が異性だから、というだけではない。

「ねえ、あれつて……」

「あれが保護観察中の……」

「あんな顔してるけど、相手に酷い怪我させたらしいよ……」

周囲から聞こえてくる無遠慮な囁き。それが彼女を過剰に萎縮させていた。せつかく僕が緊張を解そうとしたのに、校舎に一步入るだけでこれだ。こんな噂を広めてくれたあの体育教師にこめかみが痛むような気がしてくる。自分のカリスマを保つためといえ手段を選ばなさすぎだろう。

多くが知り得ない秘密を自分は知っていると喧伝し、その影響力を暗に示す。そうすることによって人は意識的、無意識的を問わずその人物を自身より上だと感じてしまうのだ。特に学校のような階級層、年齢層が歪な環境ではその効果は絶大だ。

「……っ」

周囲から投げ掛けられる排他的な視線。一人二人ならまだ耐えられても、周囲全員がそうとなると耐えられる人間はそういない。その証拠に、雨宮さんは周囲と視線を合わせないように俯き、陰口が耳に入るたびに僅かに肩を跳ねさせている。これは、どうしたものだろうか。

「あ、そうだ。雨宮さん」

「っ、はい……」

もうすぐ職員室に着く、というところで僕は彼女に声を掛け、手招



きをして進路を変える。目指すは階段の先、もう時間的にそこまで遠くには行けないが、このまま教師に彼女を預けるのも気が引けた。

「職員室行く前に最後にここだけは紹介しておこうと思つてね」

僕が案内したのは生徒会室。別に今すぐに遅刻の理由を問い質そうなんていうわけじゃない。

「ここは生徒会室なんだけどね。放課後は大体僕か生徒会長がここにいるんだ。なにか困ったことがあったらここに来てね」

「え、つと……はい、ありがとうございます？」

きよんとした様子だけど、おずおずと頭を下げる雨宮さん。うーん、まあこれだけじゃ意図が伝わるとは思っていなかったけれども。「んとね、何かこつちの手違いで守るべき個人情報プライベートが守られていなかったからさ。少なくともここに来れば周りの鬱陶しさからは切り離されると思うんだ。色々と言われたりもすると思うけど、最初、はもう坂本くんか。二番目にこの学園で知り合った仲として、いつでも相談に乗るよ」

自分で言っていて小つ恥ずかしくて顔が熱くなりそうだが堪える。というか見ようによつては初対面で口説いてるようには見えないかこれ？ いや落ち着け、これは生徒会副会長として当然の気遣いだ。転入生が男女どちらであつても同じことをしていたはずだ。

そう自分に言い聞かせて気恥ずかしさを抑える。人生推定2周目であつても恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。これで雨宮さんにドン引きされていようものなら結構な精神的ダメージを受けることは間違い無しなので反応を見ないように彼女の前に立って改めて職員室を目指す。

「それじゃ、気を取り直して職員室に行こうか。担任の川上先生を紹介するよ。放課後にまた詳しく校内を案内するから、また教室に迎えに行くね」

足音でついて来てくれているのは分かるが、何も反応が返つてこない。うーん、やはりこれは外してしまった。まあ言ってしまったものは仕方ないし、と気を取り直して職員室まで連れていき、現国教諭の川上先生に案内を引き継ぐ。げんなり顔をされてしまったが、仮に

も担任なんだから初対面くらいは取り繕ってくれないかなあ。それを直接言っても誰の得にもならないから口をつぐみ、職員室を後にする。すれ違いざまに精一杯のエールを視線に込めて雨宮さんとアイコンタクトを交わしておく。とりあえず放課後までは頑張っただけ。生徒会室でインスタントコーヒーくらいは淹れてあげられるから。

校長先生から与えられた仕事はこれで半分終わった。放課後までやることもないし、大っぴらに授業をサボるのもこれくらいにして午後からは真面目に授業に出ておこうか。職員室を出た足でそのまま自分の教室へと向かう。

がらり、と扉を開けば教室は次の授業に備えて生徒達は皆席に着いたまま、それでもガヤガヤと前後の友人達と談笑していた。席の間を縫うようにして自分の席を目指す。窓際の最後尾、学生にとっては最高の位置だ。サボるにしろ、内職するにしろ後ろの席というのは見づかり辛い、というのはただの生徒側の誤解でしかないけれど。実際は教壇から見ると一番見付けやすいのは最後尾の不審な動きだったりする。そのため一段高い位置に教壇があるのだし。席に着いた自分は次の教科書とノートを用意すると、先生が来るまでの短い時間ではあるものの、気になって読みなかけだした本を開く。けれども頭に甦るのは先の職員室ですれ違いざまに見せた転入生の不安そうな顔だった。

(急に知り合い一人もない場所、それも皆が白い目で見てくる環境に放り込まれたんだもの、しょうがないよなあ)

暴行事件を起こしたと校長は言っていたけれど、第一印象からしてそんなことをするような子には見えなかった。実は話してみるとエキセントリックな思想を持っていたりするのかもしれないけれど、僕としては今のところ危険視する必要があるとは思えないし、むしろ周囲の白眼視に耐えられなくなって自分自身を傷つけたりしてしまわないかこそを気遣うべきだろう。

「おい、海藤。もう授業始まるってのにいつまで本読んどるんだ！」

深く考え込み過ぎていたのか、教壇に立つ社会科教諭の牛丸先生に

一喝される。頭を下げながら本を仕舞い、ノートを開く。牛丸先生はその様子を見て不機嫌そうに鼻を鳴らすとチョーク片手に黒板へと向き直る。あの右手から繰り出される超速チョーク投げが来ないことにホツとする。あれを避けられるかは五分五分だ。

放課後、HRを聞き流しながら、さつきまでの授業のノートを読み返す。授業の合間に行っている簡易な復習だけでも、これが意外と馬鹿に出来ない。うちの教師陣のマニアックな知識はそれこそ授業直後に反芻して少しでも脳に焼き付けておかないとすぐに忘却の彼方に消え去ってしまうのだ。そうやってHRをやり過ぎた後は手早く荷物をまとめ、階を一つ降りる。目指すは雨宮さんの教室だ。

教室の外から見てすぐに雨宮さんの姿を見付けられた。彼女の周囲だけ人がいないのだから。まあ転入初日に連絡無しで半日も遅刻してきたし、噂もあつて話しかけるのは躊躇するだろう。高校生なんてまだまだ子どもなんだし、あんまり責められるものじゃないけどここまであからさまだとため息もつきたくなる。

僕は周囲の視線を集めるのも構わずズカズカと教室に足を踏み入れると、ぼんやりと自分の机に視線を落としていた雨宮さんに声を掛けた。

「雨宮さん。時間、大丈夫かな。特に用事が無ければ昼にも言ったように校内を案内しようと思うんだけど」

「えっ、と…… よろしくお願いします」

顔を上げた雨宮さんはそう言ってペコリと頭を下げる。それじゃあ行こうか、と彼女を伴って教室を出たところで、見慣れた金色とぶつかりそうになった。

「うわっとおっ!」

「おっと、坂本くん?」

教室の扉のすぐ近くに佇んでいたのか、少々大袈裟とも思えるくらいのリアクションだったけれども。

「坂本くん、このクラスじゃなかったよね？ ああ、雨宮さんに何か用事でもあったかな？」

「あー、ええつとー…… そんな感じというか、何というか……」  
右手を頭の後ろに持っていていきながら、それはもう見事に目を泳がせている坂本君。どうしたんだろうか、僕がいては話しにくい内容？

「もしかして告白？ 会って一日だろうにすごいね」

「こ!? いやいやいやいやちげーっすよ！ ただちよつと今朝のこと  
で話したくて……」

僕の言葉に慌てた様子で否定してくる坂本君。それにしても今朝のこと、ということは雨宮さんと坂本くんの大遅刻はやっぱり何か事情があったということなんだろう。あちこちに目をやって気まずそうにしているし、このままここで話したくないことなのかもしれない。

「今朝のこと、ね。それじゃあ二人とも生徒会室まで来てくれる？」

「ええっ!? なんでなんすか!？」

「いや、だって今朝の遅刻のことだったら僕もちゃんと事情聴取しないといけないし。鴨志田先生にもそう言ってみて見逃してもらったわけだしね。あとは雨宮さんの案内もしてあげたいからついでに」

「うーん、いや、でもなあ……」

どうだろう、と促してみるも坂本君の表情は優れない。おっと、これは僕にも話せない内容なのかな。とはいえここでこれ以上話していても目立つだけだし、場所は変えたい。

「ま、取り敢えずついてきて。坂本くんも、ね？」

「…… うっす」

にっこりと笑みを浮かべて坂本君と雨宮さんを交互に見る。すると二人とも何故かタラリと冷や汗を流しながら頷いた。脅かすつもりはなかったんだけど、強引すぎたかな。僕は周囲がヒソヒソとこちらを見ながら話すのも無視して二人を伴って生徒会室に向かう。こういうのは周りの目を気にすると余計に怪しく見えるものだ。堂々と、なにも疚しいことなんか無いと言わんばかりに胸を張っていればいい。実際疚しいことなんて無いんだし。生徒会室に入った後は、誰

も入って来られないように鍵を掛ける。

「これで僕たち以外にここでの会話を聞ける人はいないよ」

二人に着席を促しながら、水が入っているのを確認して電気ポットの電源を入れる。カップの数が足りないから紙コップになつちやうけど、仕方ないか。

「二人とも飲み物はコーヒーしかないけど、良いかな？ 砂糖とミルクはあるから自由に使ってくれていいよ」

沸騰したのを確認してインスタントコーヒーを用意し、砂糖とコーヒーフレッシュの入った容器を二人に差し出す。僕はブラック派だから何も入れないままでけど、坂本君は一口飲んですごい顔をしたかと思うと、砂糖をポイポイと放り込んでいた。そして雨宮さんはと云えば、

「おつ、雨宮さんもブラック派なんだね、珍しい。仲間を見付けたみたいで嬉しいな」

「……」

熱いのか、チビチビと飲み進めてはいるが、彼女は砂糖もミルクも入れていなかった。カッコつけたがりな男友達には何人か無理してブラックを飲む人間もいるが、そういう人間は得てして苦味で無意識に顔が歪む。彼女にはそういった様子も無いので、自然に苦味を楽しめているんだろう。まあインスタントコーヒーだからそこまで美味しい、というわけでは無いだろうけど。

「どうだろう、朝に何があったのか聞かせてもらえないかな？」

「…… 信じてもらえねーと思うんですけど」

「学校に行こうと思ったら城だった」

二人の口から飛び出した言葉に紙コップを傾けた手が止まる。

「…… 流石に初対面でそんなところに行くのは良くないと思うよ？」

「はっ」

「いや、お城って……」

「いやいやいや、違うっすからね!!」

僕が言わんとしたことを理解したであろう坂本君が顔を真っ赤に

して否定する。雨宮さんも顔を赤くして俯いていた。

「学校まで行ったのにその学校がお城に変わってたんすよ！」

「学校が城に……？」

「実は……」

そこから二人の口から語られた話にはわかには信じがたいものだった。普段通り登校してみたなら学校が城に変わっていて変態的な格好をした鴨志田先生が王様みたいに振る舞っていた？

白昼夢を見たか、随分とハッピーな何かをキメたんじやないかと疑いたくなる。けれど、坂本君も雨宮さんもそんなことをする子には見えないし。

「……なるほどね」

「やっぱり信じられないっすよね。」

腕組みをした僕に、坂本君は肩を落としながらポツリと呟く。雨宮さんも表情が暗い。

「まあこの話をしたのが君達のどっちか一人だけだったら信じられないって言うところだったんだけどね。二人とも必死だし、何よりその怖がりようは嘘じゃなさそうだ」

僕はそう言って坂本君の手を指し示す。空っぽになった紙コップを握る彼の手は、先ほどから小刻みに震えていた。話を聞く限り殺されそうになつたらしいし、この現代日本でそんな経験をして平然としてられる人はまあ稀だ。だからこそその怯えようは嘘じゃないと思つた。

「二人揃つて変な夢を見たのか、本当に何かおかしいなところに迷いこんだのかは分からない。けど、今日は帰つて心と身体をゆつくり休めた方が良く。雨宮さんの案内も明日にしよう」

坂本君は驚いたように目を丸くしてこっちを見る。

「えつと、良いんすか？」

「良いも何も、僕は事情聴取するってだけで別に反省文を書かせようってつもりも無いし。先生方には適当に言っておくから帰りな。帰りに寄り道でもして甘いもの食べればリフレッシュ出来るんじゃない？」

生徒会室の扉を開けて二人に帰るように促す。二人はペコペコと頭を下げながら部屋を後にし、昇降口へと歩いていった。それを見送ってから、僕は生徒会室に戻って二杯目のコーヒートを淹れる。

「さて、これをどう誤魔化して先生方に伝えようか」

二人してお城で死にそうな目に遭って命からがら逃げてきました、なんて言っただけが大人が信じてくれるわけ無いし、さっき僕がしたのと同じ誤解をしようものなら二人の学園生活に致命的なダメージになる。

僕はパソコンの前に、報告書の書き方をどうすべきかとしばし頭を悩ませるのだった。

## U n c o n s c i o u s   s h e l t e r

転入生を受け入れた翌日、4月13日は秀尽学園の一大イベントである球技大会が開催される。新学年となったクラスの親睦を深めるという名目で行われるそれは、男子生徒にとっては日頃の有り余る体力を思う存分発揮する良い機会だ。とはいえ、鴨志田先生が教師となつてからは一部の女子生徒も熱狂するイベントになっているが。

「キヤー！・ 鴨志田センセー！・」  
「スゴイ！」

体育館から聞こえてくる黄色い悲鳴をよそに僕は校舎内を適当に練り歩く。球技大会の運営は基本的には保健委員と体育教師が主軸となつて行われるが、足りない手については生徒会も協力する必要がある。そして僕はと言えば、鴨志田先生からのたつてのご希望でサボりがいないか校内の見回りに回されていた。

「…… 気に入らないからつてここまであからさまなことするかなあ」

自分が一番活躍出来るフィールドに口出ししてきそうな人間を遠ざけるつて、やつてることが中学生と変わらないと思うんだ。というか学生が主役のイベントで教師チームとのエキシビジョンマッチが3、4試合も組まれてるつてどうなんだろう。先生方も日頃のストレスを身体を動かして解消したいんだろうけどさ。

などと益体も無いことをうだうだと考えながら校内を見回る。途中、教室にたまつてサボっている子達に形だけの注意をしながら歩いている。年々、球技大会をサボる子が増えている気がするなあ。真面目な生徒も、体力が豊富な運動部連中もサボったりしてることとは球技大会そのものが魅力的になつてないんだろうな。

「うーん、食堂の無料券だけじゃそろそろ誤魔化すのも難しくなつてきてるかな」

僕が生徒会に入ったときに提案した景品だ。導入した当初は結構な反響があつたものの、3年目ともなればそのインパクトも薄れつつある。根本的な対策を取らなくちゃいけないよなあ。



「でも鴨志田先生に球技大会出るなどは流石に言えないし……」

そんなこと鴨志田先生は絶対に認めないし、鴨志田ファンが黙っちゃいけない。腕を組んでうんうんと唸りながら歩いていけば、気づけば中庭に来ていた。ふと視線を巡らせてみれば昨日も見たペアが自販機の並ぶ一角に佇んでいるのが見えた。

「……！……… ってか！」

何を話してるのかは聞こえないが、中々坂本君がヒートアップしている様子。体育館で何かあったのかな？ ついでに二人に声を掛けようと近づいて行くと、僕より先に二人に声を掛けた人がいた。

「アンタ達、もう噂になってるから。誰も協力なんかしないし」

声だけで分かる険悪な雰囲気。坂本君のとは違う天然物のブロンドヘアに青い目。野暮つたい学校指定のジャージ姿が様になるのはこの子くらいのもんじゃないだろうかと思うような美人が坂本君、雨宮さんと対峙していた。

学年は違うけれど彼女の名前は知っている。高巻杏。あまり校内に良い噂は聞かないが、本人もそれを気にしているのか気にしていないのか、他人とあまり関わったりしている様子もないという。

あんまり関わりと余計なお節介になるだろうが、これ以上話していると喧嘩になってしまいそうだ。そう判断した僕は一触即発の雰囲気漂わせている三人のもとに姿を現す。

「休憩するのは良いけど喧嘩はダメだよ」

「っ!? 海藤センパイかよ、教師かと思ってビビったあ〜」

「聞かれちゃマズい話でもしてたのかな〜?」

「いやいや! そんなことはないっすよお?」

坂本君の顔を覗き込むと、わざとらしく視線を逸らして誤魔化そうとする。相変わらず隠し事が下手だなあ。とはいえ本人が話したくないと思っていることを無理に暴くのもおかしな話だし、あんまり追求するのは止めておこう。僕はくるりと振り返って今度は高巻さんに視線を合わせる。

「えっと、2年の高巻さん、だよな?」

「……何ですか?」

高卷さんは警戒心を隠そうともせずはこちらを睨み付ける。いや、美人が凄むと滅茶苦茶怖いな……。いや一方的に名前だけ知られてたらそりゃ警戒もするか。

「ごめんごめん、自己紹介がまだだったね。僕は3年の海藤っていうんだ。一応生徒会役員で今日は球技大会をサボってる子がいないか見回りしてるんだよね。高卷さんは目立つし、モデルとかもやってるから名前知ってたただけだよ」

「……そうですか、じゃあ私はこれで」

警戒させないように笑顔を心がけていたが、失敗。初対面じゃそれそうなるわな、という感じなのであまり気にしない。それ以上に何か嫌われているような気もするけど、覚えが無いので気にしても仕方ない。坂本君と雨宮さんに向き直る。

「僕なんか嫌われるようなことしたかな？」

訂正。気にしても仕方ないけど気にしないわけじゃないのだ。

「いや、アイツは誰にでもあんな感じっすよ。てかこんな日に見回りとかセンパイも大変すね」

坂本君の言葉に多少なり救われるよ。

「まあ生徒会って要は先生方の雑用係だしね。腹立つからしつかり権利も行使するけどさ。坂本君は足の調子はどう？」

「ボチボチつてとこっす」

坂本君は足を上げ下げして力無く笑う。去年、陸上部のエースだった坂本君は無茶な練習で足を壊してしまい、臨時顧問だった鴨志田先生とひと悶着あったのだ。坂本君とはその時から関わる仲である。

「そっか、一人も休憩はそれくらいにして戻りなよ。せっかく食堂無料券を景品にしてるんだし、景品狙って頑張ってみてよ」

自販機に小銭を入れてジュースを三本購入。坂本くんには炭酸を、雨宮さんには無難にスポーツドリンクをそれぞれ手渡しておく。二人の境遇を考えると、これくらいは許されるだろう。

ジュースを受け取った二人はなんとも言えない表情で僕を見ていたが、気にしないようにして退散。ある程度仕事はしたし、僕も後は生徒会室で今買ったコーヒーでも飲みながらのんびりしよう。自分

の出る競技まではどうせ暇だし。

放課後、今日も帰りのHRを適当にやり過ごした後は、生徒会室に鞆を置いて体育館へと向かう。球技大会の日は半ばこうやって体育館に向かうのがルーチン化していた。体育館に近付けばボールが弾む音と気合いの入った声が聞こえてくる。相も変わらず熱心なことだ。

「こんちわー」

誰も聞いてないだろうけど、体育館の扉を開きながら挨拶をしておく。それと同時に僕の顔の真横付近、金属製の扉に豪速球で飛んで来たバレーボールがけたたましい音を立ててぶつかった。

「……なんだ、海藤か。相変わらず暇な奴だな」

ボールの出所を辿ってみれば、そこにはあからさまに表情を歪めた鴨志田先生。

「どうも。恒例の見回りです」

「チツ、練習の邪魔だけはするなよ」

これ見よがしに邪魔だオーラを出してるけどそれは敢えて無視して体育館の隅を歩いてバレー部の練習風景を眺める。この見回り、という名の監視は去年の春頃からちよくちよくやるようになった生徒会の、というよりは僕の新しい仕事だ。定期的に体育館やグラウンドの設備を見て回り、各部活動がどのように活動しているかを確認、予算分配の参考にするといった名目で行っているわけだけれども、まあ一番の目的はバレー部の過剰な練習の監視だ。鴨志田先生はバレーボールの元金メダリストということもあって生徒に求めるレベルが異常に高い。最初に見たときはただの拷問じゃないかと思紛うようなシゴキをしていたものだから、その様子を撮影して校長先生に突き出したりもした。と言ってもバレー部は全国大会優勝したりといった実績もあって校長も強くは言えない。なので撮影した映像を引つけて鴨志田先生に無茶な練習をしないように直談判した。

その結果、僕が見ている前では目に余るようなシゴキはしないようになった。だけでもそれでバレー部の実績が落ちたなんて言われるのも癪なのでちゃんとバレーや運動科学について勉強し、鴨志田先生に言われっぱなしにならないように知識も身に付けた。

「おい三島ア！ サボってるんじゃない！」

鴨志田先生の怒号が飛ぶ。対象はコート内でフラフラになっていた三島君だ。罰とばかりに先生の強烈なスパイクが炸裂し、辛うじて腕で弾いたものもんどり打って倒れてしまう。

「そんなんじゃないつまで経つてもレギュラーになれないぞ！」

うーん、これは体罰か、厳しい指導か微妙なラインだ。バレー部は男子も女子も鴨志田先生こそ絶対という思想が大なり小なり浸透してしまっているから内部告発も期待出来ない。動画をSNSに公開すると言えば校長だけじゃなくバレー部の父兄からも止めろと言われる始末だし。せめて出来ることと言えばこうして目を光らせて被害が深刻化しないようにするくらいだ。

僕はフラフラと覚束ない足取りでコートから出てきた三島君にタオルとスポーツドリンクを差し出す。

「お疲れ。大変だね。鬼コーチのシゴキってのは」

「あ……、えつと、はい……」

ありがとうございますと聞こえます、と聞こえるか聞こえないかくらいの声量で呟いた三島君は壁にもたれかかって失った水分を補給する。

「部活に懸ける青春ってのも良いけど、身体と心を壊さない程度にね」  
それだけ言い残して壁から離れる。男子バレー部は今は交代で試合形式の練習を始めており、鴨志田先生の興味は体育館のもう半面を使用している女子バレー部に移っていたからだ。

女子バレー部は先ほどの男子バレー部よりも優しい指導が行われている。傍目に見てボディタッチが多い気もするけれど、喜んでいる生徒もいるからどうしようもない。

「鈴井く。お前は相変わらずフォームが固いなあ。トスを上げるときはこうやって腰を落として……」

鴨志田先生のお気に入りは鈴井さんらしく。彼女に対しては特に

念入りな指導が行われる。念入り、というか変態的な指導だ。対する鈴井さんとは言えば俯いて身体を余計に固くさせてしまっている。とてもじゃないが健全な指導風景には思えない。

「鴨志田先生、一回先生がお手本を見せてあげるのはいかがですか？」  
「ああん？ 何を勝手なこと言ってるんだ海藤。部外者が口出しをするんじゃない！」

「でも元金メダリストのプレイを見るってすごく勉強になるじゃないですか。それにあんまりベタベタ触るのは指導じゃなくてセクハラですよ、先生」

セクハラ、と言われて鴨志田先生の顔が歪む。本人も自覚はあった、というかそのつもりでやっていたんだろうしね。傍から見てもイヤらしい目してたよ、先生。

「……仕方ない、おい。俺に向かってスパイク打ってこい！ しつかり見ておくんだぞ、鈴井！」

「は、はいー」

これ以上言い争っても良いことは無いと悟ったのか、鴨志田先生はコートの中に入れて構える。鈴井さんは壁際に立つ僕の隣までそそくさと小走りで退避してきた。

「……その、ありがとうございます」

「あー、気にしないで。毎回助けてあげられてるわけじゃないし。ほら、ちゃんと見てないとまた鴨志田先生にどやされるよ」

小声でこちらにお礼を言ってくる鈴井さんにそれだけ言うと、僕もコート内の鴨志田先生を観察する。流石に元メダリストだけあって構えが自然だ。対面のコートから放たれる女子にしては球威の強いスパイクを、鴨志田先生は難なく捉え、優しくトスを上げる。場所も完璧だ。こう見るとやっぱりの人もスゴい人なんだよなあ。セクハラ癖とガキ大将気質なのが玉に瑕なんだけどさ。

「ほら、ちゃんと見てたか？ 次は鈴井がやってみろ！」

「はいー」

鴨志田先生の指示に鈴井さんはまた小走りでコートへと戻っている。その途中でチラリと肩越しに僕を振り返ると、ありがとうございますと目礼

してきてくれたので手を振り返しておく。律儀だなあ。そこまで気にする必要のないのに。

結局、バレー部の練習が終わるまで何かと理由をつけて体育館に入り浸っていたため、僕が学校を出たのは19時を回った頃になってしまった。

学校を出た後、まっすぐ帰るのも何だかなという気分になった僕は渋谷駅付近をブラブラと散策することにした。とは言っても精々が本屋に寄ったりレンタルショップを覗くくらいしかやることは無いんだけれど。

そう思っただけでセントラル街を練り歩いていると、目の前を見慣れた派手な金色が機嫌悪そうに歩いているのを見かけた。

「や、坂本くん」

「うおっ!? 海藤センパイ、こんな時間に何してんすか」

どうやら声をかけるまで気付いていなかったようで、肩を大きく跳ねさせてこちらに勢い良く振り向く。

「それはこっちの台詞でもあるけどね。何か不機嫌そうだけど、どうかした?」

「いや、その……」

会話の取っ掛かり程度の問いかけだったが、坂本君は言いにくそうに右手で頭を掻いている。これは、結構厄介な問題をまた抱えてそう  
だ。

「……長くなりそうだし、ちよつとファミレスでも寄って行くかうか。あ、もちろん僕が奢るから安心してね」

ここでまごまごしていても話が進まないし、さっさと坂本君から事情を聞き出してしまおうと彼をファミレスへと誘う。あんまり人の事情に踏み込むのも良くないと分かっているが、彼には陸上部の時の鴨志田先生との一件を知っている僕からすると彼を放っておくことなど出来なかった。

坂本君も黙ってついてきてくれるところから話すつもりはあるようだ。セントラル街にあるファミレスは渋谷駅に近いことから学生達で賑わっている。店内は僕らと同じく学校帰りであろう学生達でゴった返していた。運良く隅の席を確保できた僕は、ドリンクバーとポテトを注文してさっさとコーヒーを用意する。坂本君もコーラをグラスに注ぎ、運ばれてきたポテトを浮かさない表情で口にし

ていた。

「それで、僕としてはこのまま後輩とお茶して帰ったつてことでも良いんだけど。僕が力になれることなら話くらいは聞くよ?」

急かすのも良くないが、あんまりのんびりしていると補導されてしまう時間になる。少し促してみても、ダメだったらおとなしくポテト食ってコーヒー飲んで帰ろう。

そう思っていると、坂本君がぽつぽつと口を開いてくれる。聞けば、例の転校生、雨宮さんと一緒に鴨志田先生の体罰の証拠を探そうとバレー部員に聞き込みをしていたけれどもうまく行かなかつたらしい。

雨宮さんの噂を流したのが鴨志田先生ということもあり、同じように彼と因縁のある坂本君からすると放っておけなかつたとのこと。

そこまで聞く頃にはコーヒーも二杯目に突入しており、僕は口から漏れそうになるため息をどうにか堪えることに必死だった。

「……はあく」

訂正。ため息は堪えられなかつた。

「海藤センパイ? 急にため息ついてどうしたんすか?」

「いやね、君達の気持ちは分かる。特に坂本くんが許せないって思う気持ちも分かるんだけどさ」

やり方が良くないと言えば良いだろうか。鴨志田先生とひと悶着あつた坂本君と噂になつている雨宮さんが動けばそれはもう目立つ。そしてそれを見逃すような鴨志田先生ではない。バレー部員にはよく言つて聞かせていることだろう。

「君らが正面から聞いたところで素直に話してくれるバレー部はいないだろうね」

「……かもしれねえつすけど」

「だからこそ、動き方はもつと考える必要があつたんじゃないかな。今のやり方だと鴨志田先生を単に警戒させちゃうだけだからね」

「……じゃあどうしろつていうんすか」

不満そうに口を尖らせる坂本君。まあこんなこと言われて良い気持ちになるわけがない。それは分かっているんだけど、彼は鴨志



田先生が去年に陸上部の臨時顧問をしていたときに色々揉め事を起こしている。それを何とか収めようと奔走した身からすると言いにくくなるというものだ。僕も結構鴨志田先生に睨まれることになったんだから。

「まずは利用できそうな人に声をかけるべきだよな」

「んなこと言っちゃって、そんな人どこに……」

「いるじゃないか。目の前に」

「え？」

坂本君は啞えていたストローをポトリと落としました。

「去年の陸上部廃部危機を何とかしたのは誰でしょうか」

「……センパイっす」

そう、去年のことだが、坂本君が所属していた陸上部の臨時顧問に鴨志田先生が収まった際、坂本君が鴨志田先生に暴力を振るったという事で鴨志田先生が陸上部の臨時顧問を降り、廃部の危機に晒されたことがあった。もちろん坂本君が鴨志田先生を気に入らなかつたという個人的な好悪で暴力を振るったわけでは無い。彼は足を壊され、更には母親をバカにされてカツとなつてしまったとのことだった。

そんなことを聞いてしまったからには放っておけない。せめて陸上部の廃部だけは避けようとあちらこちらに話を持ちかけ、最後にはあらゆる人の証言を集めて鴨志田先生に直談判まで行った。新島さんにも呆れられてしまったけれど、臨時の生徒総会まで開くことになったのも今となつては良い思い出だ。

「そんな先輩を少しは頼ってみようとは思わない？」

坂本君はポカンと口を開けたまま何も言わない。まあ学年も違うし、同学年の中じゃ敬遠されているだろうから校内の誰かを頼るといふ手段を探りにくいのは理解できる。

とは言つても去年は結構関わったんだから多少は頼ってくれても良いと思うんだ。

「……でも、良いんすか？ センパイも鴨志田のヤロウに目付けられちまつたらガツコ居づらくなるんじや」

「そうなんつても僕は気にしない、というか去年はちよつとした嫌がらせも受けてたけど無視してたら気付いたら終わってたよ」

坂本君が心配そうに聞いてくるが、気にするなと手を振る。去年は上履き隠されたり黒板に悪口書かれたり変な噂流されたりしたなあ。どうでも言いと思つて無視してたけど。毎日来客用スリッパを使つて先生に注意されたけど、スマホに撮影した色々な証拠を見せると黙認してくれるようになった。いや、そこは解決するように動いてよとも思つたけど。まあ先生も人だしね、面倒なことにはなるべく関わりたいくないだろうし。

「ま、そういうわけだから。バレー部の聞き込みに関しては任せなよ」  
「どうしてそこまでしてくれるんすか……？」

坂本君にそう聞かれる。確かにたかが学校の先輩がここまで協力的なのってよく考えなくとも怪しいな。僕としては知り合いが困っているし、何か出来る範囲で協力できるならやってやろう程度の軽い気持ちなんだけども。

「どうして、つて言われてもね。知らない仲じゃないし、助けられそうなら助けるつてのじゃダメかな？」

「めっちゃ軽い理由すね……」

「そんなもんで良いと思うんだよね、人を助ける理由つて。あ、じゃあ生徒会副会長だから学生の楽しい学校生活を守るためつて理由も付け加えとくよ」

「……ははっ、何すかそれ」

僕は割りと真面目に言ったのだが、なぜか坂本君には笑われてしまった。なぜだ。首を傾げていると、もう温くなっているであろうコーラをグイツと飲み干した坂本君が席を立つ。

「コーラお代わりしてきます。先輩はコーヒーで良いっすか？」

「おっ、気が利くねえ。そんなことしても追加のポテトくらいしか出てこないよっ。」

「そこは唐揚げにしてくれると嬉しいっす」

「うーむこの後輩、中々言いよるな」

普段の調子に戻ったらしい坂本君はそう言うと言つても足取りも軽くドリ

ンクサーバーへと向かっていく。僕はその間に店員さんと呼んで追加で坂本君ご所望の唐揚げを注文しておいてあげた。

次の日、僕は坂本君との約束通りにバレー部員への聞き取りを始めようと早速動き始める。彼らがどのバレー部員に話を聞きに行ったかは定かではないが、上級生にいきなり話を聞いてはいないだろうと考えて同じ3年生のバレー部員を巡ることにする。

「やめてくれよ海藤。お前が動いたら大事になるんだから」

「大会も近いんだから本当に勘弁してくれ、推薦かかってんだから」

「去年ので懲りてなかったのかよお前……。俺から話すことは何も無えぞ」

朝練があるからと朝早くから登校している人達に話を聞いてみたが、返ってくるのは上記3パターンのどれかだった。バレーで推薦狙ってる人も多いのか、皆一様に口が重い。後は去年鴨志田先生とゴタゴタしたから全体的にバレー部からの好感度は低い。特にレギュラー陣からの心証は最悪だった。これは坂本君に偉そうなと言えないな。

どうしたもんかと思いつながら渡り廊下を歩いていると、反対側からジャージ姿の女子生徒が歩いてくるのが目に入る。あれは、ようやく少しは話を聞ける人が来たかもしれない。

「おはよう、鈴木さん」

「っ!?! 副会長さん……。おはようございます」

廊下を歩く鈴木さんは、左手で右肘を庇うように覆っている。ジャージを着ているから実際のところは分からないが、痛めているのは間違いなさそうだ。

「部活で気合い入れすぎちゃったのかな。保健室はまだ開いてないよ」

「いえ、少し飲み物を取りに戻っただけですから」

鈴木さんはそう言うが、肩が微かに震えている。このまま朝練に戻

すのは良くないんじゃないだろうか。

「そうは言っても身体を痛めたままじゃ辛いでしょ。生徒会室に救急箱あるから寄っていきなよ。湿布くらい貼っていきな」

躊躇う鈴井さんを押しきり、彼女を生徒会室に招き入れる。椅子に座らせて休ませている間に棚を漁って救急箱を探す。去年に生徒会室を緊急避難場所にしようと色々揃えていたのがこんなところで役に立つとは思わなかった。

練習していて喉が乾いている彼女に熱いコーヒーを出すのも酷だと思ったので部屋に来る途中で購入したスポーツドリンクを渡す。

「この中に湿布とか諸々入ってるから、好きに使ってよ。僕は反対側向いてるから。手伝いが必要なら言ってね」

そう言っつて鈴井さんに背を向ける。少しの間動きが無かったが、やがてゴソゴソと彼女が手当てを始めたらしい物音が耳に届いた。

「朝からすごい熱心に練習するんだね」

「大会も近いし、それに私、レギュラーですから……」

「スゴいね、2年でバレー部のレギュラーなんて。でも大会前に怪我して出られなくなるなんてことにならないようにしなよ」

「うん……」

鈴井さんの沈んだ声が耳朶を打つ。バレー部の部員数は多い。元々女子バレー部はそれなりに人気だったのが鴨志田先生赴任以来のインターハイ常連となったことによるネームバリューも手伝って一気に人数が膨れ上がった。そのため、3年間レギュラーになれないまま引退する人も珍しくない。そんな中で2年でレギュラーになるということとは相当に実力を認められているか、あるいはそれ以外の要因があるかだ。

昨日のバレー部の練習を見学していたときに鈴井さんの練習は見ていた。言つちや悪いが、彼女が他の部員よりも特に優れていたようには見えない。それに彼女に対する鴨志田先生のあの目。

「副会長も、気付いてますよね。私が、実力でレギュラー取ったわけじゃないってこと」

「それが僕の勘違いであることを祈ってはいるけどね」

そして今の彼女の言葉で、僕は嫌な予感が間違っていないなかつたことを悟る。なるほど、彼女は鴨志田先生のお気に入りらしい。それも彼女の口ぶりや様子を見るに本人にとっては不本意な。

「鈴井さんに聞くのも酷だと理解しているけど。そのままが良いの？」

「……でも、私が我慢しないと杏が」

「そこで高卷さんか……」

なるほど、どうやら鈴井さんは高卷さんを鴨志田先生に人質に取られている、と考えても良さそうだ。鴨志田先生がこれ見よがしに自分の車に高卷さんを乗せて登校するのも、周囲へのアピールもあるのかと思っただけが一番の狙いは鈴井さんを逃さないようにするためなのかもしれない。

「飲み物、ありがとうございます。お金はまた返します……」

「良いよ、気にしなくても。部活、無理しないでね」

手当てを終えたのか、鈴井さんが席を立て扉へと向かう。少しは身体の痛みや疲労もマシになったのか、先程廊下で会ったときよりも足取りはしつかりとしていた。

そのまま彼女は僕に向かって頭を下げると、体育館へと戻っていつてしまう。朝練の時間もそろそろ終わりだとは思うけど、あの調子だとあまり安心できない。

「……これは、ちゃんと気にしてないとヤバいかもしれない」

生徒会室の窓から見える空は、僕の心持ちを反映したかのように厚い雲に覆われていた。

## E v i l i n f l u e n c e

朝の間に鈴井さんから手に入れた情報は体罰なんかよりもよっぽどヤバイものだ。もちろん彼女の証言だけで動いたところで握りつぶされるのがオチだろうが、放っておくともっと不味いことになりかねない。

「……どうしたもんかな、これ」

坂本君にこれを伝えれば間違いなく激昂してしまう。最悪は暴力沙汰になって今度こそ退学を言い渡されかねない。こんなときこそ他の大人に頼れば、とも思っけれど坂本君にとってこの学園の大人達は肝心なときに自分を助けてくれなかった人間という認識だ。簡単に頼ったりはしないだろう。実際、校長先生すら鴨志田先生にあまり強くは言えない。これまで運動部で実績を挙げてきた陸上部が落ち目になった後、もう一つの目玉としてバレー部をインターハイ常連に押し上げたのは鴨志田先生なのだから。それを鴨志田先生自身も自覚しているのがより一層質が悪い。

鈴井さんが去った後の生徒会室でコーヒーを飲みながらスマホを弄る。こうなったら強行手段に出るのもやむ無しだろうか。このスマホの中には今年の鴨志田先生が陸上部で坂本君に拷問じみた練習を課している姿や、バレー部で指導の範疇を越えた行動をしている姿が収められている。去年はこれを鴨志田先生と校長先生に突きつけて陸上部の廃部を思い止まらせたのだ。動くつもりが無いなら全てをSNSにぶちまけてやると迫って。元メダリストの醜聞だ。真偽はどうあれマスコミの格好のネタになる。不本意な形で秀尽学園の名を広めることになりたくないだろうと言えば、二人も流石に黙るしかなかった。

とはいえ、これは自爆戦術でもある。こんなことすれば鴨志田先生のシンパからのバッシングは今までの比じゃなくなるだろうし、告発者の自分もマスコミに追われて平穏な学生生活とは別れを告げる必要が出てくる。

「でも見て見ぬふりは流石に出来ないよなあ」

「何を一人でぶつぶつ言ってるのよ？」

「ふへあ!？」

誰もいないと思っていた生徒会室に突然僕以外の声が響いて思わず情けない声を上げてしまった。声の主を確かめてみれば、そこには麗しの生徒会長が驚いたように目を丸くしてこちらを見ていた。

「急に変な声出さないでよ、ビックリしたじゃない！」

「ビックリしたのは僕の方なんですけど」

「ちゃんと挨拶はしたわよ。何も反応が無いから近づいて声かけただけ」

おっと、これは僕の分が悪そうぞ。どうやら思考に没頭しすぎて新島さんに全く気付いていなかったらしい。ごめんごめんと謝り、新島さんの分のコーヒーを用意する。

「ありがと。それにしても今日は早いのね。まだHRまで30分以上はあるわよ?」

「んー、たまには三文の徳を試してみようかと思ってね」

「へえ、それで急いでどこかで転んだりしたのかしら?」

そう言う新島さんの視線は机の上にある救急箱に注がれていた。おっと、片付けるのをすっかり忘れていた。

「まさか、副会長として生徒会室の備品整理でもしておこうという殊勝な心がけだよ」

「……また何か面倒なことに首を突っ込んでいるんでしょう」

新島さんの目がスツと細められる。美人が凄むと怖いからやめてください。新島さんは僕が去年色々やらかしたのを直接目にしてきただけに、すぐに何かを嗅ぎ付けたらしい。お姉さんが確か検事さんとか言っていたし、やっぱり事件とかには敏感なのかな。そして曲がったことや間違ったことを嫌う性分の彼女を誤魔化すのは骨が折れる。ただでさえ教師陣から雑用を振られて忙しい上に、こんな重たい案件を彼女に背負わせるのは酷だろう。僕? 僕はまあ、人生2周目ってことでノーカンで。

「まあ面倒っちゃ面倒だけど。何とでもなるよ。所詮学生レベルの悩みごとだしね。ちよつと人には言えない所におできができたやつた、

みたいな感じ」

「誤魔化し方が適當すぎるわよ……。私には聞かせられないってわけ？」

「うーん、デリケートな問題故にあまり大勢を巻き込みたくないというか、そんな感じかなあ」

新島さんが呆れたような顔でカップに口を付ける。だってこんなこと言ったら絶対に鴨志田先生に直談判しに行きそうだし。生徒会長と副会長両方が明確に敵だと鴨志田先生に認識されるのは良くない。他の教師陣を抱き込んで処理しきれない雑用を投げられてこつちをパンクさせようとしてくるか、あるいはもっと直接的な手段に訴えかけてくるかもしれない。学園の理事にも顔が利く鴨志田先生を正面から敵に回すのは得策じゃないのだ。去年の段階で正面切って喧嘩した自分が言うことでもないけど。

「2年の転校生絡み？」

「当たらずとも遠からず」

「なるほどね。あの噂が関係してるってことね」

坂本君と雨宮さんが動いているから雨宮さん絡みの問題といっても良いだろう。新島さんも良い感じに勘違いしてくれているし。

「これでも私は会長なんだから、少しは頼ってくれても良いと思うのだけど？」

「それを言うなら僕も副会長ですし。あんまり友達を面倒なことに巻き込むのも申し訳ないじゃない」

「その友達は蚊帳の外にされている方が辛いと思ってるわよ……」

「うーむ、それを言われると辛い。とりあえず一段落したらまた話すよ。本人のプライバシーも関わるから巻き込みすぎるわけにはいかないってのは本当だしね」

個人の問題にあまり踏み込むのは良くないと考えたのか、新島さんは尚も納得いかないところらをジト目で睨んでいたが反論することはなく押し黙った。

「ちゃんと聞かせてよ？」

「りよーかい。それじゃ、HRまで健康的に散歩でもしてくるよ」



机の上の救急箱を棚にしまうと、生徒会室を後にする。そのまま向かうのは2年の教室。この時間だとそろそろ坂本君がきているはずだ。

そう思つて教室を覗けば、一目で分かる金髪が目に入る。彼も彼なりに動こうとしているのか、クラスメイトから情報を聞き出そうとしているみたいだが、進捗は芳しくないであろうことはその表情を見れば分かった。少しの間それを観察していると、ようやくこちらに気付いた坂本君が表情をパツと明るくさせてこちらに駆け寄つて来る。

「おはよ、坂本くん」

「おざつす！ 何か分かつたつすか？」

坂本君の質問には答えず、ちよいちよいと手招きをして人気の無い廊下の隅を示す。それだけであまり楽しい話ではないと察したのか、坂本君の表情が険しくなった。

「ま、お察しの通りあんまり良くない話だよ。ちよつとデリケートな話だからここでは話せないけど」

「やつぱり体罰つすか」

「まあね、そんなとこ。ただバレー部から聞き出すのは少なくとも僕らじゃ無理だ。僕は去年の騒ぎでバレー部員からの印象は良くないし、坂本くんも特に仲の良い友達とかもないよね？ だから正攻法で聞き出すのはまず出来ないと考えよう」

「でも、それじゃどうすれば……！」

「落ち着いて。僕らじゃ無理なら聞き出せそうな人をお願いするしかないよ。昨日は任せろ、なんて言つておいて情けない限りだけど何かアテはあつたりするかな？」

もどかしさから声を荒げそうになった坂本君を落ち着かせる。出来れば巻き込む人は少なくしたい。けれど坂本君に何か打開策があればそれを頼るのも一つの手法だ。

坂本君は少し考え込んでいたが、思い当たる人物がいたのか、閃いたと言わんばかりの表情で顔を上げた。

「高巻ー！」

「高巻さん？」

「そうっす！ 高巻はバレー部の鈴井と同じ中学だったんすよ。二人はめっちゃ仲良かったですし、高巻から話を聞いてもらえれば……」  
「……なるほど、それじゃそっちは任せても良いかな？ 僕も僕の方で動いてみるから」

恐らく坂本君の作戦は失敗するだろう。今朝の鈴井さんの様子を見れば、多分だけど互いが互いを守ろうとして自縄自縛に陥っている。多分鴨志田先生から巧妙に脅しつけられているんだろう。

高巻さんには鈴井さんをレギュラーにしてほしければ自分の言うことを聞くように。

鈴井さんには高巻さんに手を出されたくなければ自分の言うことを聞くように。

親友であるからこそ互いを庇おうと互いに相談することが出来ない状態になっているはずだ。けれどそれを坂本君に言ったところで折角の希望をふいにしてしまうのは避けたかった。僕の考えすぎで、実は高巻さんが聞けばあっさりと言ってくれるようであれば問題も解決しやすいからだ。それとは別にこちらでもフオローをする必要があるというだけだ。

「了解っす！ こっちは任せてください、センパイ！」

「頼もしいね。それじゃあ転入生のこともよろしくね？ 少なくとも今日は僕もあんまりそっちには構えないと思うから」

そう言っつて坂本君と拳を合わせる。さて、今日の放課後は鈴井さんから目を離さないようにしようか。坂本君達が鴨志田先生を刺激した結果、鴨志田先生が怒って彼女に何かしでかさないと限らない。

そして訪れた放課後。僕は掲示物の更新という名目で再度2年の教室が並ぶ階にやってきていた。手に抱えた紙の束を一枚ずつ掲示板に貼り付けていく。同時に耳は廊下の会話を聞き漏らすまいと集中させる。さつさと帰る生徒、部活へ向かう生徒と様々だが、高巻さんが足早に帰っていく姿を横目に作業を進める。

しばらくしてから鴨志田先生が現れ、誰かを探すようにキョロキョロとしていたが、お目当ての人物がいなかったのか小さく舌打ちをこぼすとどこかに行ってしまった。さて、ちよつと虫の居所が悪そうだぞ。これはもしかするともしかするかもしれない。

僕は掲示板横の机に紙の束を置くと鴨志田先生の後ろをそつと尾行する。何かボロでも出してくれば良いのだけれど。鴨志田先生はそのまま体育教官室へと入って行ってしまった。体育教官室は鴨志田先生の聖域だ。中から鍵を掛けられてしまうと今の僕じゃ入れなくなってしまう。僕は扉にそつと近づくと耳をそばだてる。

「高巻のやつ……いや、今からでも……」

やつぱり探していたのは高巻さんか。今からでも、ということとは彼女に連絡でもするつもりかもしれない。連絡の声は遠ざかっていつてしまったからそれ以上何を言っているのかは分からないが、良い兆候だ。

「とりあえずいつでも突入できるようにしておかないといけないな」

僕は急ぎ足で職員室を目指す。鴨志田先生があまり周到でないことを祈るしかない。

「失礼します。定期の予備鍵確認しに来ましたー」

職員室に入ると、それだけを告げて入り口に一番近いところにいた先生に話しかけ、キーBOXの鍵を借りる。これも本来は先生方の仕事なのだが、セキュリティの観点から定期的に教室、体育館、教官室を含めた鍵の予備が全て揃っているか、マスターキーがあるかをチェックする必要がある。いつからか生徒会の雑用の一つになっていたが、その幸運に今日ほど感謝したことはない。

予備鍵が入っているキーBOXを開け、手早く確認していく。体育教官室、体育教官室……あった。お目当ての鍵を手に入れると、タグを取り外し、ポケットに入っていた別の鍵とタグを付け替える。こつそりと確保していた屋上の合鍵だ。タグを付け替えてしまえば見分けなんかつかない。予備鍵なんて年に一回使うかどうかだし、教師陣が気付くことも無いだろう。また何か理由をつけて交換してしまえば良い。

「予備鍵揃ってました。ありがとうございました」

「おう、いつもご苦労さん」

キーBOXの鍵を返しに行くとき先生はパソコンの画面を見ながらこちらを一瞥もせずにおびなりに労いの言葉を掛けてくる。今は助かるけれど、これはどうなんだろうな。社会人としてもこの管理体制は良くないと思わないだろうか。あるいは僕がそれだけ信用されているということか。

まあそんなことは今はどうでも良いことだと頭から追い出すと、さつさと職員室を出る。再び体育教官室へと向かう。その道すがら、腕に湿布や絆創膏を貼った男子生徒が深刻そうな面持ちで歩いているのを見かける。確か三島君だったか。

その表情にただならないものを感じた僕は、彼に声を掛ける。三島君は肩を跳ねさせると、こちらを怯えたような表情で見ってくる。

「あ、副会長……」

「や、三島くん。元氣無さそうだけどどうしたの？ バレー部の練習がキツくて疲れてる？」

「あ、はあ……そんなところ、です」

まず間違いなく練習の疲れじゃないだろう、その顔は。今日はそもそもバレー部の練習は休みだ。だから練習でボコボコにされたわけじゃない。だとすると何か鴨志田先生にまた無茶振りされたんだろうか。

「そういえば今日は練習休みだったね。というとまた鴨志田先生に面倒なこと頼まれた？」

「え、あ……」

三島君の目が泳ぐ。頼まれた、という言葉に反応したな。

「ボール磨きでも言われた？ 手伝おうか？」

「い、いや、違います……。何もありませんから！」

三島君はそう言うのと逃げるように走って行ってしまった。向かう先は昇降口だ。ということは頼まれ事は既に終わったか、あるいはバレー部とは関係無い何か。それとさつき体育教官室で漏れ聞こえた鴨志田先生の言葉。

嫌な予感が急速に胸に広がっていく。これは、本当に取り返しのないことになっていくのかもしれない。

今まで校則を破ったりしたことはない優等生だった僕だけど、今日このときばかりは廊下を走らずにはいられなかった。

高校生にもなって校舎内を全力疾走することは中々無い。そんな珍しい経験をした僕は大きく肩で息をしながら体育教官室の前に辿り着いていた。

ここまで来たらもう遠慮なんてしてられないし、する必要も無い。僕はポケットにしまっていた体育教官室の予備鍵を取り出すと鍵穴にそれを差し込む。案の定、扉には鍵がかけられていた。この中で今まきに行われようとしていることを想像すれば当然のことだけだ。

「誰だー！」

扉を開けた音に反応して飛んできた声は、やはり鴨志田先生のもの。それは保健室にも置いてあるような移動式の間仕切りの向こう側から聞こえてきていた。その向こうにあるのは鴨志田先生が校長に買わせた豪華な来客用ソファー。

問いかけには答えず、間仕切りを半ば投げ飛ばすようにして壁際に追いやると、ソファーに押し倒されて泣いている鈴井さんとその上に覆い被さってこちらを睨み付けている鴨志田先生の姿が視界に入った。

「海藤?! キサマ何をしに……!」

鈴井さんの制服がはだけさせられているところまで認識し、僕の思考は一瞬にして白熱した。

「何やってんだ変態野郎!」

次に気がついたときは鴨志田先生、いや鴨志田を両手で床に突き飛ばした後だった。いくらガタイの良いスポーツマンとはいえ、ソファーの上に覆い被さっている不安定な姿勢でかつ横から力一杯押されてしまつては抵抗も出来ない。床に顔面から落下し、鼻を押さえていた。

僕はその隙に鈴井さんを引き起こすと、自分が着ていたブレザーを彼女の肩に掛けて背後に庇う。最悪の事態一歩手前で助かった。もし最中や事後だったら取り返しのない傷を彼女に負わせてしま

うところだった。いや、今でも十分彼女にとっては大きな傷になっているのは確かなのだらうけども。

「つ、海藤オ……！俺にこんなことしてただで済むと思っっているのか!？」

「それはこつちの台詞ですよ。未成年淫行に強制猥褻、暴行。越えちゃいけない最後の一線をアツサリ越えています」

赤くなつた鼻を押さえながらユラリと立ち上がった鴨志田はこちらを血走つた目で睨み付けている。その眼光に耐えられず、鈴井さんが僕の後ろで身を縮めていた。僕もまあ怖くないわけがないけれど、鈴井さんの手前何とか手の震えを我慢して睨み返す。殴り合いにでもなつたら間違ひなく負けるな。

「ふん、たかが一生徒のお前らの証言と信頼が厚い俺の言葉、どつちを信じるかなんて比べるまでもない！」

「そうなつたら去年までの他のあらゆるデータをSNSやゴシップ記事に売り飛ばしてやりますよ」

鴨志田はそう言つて嘲笑うが、そうならないための材料をこちらだつて持っている。周囲が騒がしくなり、平穏な学生生活は望むべくもなくなるけれど、その代わりに一人の人生をぶち壊せるのなら安い方だ。

僕が本気だということが伝わつたのか、鴨志田の顔が怒りで歪む。これ以上ここで口論を重ねても平和的解決は不可能だ。絶対に僕の血が流れる。となればやるべきことは一つ。

「鈴井さん、早く逃げて。出来ればしばらく学校は休んだ方が良い」

「え、でも……」

「良いから早く逃げて！」

躊躇いを見せた鈴井さんだったが、強い語気に気圧されて身を翻すと体育教官室の外へと駆けていった。よし、これで後は目の前の男をしばらく足止めすればこの場は凌げる。

鴨志田はソファアを乗り越えると僕の目の前に立つ。身長、それと体格差で僕が見上げる格好になり、先程以上の威圧感に身震いしそうになる。

「お姫様を守るナイト気取りか？」

「まさか。精々槍持ち程度の下働きで……」

言葉を最後まで言いきることが出来なかった。それより先に僕の土手っ腹には鴨志田の拳がめり込んでいたからだ。日々のトレーニングで鍛え上げられたその腕力は僕の貧弱な身体に容易く突き刺さり、肺の空気が全て押し出されて言葉を発するどころか満足に呼吸も出来なくなった。

「っ!? げほっ、げほっ！」

「おら、カッコつけたんならもつと踏ん張れ、よ！」

続いて飛んでくるのは平手打ち。平手打ち、と良いながら手のひらと手首の境目付近で打撃を加えてくるそれは最早掌底と言うべきものだ。それが往復で飛んでくるものだから視界がチカチカと明滅する。

「その程度か、え？ 一発くらい殴り返してみろよ！」

そう煽りながら攻撃の手は緩めない。そもそも元アスリートに身体能力で勝てるわけがない。それに一度突き飛ばしてしまっているが、これ以上相手にダメージを与えてこちらを殴る正当性を付与してやる必要は無い。僕はただ鈴井さんが逃げる時間を稼ぐ案山子になっていれば良いのだ。もつとも、鴨志田には既に彼女を追いかけるよりも僕を徹底的に痛め付ける方が優先度の高い事項になってしまっているようだが。

身体はこれ以上無く危機を訴えているのに、不思議と頭はクリアだった。一度鴨志田を突き飛ばしたことで煮えた頭が急速冷凍でもされたのだろうか。あるいはアテにならない前世の記憶らしきものの経験値がなせる技なのか。

そして幾度目かの打撃を受け、僕は体勢を崩して床に倒れてしまう。出来るだけ哀れみを誘うような崩れ落ちかたをしたつもりだったけれど、鴨志田の怒りは収まらないのか、そのまま倒れた僕を足蹴にし始めた。

「キサマみたいな！ 虫けらが！ 俺サマに！ 楯突こうなんざ！ 百年早いんだよ！」



文節毎に満身の力を込めた蹴りを喰らうものだから僕の口からは意味のある言葉は出ない。というか胃の中の物が出てこないように堪えるだけで精一杯だ。

しばらく蹴り続けて満足したのか、僕の腹を襲う凶悪な衝撃は止み、後には僕のえづく声と鴨志田の息切れだけが残る。

「ハア……ハア……。キサマは俺サマを突き飛ばすという暴力を振るった。たかが生徒が教師に向かってな。理事会で吊上げて退学にしてやる！ それまではその不愉快な面を俺サマの前に出すなよ。またこんなことになりたくなかったらな」

たった一発のお返しにしては十分すぎる報復をした挙げ句、床に倒れ伏す僕に言い渡されたのは無慈悲な退学宣言だった。それに言い返す気力も無く呼吸を整えることに意識を集中させていると、鴨志田は何も言わずに体育教官室を出ていった。大きな音を立てて閉まった扉からは、外から鍵を掛ける音が聞こえてくる。この状態の僕が万が一にも他の生徒に見られないようにするためだろう。こういう小賢しいところには頭が回るのか。

「……はっ、それでも、押さえるべき証拠は、押さえたぞ」

鴨志田の足音が遠ざかっていくのを聞き届けてから僕はポケットにしまっていたスマートフォンを取り出す。画面を点灯させ、体育教官室に向かいながら開始していた録音を停止させる。なぜこちらが無抵抗でされるがままになっているのを許していたのか、最初の一発はこちらが頭に血が上っていた故のミスだが、それ以降は相手が一方的にこちらに暴力を振るっている証拠音声だ。過剰防衛にしてもやり過ぎだということは十分に伝わるだろう。それに暴行に入るまでの会話で何が行われようとしていたかも分かるようになっていた。

「たかが一生徒が身体張った甲斐は、あったと信じたいね」

にしてもかなりグロッキーだ。僕の記憶にある限りここまで肉体的にボロボロにされたのは初めてだし、よく泣かなかったと自分で自分を誉めてあげたい。

痛む身体を何とか引き起こし、僕は立ち上がる。

「さて、これを明日校長に聞かせてみるか。最後の手段に出る前に、自

浄作用はあると信じてますよ」

僕はこのときまで、まだあの校長にも教育者としての精神が宿っていることを期待していたのだ。

「は？ 今なんと言いました」

翌日、朝一番に校長室に飛び込んで昨日の録音データを披露した僕に返ってきた言葉は、僕の耳か頭がおかしくなったのではないかと疑いたくなるようなものだった。

「だから、その録音データはすぐに破棄してくれと言ったのだよ」

「……すみませんが理由を聞かせて頂いても？」

「鴨志田先生も軽拳に走ったかもしれないが、その行為は君によって未然に防がれた。それに昨日の間に私も鴨志田先生から話を聞いたが君は彼に暴力を振るったそうじゃないか。それに対して少しばかり激しい指導があつたらしいが、それに関しては君にも過失はある」  
「お言葉ですがこの顔の傷を見てもまだ言いますか？ なんなら病院の診断書だつて提出しますよ？」

僕の言葉に校長先生の目が泳ぐ。自分でも言っていて苦しいと自覚しているのに、そこまでしてあれを庇う理由が分からない。あんなものをいつまでも学校に置いていたら、僕じゃなくとも早晚その蛮行が校外に漏れて学校の評判に致命的な傷がつく。そうなる前に果敢な処理をしたとして事態を収めた方がよっぽどマシなはずなのに。

「考えてもみたまえ、確かに君は優秀だ。君の学力なら複数の有名私大に加えて最難関国立大にも合格可能だろう。だがそれによって生まれる合格実績はどれだけでも5、6人分にしかない。それも君が受験をする一年限りだ。一方で鴨志田先生はバレー部で輝かしい実績を出し、それによって我が校の受験者数は増え、必然的に生のレベルも上がっている。それも単年度だけでなく複数年度に渡つてな。であれば経営上どちらがより価値を創出しているかなど比べるまでも無いだろう？ 更に知名度が上がったことで大学の推

薦棒も増えている学生達にも大きなメリットがある。君たちが少し我慢をしてくれるだけで我々経営陣だけでなく他の学生達も大きく助かるのだよ」

校長先生が持ち出してきたのは冷たい経営理論だった。こちらが学生だからとそれで黙るようであれば大間違いだ。

「鴨志田の蛮行が明るみに出たとき、隠蔽しようとしていたことも必然的にばれます。そうなる前に先に事実を公表し、自浄作用があることを示した方が傷は浅く済むでしょう。既に彼は自身の欲求をコントロール出来ないところまで来ているんですよ!」

「そんなことは起こらない! これまでも、これからも、この学園内では何も問題は起こっていないし、起こらない。故に鴨志田先生にはこれからバレー部顧問として指導いただく」

僕の言葉に返ってきたのは現実を全く見ていないような言葉だった。ダメだ、校長先生すらも鴨志田の言いなりでしかなかった。鴨志田の輝かしい実績に目を奪われ、幾人もの血と涙を啜って生み出された果実の甘さに溺れてしまっている。

「では僕が個人的に今まで集めた全ての証拠をSNSや記者に公開します。そうすれば僕の危惧が現実になると分かるでしょう?」

「いや、君にそんなことは出来ない」

「出来ませんよ。あまりやりたくはありませんでしたが」

「出来ないとも。もちろんそんなことをされれば事態は明るみになるが、同時にそれは君達3年生にも大きな影響を与えることになる。既に大学から推薦の声がかかっているもの。これからの推薦受験に向けて面接練習を重ねている生徒もいる。そんな子達は全ての推薦が取り消しになり、進学先に窮することになるだろうね。一般受験で大学に行っても出身高校で何を言われるか分かったものじゃない。下手をすれば就職にまで響くことになるかもしれない」

「……同級生を人質に取るつもりですか?」

「いいや。君一人の暴走で生じた結果に、君は責任を取れるのかと問いたいだけだとも」

視線で人を殺せたならば既に10回はそうしているだろう程に怒

りを込めて睨み付けた先には、校長先生のねばつくような笑みがあつた。

「その責任を取るのには僕じゃない。学校運営の責任者であるあなたですよ」

「そうだとも。だが他の生徒達はそうは思わないかもしれないね。3年生だけじゃない。下級生の未来すらも潰すかもしれないのだよ」

その言葉と共に校長先生の表情が険しくなり、僕を真っ向から睨み付けてくる。

「子供が大人の世界に首を突っ込むんじゃない。それ以上にか言うようなら鴨志田先生の言う通り退学にしても良いんだぞ」

「……その子供が大人の世界の論理で犠牲にされそうになっていることには目を瞑れと？」

「リスクとリターンを考え、最適な判断を下すのが経営者だ」

それを聞いて僕は校長先生に背を向ける。なるほど、ここまでアテにならない人だったとは思ひもしなかった。経営者なのかもしれないが、それ以上に教育者であつて欲しいというのは僕の我が儘でしかないのだろうか。怒りで頬がひきつり、昨日の傷がそれに伴って鋭い痛みを訴えた。

「校長先生、あなたの言う子供から僭越ながら指摘させていただきませう。経営者としても、教育者としてもその判断は間違っていますよ。

……腐りきってます」

「言いたいことはそれだけかね？ 私に対する暴言、きちんと理事会で報告しておく」

校長室の扉を乱暴に閉めた僕は、そのまま教室に戻ることも億劫になつて生徒会室に閉じ籠り、これも入学以来初めてになるのだけれど、授業を無断欠席した。

# An omen of resistance

昼休みを告げるチャイムの音に目を覚ます。気がつけば眠っていたらしい。スマホで時間を確認すると、新島さんからメッセージがいくつも届いていた。

「しまったな。心配させちゃったかな」

保健室登校ならぬ生徒会室登校しているよ、と返信しておく。この姿を見られるといっそう心配させてしまいそうだけど、このまま無視していても心配をさせてしまうだろうし。そこでメッセージアプリの宛先にいた坂本君の名前が目に入った。情けなくて泣きたくなるが、ここは彼にも話しておこうか。放課後に屋上に来るように彼にメッセージを入れておく。雨宮さんにも声を掛けてもらおうように頼むのも忘れない。彼らも彼らで動いている以上、情報を共有しておくべきだろう。

メッセージを打ち終わったところで生徒会室の扉が開く。鍵を掛けておいたので入ってこれるとすれば関係者しかいない。それもこのタイミングでここを訪れるとすれば思い当たる人物は一人だ。

「新学年早々サボりなんて……って、どうしたのその怪我!？」

「やあ、新島さん。怪我のことは気にしないで。ちよつと転んだようなものだから」

扉を開けて僕の姿を見て立ち尽くしている新島さんにそう声をかける。誤魔化せていないのは重々承知の上だけど、正直に事情を話すのも躊躇われた。彼女の性格を考えれば鴨志田に対して怒ることは確実で、何かしらのアクションを起こすだろう。それによって鴨志田や、それだけでなくそのシンパ、校長が動き出すことが怖い。自分の知らないところで自分が原因で被害が出るのはごめん。

「そんな下手な言い訳が通じると思っただけ?」

「それはそうなんだけどさ。確かに面倒なことにはなってる。でもそれに新島さんを巻き込むのはね」

「それでもっと酷い怪我をしたらどうするつもり?」

僕の前に立って腰に手を当てて凄む新島さん。高卷さんという新

島さんといい、最近は美人に凄まじれることが多いな。僕は彼女をどうしようと宥めながら、彼女を言いくるめる方便を頭の中でまとめ始める。

「事情が事情だからね。出来れば新島さんはしばらく僕と距離を置いて欲しいんだ。僕がどうなっただけでも関係ない顔で無視して欲しい」  
「あのねえ、そんなこと言われてはいさそうですかって頷くと思う?!」  
「せめて事情くらいは話してよ」

「話したら無関係な顔出来なくなるでしょ?」

新島さんには出来るだけ今回の件を知らせたくなかった。というのも校長が僕に対して敵がい心を剥き出しにしている以上、僕が彼から大人側の事情を教えてもらええる可能性は今はほぼゼロになったと言った方が良い。そうなったとき、新島さんが何も知らないと知れば彼女にすり寄りに行くことは容易に想像できる。

要は、僕は新島さんを、僕の代わりに大人達の裏事情を知るためのパイプ役に仕立て上げようとしているのだ。客観的に見て僕は今朝の校長と変わらない思考をしている。つまりは僕が校長を責める言葉は全て僕に返ってきている。そのことに気付いて僕は自嘲するように笑った。

「なに笑ってるのよ」

「いや、ごめんね。僕も相当卑怯な人間だと改めて自覚しちゃったからさ。でも、どうか今回は見逃してくれないかな。この件が片付いたら絶対に事情を話すからさ」

そう言っただけで両手を合わせて彼女を拝む。そんな僕を剣呑な目付きでしばらく睨んでいた新島さんだったが、やがて呆れたようにため息をつくと一度だけ頷いてくれた。

「……美味しいコーヒーのお店探しといてよ」

「もちろん。とっておきの隠れた名店を探しておくよ」

とても優しい交換条件で彼女は渋々承諾してくれた。その優しさに下げた頭がますます下がっていく。去年といい今といい、彼女には二度と頭が上がらなくなりそうだ。それと今度の休日に喫茶店巡りをする事も確定した。彼女を唸らせるようなコーヒーを出す店を

探しておこう。

「ああもう、そこまで頭を下げなくても良いわよー！」

「いやホントにありがとう。でも新島さんってそんなにコーヒー好きだったっけ？」

新島さんに肩を押さええられ、頭を上げさせられる。そこで僕はふと浮かんだ疑問を口にした。生徒会室ではインスタントコーヒーをよく飲んでいるのを見かけるが、喫茶店探しまでして飲むほどのコーヒー党だとは初耳だ。

「誰かさんがずっとコーヒーばかり飲んでるせいでね。私もブラツクコーヒーの味が少しは分かるようになったのよ」

「いや、砂糖もミルクもあるんだから入れれば良いのに……」

「良いから！ 約束ね？」

「うっす！ あざっす姐さん！」

「誰が姐さんか！」

最後の最後にふざけてみたら頭にチョップを喰らってしまった。鉄拳でないだけ有情かもしれない。

放課後、僕は帰りのHRを全て聞き流してさっさと教室を後にすると屋上へと向かう。屋上を出てすぐの場所には同級生が育てている野菜のプランターが置いてあり、プランターの持ち主が休憩するための椅子も設置してあるのでそこに腰かけて坂本君達が来るのを待つ。スマホを見て時間を潰していると、屋上の扉が軋むような音と共に開かれ、目的の人物が姿を現した。

「急に呼び出したりしてごめんね、坂本くん。でも情報共有しないでいるのもどうかと思って」

「いえ大丈夫ッス。それより、追加でもう一人話を聞かせてやってもいいッスか？」

「ん？ 君達が良いなら良いんだけど……」

坂本君の申し出を承諾すると、彼は屋上の扉の影に隠れていた子に

手招きをする。出てきたのはある意味予想通りの人物だ。

「えっと、その……」

「こんにちは、高卷さん」

現れたのは気まずそうに頬を掻きながらこちらを見ている高卷さんだった。この様子だと昨日に何があったのかを鈴井さん経由で知ったのかもしれない。

ということは、一緒にいる彼らも僕がこうなった理由を感付いているのかな？

「坂本くんも雨宮さんも、それに高卷さんも僕のこれに関する説明は必要かな？」

そう言っ僕は白いガーゼが当てられた自分の顔を指差す。三人とも大体は察していそうな顔だが、雨宮さんが聞かせてくれと言うので昨日の出来事をかいつまんで語る。僕がいかに鴨志田から殴られたか、などというのはどうでも良いので省くとして、鈴井さんが襲われそうになったこと、僕がそれを止めて鈴井さんを逃がし、鴨志田と一悶着あったこと、そして今朝の校長とのやり取りで教師達の介入は期待できそうに無いことを告げる。

話を聞いた彼らの顔に浮かんでいたのは一様に義憤に駆られた表情だった。坂本君が腰かけている机に自身の拳を打ち付ける。

「つぎけんな！ 揃いも揃って腐りきってやがるじゃねえか！ ここまでセンパイが身体張って証拠出したっつうのに！」

「信じらんない……！ こんなのもう警察に言っちゃおうよ！ 私も、志帆も証言するし！」

坂本君も高卷さんも鼻息荒く言い募るが、僕はそれを手で制した。

「いや、警察に言うつもりは無いよ。少なくとも今はまだね」

「……どうして？」

僕の言葉に、黙って話を聞いていた雨宮さんが小さく呟く。眼鏡の奥にある黒い瞳からは彼女の思考を読み取ることは出来ない。ただ風いだ海のような目で彼女はこちらを見据えていた。

「二つ目の理由としては出来るだけ事を荒立てたくない、ということ。この事実を公表すれば少なくとも数年は秀尽学園の評判は地に墜ち、



学生は色々と苦勞することになる。そういうときは得てして本来責任を取るべきところ以外に怒りの矛先が向いてしまいがちなんだよ。この場合はそれこそ鈴井さんとかにね。特に同じようにバレー部で厳しいしごきに耐えてきた子達は余計に暴発する可能性が高い。推薦を勝ち取るために厳しい練習を我慢してきたのに、それが目の前で無為になるっていうのは耐えがたいだろうし。心ない誹謗中傷に彼女を晒すわけにはいかないからね。それと二つ目は校長の謎の自信だよ」

「自信？」

「そう。校長室で話していたときの事を思い返してみると、校長の言葉はかなり奇妙に思えるんだ。鴨志田の所業が未来永劫明るみに出ないなんてあり得ない。在校生だけじゃなく卒業生だって声を上げられるんだよ？ それに生徒の親が全員バレー部の実績に目が眩むわけでもない。なのに鴨志田の行いを揉み消せると確信しているような口ぶりだった。学生が暴露するだけならまだしも、親まで巻き込んだら相当な騒ぎになるのに、それすらもどうにかなると思ってるみたいでね。端的に言うと、校長はこれがどんなルートで公になろうとも揉み消せるような伝手を持っているのかも、と違って」

それは生徒会室で少し冷静になることが出来たから考え付いた可能性。たかが一学園の校長に公権力をどうこう出来る力なんて無いとは思うけれど、例えば高校や大学の同級生にそうした所に影響力を持った人物がいて、力を借りられるのかもしれない。校長は良くも悪くも小心者の商売人だ。本当にリスクが大きいところは避けるはず。それがああまで強硬な態度になるということは僕が全てをバラすことを考慮してもなお鴨志田をここに留めておくことのリターンが高いということ。そうなると最悪の想定として僕が持っている証拠をどうにか握りつぶす手段があることも視野に入れておかないといけない。

「だから少し待った。絶対に校長の息が掛かっていない、例えばフリーの記者とかにネタを売るとかすれば流石に握りつぶせないだろうからね」

僕の考えを聞いた雨宮さんは目を閉じて少し考え込む。そうして僕の言葉を飲み下して納得したのか、一度頷いて僕の意見に賛同の意を示してくれた。

「分かった。でもこちらはこちらで動くことにする」

「動くって……、なにかアテがあるのかい？」

雨宮さんの動く、という言葉に引つ掛かって思わず問い返してしまった。転校してきたばかりの彼女に早々頼れる伝手なんか無いだろうし、校内で浮き気味な坂本君と高巻さんも同様だ。でも三人とも何か考えがありげな顔をしているし、

「大丈夫つすよ、センパイ」

「志帆を守ってくれたんだもん。次は私達が何とかしますから！」

自信ありげな表情で任せろとばかりに胸を張る二人。方法は分からないが、何やら効果的な案を腹に抱えているらしい。僕の方で動くことは出来ないし、ここは彼女らに任せるのも良いかもしれない。少なくとも僕以外で動いてくれる人達がいないと僕が八方塞がりになったときに本当に手詰まりになってしまう。

「それじゃあ、君達を信じて任せるよ。くれぐれも危ないことはしないようにね」

「それ、先輩が言っても説得力無いんですけど？」

「俺らの中で一番酷い怪我してるじゃないっすか」

高巻さんと坂本君にそう言われてぐうの音も出なくなってしまう。確かにどの口で言うんだって話だ。

「ちなみに雨宮さん。どんな考えがあるのか聞かせてもらおうことは出来るのかな？」

ダメ元で聞くだけ聞いてみることにする。この三人の中で雨宮さんは一番口数が少なかったが、不思議と三人の中心になっているように見えたからだ。事実、坂本くんも高巻さんも彼女を真ん中に据えて話しているし、彼女の一言で坂本君も高巻さんも表情が変わったのだから。

「……後のお楽しみ」

僕の問いに、雨宮さんは人差し指を唇に当ててそう返した。そのと

きに彼女が浮かべた表情に、僕は少し呆気に取られてしまった。転入初日は周囲の視線に怯えてビクビクとしていたのに、今の彼女は不敵な笑みを浮かべており、少し目にかかっている天然パーマの前髪の奥には好戦的な光を湛えた瞳が輝いていたからだ。

もしかしたら、こつちの彼女の方が素の性格なのかな。坂本君と高巻さんという友人を得て、本来の彼女の性格が顔を覗かせたのかもしれない。少なくとも怯えているよりはよっぽど良いことだと思う。

僕も笑みを浮かべると、右手をポケットに突っ込み、中に入っていたものを彼女に差し出した。

「分かった、楽しみにしておくよ。何か協力できることがあれば言ってくれたら力になるよ。さしあたっては、これを渡しておくね」

そう言つて雨宮さんの手に乗せたのはこの学校内でも人通りが少ない倉庫横の空き教室の鍵だ。僕が去年の鴨志田とのゴタゴタで生徒会室にも逃げ込めなかったとき、避難場所になっていた教室になる。校舎内でも日当たりが悪く、使っていない机や椅子といった備品を置いておくような物置として利用している教室で、それこそ文化祭のときやその他の行事のときくらいしか使用することが無い穴場スペースだった。

「そこなら滅多に人が来ないし、何か集中したいときや内緒話なんかには打ってつけだと思うよ。良ければ使って」

「ありがとう。これに見合うような成果を上げる」

「ハハッ、何だか取引みたいだね」

鍵を受け取った雨宮さんが言った言葉に少し笑ってしまう。刑事ドラマの真似事をしているような気分になってきた。事態は深刻だけど、少しだけ気が晴れた心地がした。

「取引……。そう、取引」

「期待してるよ、雨宮さん」

僕の言葉を繰り返してしっくりきたとばかりに呟いた雨宮さんと握手を交わし、僕は屋上を後にした。

我は汝…汝は我…

汝、ここに新たなる契りを得たり

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり

我「大蛇」のペルソナの生誕に祝福の風を得たり

自由へと至る、更なる力とならん…

## First declaration

雨宮さん達に別動隊となってもらった日から、少なくとも表面上は穏やかな日々が流れていた。鴨志田と僕の確執はたった一日で学園中に広まったらしく、僕は学生からも先生からも遠巻きにされる存在となっていた。

去年のゴタゴタがあつた際にいじめに近いことも受けたが、それに何の反応も示さなかつたためか今回は嫌がらせを受けるわけでもなく、単純に僕との関わりを避ける形で分かりやすく孤立することになった。

「でもそれだけで怒りが収まるわけが無いよな」

そう呟く僕の視線の先にはバレー部員達の姿。皆、いつにも増して生傷が増えている。大会が近いという口実で普段以上のしごきを課しているようだ。僕はといえばその抑制で体育館に行くことも出来なかつた。単純に処理しきれない雑用を名指しで頼まれるようになっていたからだ。あまり鴨志田に関わらないようにという校長の計らいなのだろう。悲しいくらいにやることが二人とも似通っている。

そして僕が満足に動けない間は雨宮さん達が何やら動いてくれた。何をしているのかは教えてくれないが、僕が鍵を渡した空き教室をよく利用しているらしい。

そんな彼らを頼もしく思いながら、僕も僕で何とか動けないかと色々模索を続けていたある日。僕は雨宮さん達から空き教室に呼び出されることになった。

放課後になるのを待つて教室に向かえば、そこには既に雨宮さん、坂本君、高卷さんの三人が揃っており、扉を開けた僕を迎えてくれた。「遅くなったかな、ごめんね」

「大丈夫ツス。こっちも今来たところすから」

坂本君に促されて僕も椅子に座れば、雨宮さんが早速といわんばかりに口を開く。

聞けば、あの後高卷さん伝いに鈴井さんから詳しい話を聞き、三島

君やその他の鴨志田の標的になりやすい生徒からどうか話を聞き出した三人は、去年の僕と同じように鴨志田に直談判しに行つたらしい。僕に怪我を負わせたことについても問い詰めたそうさ。

しかし結果は空振り。どころか、三人揃って次の理事会で退学させるように働きかけると脅されたらしい。やつてることが僕のときと全く一緒だな。それを報告してきたということは彼女達も手だてが無くなつてきて苦しくなつてきたのかもしれない。

「それで、君達の方でも手詰まりになつたつて感じ?」

「いや、そうじゃない」

心配から零れた質問は、自信ありげな雨宮さんの声で否定された。

「あくまで最終確認だった」

「最終確認?」

何を確認したかつたのかと首を傾げるが、小さく笑みを浮かべた彼女が教えてくれそうな気配はない。坂本君や高卷さんにも視線で問いかけるが、何も言わず、けれども諦めた様子でも無い。ということはまだ何か隠し玉があるということなのだろう。

「何をするつもり……つて聞いても教えてくれないんだらうね。こつちが協力できることはあるかい?」

「大丈夫。後は任せて欲しい」

僕からの申し出に返つてきたのは短く、されど頼もしい言葉。この様子だと僕に出来ることは無さそうさ。

「それじゃあ僕は君達がやろうとしていることが上手く行くように祈つておくよ。話はこれで終わりかな?」

「それだけじゃないです」

この報告だけで終わるのかと思えば、そうでは無かつたらしい。高卷さんが差し出したのは通話状態になつていて彼女のスマホ。促されるままにそれを耳に当ててみる。

「あ……、副会長さんですか?」

「その声は鈴井さん?」

電話口にいるのはどうやら鈴井さんらしい。鴨志田に襲われかけた日から休んでいるとは聞いていた。連絡先を知らないし、鴨志田と

同じ男である僕だとかえって怯えさせてしまうかもしれないと特に連絡を取ろうとはしていなかったけれど、いったいどうしたのだろう？

「その、お礼を言いたくて」

「お礼？」

「そう。あの日、私を助けてくれて、ありがとうございました」

「お礼を言われるようなことじゃないよ。むしろもっと早く助けあげられなくてごめんね。部活での様子も目にしていたのに事前に動けなくて不甲斐ないよ」

「ううん、そんなことないです。私が何も言えなかったのに、副会長さんはいつも助けてくれました。この前だけじゃなく、今まで何度も」

最初は緊張からか、もしくは怯えからかぎこちなかった喋りも次第に流暢になり、彼女は僕への感謝を述べてくれる。最悪の事態は避けられたとはいえ、彼女にとってはトラウマになってもおかしくない出来事だったのに、こうして話せるようになってくれて何よりだ。

「あのとき私に掛けてくれたブレザー、借りっぱなしでごめんなさい」

「ああ、それは気にしないで。予備もあるし、捨ててくれても良いからね？」

「そ、そんなことしません！」

そういえば鈴井さんに掛けたブレザーもあったな、と今さらになっ  
て思い出した。気にしなくとも良いのに、クリーニングして返して  
くれるという。学校に来られるようになって、余裕が出来てからで良  
いと伝えておく。その後も何度もお礼を言ってくる鈴井さんに、ゆっく  
り休むように伝えるとスマホを高卷さんへと返した。高卷さんも少  
し会話を交わすと通話を切る。

「ありがとう、高卷さん。わざわざ話をさせてくれて」

「良いんですよ。志帆にお願いされましたし。それに、私もちゃんと  
言えてなかったから。ホントにありがとうございました！」

「高卷さんまで……」

「私は何も知らなかった。志帆がバレー部で何をされてるかなんて。  
私が嶋志田の相手をすれば志帆がレギュラーになれる、私の方が志帆

を守ってるんだって自惚れてた。ホントは志帆にも守ってもらってたのに……」

そう言つて高卷さんが頭を下げる。

「二人には謝ったけど、先輩にもちゃんと謝っておきたくて。前は最低な態度を取つてごめんなさい」

「前……？」

「ほら、中庭の自販機のとこの……」

坂本君が横で耳打ちしてくれて思い出す。そういえば高卷さんに初めて話しかけたときにすぐ警戒されていたっけ。ただまあ、あれに関しては急に話しかけた僕も良くなかったというか。いや、確かに怖かったんだけどね。そのことを伝え、気にしないで言つても彼女が頭を上げようとしなかつたので、謝罪を受け入れ、普段通りに話してくれるようをお願いした。高卷さんに頭を下げさせてるなんて噂になったら彼女のファンから怒られるかもしれない。

「あはは、何それ。私にファンなんかいませんよ」

「そうかな。高卷さんくらいの美人だったら性別問わず憧れる人はいそうだけど」

高卷さんは照れたように笑う。うん、警戒されたり、恐縮されたりするよりもこっちの高卷さんの方がよっぽど親しみやすい。雨宮さんも坂本君も安心したように表情を緩めていた。

「さて、それじゃ僕はそろそろ帰るよ。何か策があるみたいだし、君達に任せる。退学を決定するしたら次の理事会、5月2日だね」

「それまでに鴨志田のヤロウを何とかしてみせますよー」

「期待してて」

何をしようとしているのかはさっぱり分からないけれども、そう言う坂本君と雨宮さんに頷きを返して教室を後にする。

教室を出る瞬間、微かに猫の鳴き声が聞こえたような気がした。

それから数日が経ち、休日明けの4月25日。学校中に貼り付けら



れた予告状に校内は騒然とした。

『色欲』のクソ野郎、

鴨志田卓殿。

抵抗できない生徒に歪んだ欲望をぶつける、

お前のクソさ加減はわかっている。

だから俺たちは、お前の歪んだ欲望を盗って、

お前に罪を告白させることにした。

明日やってやるから覚悟してなさい。

心の怪盗団より

校内の掲示板に所狭しと貼り付けられた赤と黒のカードに新聞の切り抜きのような文字が印刷された予告状。誰かが気になって足を止めれば、それが更に人を呼んで多くが文面を目にする。ご丁寧に掲示板の前の机にも同じ予告状がばらまかれており、掲示板のように貼り付けられていないそれを手にとって友人に見せに行く生徒もいた。「なにになに?」

「鴨志田先生、何かやったの?」

8時を過ぎて登校する生徒が増えてくると、その騒ぎは到底無視できないものになる。教師も何事かと見に来て、内容を目にとると血相を変えて走っていく。恐らく鴨志田を呼びに行ったんだろう。

程なくして騒々しい足音を立てながら鴨志田が掲示板の前まで走ってくる。その頃にはこの予告状の内容を知らない生徒の方が少なくなっていたけれど。

「誰だ! こんなことをしたのは!」

予告状の内容を見た鴨志田は普段のファン向けの爽やかな笑顔はどこへやら。怒りの形相で近くにいた生徒に次から次へと食って掛かっていた。そしてその視線がふと僕を捉える。

「キサマかあ!」

ずんずんと僕の前まで来るとその大きな両手で僕の襟首を掴み上げた。首が絞まって息がしづらくなるが、何でも無い様子を装って鴨志田の怒りの視線を受け止める。

「何の話ですか?」

「とぼけるな！　こんなふざけたことをしやがって！」

「そんなに焦ること無いじゃないですか。大したこと書いてない、ただのイタズラみたいなものじゃないですか。それとも、なんですか？」

何か心当たりでもあるんですか？

そうやってニヤリと笑えば、鴨志田の顔が大きく歪んだ。このイタズラを仕掛けた犯人は大体想像がついている。もちろんそれを素直に教えてやるつもりはないが。むしろこれを利用して精々引っ掻き回してやろうとすら考えていた。

「この、舐めやがって……！」

鴨志田が今にもこちらを殴り飛ばさんばかりに怒気を纏う。いつそのこと衆人環視のこの場でそうしてくれれば僕としても手間が省けるのだが、流石にそこまで冷静さを失っていないようで、ギリギリと僕の襟首を締め上げるだけに留まっていた。更に息が苦しくなるが黙ってやらないし、むしろニヤリと不敵に笑って見せた。

「舐める、ですか。それはこちらの台詞ですよ」

「ナニイ？」

眉をピクピクと震わせる鴨志田の耳元に顔を寄せる。

「子供だからって舐めるなよ。あんたのやってることを必ず明るみに引きずり出してやる」

「この……！　クソガキ……！」

そうやって歯が砕けるんじゃないかなろうかというくらいに歯軋りする鴨志田だったが、周りの目があるせいかな最後までこちらに手を出すことはなかった。

「こんなイタズラを許すなんて情けない生徒会だな！　責任取って全部お前が片付けろ！」

「はいはい、もちろん片付けておきますよ。おっと、そろそろ朝のHRの時間でしたね。昼休みに片付けることにしますよ。サボりは良くないです。それにこのイタズラで授業が今すぐ出来なくなることもないでしょう？」

僕はそう言うと鴨志田の手を振りほどいて自分の教室へと向かう。

後に残された鴨志田は他の生徒にも噛みつき、坂本君達にも絡んだ拳げ句、最後には自分で掲示板に貼ってあった予告状を全て剥がしたらしい。

ここ最近、僕や雨宮さん達が散々刺激したからあんな具体的なことを何も書いていない怪文書だけで動揺したんだろうか。あんなものに、適当に鼻で笑っておけば数日もすれば誰も話題にしなくなるだろうに。あそこまで過敏に反応したせいで今日一日は生徒達は予告状の件を口にしないものはいなかった。ただ、それでも翌日になればこの予告状の熱は冷めたことだろう。普段通りの日々に戻っていれば。

ただそうはならなかった。翌日は誰もが更に興奮冷めやらぬ口調で今日の出来事を話すことになる。

鴨志田が翌日から体調不良で学校に来なくなったからだ。

## Deepen the bond

鴨志田先生が心身不調による療養に入ったということが担任の口を通して語られ、あの予告状騒ぎは過熱した。

鴨志田先生の功績に嫉妬した教師による脅迫事件だ。

いやいや、例の転入生が秀尽学園でもついにその本性を露にしたのだ。

とんでもない、ついにあの副会長が鴨志田先生と一戦交えたのだ。あの頬の傷がその証拠だ。

何も知らない生徒達はあれやこれやと憶測を飛ばす。その憶測の中に僕を犯人だとするものもあるのは仕方ないと思うべきか、それとも雨宮さん達に向かう好奇の目が僕に向けられる分減って良かったと思うべきなのか。

何にせよ、僕はそれから数日はクラスメイトの好奇心、バレー部からの敵愾心をどう捌くべきかと頭を悩ませることになった。

そんな混乱が少しずつ収まってきた頃、半ば生活習慣と化した生徒会室での読書に精を出していた僕の下に珍しい来客があった。

「や、最近は何が騒がしいけれど困ったことは……無いわけじゃないね」

「……そつちほどじゃない」

眼鏡を曇らせながらインスタントコーヒーを啜るのは噂が噂を呼んで他学年にもその名を轟かせる雨宮さんだ。人目につかない教室の鍵を渡していたものの、校内の新聞部にずっと後をつけ回されては落ち着いて利用することも出来ないと一時的に避難させてくれと頼られたのだ。

「僕は去年も似たようなことがあったからね、疲れはするけど慣れたもんだよ」

「頼もしい」

「頼もしい、と言って良いのかは微妙なところだけだね」

話をしながら、僕も雨宮さんも本のページを捲る。彼女の読んでいる本は、『大怪盗・アルサーヌ』？ 図書室に入っている本だけど、女

の子にしては随分と渋いチョイスだ。

「雨宮さんも結構本を読むの？」

「それなりには」

「そっか。僕は本を読むのが好きでね。その本も読んだことがあるから、良ければ後で感想会でもしようよ」

僕の提案に雨宮さんは本に視線を落としながらコクリと頷いた。コーヒーが好きで本も読む、なかなか趣味の合う友人を見つけた気がする。僕は表情には出さないものの、内心ウキウキとした気分で手元の本を読み進めていた。

「副会長には迷惑を掛けた」

「迷惑……？」

しばらくの沈黙の後、徐に口を開いた雨宮さんが告げたのは謝罪。謝られる筋合いに心当たりが無いわけではないが、それでも半信半疑だったのでぼけてみせる。

「予告状のこと。あなたがやったわけじゃないのに」

「そう言ってくれるってことはあれは君達の仕業なのかな？」

聞き返すと雨宮さんは肯定も否定することも無く、ただ視線を下に落とす。あまり公にしたいことでは無いということなのかもしれない。

別に僕としては問い詰めるつもりもないし、あれが僕の仕業とされてもそれはそう思われるような普段の僕の行いにこそ問題があるのであって雨宮さん達が悪いわけでは無いと理解しているので責めるつもりも無い。

ただ、一つ気になることはある。

「答えたくなければ言わなくても構わないよ。だけど一つ教えて欲しい。鴨志田が今休んでいる件、あれは不法な尋問、拷問、その他肉体的、精神的苦痛を与えたことによるものかな？」

「それは違う！ と、思う……」

僕の言葉に慌てたように本から目を上げて反論する雨宮さん。思う、と言ったということは彼女自身も鴨志田が今休んでいる件の効果を確認出来ていないのだろう。この時点で少なくとも彼女は鴨志田

が今休んでいる件に大きく関わっていることは確定したわけだ。それを誰かに言おうとは思わないけれど。

「そっか、少なくとも雨宮さんは鴨志田に危害を加えていない、ないしは加えたつもりは無いってことだね。それだけ分かれば良いよ。僕は変わらず君達の味方だ」

「……良いの？」

「良いのも何も、僕も君も鴨志田に悪いことをした訳じゃないし。僕も君も何も知らない、そうでしょう？」

雨宮さんはポカンとした顔で僕を見ていたが、理解が追い付くとホッとしたような笑みを見せた。

「何も知らない僕の勝手な独り言だけどき。君は取引に見合う、いやそれ以上の成果を挙げてくれたと思うよ」

再び本に視線を落としながら、僕はそう呟く。あの予告状の内容を思い出してみれば、鴨志田は自らの罪を自白することになるんだろう。方法は分からないけれど、雨宮さん達はそれが可能な手段を持っているか、知っている。ただそれはあまり大勢には知られたくないか、あまり信じてもらえないような内容であろうことは彼女の口が重いことから想像がつく。なら僕が出来ることはこうして何も聞かず彼女を労ってあげることくらいだ。彼女達も僕の知らない方法で戦ってくれたんだろうから。

その後、僕は本を読み終えた彼女と『大怪盗・アルセーヌ』に関する感想会を開いた。常人には盗み出すことは不可能と思われる嚴重に守られたお宝を盗み出した彼の鮮やかな手口、それを構築する彼のあらゆる分野に精通した知識について僕なりの私見を交えて話せば、彼女はアルセーヌの怪盗としての揺るぎ無い美学を語る。着目する点は違えど、いや違うからこそその洞察の深さに互いに熱く語り合ってしまった。

「ありがとう、今日はとても楽しかったよ。良ければまたこうやって感想会をしたいね」

「……ちーこそ。また話がしたい」

「うん、話したくなったらいつでも生徒会室において」

満足そうな顔をした彼女と別れ、僕もご満悦な気分で帰路につこうとした。

「海藤くん」

そんな僕の気分を一撃で底値に持っていくような声が僕の背中に掛けられた。

「……どうかなさいましたか、校長」

「校長室に来たまえ。話がある」

普段は滅多に校長室から出ることもない、それどころか彼がその椅子から立った姿を見たことがないとすら言える黄色いハンプティダンブティこと校長先生、彼が洗面でこちらを睨み付けていたのだった。

彼に付き従って校長室に連行されると、彼は質の良さそうな椅子にどっかりと座り込み、額から流れる汗を拭いながらこちらを睨み付ける。

「君は鴨志田先生の療養について何か知っているだろうか」

「急に連れてきて何ですか」

校長は何やら確信を持っているような口ぶりだが、全く知らないことを知っているだろうと言われてもさっぱりだ。

「あの悪質なイタズラは君の仕業だと噂になっている」

「数ある噂の一つがそこまで強い根拠になるとは僕には思えないですけどね」

「鴨志田先生と喧嘩をした君が彼を脅したに違いない！」

口角泡を飛ばす勢いの校長をどうどうと宥めすかす。数日前は大人としてこれほど見下げ果てた人だと思っただが、どうやら底値はまだまだ下にあったようだと言われ、評価を下方修正する。多少確執があるとはいえ、噂話なんていう薄い根拠で犯人を決めつけ、尋問まがいなことをするのはどうかと思う。

「僕が鴨志田先生に何をしたと？ それに僕がやるとすれば自暴自棄になって今まで集めた証拠を無差別にばらまくくらいですよ。直接手を出すなんてリスクの高い真似はしません」

「それでも……、それでも君が何かしたことは間違いないはずだ！」

「何でそこまで躍起になって僕を犯人にしたがるんですか。あれですか、以前僕が話したリスクが現実になりそうだからって慌ててます？」

ここまで校長が僕を執拗にあげつらう理由としてはもうそれくらいしか無い。鴨志田が心身不調で休んだ。この間にもっとも動きやすくなって更に校長にとってリスクのある行動をする人間といえば僕だ。僕が以前話した学園の評判を地に落とす最悪のシナリオを現実にはかねないと恐れた彼は少しでも僕の行動を制限しようとしたのだと考えるのが自然だ。

僕の指摘が凶星だったのか、校長はぐっ、と喉を鳴らして黙り込んだ。マジかよ。

「だが、もし犯人でなかったとしてもあの悪質なイタズラを防げなかった罪は君にある！」

「お言葉ですが生徒会は生徒達による自活機関の一つですよ。生徒達の意見を集約し、権利を行使するだけです。警察では無いんですけど？」

というか警察にしたってこの程度のイタズラを本気で止められる訳が無い。被害者といえるのは鴨志田ただ一人。それにしたって根拠の薄い抽象的な悪口だけのあの予告状で名誉毀損まで問えるのだろうか。法律には詳しくないから分らないけれど、あれがしかも校内だけにしか広まってない上に朝の間に鴨志田自身が片付けて長い間人目に晒されたわけでもない。

「まあそこまで本気ならば是非警察を呼んでください。そうしたら事実関係は多少なりとも明らかにするでしょうし」

そんなことが出来るわけがないと知っているので挑発的に言ってる。仮に警察が事情聴取に来たところでのときは僕がこれまでのことを証拠付きで包み隠さず話すだけだ。それに鴨志田が休んでいる理由については何一つ知らないので校長の得になることは何も無い。

「それで、警察をお呼びになりますか？」

再度問いかけてみるが、校長は視線を忙しなく彷徨わせるばかりで



なにも言わず、そのまま肩を落とした。

「……これで満足かね？ 君のやったことは学園の信用を失墜させ、多くの学生達だけでなく、この学園のスポンサー達にも泥を塗る行為だ」

力無く呟いたその姿からは、先程までの怒りがすっかり抜け落ちてしまったようだった。彼は僕のせいで学園に不利益が生じると考えているみたいだが、残念ながらそれは勘違いだと言わざるを得ない。

「あなたのでしていた行為そのものが既にこの学園の看板に泥を塗りたくる行為でしたよ。学園の信用を思うのでしたら僕が去年告発した段階で事態を重く受け止め、対策すべきでした。遅かれ早かれ事は明るみに出ます。そうなったとき、校長はどうなさるおつもりですか？」

「……ワシの在任中に何故こんなことが」

僕の質問には答えず、頭を抱えて現実逃避に走る校長。その気持ちは分からないでも無いが、それを言うなら生徒側の意見にももう少し耳を傾けておくべきだっただろう。そもそも、ここまで鴨志田を好き勝手にさせたのは実績欲しさにその専横を黙認した校長にも非があるのは確かなんだから。あるいは秀尽学園の看板を一身に背負わされた鴨志田のプレッシャーを考えると、過度のストレスが彼の暴走の理由の一つになっていた可能性もある。

「どうすれば良いんだ、ワシは」

「きちんと説明責任を果たすしかないと思います」

そう言えば更に悩みは深まったようで、悲壮感漂う表情で僕に縋るような視線を向けてくる。

「君は今回の件、犯人が誰か心当たりがあるんじゃないかね？」

「校長の考えでは僕が犯人じゃないんですか？」

もちろん心当たりはある。というかその人物とさつきまで話していたくらいだけど、それを素直に教えてやるつもりはない。その程度には僕の校長に対する信頼は無くなっているし、雨宮さん達に対する信頼は強くなっている。多少の泥くらいは被っても良いと思うくらいには。

「それでは方が一警察が来たときにはワシは君を最有力容疑者として話すことになるが？」

「校長の中では最初からそうなっているのですからそうすれば良いじゃないですか。その結果、僕が退学になるのだったら仕方ないですね。大学なんて別に高校に通わなくても受験できますし、両親には謝らないといけないですけど」

僕が口を割ることは無いと悟ったのか、校長の顔に滴る汗が量を増していく。これ以上話すことは無いだろうし、ここにいっても仕方ないな。

僕は項垂れたままの校長先生に背を向けて校長室を後にする。出たところで心配そうにこちらを窺っていた雨宮さんと目が合う。帰り際に僕と校長の姿を見て心配してくれたんだろうか、もしくは僕が口を滑らさないかが気になったか。どちらにしても安心して欲しいと目配せしておく。その意味がきちんと伝わったかは分からないが、彼女はペコリと小さく頭を下げたのだった。

F i s t o f T h e H i g h P r i e s  
t e s s

「そっか、明日には学校に来られそうなんだね。安心したよ」

校長とのお話し合いの次の日、僕は珍しく昼休みを誰もいない屋上で過ごしていた。僕が話しかけている相手はスマホの向こう側にいる。この子との話は余人には聞かせるわけにはいかないため、こうして屋上に出向き、鍵を掛けて誰も立ち入れないようにしていた。

「うん。何回も相談に乗ってくれてありがとう」

「気にしないで。むしろこうやって話せて僕の方が安心してらんだから」

電話の相手は鈴井さんだ。鴨志田との一件以来、なかなか学校に来ることが出来ないでいたが、少しずつ回復してきたため5月の頭からは再び登校するという。高巻さんのスマホを借りて話して以来、僕は鈴井さんと連絡先を交換して何度か電話で話をしている。

最初はぎこちなかった彼女も少しずつ慣れてきたのか、今では普通に僕と話せるようにまでなっていた。

「ブレザーも借りっぱなしだし」

「それはホントに気にする必要無いのに。律儀だなあ」

「ううん。これがあったから、私はちゃんと副会長と話せてるの。あの日誰も来てくれなかったら、私は二度と男の人と話すことすら出来なくなってたかもしれないから……」

僕の行動は幸いにして、彼女に消えないトラウマを刻み付けることを防ぐのに成功していたらしい。それだけである日身体を張った甲斐があったものだ。

「それで、登校出来るようになったのは嬉しいけれど。このまま秀尽に通えそう？」

僕は気になっていたことを尋ねる。回復傾向にあるとはいえ、今の秀尽学園は彼女にとって心に深い傷を与えた場所には違いない。

鴨志田のこともあり、バレー部で長く休んでいた彼女に対して余計

なことを聞く人間は絶対に出てくるだろう。大半は予告状とその後  
の鴨志田の休養に目を奪われているだろうが、彼女が登校し始めれば  
どうしても耳目を集めてしまう。

そうした好奇の目は治りつつある彼女の心を再び傷つけてしまう  
可能性が高い。であるならばいつそのこと環境を変えてしまうのも  
一つの手段だ。そのことは以前から彼女にも提案はしていた。校長  
はまたぞろ学園の評判が、良からぬ噂が、等と喚くだろうが今さら  
な上に生徒の立場で気にすることでは無いと僕は考えている。

「どうだろう……、でもちよつと頑張ってみようと思う」

「そっか、辛いことがあったらいつでも言ってくれ。僕に出来ることな  
ら助けるから。と言っても今の僕は良くも悪くも注目されてるから  
あんまり話してるとこ見られるのも良くないかもだけどね」

「ありがとう。頼りにさせてもらうね」

鈴井さんから返ってきたのは前向きな言葉だった。転校というの  
もそれはそれで大きなストレスにはなってしまう。そういう意味で  
は学校に問題なく通えるようになり、冷静に自分のことを見れるよう  
になってから考えるのもアリなのかもしれない。僕は僕で性急に事  
を進めようとしていたのだと自省する。

鈴井さんがここまで前向きになれたのはやはり親友の高巻さん  
のお陰だろう。あれから頻繁に鈴井さんの家をお見舞いに行っている  
らしい。廊下ですれ違うときにたまに報告してくれる。個人的には  
浅く広い交友関係よりもこうしてしんどいときに寄り添ってくれる  
深い関係の人間が一人でもいる方がよっぽど財産だと思う。そうい  
う意味では鈴井さんはある意味恵まれているとも言えるだろう。

「それじゃ、明日はあんまり無理しないようにね」

「うん。ブレザー返しに行くから」

「ありがとう。会えるのを楽しみにしてるよ」

それだけ言って通話を終える。心配は尽きないが、高巻さんがつい  
ていれば大丈夫だろう。何かあれば今度は自分にも相談に来てくれ  
ると思える程度には信頼関係を築けたと自負している。

僕はスマホをポケットにしまうと屋上の扉を開ける。その瞬間目

の前に飛び込んできた誰かの頭が僕の胸にぽすと収まった。

「あつ……」

「ん？ 新島さん、何してるの？」

質問してみたけれど、何をしていたかは簡単に想像はつく。というより、普段人が来ない屋上にたまたま僕が来たタイミングで新島さんも来たと考える方が不自然だ。

恐らくは屋上の扉に耳をくっ付けていたんだろう。そして僕が急に扉を開けたから勢い余ってこつちに倒れ込んできてしまった、というところか。何で彼女がそこまでして僕の話を知りたがったのかは分からないけれども。

「べ、別に……。ちよつと新鮮な空気を吸いたかっただけ、といいますか」

「……新島さんはそういうの向いてないと思うよ」

露骨に目があらぬ方向へ泳いでいる彼女に僕は善意からアドバイスする。誤魔化し方が下手くそ過ぎる。根が正直すぎる彼女にとつてこういった真似は最も不得手な分野だろう。それこそ、こういうのは僕がやるようなことだ。

「なら単刀直入に聞かせてもらうけれど、この前ごまかされたことを聞かせてもらえる？」

「この前……？」

「顔に傷つけて登校してたときのことよ！」

新島さんに言われてようやく思い出した。そういえば一段落したら話すって言っていたつけ。あれから噂への対処だったり鈴木さんのカウンセリングっぽいことだったり雨宮さんとの不定期感想会の開催だったりですっかり忘れていた。

僕が忘れていたことに新島さんも気付いたのか、不満そうに眉を寄せて眉間にシワを作っている。

「忘れてたわね……？」

「いやいやまさか。それよりもちよつと離れませんか？」

「離れる……？ あつ、ご、ごめんなさい！」

新島さんはお怒りのようだけれどちよつと距離が近すぎる。何故

僕にもたれかかった状態のまま話を続けようとしたのか。それを指摘すれば、しかめ面は照れた表情に変わって彼女は飛び退く。

「話を出来てなかったのはごめんね。忘れてたわけじゃなく色々ゴタゴタしてたからタイミングが無かったんだよ」

そしてこれ幸いとばかりに忘れていたことを誤魔化しにかかる。実際ゴタゴタしていたのは事実だからね。

「タイミングが無かった、本当に？」

「もちろん。気になるなら今日の放課後にも話すよ。昼休みも終わるしそろそろ戻ろうよ」

僕はそう言つて新島さんを宥めすかし、なんとかこの場を切り抜けることに成功した。いや、新島さんの疑うような目を見るにそうでもないかもしれない。

「さ、放課後になったわよ。聞かせてもらおうかしら」

「HRが終わった瞬間に教室に来て僕を引っ張っていくとか行動力ありすぎじゃない？」

それから午後の授業はいつも通りにやり過ごし、さて約束通り生徒会室に行こうかと思つた瞬間に僕は新島さんに拉致され、生徒会室の椅子に座らせられていた。

「どこから話したのかな……」

一から十まで話すわけにもいかない。特に鈴井さんの名前なんかは起こつたことを考えればあまり口に出すのは憚られた。なのでその辺りはぼかしつつ、ただ去年のこともあってそれなりに突っ込んだところまでは事情を伝えることにする。

新島さんは僕が話している間ただ黙つて話を聞いていたが、机の上に置かれた両手が固く握りしめられていることから彼女の内心が窺えた。

「……それで、鴨志田先生と喧嘩して傷だらけになったと」

「喧嘩、にしては一方的だったと思っっているけどね」

怒りを押し殺した声で呟く新島さんが非常に恐ろしい。

「私に相談してくれなかった理由を聞かせてくれる？」

「前にも言ったけど事が事だからね。巻き込むわけにはいかなかったんだよ。鴨志田先生って他の先生にも影響力あるじゃない？ 僕だけが睨まれるならまだしも生徒会全体が睨まれるのは流石にね」

校長と真つ向から対立しちやっつた後は新島さんに色々と面倒事が降り掛かるだろうけど、ごめんねと謝っておく。

「そんなことはどうでも良いの。頼ってもらえなかった自分が不甲斐ないわ」

新島さんはそう言って視線を机に落とした。そこまで気に病まなくても良い、というの僕が言っても逆効果だろうけど。それでも新島さんは気にしすぎだと思う。去年にしたって今年にしたって僕が勝手にやりたいようにやった結果でしかないのだから。そこまで全部気にしていたら新島さんの気が休まらないだろう。

「新島さんも忙しいだろうし、あんまり負担を掛けたくなかったんだよ」

以前、ふとしたきっかけで新島さんがお姉さんと二人暮らしをしており、忙しい姉に代わって家事を全て行っているという話を聞いていた。それだけでなく生徒会長として普段から生徒、先生問わずに雑用を振られ、勉強にも手を抜けないとなれば僕としてはあまりこうしたことに巻き込みたくはなかった。

それを話せば、新島さんの表情は困ったようなものになり、それから大きなため息をついた。

「だからって友達がスゴい怪我してるの見たら心配するに決まってるじゃない」

「それは、そうだね」

僕も新島さんが顔に傷をつけて登校してこようものなら問答無用で事情を聞き出そうとしたらどうかとは想像に難くない。それも踏まえて改めて頭を下げる。

「ごめんね。自分ならうまくやれるって自惚れてた面があったのは確かだよ」

机に鼻がつくくらいに頭を下げれば、また向かいからは小さなため息。その後、頭にコツンと何か当たったような感触があった。

顔を上げれば新島さんが困ったような笑みと、こちらに伸ばされた右手。

「今度からはちゃんと相談してよね？」

「そうさせてもらうよ。鉄拳も喰らったしね」

「そんなに強く叩いてないから！」

噂の真相を知りたいというのは彼女も同じだろうが、僕に群がってきた同級生とは違って彼女は僕が話したことをそれ以上に突っ込もうとはしなかった。僕は得難い友人を得たものだ。

「そういうえば新島さん、今日はこれから少し時間ある？」

「え？ ええ、予定は特に無いけど」

それなら良かったと席を立つ。

「お気に召すかは分からないけど、駅前のカフェにでも行こうか。コーヒー奢るよ」

「あ……、フフツ、あなたも律儀よね」

前に新島さんに言われた約束。彼女も忘れていたようだが、僕はきっちり覚えていた。そりゃあこんな美人とお茶できる約束なんて忘れるわけがない。言っていて自分でもカツコつけ過ぎかと思っただけでもう遅い。

新島さんにからかわれながらも僕達は学園を出る。お願いだからもう少し手加減して弄ってくれないかな……。



C o l l a p s i n g   t h e   c a s t l e   o  
f   l u s t

「私は教師としてあるまじき事を繰り返してまいりました……」

5月2日。ゴールデンウィークを目前に控えたこの日、臨時に開かれた全校朝礼の場に突如として現れた鴨志田は壇上で静かに語った。

自身が今まで行ってきた暴挙の数々。それは生徒への暴言やバレー部員への体罰、女子生徒への性的な嫌がらせ、エスカレートした挙げ句、鈴井さんへの性的暴行未遂に至ったこと。

「私はこの学校を、自分の城のように思っていた。気に入らないというだけの理由で退学を言い渡した生徒もいます。もちろん、それは撤回します……」

涙を流し、肩を震わせながら話す彼の声は小さなものだったが、それすら体育館中に響き渡るように思えるくらい、今の体育館は静まり返っていた。

「私は傲慢で、浅はかで……、恥ずべき人間、いや人間以下だ……」

そう項垂れる彼に、いつものエネルギーに満ちた元メダリストでカリスマ的な人気を誇る教師としての姿は微塵も感じられなかった。

「鈴井さんにも、そして高卷さんにも、どのようにお詫びをすれば良いか……」

更に彼の口は止まらない。自身が両者を互いに人質として関係を迫ったことまで明かした。これには体育館内が一時ざわつきを見せた。かくいう僕も状況を冷静に分析しているようであり、動揺を抑えきれてはいなかった。

あの自信に満ちた鴨志田がいったいどのような心変わりをするのか。ここまで一変した雰囲気身を纏うのだろう。彼がここまで自身を卑下することなど、恐らく生まれてから一度も無かったのではないか。

「私は本日限りで教職を辞し、警察に出頭いたします。私のこれまでの行いは、賢明なる生徒のお陰で容易に立証出来るでしょう。私など

にお手間を掛けて申し訳ないですが、どうか協力してください……」  
そう言つて全校生徒を見回した彼の目は、僕と合つたところで止まった。その目には深い悔恨の念が溢れており、とてもではないが彼の芝居であるようには思えなかつた。むしろ、この告白をしてまで僕の握っている証拠を握りつぶそうとする意味が無い。

僕は呆気に取られたまま、でも彼の求めの通りに頷いた。それに対する鴨志田の反応は、これまた驚くことに安堵の表情だつた。まるで自分に罰が下されることに対して心底安心したかのような穏やかな表情を浮かべたのだ。

「どなたか、警察を呼んでくれ！」

その言葉と共に俄に騒ぎ出す生徒達。これは放つておくと收拾がつかなくなると感じた僕は、わざと大袈裟に足音を立てながら壇上に入り、マイクを片手に全校生徒を見下ろした。

「本日の全校朝礼は以上。生徒達は速やかに教室に戻ることに。担任の先生方は生徒の誘導をお願いします。……よろしいですね、校長先生？」

「あ、ああ……」

まだ混乱の渦中にある生徒達は、それでもいち早く出された指示に盲目的に従う。それは脳が混乱している中で唯一秩序だつて下された指令だからだ。先生方もたかが一生徒の僕のことだというのに律儀に生徒の誘導をしている。

ただ出口に向かいながらも壇上の鴨志田を見ながら話す生徒達のざわめきが徐々に熱を帯びはじめている辺り、動き出すタイミングとしては最適だつたと自分を褒めてやりたい。これ以上放つておけば体育館から生徒を出すだけでも倍近く時間がかかつたはずだ。

「ありがとう……、海藤君」

「鴨志田、先生……。一体どうされたのですか……?」

鈴井さんの件以来、彼のことは内心で呼び捨てにしていたが、今はそうすべきでないと感じた。今の彼は欲に溺れた鴨志田ではなく、鴨志田先生と呼んでも良いと思えたのだ。

「自分のやっていたことの罪深さに気付かされたんだよ……。あの

日、私を止めてくれて本当にありがとう。私はもう少しで、本当に取り返しのつかないことをしてしまうところだった。思えばいつも、君は私が道を完全に踏み外さないように押し止めていてくれた」

鴨志田先生はそう言っただけで弱々しく笑みを浮かべ、僕を見る。鴨志田先生からこんな感謝の念を向けられるようなことをした覚えも無ければ、むしろ何故ここまで急変して聖人染みた言動をするようになったのかが不気味で仕方ない。けれども、少なくとも彼が自らの行いを恥じ、罪を告白して償おうと考えているのは良いこと、なのだと思う。「鴨志田先生、僕は僕がやらなければいけないと思ったからあなたを止めたに過ぎないですよ。感謝される理由は無いです。それに、あなたがこうなったのは必ずしもあなただけのせいではないと僕は思いますから」

僕はそう言っただけで壇上でなおも立ち尽くしている校長を鋭く睨み付ける。鴨志田先生のもたらす甘い汁に目を曇らせ、彼がここまで増長することになった一因は間違いないと校長にもあるからだ。校長が庇うから、他の教師も何も言えない。学園の理事にも輝かしい業績ばかりを報告し、その裏で数多の涙と血を握りつぶしてきた。校長が強いリーダーとして鴨志田先生を抑えられていれば、この事態は防げた可能性もあったのだ。

僕の視線の意味に気付いた校長がギクリと身を震わせ、それから逃げないように体育館を出ていく。気がつけば、体育館に残っていたのは僕と鴨志田先生だけになっていた。僕はへたりこんだままの鴨志田先生の隣に腰を下ろす。

「警察が来るまでの短い時間ですけど、少しお話しませんか？」

「ああ……、君にはぜひとも聞いておいて欲しい」

それから、鴨志田先生はたどたどしくはあるものの、語ってくれた。元メダリストということと周囲から掛けられる実績への期待に押し潰されそうだった毎日。選手として一流でも、教師としてはまだ半人前なのに周囲はそんなこと関係ないとばかりに一流の指導者で一流の教師であると持て囃し、褒めそやす。自身の経験をうまく言葉に出来ず、部員達の能力が伸び悩むことに眠れなくなるほど悩んだ

日々。

そしてある日、彼の中の暴君が目を覚ました。試合で対峙する相手選手を全身で威圧していたときのようには振る舞えば、部員は以前よりも必死に練習に取り組むようになった。かつて自分がゲロを吐き、泣きながらこなしたメニュー、水すら飲むことを許されないような命の危機すらあるような非効率的なシゴキ。自分が指導者だったらこんな非効率的なことさせてなるものかとまで思ったそれをいつしか当然のように部員達に課すようになった。

全ては周囲から掛けられる期待に比例して大きくなった恐怖心によるもの。教師として、指導者としての自分の拠り所が不安定なために過去の選手としての栄光に過度に依存した結果だった。

「そうして実績が上がれば、周囲はさらに褒めそやし、しかもそれで終わらない。次を、もつと上をと言外に求める。それに応えるために更なる地獄を部員達に課す。そんな繰り返しだった」

そうやって大きくなり続ける恐怖が見つけた逃げ場所が、絶対強者としてこの学園に君臨する歪んだ悦びだった。

「最初は些細なことだったんだ……。ちよつと疲れて授業が億劫だから、休みたいとワガママを言ってみた」

するとそれがあつさりと通ってしまった。体育教官室で一人、彼はそのことに思いを馳せたという。

それからは些細なことが徐々に積み重なっていく毎日。授業を休むだけじゃなく、次は部活動の予算配分のこと、体育館のバレー部の優先使用、一つ一つは些細なそのワガママが、気付けば我欲を満たすようなものへと変貌していったのに気付いたのはいつだっただろうか。「ああ、誰も私に何も言えないんだと思っただ。実績さえ出せば、満足して好き勝手しても許される。そうやって私は、『俺さま』になった」

秀尽学園を我が城と見なす王の誕生は、しかし歴史の常たることのように半ば周囲から望まれるようにして成った。王となることにより、鴨志田先生はより自由に、より活発になり、それはバレー部の輝かしい実績を生んだのだから。

「そんな中、君が真っ向から私に対立してきた。意外かもしれないが、最初は安心したんだ」

「安心、ですか？」

「ああ、私が間違っていることをこうして敢然と示してくれる人間がいる。君という諫言者を通して、私は自身の行いを省みる切っ掛けを得られた」

だが、それも程なくして終わる。陸上部の顧問を臨時で受け持つようになったことが端緒となった。バレー部が実績を上げるまでは頼もしく感じ、実績を上げ始めてからは焦りを、そして自らが王となつてからは疎ましく感じていた陸上部。

ちよつと厳しくシゴいてやって部活を辞めさせようと思った。だが、そうやって標的にした人間は愚直に自身が言うメニューをこなす、ついには選手生命を絶たれてしまった。種目は違えど同じスポーツ選手として、その絶望が如何ほどのものかを分からない自分ではなかった。その取り返しのない罪の大きさを自覚する前に、逃げた。

「私が正しい、間違っているのは向こうだと背を向けた。そうして坂本君を挑発し、問題を起こさせ、退学させようとした。そうすれば私の罪の象徴は私の城からいなくなるから」

鴨志田先生は自身を止める最後のチャンスを失った。そこからは欠片ほどの良心は消え去り、残ったのは暴君と化した己の欲望のみ。そうなれば諫言者はたちまち目障りな障害にしか見えなくなった。

「そうして今になって死ぬほどの後悔に襲われているのさ。本当に、愚かだ……私は……」

それっきり、鴨志田先生は泣き崩れ、意味を成さない嗚咽を上げるだけになってしまった。一流のスポーツ選手としての強い自我が、歪んだ環境と合わさったことによつて普通の大人であれば持ち合わせている自制心を失わせた、と言えるかもしれない。もちろん、大多数の大人はこんなことにはならないだろうとは思ふ。けれど、学校という閉鎖的で特殊な職場環境、その中で、教師として新米でありながら結果を求められ、周囲には自身を肯定するものしかない、そんな環

境でどこまで人は自制心を持ち合わせていられるだろうか。少なくとも、彼ほどではなくとも生徒に横暴に振る舞う教師には前世でも今世でも覚えがある。

「でも鴨志田先生、あなたはきちんと自白して、償おうと考えているじゃないですか」

僕は鴨志田先生の震える肩に手を置く。そういえば鴨志田先生とは握手すら交わしたことがなかったかもしれない。鈴井さんを助けたあの日と今とで通算二度目の触れあいだ。そう考えれば、僕ももう少し鴨志田先生と向かい合うべきだったのかもしれない。彼が抱えていたプレッシャーを察していれば、本当に手遅れになる前にこうして彼が弱音を吐き出せる場になっていられば、少しは違った結末もあり得たのかもしれないと夢想する。けれども、教師と生徒という立場がそれはありもしない仮定だと一蹴してしまう。

例え前世の記憶を持っていようが、多少人より勉強が出来て大人びていようが、僕はただの高校生でしかないのだ。そんな僕に鴨志田先生が悩みを打ち明けられたかと問われれば、答えは否だろう。

「あなたのしたことは許されることじゃない。あなたを一生恨む人だっている。だけど蹲ってばかりじゃいられないんです。自分がやってしまったこと、それで自分に向けられる視線も、全てを受け止めて、あなたはまた歩き出さないといけない。考えることを止めて、ただ謝り続けるだけじゃ意味が無いんです。考えて考えて、辛くてもしんどくても考え続けないといけないんだと思います。これから自分が出てくることを。たかが高校生の戯れ言ですけど、でも、あなたが間違っていないんじゃないかと僕は思っていますよ。それにバレー部の中には、そんなあなたでも慕っていた生徒がいました」

「うっ……くっ……ああ……、ああっ……！」

鴨志田先生は泣き続ける。泣き続けながらも、僕の言葉に何度も頷く。大の大人を高校生が諭しているだなんてお笑い草だ。社会の苦しきも知らないで、綺麗事しか言わない子供の戯れ言なんて一笑に付して終わりでもおかしくない。それでも、鴨志田先生は笑うことも、否定もせず、ただ頷いて泣き続けるのだ。

それからしばらくして、誰かが通報したのか警察がやって来て、事情聴取をするということで鴨志田先生を任意同行で連れていくことになった。僕は警察と鴨志田先生に促されて鈴井さんが襲われた日の録音データと去年と今年のバレー部員に対する体罰を記録した動画、音声データを提出し、パトカーへと連れられていく鴨志田先生を見送った。

「改めてお礼を言わせて欲しい。ありがとう……海藤君。君のお陰で私は、ただ罪を裁かれることだけに安堵するのではなく、その先のことも考え続けないといけないことに気付かされた。君には教えられてばかりだな、教師として情けない。いや、もう教師ですらないか」  
パトカーに乗る直前、こちらを振り返ってそう言う鴨志田先生の顔は、どこか晴れやかな表情をしていた。

「安心してください、今の鴨志田先生ならちゃんとやり直せると思います。いつ、どこでになるかは分かりませんが、また会うことがあればバレーボール教えてください。あんな強いスパイクを僕も打つてみたいですから」

「ああ……。本当に、ありがとう」

こうして怒涛の4月は終わりを告げた。偽りの城の支配者は自らの過ちを認めて王冠を脱いだのだ。

鴨志田先生を乗せて走り去っていくパトカーを見送りながら、僕の脳裏には彼女と初めて出会った日のことが思い出されていた。

「学園かと思っただら城に来ていた、ね」

城と王様。白昼夢と切って捨てられてもおかしくないような言葉が、僕の頭にこびりついて中々消えてくれなかった。

「……」

自身の部屋だと割り当てられた喫茶店『ルブラン』の屋根裏。ベッドに横になった蓮はぼんやりと天井を眺めながら思索に耽っていた。その脳裏に浮かぶのは一人の男子生徒の顔。

『危ないところだったね。怪我は無いかい？』

秀尽学園を自らの城と見なす歪んだ鴨志田の認知世界で、彼だけは現実世界と何ら変わりがないようにいつも通り飄々としていた。

敵に囲まれ、あわや絶体絶命の危機というところで逃げ道を示し、鴨志田の歪んだ認知が及ばない場所、セーフルームに導いてくれた。『もはや僕の言葉じゃ鴨志田先生を止められそうに無いけれど、それでも僕が出来る限りの助けを君たちにしよう』

そう言つて鴨志田の歪んだ認知によつて構成された世界、パレスの中でもその影響が少なく、脅威が小さなルートを蓮達に教えてくれた。

『誰だつて心に弱いところを抱えているだろう？ 言つてしまえば鴨志田先生は僕を通してそうした弱い自分を見つめ、それに耐えられなくなつて僕を追放したのさ』

城の暗い地下道を先導しながら彼が語つた言葉が頭の中に甦る。

『君達には探してみたい。彼が裸の王様に完全になつてしまう前にこの城のどこかに散らばつてしまった彼の最後の叫び、その欠片を。君なら、その声に気付けるはずだから』

そうして彼と別れ、城の探索を続ける中で見つけたもの、モルガナ曰く『イシ』と名付けられたそれを手に取つた瞬間に聞こえた声。

『どいつもこいつも、勝手な期待を押し付けやがる……！』

『どこまでやれば満足するんだ……！』

『どうしてこんな俺を理想の教師だなんて無責任に持て囃すんだ……！』

髑髏を象つたそれを手にする度に脳裏に響く声は、まるで悲鳴のようだった。それを聞いたのは蓮だけだったのか、竜司や杏、モルガナ



に尋ねてみても首を傾げるばかりだった。

それはもしかすると、鴨志田の歪んだ認知の中に取り残された最後の良心というやつだったのかもしれない。

「ボーツとしてどうしたんだ、蓮？」

足元で丸まっていたモルガナが気遣わしげな声で枕元に寄ってくる。

「イシを手に入れたときの声のことか？」

そう問われて蓮はこくりと頷いた。蓮の枕元に丸まったモルガナも悩ましげな声をあげる。

「ワガハイもイシについては分からないことだらけだ。だから蓮だけが聞いたっていう声もそのイシが大きく関わっていることは間違いないだろうな」

だが、とモルガナは続ける。

「パレスにいたあの男、海藤だっけか？ アイツは一体何者なんだ。アイツは鴨志田の認知が生んだ海藤なのは確かだが、それにしても異質なヤツだった」

モルガナという言葉に蓮も頷く。確かに彼はパレスのシャドウ的存在、鴨志田の認知存在でしかないはずなのに、パレスの構造を熟知し、あらゆることかパレスの主である鴨志田に敵対していた蓮達を助けるような真似を試みせた。

パレス内を闊歩している野良のペルソナを蓮の交渉で仲間にしたのであればまだ頷ける。だが、彼は蓮の仲間や野良ペルソナとも違うただのシャドウであるのに、他のシャドウから大きく逸脱した存在感を放っていた。

「イシについても知っているみたいだった。もう鴨志田のパレスは崩壊しちゃったからアイツと話すことは出来ないのが悔やまれるな……」

悔しそうにモルガナが呟く。蓮も同意するように頷いた。情報源というだけでなく、敵だらけのパレスの中で彼と出会えたのは蓮達にとって非常に幸運だった。

現実でもどこか他の学生達とは違った雰囲気を持っており、周囲の

白い目を恐れる蓮を助け、偏見無く手を差し伸べてくれた。パレスでも現実でも周りが敵に見えていた蓮にとつてそれは非常に心強い支えとなってくれたのだ。

「ま、あんまり気にしても分からないものは分からねーんだ。今日はもう寝ようぜ？」

再び思考の海に沈みそうになっていた蓮を、モルガナの欠伸混じりの声が引き上げる。そうだ、確かにもう夜も更けてきた。今日は朝から鴨志田の改心を見届け、それで大騒ぎになった学園や興奮した竜司を宥めるのに疲れた。

明日からはゴールデンウィークなのだし、今日くらいはゆつくりと寝て英気を養おう。

そう思つて蓮は目を閉じる。

『強すぎる欲望は現実の認知を歪め、人格にまで影響を及ぼす。けれど、歪んだ欲望だけで果たしてそこまで成し得るものなのかな』

別れ際、最後に彼が呟いた言葉がいつまでも蓮の頭の中で木霊していた。

「ニュースになつてたよ、海藤君」

「藪から棒に何ですか店長？」

秀尽学園は私立の進学校にしては大変珍しいことにアルバイトが容認されている高校だ。僕は成績優秀者の特待生枠のため授業料は免除されているが、高校生にもなつていつまでも親の小遣いだよりというのも申し訳ないと感じてこうしてバイトに精を出している。

渋谷駅はセントラル街のファミレス。以前、坂本君を連れて入ったそこが僕のバイト先だった。学生がメインで平日、休日問わず混み合っていることもあり、夜遅くまでシフトに入れない高校生でありながらとりあえず居てくれるだけでもありがたいと雇つてくれている。

「あれよ、体育教師の体罰問題」

「ああ、そのこと」

元メダリストの有名教師が起こした不祥事というのはマスメディア

アの格好のネタになったようで、鴨志田先生が警察に出頭して翌朝には朝の情報番組のトップを飾っていた。恐らく近々校長が会見を開いたりもするのだろうか、とぼんやり思いながら朝ご飯を食べていた記憶がある。

「ああ、ってドライな反応ねえ。もつとビックリしたりしないの?」「何でしょうね、そこまで実感が湧いてないのかもしれないですね」

バックヤードの休憩室で、僕の対面に座ってノートパソコンをカタカタとやっているメガネのお姉さん（年齢は聞けない）がこの店の店長である。あまり表に出てくることはなく、もっぱら休憩室に籠ってパソコン作業に精を出しているため、バイト仲間からは親しみと少しの怒りを籠めて休憩室のヌシと呼ばれていた。

「バレー部員への暴言、体罰、セクハラ、これまたやりたい放題だね。海藤君って秀尽の副会長なんだよね? この人のやってたこと知ってたの?」

「まあ知ってましたよ。公表は出来なかったですけど」

去年は真つ向から対峙してました。今年はがつり殴られました。だなんてとてもではないが言えないため、当たり障りのないことを言っておく。

というかさつきからキーボードを叩くこともなくずっとマウスを触っていたのはネットサーフィンでもしていたな、この人。僕がそう思ってジト目で睨み付けてみれば、店長はこほんと咳払いをしてみました。

「これでも心配してるんだよ。海藤君はホールもキッチンも任せられる貴重な戦力だからね、学校生活がゴタゴタしてシフト減らしますなんて言われたら困る」

「そのときは店長がシフトに入れば良いんじゃない?」

「止めて。これ以上働かせられたら私死んじゃうから」

飲食店の店長なんてそりやまあ忙しいことこの上ないだろうけど、それでも高校生一人分の穴埋めくらいはしてくれないかな。僕は机にだらんと上半身を投げ出した店長を冷めた目で見つめた。

「まあろくにクローズ作業にも参加できない高校生をよくここまで重

宝してくれてる、という意味では僕も感謝してますけどね」

「逆に言うと君が出来ない仕事ってそれくらいじゃん？ オープンも発注も出来るし、私の代わりに店長してくれても良いんだよ？」

「なら時給上げてくださいよ」

「そう言われたから前も上げたじゃんかー！」

そう言っただけで店長はついに手足をバタバタと暴れさせた。それをハイハイと受け流しながら僕は手元の本に再び視線を落とす。どこまで読んだっけ？

「あ、話は変わるんだけどさ、副店長」

「勝手に人を大層な役職に就けようとししないでください。何ですか？」

しれっと人を副店長呼びわりしてきたためきつちり否定しておく。今のを流しているとこの人のことだから他の人の前でも普通に僕のことを副店長とでも呼びそうだからだ。否定しても呼んできそうだけれど……。

「いやね、海藤君は芸術に興味あったりするかい？」

「芸術、ですか？ 詳しくないですけど絵とか彫刻とか鑑賞するのは好きですよ」

特に好きな芸術家なんかは自伝なんかを読んで人となりを知ってからその人の作品を観て、制作時に何を考えていたのだろうと考えたりもする。これも恐らくは前世の記憶らしきものの影響だろうとは思っただけで、自分が見ている世界は他人が見ている世界と違うのだと幼い頃からぼんやりと感じていた。その考えは突き詰めていくと自分が今いる場所の現実感を失わせ、アイデンティティを喪失してしまいうるにもなる。特に多感な中学生の時期は幼い自我と覚えの無い老練した記憶に挟まれて苦労したこともあったため、そうしたときに誰かの創作物を眺め、その世界観に身を浸すことで現実を再認識するということをしていた。

僕の返答を聞いた店長はへにやりと緩んだ笑顔で僕に一枚のチケットを差し出してくる。

「なんです、このチケット？」

「いやね、これいるかなって。何とかって有名な日本の芸術家先生の個展のチケット。私は芸術とか欠片も興味ないし」

「何とかって……興味無さすぎるでしょ……」

チケットを受け取って目を通せば、『斑目一流齋個展』の文字が目に入る。この名前は流石に芸術に興味が無い人間でも一度は目にしたか、耳にしたことがあるはずだ。

日本芸術界の押しも押されぬトップ。写実、抽象だけでなく和洋のジャンルにすらとらわれない変幻自在の作風で、まるで別人が描いたと言っても頷けるような幅の広さに世界でも評価が高い芸術家の人だ。

「斑目一流齋って……日本画家の超大家じゃないですか。しかもこの個展のチケットって発売即完売でプレミア付きのやつでは？」

なんだって芸術のげの字とも関わりが無さそうな店長がそんなプレミアチケットを手に入れられたというのか。驚きに目を瞪れば、店長はどこか得意気に胸を張った。

「フン、私の親戚がなんかそういう筋らしくてね。余ったチケットを譲ってくれたのよ」

「へえ、でも良いんですか？　こんな貰ってしまったって」

このチケットを喉から手が出るくらい欲している人はたくさんいるはずだ。褒められたことではないが、それこそネットオークションなんかに出品すればそれなりの小遣い稼ぎは出来るくらいの。

それをたかがバイトの高校生にあっさりと渡してしまっても良いのかと思ってしまう。それを伝えたが、店長は気にするなとばかりに手をヒラヒラと振った。

「普段シフト入って頑張ってくれてるし、今日だってせっかくのゴールデンウィーク初日なのに朝からシフト入ってくれてるじゃない。これくらい貰ったってバチ当たらないよ」

それに、これで恩を感じてもっとシフト入ってくれたら儲けものだし。と最後に付け加えたのは店長なりの照れ隠しだということは流石に理解できる。僕はチケットをロッカーの鞆に丁寧にしまうと、きちんと施錠を確認する。

「それならありがたく受け取っておきますね、店長。それと、これのお返しというわけじゃないですけどもうちよつと気合い入れて頑張ります」

「お、やったね。期待してるよー!」

斑目一流斎の個展か、柄にもなく楽しみで顔が緩んでしまった。4月からこつちバタバタとしっぱなしだったけれど、少しは楽しみが増えたな。

Not malicious but harmful

バイトとお気に入りのカフェでの読書、そして少しの勉強とこの上なく模範的な態度で過ごしたゴールデンウィークの三日間は終わりを告げ、今日からまた高校に真面目に通う日々が始まる。

「あーあ、ゴールデンウィークが終わったと思っただら来週には試験だぜ」

「朝から憂鬱なこと言うなよ……」

最寄り駅から学校に向かうまでの道すがら、そんな雑談が耳に届く。そういえば雨宮さんは大丈夫だろうか。学校が違えば授業の進度も違うし、何より秀尽のカリキュラムはやや特殊だ。

などとつらつらと考えながら歩いていると、校門前に人だかりができてるのが目に入る。それにがやがやと騒がしい。僕も別に情緒が枯れているわけではないので、何が起きているのかは気になるのだ。群衆の後ろからその中心を見ようと背伸びを試してみれば、

「では鴨志田容疑者の体罰について知っていた人はそう多くないか？」

「むしろ結構人気だったしね、鴨志田先生」

「だよな。私も知らなかったし。詳しく知ってたのって副会長じゃないかなあ」

スーツに身を包んだ女性がうちの学生にマイクを向けてうんうんと頷いている。それを少し離れたところから撮影しているのは両手で抱えられる程度のカメラを構えた男性。彼は地上波キー局の名前が印刷されたシャツを身に付けていた。なるほど、ゴールデンウィークも終わって学生が登校してくるこの日を狙ったのか。鴨志田先生の行いのデータを提出した僕に対しては、人目を避けるように警察が家を訪ねてきて二、三質問をして帰っていく程度であり、マスコミが家に押し掛けてくることはなかった。その辺りは事情聴取に来た警察の人が気を遣って名前を出さないでいてくれたのだろうか。

何にせよ、ここでマスコミに捕まると面倒な上、折角気を遣ってくれたかもしれない警察の人の気持ちを無駄にしてしまう。僕は昇降口に向かおうと踵を返そうとした。

「あー、あそこにいるのがその副会長ですよ」

だがそういうときほど上手く行かないのが世の常。僕の背に掛けられた声、それと同時に背中に突き刺さる数多の視線に、僕はそれらを見無視して歩を進めるといふ選択肢を奪われてしまった。

ため息が半分ほど口から漏れだしそうになりながら振り返ると、マイクを携えたりリポーターがニコニコと愛想の良い笑みを浮かべながらこちらに歩いてきてるのが見えた。カメラマンの男もちろん一緒だ。

「あなたが副会長の海藤くんですね。少しお話聞かせてもらっても良いですか？」

疑問の形を取っているものの、マイクは既にこちらに向けられている。笑顔に見えて、その目の奥にギラギラと光る執念は僕を逃してなるものかと雄弁に語っていた。つまり拒否することなど出来ないということだ。

「……なんでしょうか」

「鴨志田容疑者の体罰について、彼が出頭する前からそのことを把握されていたそうですが、それは本当ですか？」

せめてもの抵抗として渋々、という感情を隠すこと無く返してみたけれど、リポーターの女性には何も堪えていないようだ。インタビュアーなんて、普通の高校生だったら喜ぶところなのだろうか。僕としてはこうして人の触れられたくないところに無遠慮に踏み込もうとするところは好きになれないのだけれど。

「本当ですよ」

どうせ警察から話を聞いているのだから、ここで知らなかったと嘘をついても良いことはない。さっさと答えるべきことを答えて終わらせてしまおうのが吉だろう。

余計なことは言わず、訊かれたことだけに答える。僕の返答にこちらが内心警戒していることが伝わったのか、リポーターの女性の眉が



微かにピクリと動く。注視してなければ気付けないほどの変化だったけれど。

「では今までその情報を表に出さなかった理由は？」

「色々事情があったので」

校長に脅されていたから、とは流石に言えない。別に彼の進退がどうなるかと知ったことではないが、それで他の生徒に累が及ぶのも望むところではないからだ。僕だって積極的に母校の悪評をばらまきたいわけじゃない。それにこういう話はこんな所ではなく、きちんと信用できる人に渡すべきものだ。決してお茶の間を一時賑わわせて終わらせてしまうような形で消費されるべきものじゃない。

「その事情とは？」

「申し訳ないですが、言いたくありません」

「では鴨志田容疑者についてはどう思われますか？ その行いを知っているながら隠していたということは彼の行動を黙認していたということですか？」

とてもじゃないが高校生に向けるべき質問じゃないだろう、これ。という言葉が喉まで出かかったが、グツと堪える。こちらから半ば喧嘩を吹っ掛けたようなものだ。相手の追求が強くなるのも当然と言えば当然。

「黙認していたわけじゃありません。ただ、自分に出来ることをしていました。鴨志田先生のことをどう思っていたか、についてですが。もちろんあの人のやっていたことは許されることじゃありません。なのできちんと自身の行いを受け止め、被害者への謝罪、反省をして欲しいと思っています。少なくともバレーボール選手として偉大であったことには変わりないですから」

「体罰や性的暴行をしていたことについて特に思うところはないと？」

リポーターの女性が引き出したかった言葉は恐らく警察から聞き出せなかった鴨志田先生の普段の校内での振る舞いとそれに対する生徒の嫌悪の感情だろう。だから色々と僕に対してこんな穿った質問をする。特に鴨志田先生の行いが校内では巧妙に隠されており、そ

れを知っていた中でバレー部とはあまり関わりが無い僕のような生徒の言葉というのは貴重な撮れ高になるだろうから。

「許されることじゃない、と言いましたが」

「それだけですか？」

「どのような裁きが下されるかは僕ではなく警察や裁判所のお仕事ですから。ただ鴨志田先生が出頭した日、彼は自らの行いを深く悔いていました。本心から後悔している人をそれ以上貶めるようなことを言うつもりはありません。直接の被害者でもないですから」

彼に何か言えるとしたら、それは彼の被害者だと僕は思っている。彼らに頼まれたわけでもないのに彼らの代弁者になるつもりは僕には無かった。それはさつきも言った通り警察や裁判所の仕事だ。

「鴨志田容疑者が突然自白したことに対してきつかけのようなものに心当たりはありますか？」

これ以上質問を重ねても望む言葉を引き出すことは出来ないと感じたのか、リポーターは質問を変えてきた。

「さあ。僕にはさつきぱりです」

「自白の前に鴨志田容疑者と揉めたとも聞いていますが」

インタビュールした生徒の誰かから聞き出したのか。この話を深掘りされると僕だけじゃなく鈴井さんまで巻き込んでしまうことになるのでしばらくはつくれる選択しか僕にはない。

「特に揉めたとかはありませんよ」

「ですが……」

尚も食い下がろうとするリポーターの言葉を無視してこれ見よがしに腕時計に視線を落として見せる。

「すみませんがもう行っても？ HRが始まる時間になりますし」

時刻は8時15分。今日は少しのんびりと家を出たため、あんまり余裕も無かったのだ。暗にこれ以上答えてやるつもりもないと腕時計を指差す。

「……お忙しいところありがとうございます」

「ええ。そちらこそご苦労様です。あまり大したことが答えられずみません」

声の調子こそ変わっていないが、面白くなさそうに目は剣呑な光を放っているリポーターに頭を下げると、僕は改めて昇降口へと歩を進める。それと共に周囲で足を止めて聞いていた生徒達もこちらを見てヒソヒソと話しながら同じように昇降口へと向かっていく。

鴨志田先生の仕出かしたことは許されない。これは確かなことだ。けれど、あのとき泣きじゃくっていた鴨志田先生をそれ以上追い討ちするような真似は僕には出来ない。少なくとも、真に反省している人には更正のチャンスを与えるのがこの国の法なのだから。もちろん被害者からしたら許せることではないのは理解している。僕だって直接被害を受けていたらこんなことを言えないかもしれない。でも鴨志田先生が流した涙が嘘じゃないってことを、誰か一人くらいは信じてあげても良いと思うのだ。

「改めて、あのときはありがとう」

「本当に律儀だね、鈴井さん」

放課後、いつもの通り生徒会室で時間を潰していた僕のところ、高巻さんを伴って現れた鈴井さんはそう言っていてクリーニング済みのブレザーを僕に差し出してきた。

それを受けとりながら、僕は彼女らを椅子に座らせてコーヒーを淹れる。ゴールデンウィークも過ぎると徐々に気温も上がってきているけど、まだホットコーヒーでも許されるだろう。

「電話でも言っていたけど気にしなくても良かったのに」

「私が杏と一緒にまだ秀尽に通えているのは副会長のお陰だから、これくらいしない」と

まだ少しぎこちないものの、微かに微笑んだ鈴井さんに安心して僕はコーヒーに口をつける。こうして少しでも笑えること、そして高巻さんや雨宮さん、坂本くん、それ以外にも彼女のクラスメイトが気に掛けてくれるだろうから鈴井さんはこれからも何とか秀尽に通うことが出来るだろう。それから少しの時間、彼女らと談笑を楽しんでか

らバレ一部にも顔を出していくという彼女達を見送った。

それからまた読書に戻ってしばらく経った頃、生徒会室の扉が開く音に視線を上げれば、新島さんが浮かぬ表情でそこに立っていた。「や、新島さん。何か浮かぬ顔してるけど、どうしたの？」

「海藤くん……。いえ、なんでもないわ」

何かを言いたそうに口を開いた新島さんだったが、何も言わないまま再び口を閉ざすと、椅子に座って物思いに沈んでしまう。気になるのは気になるが、彼女が話しながらないのなら無理に聞き出すこともないだろうと思つて再び本に視線を戻す。

それから彼女は何かを言おうか言うまいかと僕をチラチラと盗み見ては口を開いては閉じを繰り返していたが、何も会話が無いまま時間が過ぎていく。今日は珍しいことに先生方から押し付けられた仕事も無い、というより鴨志田先生の件で殺到しているのであろう問い合わせに忙殺されているのかもしれない。いずれにせよ、このまま下校時間まで暇を潰すことになるかもな、などと考えているとポケットの中のスマホが震えるのを感じた。

何かと思つて見てみれば、チャットアプリの通知画面にどこかのWebサイトのURLが貼られているのが目に入る。どうやらクラスの情報通がクラスメイト達のグループチャットに貼り付けたいらしい。少し気になったのでリンク先に飛んでみれば、赤と黒を貴重とした派手な装いのサイトトップページに飛ばされる。そのサイト名は、

「怪盗お願いチャンネル……?」

またぞろ胡乱なサイトがあったものだ。どうやら鴨志田先生の騒ぎの後、つい最近立ち上がったサイトらしい。あの日突然人が変わつて罪を自白した鴨志田先生のように、改心させたい人はいませんかと問うそのサイトには、匿名掲示板まで用意されていて、中々の賑わいを見せていた。

「怪盗?」

そして僕の眩きに先程まで静かだった新島さんが初めて大きな反応を見せた。机に身を乗り出し、僕のスマホに視線を注いでいる。

「う、うん。何かクラスのグループチャットにURLが貼られてね。」

こんなサイトがあるみたいだよ」

そういつてスマホの画面を向けてみれば、それを食い入るように見つめる新島さん。

「こんなふざけたもの……」

そして静かに、けれど忌々しそうに呟いた。なるほど、彼女の悩みはこの怪盗騒ぎ絡みのことらしい。

「まさか海藤くんもこのサイトで何かお願いしようなんて考えてないわよね？」

「僕が？ まさか」

据わった目を僕に向ける彼女に対して、肩を竦めて返す。

「あいにくとこういうのを手放しで信じられるほど可愛げのある性格じゃないしね」

「そう……そう、よね……」

そう言うとな新島さんは顎に手をやってうんうんと唸り始める。その様子から彼女が何に悩んでいるのか、どんな面倒事を抱えてしまったのかは大体想像ついてしまった。

またあの校長が無茶振りをしたんだろうな。記者会見もして、マスコミに色々追求されたみたいだし、そして僕にはあまり頼れないとなればあの人が次に頼りそうなのは誰かなんて容易に予想できる。

「にしても、怪盗お願いやチャンネルとはまた……」

僕は再び手元のスマホに目をやる。誰がこんなサイトを作ったのかは分からないけれど、どこまで本気なんだろうか。遊びなんだとしたらまだ話が大きくなる前に消しておいて欲しいものだけだ。

改心依頼、と名付けられたページに次から次へと書き込まれていく顔も名前も知らない誰かの悲痛な叫びとその苦しみを強いたであろう人の名前。ページを更新する度に増えるそれを見ながら、僕は今度こそ今朝から堪えていたため息を溢したのだった。

Mercy of Death, kindness  
of the Pope

「うん、もう傷も無さそうね」

「本当にお世話になりました、武見先生」

僕の前でカルテに何やら書き込んでいる女医に向かって頭を下げる。白衣こそ纏っているものの、ごつついチョーカーを首に巻いて真っ赤で太いベルトをしているパンクな姿は一見して女医とは思えない。

そんな奇抜に過ぎる服装をしてはいるものの、彼女はこの辺りでも腕が確かと評判な医者だった。僕も知り合いの紹介でここを訪れてからは何度かお世話になっている。

「いきなりボロボコの顔でやってきて事情も聞かずに手当てしてくれだなんて、まともな医者だったらまず領いたりしないわよ」

「いやはや先生にはお世話になりっぱなしで……」

鴨志田先生に滅多打ちにされた日、僕はボロボロの姿で彼女の医院を訪れた。彼女は目を丸くしていたものの、事情を伏せて欲しいという僕の要望を聞いて何も聞かずに治療にあたってくれた。

「まあこっちも新薬の有益なデータが採れたから良いけど」

「おっとこの先生急にマッドなこと言い始めた。何を投与されたんですか僕は」

確かに良く分からない飲み薬を処方されたけども！ 疑いもせず飲んでしまったけども！

「コンセンサスを取らないのは違法では？」

「そっちのワガママを聞いたんだし、こっちの要求を飲んでくれても良いんじゃない？」

「普通に頼まれたら了承してたんですけど……？」

しれっと流す武見女医。いやこれは見逃してはいけないのでは……？ でも先生には助けてもらった恩義もあるし、うぐぐぐ。

頭を抱えてうんうんと唸っている僕を、武見先生はクスクスと笑っ

て眺めていた。

「あー、最近は新しいモルモットちゃんも入ったし、君もいるし。研究が捗って助かるわ」

「モルモットちゃん？ 他にも犠牲者を出してるんですか……」

「あら、きちんとした取引よ？ 私が専属で治療してあげる代わりに治療に協力してもらおうっていうね」

「何故僕に対してはそのワンクッションが出来なかったんですか……！」

「色々は無理言ってくれるし、こつちも無理言っても良いと思うのよ。去年のこともあるし？」

「……何も言い返せない」

武見先生には去年の鴨志田先生とのゴタゴタのときからお世話になってる。その時から色々と見て見ぬふりをしてもらったりもしているため、それを持ち出されると何も言えない。それに先生が本当に危ない薬を黙って投与したりすることは無いと信用もしている。そうでなければ四軒茶屋の人達が慕って通いつめたりはしないだろうし。

「はあ、次からは一言言ってくださいね。僕だってお世話になってる先生に協力するのは吝かじゃないんですし」

「フフ、ありがとね、モルモット君」

「モルモットになった覚えはありませんが!？」

しれっと人を実験動物扱いするのは止めていただきたい。そう伝えるものの、武見先生は面白そうに笑ってハイハイと流すばかりだ。

「ちようど男女の比較データが採れるわね、助かるわ」

「話が勝手に進んでいく……」

顔も知らぬモルモットちゃんと並んで、僕は武見先生の実験データ採取のテスターになったらしい。

「ちよつとくらいバイト代出してくれますよね？」

「あら、受付もしてくれるなんて優しいのね」

「あ、治療は口ハなんですわ……」

「こういうときに美人は得だと思おう。だって武見先生にお願いされ

たら大抵の男はホイホイ頷くだろうし。センスがやや奇抜なものには目を瞑るとしても。

僕は検診のために脱いでいたシャツを羽織ると席を立つ。とりあえずもう怪我はなんとも無いし、今日だって怪我の経過観察と言いなから本当は薬の効き目を確かめたかったんだろう。この後はバイトもあるし、そろそろ出ないと。

「それじゃ、僕はバイトもあるんでそろそろ行きますね。お代は……」  
「ああ、お代は良いわ」

僕は財布を取り出したのだけれども、武見先生はそう言ってお金を受け取ろうとはしなかった。

「え？　でも……」

「色々言ったけど、試験薬を出したのは確かだしね。データ探ってお金まで取るのは貰いすぎでしょ」

そんなサービス精神に溢れていたのか、この人。いつつも仏頂面だったし今日ほど話せたこともあんまりなかったものだから意外だった。美人はしかめっ面でも絵になるけども。

僕のそんな失礼な内心を察したのか、武見先生の目がすつと細められる。

「何か失礼なこと考えてなかった？」

「いえそんな、滅相もございません」

じとつとした目で睨む武見先生。高巻さんといい新島さんといい武見先生といい、ここ最近は美人に睨まれる機会が多い僕である。

「……ま、良いわ。言っておくけど、あんまり怪我ばかりするんじゃないわよ。あんたを心配してる人もいるんだから。そういう人達のためにも、無理はしないこと」

「そうですね……、耳が痛いです」

ぺこりと頭を下げる。新島さんにも謝ったけれど、僕は自分が抱えた案件は全部自分で片付けようとしてしまいがちだ。なんというか、同級生に頼るのも良くないかと思ってしまっただ。これもいまいち信用ならない前世の記憶の弊害かもしれない。とはいえ、僕の自意識がどうであろうと対外的には高校生であることには変わらない。僕



が一人で出来ることなんかたかが知れていると今一度戒めておかないといけない。

「お大事に……」

その言葉と共に見送られて僕は武見医院を後にした。なんだかんだと優しい人なんだろうな。モルモットとか言い出さなければもつと良いんだけど……。

「海藤君ごめん！ 今日ホール入ってくれないかな?！」

バイト先のファミレスに着いた途端、店長が顔の前で両手を合わせて僕を拝み倒してきた。話を聞けば、今日シフトに入っていた子が病欠で急に来られなくなったらしい。キツチンは経験者ばかりで回せそうなのでホールのフロアに入って欲しいとのこと。

とても珍しいことに僕が来るまでは店長がホールに入っていたらしい。この人が働くんなんて今日は本当に代わりの人が見つからなくてやばかったんだろうな。

「分かりました。チケットの恩もありますし」

「流石副店長!」

「だからしれっとバイトに変な役職名を付けないでください!」

腰に縫り付いてくる店長を引き剥がしながら制服に着替えると、学校帰りであろう学生達で賑わうホールに足を踏み入れた。

店長はぜえぜえ言っていたものの、めちやくちや忙しいかと言われればそこまででもない。金曜日ということもあつていつもより人は多いけれども、捌けない程度じゃないだろうとせかせかと働いていると、新たな来客を告げるベルの音が耳を打つ。

「いらっしやいませー。何名様でしょうか」

もはや反射で口から出るようになった定型句を言いながら入り口に向かってみれば、入ってきたお客さんは何も言わずに突っ立ったままだった。何だろうと視線を上げてみれば、目に入ったのは癖のある黒髪と大きな眼鏡。

「えつと……」

「おや、こんなところで会うなんて奇遇だね雨宮さん。一人？」

「うん」

「じゃあこっちの席にどうぞ」

僕はそう言つて雨宮さんを空いた席に誘導する。学生鞆を肩にかけたままのところを見るに、学校帰りに寄つたというところだろうか。

「試験勉強かな？」

そう尋ねてみれば彼女はこくりと頷いた。それなら隅の方の席が良いだろう。席に着いた彼女はドリンクバーとポテトを頼んでさつさと教科書とノートを机上に広げ始めた。

「それじゃごゆっくり」

チェーンのアミレスなのでよくアニメなんかであるような一品サービス、なんてことは出来ない。マニュアルしつかり決まつてるし、たかがバイトにそんな権利は無いのだ。なので僕は一声かけるだけに留めて仕事に戻る。

それからしばらくはホールを歩く傍らチラチラと様子を伺つていたけれど、彼女は淡々と勉強を進めているようで特に困つた様子も無さそうなので秀尽学園の授業についていけない、というわけではないようで安心した。

その後、僕は僕で客足が落ち着いてきてからはキッチンに呼ばれたので奥へと引っ込んでしまったのでそれ以上雨宮さんを見ていられる状況でも無くなつてしまった。

「それじゃ、お疲れさまでしたー」

それからは大きな波乱もなくその日のシフトを終えた僕は休憩室でぐでんとしている店長に一言挨拶をしてお店を後にする。今日も一日頑張つたし、駅前のレンタルショップで寝る前に見る映画でも借りようか。そう思いながら階段を降りていくと、僕の前に店を出ていたのかくるくるとした黒毛が階段の下に立っているのが目に入る。足音で振り返つた彼女も僕のことには気付いたようだ。

「今から帰るところ？」

「副会長、バイトお疲れさま」

そう言つて労つてくれる雨宮さんの横に並ぶ。帰り道が一緒だし、もう辺りも暗い中で女の子を一人で帰らせるのも良くないだろうと歩調を合わせて駅に向かう。

「転入して初めてのテストだけど、どうかな。大丈夫そう？」

「多分大丈夫かな」

「そっか、参考になるかは分からないけど去年のテストで良ければ残してるから必要ならまた言つてね」

「ありがとう。また頼らせてもらう」

初めて会つたときからそうだったけれども、雨宮さんはあまり表情も変化しなければ口数も多くない。それでも坂本君や高巻さんと一緒にいるようになってから、彼女の雰囲気明るくなつてきていることは分かる。言つてしまえば三人とも学校では”浮いている”存在なので、彼女らが仲良くなるのは半ば当然の事だったのかもしれない。

他愛ない話をしながら、四軒茶屋駅で降りる彼女に従つて僕も電車から降りる。どうせなので嫌じゃなければ家の近くまで送ると言えば、雨宮さんも恐縮したように肩を締めながらも頷いてくれた。という人がまだ多かつた渋谷ならともかくこの辺りの方が人通りも減つてきて一人で帰すのが不安になる。どうせ自分の家もそこまで遠くないので彼女と友好を深める良い機会だと駅から二人で歩くこと数分、彼女が今住んでいるところだと示したのは細い路地に面した喫茶店だった。

「喫茶ルブラン……？」

喫茶店で居候なんてなにかのドラマみたいな展開だ、などと頭に浮かんだ感想を振り払う。何の気負いも無くドアを開けた彼女に促され、店内に入ったのは良いもの、お邪魔する気は無かつたのに何をしているんだ僕はと自問する。

カウンターの途中で新聞に目を通していた店主らしき男が、ドアに取り付けられたベルの音に顔を上げて僕達を視界に捉えた。

「お、やっと帰つてきたか。あんまり遅くなるんじゃない？…つて誰だ？

悪いがもう店仕舞いなんだが」

「学校の先輩。時間も遅いからと送ってもらった」

ひよろりと背が高く、やや後退した前髪、整えられた髭と眼鏡の奥で落ち着いた光を放つ瞳。ゆったりとした時間が流れる店内と、少し草臥れたような猫背の彼の雰囲気はよくマツチしていた。こういうところでコーヒーを飲みながら読書をしたりこの人と世間話をする時間はかなり魅力的かもしれない。我ながら年不相応な枯れた趣味だと自覚はしている。

「はじめまして。秀尽学園3年の海藤と言います。僕のバイト先に雨宮さんが来ていて、ちょうど上がりの時間と彼女の帰る時間が一緒だったので近くまで送ろうと思って」

「ああ、そうだったのか。手間かけちまったな、ありがとうよ。俺は佐倉惣治郎、いちおうコイツの保護者、みたいなもんだ」

そう言っただけで佐倉さんは頭を掻きながら新聞を折り畳む。

「いえ、気にしないでください。女の子を一人で帰らせるのも良くないです」

「ごもつともだな。お前も遅くまでうるちよろしてんじやねえぞ」

佐倉さんの咎めるような視線に雨宮さんは気を付ける、と苦笑を返す。

「コーヒーならすぐ出せるが、飲んでいくか？ お代はいらねえ」

「良いんですか？ それじゃあお言葉に甘えさせてもらいたいです」

「あいよ、ならちよつと座って待っててくれや」

佐倉さんは薄く笑うとサイフォンの下にあるアルコールランプに火を灯す。大のコーヒー党の僕としてはこういう隠れ家的な喫茶店を出てくるコーヒーには期待が膨らんでしまうものだ。雨宮さんは荷物を置いてくると店の奥にある階段から2階に上がっていった。壁際に備え付けられたテレビから流れるニュースの音と、お湯が沸くポコポコという音だけが店内を支配する。

「海藤くんって言ったか。お前さんは、あの子の事情を知ってるのかい？」

そんな静かな店内で、佐倉さんがコーヒーの準備を進めながらふと

尋ねてくる。雨宮さんと佐倉さんの名字が違うのにつつまなかつたから気になったんだろう。

「そうですね、知っていますよ。嘘か本当かは分からないですけど」「なるほどね。あの子は学校でうまくやってるか？ 初日から大遅刻かましやがったからどうかと思っちゃいたが」

「友達も出来てますし、そこまで心配されるようなことは無いと思いますよ。初日は僕が校内を案内しようと思ってたので朝来なかったことに心配しましたけど」

「そりやますます頭が上がりねえな。よく気にかけてくれてるみたいで俺としちゃありがたいばかりだ」

僕の答えに佐倉さんはうんうんと頷く。少しぶつきらぼうな物言いこそあるものの、佐倉さんは佐倉さんなりに雨宮さんのことを案じているらしい。そもそも、仮にも暴力事件を起こしたと保護観察処分になっている子どもを保護者として引き取るなんてよほど懐が深くないと出来ないだろうし、当然か。

それからは学校での彼女の様子について話をする。意外にも、佐倉さんは雨宮さんのことだけでなく、学校の雰囲気やどういう生徒が多いのかといったことも気になっていくらしかった。もしかしたら自分の子どもとか親戚の子が通っていたりするのだろうか。にしてはその子の名前を出して聞いてくるでもないし、学校に佐倉なんていう生徒いただろうか。

「佐倉さんは雨宮さんが本当に暴力を振るったと思われませんか？」

そう思いながらも話を進める中で、ふと僕の頭の中に湧いた疑問が口をついて出てしまった。

「知らねえし、知るつもりも無え。よその事情に首を突っ込むのは厄介事にしかならねえからな」

保護者している時点で十分に首を突っ込んでいるんじゃないかと言いたくもあるが、言葉とは裏腹に佐倉さんの表情は何か釈然としないうものを抱えているのを物語っていた。なるほど、その顔を見るだけで十分答えは得られた。

「ありがとうございます」

「なんで礼を言うんだよ。やりにくいな、お前さん」

佐倉さんはそう言つてちよつと乱雑に僕の前に湯気が立つカップを差し出した。

深く、芳醇な香りを漂わせるカップは、僕が普段生徒会室で飲んでいるインスタントなどとは物が違うことをこれでもかと主張してくる。最近はインスタントもバカに出来ないというか、美味しくなってきたと思うているけれど、これは期待出来そうだな。

それからは会話も少なくなり、じつくりとコーヒーを味わう。店内には再びテレビの音と片付けを進める佐倉さんがサイフォンや食器を洗う音が響くなか、パタパタと足音がして上から雨宮さんが降りてくる。

「ごめん、遅くなった」

「ようやく降りてきたな。片付けを手伝ってくれ」

部屋着に着替えた彼女がカウンターの中に入り、佐倉さんと並んで片付けを進めるのをコーヒーを飲みながら眺めていてふと思う。なんか父娘みたいだと。口に出すと佐倉さんが睨んできそうなので黙っているが、あれこれと洗い方を教えている佐倉さんと言葉少なながら真剣に手伝いに取り組んでいる雨宮さんを見ると割りと間違っていないんじゃないかと思った。

それからは特に会話も無く、コーヒーを飲むだけだったのであつという間にカップは空になってしまった。

「ごちそうさまでした。お代は」

「いらねーよ、お礼なんだから。気になるなら客としてまた来てくれ」  
財布を取り出そうとすると佐倉さんが笑つて制する。なるほど、こんな粹なことを言われたらまた来たくなるじゃないか。言われなくとも来るつもりではあつたけれど。

「それじゃありがたく。コーヒー、すごく美味しかったのでまた来ますね。雨宮さんも、また明日」

「おう、俺も話を聞かせてもらえて良かったよ」

「また明日、副会長」

カップを雨宮さんに手渡すと、僕は二人に軽く頭を下げて店を出

る。ちよつとしたお節介のつもりが、こんなに良い思いをさせてもらえるとは思つても見なかった。

「喫茶ルブランか、新島さんにも教えてあげようかな」

新たに行きつけになりそうな店が出来たと内心浮き足だつて僕は帰路に就いたのだつた。

「はじめまして、丸喜拓人です。中途半端な時期の赴任だけどころしくね」

「こちらこそよろしくお願ひします」

中間試験を無事に終えた日、僕は朝から生徒会室で一人の男性と会っていた。丸喜拓人、と名乗った男性は眼鏡をかけた優しい風貌の男性だった。聞けば、鴨志田先生の一件があつたことで学校側としても生徒のメンタルケアに対して何らかの措置を講じる必要があるとのことで、臨床心理士の丸喜先生に声がかかったらしい。

「元々は芳澤さんの主治医だったんだけどね、その繋がりでもこの学園でもカウンセラーとして働くことになったんだ」

「芳澤さん、というとうちの新体操部のあの？」

丸喜先生の口から出た名前に一人の女生徒の顔が浮かぶ。確かスポーツ特待生として今年入学してきた子だ。オリンピック選手としての活躍も囑望されているほどのホープらしい。

「そうそう、芳澤かすみさん。ところで、君も鴨志田先生とは因縁があると聞いているよ、僕で良ければいつでも相談しに来てね。正式な着任日は明日の15日だけど、今日でも全然構わないから」

「ありがとうございます。僕はあまり気にしていないのであんまりお世話になることも無いかもですけど」

気遣わしげな丸喜先生には申し訳ないが、僕個人としては鴨志田先生に含むところはもう無い。気にかかるとすれば、鈴木さんや三島君のようにバレー部で直接被害を受けていた子達の方だ。そういう子にこそ、カウンセリングを受けて欲しい。

僕がそう言くと、丸善先生は驚いたように目を丸くし、それから感心したように息を吐く。

「凄いね、噂じゃ鴨志田先生から暴力も振るわれたと聞いていたけど。それでもそうやって他の子を気遣えるというのは素晴らしいことだよ。鴨志田先生を憎いと思ったこともないのかい？」

「そんな褒められるようなことじゃないんですけどね」



僕としては本当に気にしていない以上、カウンセリングも何も無いというだけなのだけれど、丸喜先生はそれを殊更に褒めるものだから居たたまれない。

「鴨志田先生のやったことは悪いことですけど、本人が心から悔いているみたいですし」

「普通、当事者がそこまで冷静に俯瞰することは出来ないものだけだね。なんというか、君は大人び過ぎていようにも見えるね」

丸喜先生の言葉に内心ギクリと身を竦ませる。カウンセラーだけあって人を見る目が鋭いというかなんとか。妙に達観した目で物事を、自分自身すらを見てしまうのはこの頭の中に別の自分とも言わべき記憶があるからなのだろう。

とはいえこれを誰かに話せば良くて友人を失う、最悪は精神病院行きだと理解しているので、流石に丸喜先生にも話す気にはなれない。「大人びてる、ですか。まあよく言われますけど。読書が好きだからですかね？」

「僕も本は好きだけど君くらい歳のそんなに達観できてはなかったかなあ。まあ良いや、来週からよろしく。君とも話をする機会はこれからもありそうだし」

そう言ってハハハと笑う丸喜先生に苦笑いを返しながら、僕は差し出された右手を握り返したのだった。

丸喜先生との初対面の翌日。テスト明けの週末となった15日は、以前バイト先の店長から貰った斑目一流斎の個展の初日である。僕は足取りも軽く、会場となる渋谷まで足を運んだ。

「おお、凄い人だ」

日本、世界問わず有名な画家の個展ということもあり、普段は芸術にそこまで興味の無い人も見に来ているらしい。あちらこちらにテレビカメラもあることから、マスコミの宣伝もかなり入っているのだろう。

とはいえ、僕と同じような高校生くらいの年齢の人は並んでいる列には見えない。まあ美術学校とかじゃなければ絵に興味を持つ高校生なんて結構珍しいよな、と思いつながら待ち時間の暇潰しに持つてきた本に目を落とす。

#### 巨匠 斑目一流斎の半生

テスト勉強の息抜きにと立ち寄った本屋に並べられていた一冊だ。今日の個展の協賛でもある某出版社から出された一冊で、日本画の大家である斑目の半生をインタビューしたものを文字起こししたものだ。絵を見る上で、その人の人生観を知ることが大切だと勉強用に購入した。

彼のインタビューを見れば、彼は随分と遅咲きな芸術家だったらしい。生きていく内に評価されているだけ、ゴッホのような歴史上の偉大な芸術家に比べるとマシだと言えるかもしれないが、現代美術の若き才能、といったお決まりの報道すらされなかったらしい。そのためか、二十代の頃はひもじい生活を余儀なくされ、人並みの生活を送れるようになったのは三十代の頃、知り合いの伝手でそれなりの画廊が後援についてくれたかららしい。

それからはそれなりの評価を受けて三十代を過ごしていた。そうして少し自身の生活に余裕が生まれてからは、自分のように貧しい生活を送る若き芸術家の支援と自身の感受性磨きを兼ねて何人かの弟子を取ったらしいが、あいにくと弟子で大成した者はいなかった。そしてその頃から弟子に触発されてか、新たな表現を求めてか、画風が変化していく。大きな転機となったのは今から16年前にある一枚の絵を描いてからだだった。

#### サユリ

赤衣を身に纏い、満月を背にした女性。雲が胸から下を覆っており、そこを見下ろす女性の表情は慈愛に満ちている。けれど、雲に覆われたそこに何かがあるのかは窺いしれない。優しい表情にも、どこか憂いを帯びたようにも見えるその顔は何を見ているのか、雲に覆われた腕の中に何か大切なものを抱えているのか、それとも遙か天上から人の営みを見下ろしている女神なのか。一見すればただの女性の

絵、そこに秘められた神秘性に多くの評論家が解釈を争わせたらしい。僕もまだその頃は物心もついていない年齢だったから当時のニュースなんて覚えるどころか見てもいないけれども。

「本の挿し絵がモノクロなのが悔やまれるな……」

斑目一流斎の名を国内外に大きく轟かせることになった一枚。出来れば生で見えてみたかったけれど、あるときに盗難にあってしまつて以降行方知れずらしい。惜しい話だ。

サユリを描きあげた日のことは今でも忘れられん。動悸が止まらなかつた。

斑目と記者のインタビュもそこが一番の盛り上がりどころなのだろう。文字であつても斑目の語り口が熱いものになっていることが伝わってくる。

あれを完成させたことが僕の芸術人生の始まりでもあり、終わりでもあつた。

その言葉と共にインタビュは更に熱を増していく。あれ以来、斑目の作風は更に幅を広げた。変幻自在とも称されるようになった彼の絵は海外でも評価されるようになり、六十代を迎えて彼はついに芸術家として花開いた。ただ、サユリを越える評価を受ける絵を描けなくなつたことが悩みとなつたらしい。それでもと描き続けた彼の絵が、今日の個展には並んでいるのだろう。

並んでいる間に粗方読み終えてしまつた本を閉じる。気がつけば入り口はもうすぐそこだ。僕は受付にチケットを提示すると、壁に展示された様々な作品へと歩を進めた。

人物画、動物画、風景画、抽象画、様々なモチーフが並べられたそこは、個展と言つても俄には信じがたい。

「凄い……」

眺めながら思わず声が漏れていた。絵とは、その人が世界をどう捉えているのかを最も端的に表す手段だと僕は思っている。写実画であれ、抽象画であれ、それはその芸術家が見た世界の一部を切り取つたものはずだ。だからそこにはその人の価値観が、世界を認知している方法が表出している。であるならば、様々な手法を取れど、そこ

には一定のパターンと言えるもの、その人が大事にしている芯のようなものが見えると僕は思っている。

だと言うのに、斑目画伯の絵にはそれが無い。無い、というのは語弊があるか、あるのにそれが定まっていないように見える。手法が変幻自在なだけじゃなく、世界を作品毎に別々のフィルターを通して見ているようにも思える。まるで別人が描いたと言った方が納得できるくらいだ。

「斑目先生、本日はインタビューをお受けいただきありがとうございます。先生の変幻自在の絵、その着想の一端でも伝えられればと思います！」

「ハハハ、儂のような老いぼれの話で良ければいくらでもどうぞ」

ふと話し声が聞こえた方向に目を向ければ、テレビの取材を受けているであろう斑目画伯がいた。テレビ向けなのか普段からなのか、身に付けた着物が貫禄を醸し出している。なんと、生で斑目画伯を見られるとは。

ちょうどインタビューが始まる頃らしいので、少し近くに寄って行く。

「斑目先生は驚くほど作風に幅がありますが、そのアイデアの源泉は一体どこにあるのでしょうか？」

「ふむう、言葉にするのが難しいのですが……。水面に泡が一つ一つ浮かんでくるような……。その泡は俗世に触れば容易く破裂してしまふもの。金や名声といった俗世から離れることで、その泡を額縁に表すことが出来るのです。芸術の探索には風雨を凌げるあばら家があれば十分なのですよ」

インタビュアーが分かっているのかいないのかうんうんと頷きながら取材を続けるが、僕は早々に興味を失って絵の鑑賞に気が移っていた。

斑目画伯の言葉にあまり感銘を受けなかったというより、僕が先程まで読んでいた本と全く同じ内容を話していたからだ。まあ同じような質問が来れば同じような返答になるよな、としか思えなかった。

僕は壁に並べられている絵をじっくりと観察していく。そして、そ

の中でも一枚の絵が目にとまった。

それは腕を広げたくらい幅の大きなキャンパスに描かれた抽象画。大きなキャンバス全面を様々な色が一見無秩序に配置されたそれは、描いた人物の心象風景を表しているみたいだ。それも何か心の奥底に燻っているもの、激情のようなものを感じられる。

視線は自然、額縁の下に飾られているプレートに吸い寄せられる。どのようなタイトルが付けられているのかが気になったからだ。

「煌めき……？」

そのワードが目に入ったとき、僕はどうにも違和感を覚えた。確かに鮮やかな彩色で、一見するときらびやかな印象を受けるけれども、この絵はそういったポジティブなイメージとは違うような気がするからだ。あくまで素人の主観でしかないのでこの解釈も違っているだけかもしれないけれど。

「人の中にある様々な感情はそれぞれ異なる色をもってその人の中で光を放つ。同じ感情でも一時として同じ色を放つことはない、か」なるほど、鮮やかな色使いは怒り以外にも様々な強い感情の表れなのか。僕の解釈が一方的な見方過ぎたのかもしれない。

タイトルとコメントに目を通してうんうんと頷いていると、後ろから肩を叩かれる。なんだろうと振り向いてみれば、そこには先程まで斑目画伯にインタビューをしていた女性が、僕にマイクを向けていた。つくづく街頭インタビュー的なものに縁があるな、僕は。

「すみません。お若そうですけど、高校生ですか？」

「ええ、そうですが……」

女性の後ろにはインタビューを受けていた斑目画伯もいた。どうやら来場者へのインタビューらしい。僕が選ばれたのはやっぱり来場者の中でも珍しい高校生だからだろうか。

「斑目先生の絵は若い人も惹き付けるようですね」

「嬉しいことですね。私の感性がまだ世間とはずれていないと思ってホッとしますよ」

カメラに向けて話す女性と斑目画伯。それからこちらに振り返ると、再びマイクをこちらに向けた。

「この絵が気になったんですか？」

「そうですね。素人なので絵とかには全く詳しくないんですけど、どこか惹かれてしまって。何と言うんでしようね、怒りみたいなものをこの絵から感じて。最初は煌めきというタイトルに違和感を覚えたくらいで」

「ほう……」

僕の言葉を聞いた斑目画伯が目を細める。しまった、作者本人を前にして絵を語るなんて一番恥ずかしいことをしてしまった。内心が表情に出っていたのか、僕と目があつた斑目画伯はすぐに表情を緩めた。

「すみません、偉そうに語ってしまつて」

「ああいや、怒っているわけではないんだ。こうして儂の絵から何かを受け取ってもらえたということが嬉しくてね。それも若い人の感受性を聞けるというのは素晴らしい機会だ。それで、君ならこの絵にどういうタイトルを付けるだろう？ やはり怒り、かな？」

「怒りという言葉だけでこの絵に表された感情を表現しきれるかどうか……。僕の貧相な語彙でつけるなら、やっぱり激情、ですかね。煌めき、という言葉よりもこの鈍い輝きには合っている気がします」

「なるほど、激情……」

斑目画伯はそう呟くと顎髭をしごきながら考え込むように俯く。

「失礼ですが僕からも一つ聞いても良いですか？」

「ん？ ああ、構わないとも」

「どうしてこの絵に煌めき、というタイトルを？ 解説を読んでそういうものかと思いましたが、一見して腑に落ちるようなタイトルじゃなかったの？」

僕の質問に斑目画伯はすぐに答えを返すことなく、俯いたまましばらくの沈黙が漂う。その間を保たせなければいけないインタビュアーの女性がカメラに向かって話しているが、質問をした僕の方もちよつと気まずい。そんなに答えにくい質問だっただろうか。

「この絵に表現されている光は儂の心に生まれた強い感情を表しているね。怒りは感情のなかで最も強く、それ故に目立って伝わってしま

うのかもしれない。それでも、それだけでは無い、という意を籠めての名付けだよ。怒りに捕らわれてほしくないという願いを籠めた名だね」

「なるほど、僕はやっぱり浅い見方しか出来ていませんでした。一応この本で先生の半生を勉強してきてはいたんですけどね」

「そんなことはないとも。こうして話を聞けて良かった。僕にとっても良い刺激になる。次の作品は、この経験から生まれるかもしれないな」

そして沈黙の果てに彼が返してくれた答えはなるほど、絵の解説と同じく言われればそうだと思えるものだった。自分が安直に名付けたものよりやはり描いた本人が付けた名のほうが相応しい。

けれど何故だろう、彼が発した言葉は例えばピカソやゴッホの有名な絵を後の評論家達が解釈したもののような、言うなればどこか他人事のような距離を感じさせるものだった。もちろん僕の気のせいだとは思うけれど。

## Who is the detective?

たつぷりと絵を鑑賞して楽しんだ翌週、月曜日には丸喜先生の赴任が全校集会で知らされた。まずは直接鴨志田先生の被害にあつていたのであろうバレー部員を中心にカウンセリングを進めていく予定らしく。丸喜先生は赴任初日から忙しそうにしていた。

その一方で僕はといえば、何事もなく週明けを過ごして明くる日も穏やかに日中の時間が過ぎていつも通り放課後を迎え、のんびりと校内散歩をしながら生徒会室に向かつていたときのことだ。

「こんなふざけたサイトを作ってるのはあなたね！ 一体誰が怪盗団なのか知っているんでしよう！」

「し、知らないよ！ 急に何なんですか、もう！」

聞きなれた声が聞き慣れない調子で中庭から響いてきたのに胸騒ぎを感じて声のする方を覗き込んでみれば、常ならぬ剣幕の新島さんが三島君に詰め寄っているのが見えた。

スマホの画面を怯える三島君に突きつける新島さんの姿はお世辞にも生徒会長として他の生徒に見せて良い画ではなかった。僕は半ば走るように二人へと寄っていった。

「はいはいストロップ！ 落ち着こうか、新島さん」

「っ!? 海藤くん……」

「副会長！」

僕の声聞いた二人の反応は見事に対照的だった。不味いところを見られたと言わんばかりの苦々しげな表情と、地獄に垂れた蜘蛛の糸を見つけたときのような顔だ。もちろんどっちがどっちなのかは言うまでもない。

僕は二人の間に割り込み、三島君を背に庇うようにして新島さんに向かい合った。

「穏やかじゃない雰囲気だったからね、強引かもしれないけど割り込ませてもらうよ」

「退いてくれる？ 私は今三島くんに話を聞きたいの」

「話を聞くっていうよりもはや尋問だよ、それは」



そんな剣幕じゃ話したくても身が竦んで話せないでしょと言えば、新島さんは一度目を閉じて深呼吸し、心を落ち着かせようとした。

しかし依然として目には剣呑な光が宿ったままだ。彼女の手に握られているのがスマホで良かったと思おう。あれがメリケンサックだった日には骨の一本や二本じゃ済まなかったかもしれない。「この怪盗お願いチャンネルなんていうふざけた裏サイトを作ったのが三島くんだって噂があるのよ。そのことについて話を聞こうとしているだけ」

「だ、だから知りませんって!」

「だそうけど?」

僕の背中に隠れながら叫ぶように否定する三島君。けれどもその見る者の同情心を誘う哀れな姿も、今の新島さんには通用しなさそうだ。

「教室で他の生徒にこのサイトを勧めていたって聞いたわ。三島くんから聞くまでは誰もこのサイトを知らなかった。アクセスカウンターも全然伸びてなかった出来立てのサイトなんて立ち上げた本人かそれに近い人じゃないと知らないはずでしょう」

新島さんの鋭い指摘。僕は肩越しに振り返って三島君の様子を伺う。彼は身体を縮こまらせて僕の背に隠れていたが、僕と目が合うと必死に顔を横に振った。それは知らないって意味なのかあるいは知ってるけどそのことを新島さんにばらさないでって意味なのかどっちなんだろう。いや、多分後者なんだろうなあ。彼、絶望的に隠し事が下手くそそうだし。

これ以上三島君に喋らせると新島さんのフラストレーションも溜まるだろうから、僕が代理人として彼女に立ち向かうことにする。

「三島くんは頑なに否定してるね。知らないのか、あるいは知ってるも新島さんの欲しい情報は持っていないかのどっちかだと思うよ」

「怪盗団なんて鴨志田の件があるまではネットに欠片も存在していなかったわ。それが鴨志田の自白があったからこんなサイトが出来たってことは立ち上げたのはこの学校の関係者の誰かよ。それも怪盗団を積極的に支持するような立場の人間。容疑者は自然と一番鴨

志田の被害を受けていた人間の誰かになるわ。例えばバレ―部で鴨志田の憂さ晴らしにシゴキを受けていた三島くんとかね」

困った。新島さんは将来めちやくちや有能な検事か弁護士か刑事になるよ。確かお姉さんもとても凄腕な検事なんだったか。姉妹揃って弁論強すぎませんか？

僕は半ば諦めろと促すように再び背後の三島君に視線を送ったが、彼は涙目ながらもブンブンと首を横に振っていた。なるほど、彼も怪盗団を庇うためなら今の新島さんを相手にしても口を割らないだけの根性はあるらしい。実際誤魔化すのは僕の仕事になっているのは置いておいたとして。僕はため息をつくと両手をあげる。

「なるほどね、新島さんの推理は良く分かった。確かにその推理で行くと一番疑わしい人物になりかねないのは三島くんかもしれないね」背後で僕の制服をいつそう固く握りしめるのが伝わるが、安心して欲しい、流石にここまできて見捨てたりするつもりはない。

「けれどね、いささか思い込みに走りすぎてるってことも新島さんは自覚すべきだと思うよ」

「思い込みですって？」

僕の言葉に眉をピクリと震わせる新島さん。後ろの三島君もビビっているが、一番ビビりたいのは彼女と真正面から相對している僕の方だ。

「そう。だって新島さんが一番最初に疑うべき人間を疑っていないからね」

「私がおかを見落としているっていうの？」

「見落としているっていうか、優しいことに無意識に候補から外している人がいるよね」

そう言っつて僕は徐に人差し指を自分自身に向ける。その指す意味が通じたのか新島さんは大きく目を見開いた。

「そんな……あり得ないわ！」

「そうかな？ 鴨志田先生と因縁があつて、予告状騒ぎのときもひと悶着起こした人間だよ？」

「でも、でもあなたはこんなサイトを作るような人じゃないわ！」

「もちろん僕はこんなサイトを作ったりなんかしてないさ。こういうのあんまり好きじゃないし」

僕がそう言うのと背後でピクリと反応があった。そういう反応をす  
るからあつさり彼女にばれそうになっているのに。いや、これに関し  
ては彼女の洞察力と行動力が高校生にしてははずば抜けていたと褒め  
るべきところなんだろう。

「だけど新島さんが知りたいのはこのサイトを作った人じゃないで  
しょ？」

「あなた、どうしてそれを……!?!」

新島さんが唇を震わせる。確かに彼女からは彼女が何を探ってい  
るかなんて一度も聞いたことは無いけれど、いつもと様子が違うこと  
に加えて最近の校長の僕に対する動きの無さで色々と予想は出来る。  
それこそゴールデンウィーク明けに初めて怪盗お願いチャンネルを  
目にしたときの反応なんて露骨だった。

「新島さんは刑事や検察には向いてるかもしれないけど、賭け事とか  
は向いてないよね。いや、向かない方が良いんだけどさ。いつもと様  
子が違いすぎて丸分かりだったよ」

僕はそう言つて三島君から離れて新島さんに歩み寄ると、落ち着か  
せるように肩に手を置く。

「校長あたりに言われたんでしょ、怪盗が生徒の中にいるかもしれな  
い。そしてその一番の容疑者は僕だつて」

「そ、れは……!?!」

言葉に窮した彼女の様子で、僕は自分の予想が確かだと悟つた。だ  
からこそ新島さんは僕が怪盗お願いチャンネルを見ていたときに、あ  
そこまで血相を変えたのだろう。仮にも友人が怪盗などという胡散  
臭いものでないと信じている、信じたいからこそ、それ以外の可能性  
を必死になって探してくれたのだ。僕はやっぱり友人に恵まれてい  
る。いつそこちらが申し訳なく思えるくらいに、彼女は僕を信用して  
くれていたのだから。

「僕が怪盗なんかじゃないって示すためにサイトの立ち上げ人の最有力  
候補から話を聞き出そうとしたんでしょ？ 半ば強引だと分かっ

「ていても」

話していて僕のささくれだった気持ちは今も校長室で忙しく汗を拭っているであろうあの黄色いハンプティダンプティに向かっていた。なんで生徒に内偵の真似事なんてさせようと思ったのか。先生や、本来なら警察などの外部機関にさせるべきことだろうに。僕をダシにして新島さんをここまで追い詰めるとは。そうなるようにこちらが動いてしまったということもあるとは言え、一言どころじゃなく言いたいことが降り積もっていく。

とはいえそれは今ここで言うべきではないのでグツと堪え、新島さんに対しては努めて笑顔を向ける。

「今の新島さんがすべきことはそうやって問題の周辺部を引っ掻くようなことじゃないと僕は思うよ」

「でも、でもそれじゃあ……」

「僕が疑わしいのなら、僕をきちんと見張っていれば良い。疑わしい行動をきちんと記録して、校長に報告しよう」

躊躇いがちに目を伏せる新島さんにしやがみこむようにして視線を合わせる。これで彼女が僕の行動を注視するようになってくれれば上々だ。僕は探られて痛い腹などあんまり無いし、三島君や他の生徒に新島さんがきつく当たって反感を買う恐れも少なくなる。

「私は友達を疑いたくなんか無いわ」

「僕が疑わしい素振りを見せなければ疑いは晴れるんだからいつそ他人よりも厳しく疑ってくれば良い」

新島さんにはとても残酷なことを強いてしまっているけれど、実際に僕を監視してその行動を報告すれば校長の溜飲も多少は下がるだろう。それで彼女が追い詰められなくなれば御の字だし、僕としても校長の弱みを握ることが出来る。

新島さんを気遣うという気持ちもあるが、それと同じくらいに冷たい打算が僕の脳内には満ちていた。あわよくばこれで僕が最も疑わしいと見ている容疑者から目を逸らすことも出来る。僕は怪盗団そのものを擁護する気は無いけれど、あの子達の味方ではあるつもりなのだ。

「……分かったわ。そこまで言うなら、私がきちんと見定める。あなたのことを」

「うん、ありがとう。そうしてくれると僕も助かるよ。少しでも怪しいと思ったら報告すれば良い。それで僕が君に対して隔意を抱くことは無いと誓う」

新島さんは伏せていた顔を上げると、決意に満ちた目で僕を見据えた。彼女にはコソコソと探るような真似は似合わない。内偵の真似事は彼女には不得手だろうし、何よりもこうして堂々とかかってくる方が彼女らしい。

彼女は僕の後ろにいた三島君に頭を下げると、解放してくれた。僕は僕と新島さんに頭を下げると、そそくさと帰っていく。気がつけば結構な時間が過ぎていた。

「さ、とりあえず下校時刻までは生徒会室でのんびりとしようか。新島刑事の取り調べも受けますよ」

「誰が刑事よ、フフツ。ま、良いわ。こうなったら根掘り葉掘り聞いてやりますからね、覚悟しなさい。私はあなたが怪盗なんかじゃないって信じているんだから」

新島さんからの重たい信頼を感じながら、生徒会室へと向かう。彼女の信頼を利用して僕に対して、内心自嘲する。とても褒められたことじゃない。人よりも長く生きた記憶があるということとは、その分だけ汚い方法や卑怯な手段も知っているとことだ。僕はそれを思う存分に振るって新島さんの良心を利用してはいる。もちろんこのまま彼女が他の生徒を際限無く疑い続けたりしないようにするためにはこの方法が手っ取り早いし、確実だと思っではいる。けれども自己嫌悪は止まらないものだ。

僕はこの時はのんきにそう考えていた。僕を信じていると言った新島さんの言葉の重みに気付いているようでいて、気付いていなかった。だからこそ僕の言葉も彼女を追い詰める一因になっていたことも知る由もない。

そして何より、僕はこういふときの彼女の行動力というものを、どこまでも侮ってしまっていたのだ。

# P e n e t r a t e    O s t e n t a t i o n

「副会長、ちょっと良い?」

「ん? 雨宮さん?」

中間試験の結果発表日、テストの点数すらプライバシーだなんだろうるさく言われそうなこのご時世にまだ秀尽学園は全学年の順位表を廊下に張り出している。

まあ生徒達の競争意識を煽るのは進学率を気にする私立校にはありがちなかもしれない。例に漏れず僕も自分の順位は気になるもので、昼休みに廊下で自分の順位を確認していると、僕の隣にやってきていた雨宮さんにその声を掛けられたのだった。

「あ、そういえばテストの結果はまずまずみたいだね。転入早々で凄いいね」

「そう言う副会長は学年トップ。流石」

「まあ勉強をしておけば大人って寛容だからね」

雨宮さんは2年生の中で真ん中より少し上の順位につけていた。秀尽のカリキュラムは進学校だけあって進行が速い。転入早々付いていけているのは素直に称賛されるべきことだと思う。

一方で僕はといえば勉強が特に嫌いではないし、人生一回分の経験値差というのもあるためせめて学年一位程度は取っておきたいといううちっぼけなプライドのため、それなりにテスト対策を毎回しているのだ。

もちろん二位には我らが生徒会長の名前がある。今年一発目の勝負は僕の勝ちらしい。二年生のときには何度か負けてしまっているので今年は完勝したいところだ。

「と、そんな話をしたいんじゃないやなさそうだね。用件は何かな?」

「今日の放課後、時間ある?」

今日はバイトも無いし、あるとすれば生徒会室でテストの振り返りをするくらいだ。それだっていつでも出来る。まあ三島君を助けた日以降、新島さんは露骨に僕を監視するようになったわけなのでどうにか彼女を撒く必要があるけれど。

「時間はあるね。ただちょっと待ってもらおうことになるけど」  
「構わない」

雨宮さんはそれだけ言うのと彼女のスマホを僕に差し出してきた。そこに映っているのはメッセージアプリの画面。その言わんとするところは明らかで、僕もポケットから自分のスマホを取り出して頷いた。

学校に来れば会えるからと僕はあまりスマホで連絡を取り合ったりすることは多くない。個人的にやり取りしていることが多いのはそれこそ新島さんと最近だと鈴木さんくらいかもしれない。あんまりスマホというものに慣れていないというのもあるのかもしれない。

「集合場所はまた」

「分かった。連絡を待ってるよ」

まるで秘密の会合をするかのようにその場での明言を避けるのは僕への用件があまり人の耳に入って欲しくないからだろうか。図らずも彼女の気遣いは正しい。僕は今敏腕刑事の監視を受けているので、雨宮さんと大つぴらに会うのもまずいと僕は思っている。

僕の考えが正しければ、雨宮さん達は新島さんが正体を探っている怪盗団に非常に近い位置にいるか、あるいは怪盗団そのものである可能性が高い。幸か不幸か僕は新島さんに結構信頼されているようで、鴨志田先生との一件で校長から向けられている僕への疑いを晴らすためなら今の彼女は雨宮さんが少しでも怪盗団の痕跡を見せようものならそれを見逃したりはしない。

「それじゃ、また放課後に」

「うん、僕が無事に来れることを祈っておいて」  
「？」

雨宮さんは首を傾げるが、説明するわけにもいかないと僕は廊下を後にする。また新島さんに見られでもしたら問い詰められそうだからね。

そう思っていたけれど階段のところからこちらを見ている新島さんとぼつちり目が合ってしまった。敏腕刑事とか言っちゃったけどいくらなんでも尾行が下手すぎるよ……。

目が合ったのに気付いたのか、あからさまにぎくりとした表情で逃げていった新島さんを見送り、僕は苦笑いをこぼす。この分だと、雨宮さん達が迂闊なことをしない限りは尻尾を掴めそうにないんじゃないだろうか。

そして放課後、案の定新島さんはHRが終わるなり僕の教室に乗り込んで僕を引っ張っていった。予想通りと言うべきか、彼女が問い詰めた内容は昼休みの雨宮さんとの一幕だ。

「鴨志田先生と一悶着あったのはあなただけじゃない。あの転入生と元陸上部の坂本くん、そして噂になっていた高巻さん。彼女らがこの前も屋上でコソコソと話をしていたのを私は聞いたわ」

おっと、早速迂闊なことをしているじゃないか雨宮さん達……。せっかくなりの人気の無い教室の鍵をあげたのに。いや、安易にあそこを使っただけで新島さんにばれてしまうのも問題かもしれない。

「鴨志田先生とのいざこざで目立っていたのはあなたかもしれないけど、あの子達も十分容疑者になり得るわ。それに、怪盗“団”というくらいなもの。複数人いると考えるのが妥当よね？」

行動のポンコツさとは裏腹に彼女の洞察力は相変わらず鋭い。数日前は僕を疑えなんて啖呵を切ったものの、あっさり彼女なら怪盗団の正体にたどり着くかもしれない。出来ればそうなって欲しくないけれど。

「そこまで鋭い推理が出来るのにどうして尾行はポンコツなんだろうね……」

「そ、それは……！っていかさそう言うってことは認めるのね!!」  
新島さんは赤くなつた顔を誤魔化すように僕に詰め寄る。出来ればもっと別のシチュエーションでこの距離感になりたかったなあ。いや、別にそういう関係でもなんでも無いのだけれど。とはいえ、どう切り抜けたものか。

「ま、新島さんもまだ確証は無さそうだから明言は避けるよ」

「私の中ではもうかなり犯人の目星はついてるんだけど」

「ならその目星を確実なものにするために証拠を掴まなきゃね」

あの尾行術なら流石に決定的な証拠は掴めないだろう。いや、どう



だろう、ちよつと不安になってきたかもしれない。

「証拠、証拠ね」

新島さんは視線を落とすと証拠、証拠とぶつぶつと呟いていた。そんな彼女の目を盗んで僕は自分のスマホにチラリと目をやる。画面を点灯させるとメッセージアプリの通知が表示され、雨宮さんからの集合同所を示すメッセージが目に入る。

『美味しいコーヒーの出るところで』

どこか具体的な店名を出さないあたり彼女も気を遣ってくれているのだろうか。美味しいコーヒーと言えば僕のなかに思い浮かぶのは一つだけだ。つい最近お気に入りになったルブランだろう。

僕はまだ何やら考え込んでいる新島さんから離れると、くるりと振り返って生徒会室の扉を開いた。

「それじゃ、頑張つて考えてみてね、会長」

「あ、こちら待ちなさい！」

そこで待てと言われて待つ奴はいない。雨宮さんとの集合同所に向かうべく、僕はさつさと生徒会室を出て行ったのだった。

「初めましてだな。俺は喜多川祐介。斑目の弟子、と言えはどいう立場の人間か分かるだろうか」

新島さんを振りきって喫茶ルブランにたどり着いた僕を迎えてくれたのは、モデルのように外見の整った男の子だった。光の具合によつては深い藍色にも見えるような髪が切れ長の目と相まって伶俐な印象を与える子で、店内でも異質な空気を纏っていた。

「ええつと、秀尽学園3年の海藤徹です。斑目先生のお弟子さん、が僕に用つてこと？」

僕が喜多川君のとなりに座る雨宮さんに問えば、彼女はコクリと頷いた。なんだろう、この間のインタビューで変なこと言ったから喜多川君の怒りを買ったのか？

「用というのは他でもない。あなたがあの日受けたインタビューの件

だ」

「あ、やっぱりそのことなんだね。その節はどうもすみません……素人が下手なことを言って」

予想通り喜多川君の用事はインタビュウの件についてらしかった。やっぱり怒らせてしまったのだらうと喜多川君に頭を下げれば、彼に手で制される。どうやらインタビュウを不快に思ったわけではないらしい。

「純粹に気になったんだ。あの絵のタイトルが相応しくないと感じたのはどうしてなのか、他にもそう感じた絵はあるのかと思つてな」

「他にも……う？」

喜多川君の言葉に僕は顎に手を添えて個展を見に行った日を思い出す。タイトルと絵の違和感のようなものを感じた絵は他にあつただらうか。そういえば他にもあつたかもしれない。風景画や人物画ではなく、抽象画で数枚ほど。

それを彼に伝えたときの反応は劇的だった。

「本当か!?それはどの絵だった?これか、もしくはこの絵か?」

そう言つて彼が小脇に抱えたバッグから取り出して見せたのは書店でも売っている斑目画伯の画集だ。今は個展の効果でどこに行つても売り切れや品薄状態だけど、やはりお弟子さんだけあつてきつちりと確保しているらしい。

喜多川君は画集をパラパラと捲ると、そのうちのいくつかの絵を指して僕に質問する。その中に僕があの日見えていて違和感があつた絵があつたので指摘すれば、喜多川君は目を輝かせてついには僕の隣に席を移して来た。

「ならあなたならどんなタイトルを付ける?どんな印象をこの絵から感じた?」

「ええ……?素人にそんなこと言われても……」

「いいからー!」

彼に押しきられるように、僕は絵を見て感じたことをポツポツと話す。そう言えば、僕が違和感を覚えた絵はどれも描いた人のネガティブな感情を感じ取れる絵ばかりだな。インタビュウを受けていた斑

目画伯の印象とは全然違うからそう思ったんだろうか。

問答をいくつか繰り返し、喜多川君は満足したのか画集を閉じた。

「そうか、やはり見る人が見れば分かるのだな」

「素人の勝手な品評だからね？」

喜多川君はうんうんと納得するように頷いているが、僕としては流  
れが分からない上に芸術に関してはずぶの素人である僕を見れる人  
扱いされるのはとても居心地が悪い。

「それともう一つ質問させて欲しい。あなたの質問に対して最後に斑  
目先生が返した答え、あれについてはどう思った？」

「あの答えについて？いや、素人の僕じゃ思い付かない深い理由があ  
るんだなと……」

「本当に？」

「……気のせいだとは思うけど、どこか他人事のような印象を受けた  
よ。他人が描いた絵を解釈してるような、そんな印象をね」

喜多川君の鋭い視線に射抜かれて、僕は諦めてあの日感じたことを  
口にする。どうして弟子の前で師匠を疑うようなことを言わされて  
るんだろうか、しかもその弟子張本人に。

「ありがとう。あなたの言葉で俺は勇気付けられた」

「どういうこと……？」

さらに僕の言葉に対して返ってくるのが感謝ということに僕の理  
解が追い付かない。自分が気になることをとにかく聞き、そして訳が  
分からないまま満足する。

喜多川君は芸術家らしく、独特なリズムで生きているらしい。助け  
を求めるように雨宮さんを見るが、彼女も苦笑いするばかりなあた  
り、この独特なリズムを何度か味わったのだろう。

「あなたは斑目の噂を知っているか？」

「噂？」

「盗作の噂だ」

彼に言われて、そういえばそんな噂も目にしたかもしれないと思  
出す。個展を見に行くにあたって斑目画伯のことを調べていく中で、  
ネット掲示板にそんな趣旨の書き込みがあるというのがまとめサイ

トかなにかに掲載されていた気がする。結局は噂に過ぎないという結論で締められていたけれど。

「聞いたことはあるかな。まああれだけ有名な画家だったらそんな噂も立つだろうとは思ったけど」

「それが事実だとしたらどうする？」

「……ホントに？」

待つて欲しい。僕って今結構ヤバイこと聞いてしまってるんじゃないだろうか？

S i t t i n g   i n   t h e   e a s y   c h  
a i r

喜多川君の口から発された衝撃の事実を美味しいコーヒーと共に  
なんとか飲み下した僕は、今度こそ助けが欲しいと雨宮さんに視線を  
送った。

「……事実。副会長の違和感は正しい。指摘した絵は全て祐介が描い  
たもの」

「なんとまあ……」

そして追撃のように放たれた言葉に僕はコーヒーの良い香りと共に  
ため息をこぼす。何の力も無い一般男子高校生が聞くには重たす  
ぎる話なわけだけど、どうしてこんな話を彼らは僕にしたのだろう  
か。

「どうしてこの話を僕に？」

疑問は内心に留めておけず、口をついて出ていた。

「あなたがどう思うかを聞きたかった」

「どう思うか……？」

雨宮さんから返ってきた答えに僕はますます首を傾げる。どう思  
うも何も僕の手には負えない話としか言いようが無いのだけど……。  
そのことを伝えれば、聞きたいのはそういうことじゃないと雨宮さ  
んは首を横に振った。

「鴨志田のことでインタビューをされた日、あなたは鴨志田のやった  
ことは許されないことだけど、あの人自身を貶めるようなことを言わ  
なかった」

彼女が言っているのは、ゴールデンウィーク明けに僕が校門前で受  
けたインタビューのことだろうか。そう聞き返してみれば、彼女はコ  
クリと頷いた。

「あなたも鴨志田から暴力を受けたはず。なのにどうしてあんな受け  
答えが出来たの？ 罪を憎んで人を憎まず、ということ？」

「ううん、流石に僕はそこまで聖人ではないなあ」

僕が鴨志田先生のことを悪く言えないのは彼があの日、心の底から悔いているように見えたからだ。あの懺悔が演技なのだとしたら、鴨志田先生はもっと巧妙に秀尽学園で影響力を発揮できていただろうし、僕があの人をやっていることを暴くのも遅れたはずだ。

別に性善説の信奉者でもないため、反省の色が全く見えない人を庇うようなことは僕だって出来ないし、それに鴨志田先生に直接被害を受けた人が彼を憎むのを止めろとも言えない。言ってしまうえば僕はどっちつかずで中途半端な立場で居続けているだけなのだと思う。

「ああして反省出来るってことは根っからの悪人だと僕には思えなかったんだよね。もう少し彼に自制心があれば少しプライドが高く女好きの体育教師で収まっていた可能性もあったのかも、と思うくらいにはね」

「……蓮、お前が彼に斑目の話を聞かせたいと言ったのは、つまりこのためか?」

「そう」

? 僕が思うところを告げてみれば、喜多川君はどこか納得した様子で雨宮さんに聞き、雨宮さんはその通りだと頷いている。ダメだ、この場で話についていけないのは僕だけみたいだ。

「二人で納得していないでどういいうことか教えてもらっても良いかな……?」

「盗作したことに對するあなたなりの見解を聞かせて欲しい」

「ええ……?」

雨宮さんに言われたことに僕の混乱はいよいよ頂点に達していた。まずもって盗作という話だけでもインパクトが大きいのに、それに対して見解を述べよと言われても……。

「ううん、取り敢えず盗作について証拠があれば告発してみるっていうのは出来ないの?」

「無理だな。盗作されたのは弟子である俺や、これまでの門下生の未発表作品だ。未発表だから証拠は無いし、出せるとしても証言だけ。斑目は日本芸術界の重鎮だ。複数の振興協会の理事や美術学校の役員でもある奴に証言だけでは勝てない。それにそんなことをせずと

も……」

「告発するかどうかはともかく。盗作をしていたことについてはどう思う？」

まだ話している途中の喜多川君を遮るように雨宮さんが僕に問いを投げ掛ける。どう思うと言われれば答えは一つだろう。

「もちろん盗作は悪いことだ。許されちゃいけない。元の作者の権利も、尊厳も踏みにじる行為だからね」

「そう……。じゃあ斑目は問答無用で罰されるべき存在？」

雨宮さんが重ねて問う。まあ被害者からすれば何があろうと許せないし、許されちゃいけないことなんだろう。けれど質問をする彼女の表情を見ると、求められているのはそういうありきたりな答えでは無さそうだ。

僕は俯いて少し考え込む。日本芸術界の大重鎮が盗作をしていたらしい事実の背景に、どのような事情が隠れているのか。そんなもの、僕なんかでは及びもつかない領域だけれども。

「すぐにそこに結びつけるのは短絡的だと、第三者の視点から言わせてもらおうかな」

「なに……？」

雨宮さんに返した言葉に、訝しげに眉をひそめたのは喜多川君だ。怜悯な彼の目の奥に剣呑な光が宿るのが見えるが、雨宮さんの方は僕を咎めるような気配は無い。

「裁判でもさ、被告人に情状酌量の余地は無いかって議論されるじゃない。反省の色が全く無いのか、もしくはどこかで良心の呵責に苦しんでいるのか、そうせざるを得なかった理由はあるのか。そういったところを考えるのが第三者の役割だよ」

僕は鞆の中から一冊の本を取り出す。それは個展を見に行った日に僕が入場までの待ち時間で読んでいた斑目画伯のインタビュー本だ。それをパラパラと捲りながら頭の中にポツリポツリと浮かんだことを話していく。

例えばこういう事情があったのだとすればどうだろう。彼が弟子を取り始めた頃、そのときはまだ彼は純粋に若き芸術家達を支援する

想いがあつたかもしれない。けれど人を養うというのはとても金がかかる。サユリの発表以降、芸術界の重鎮となった後の斑目画伯ならその程度の出費は大した負担にはならないかもしれない。けれどまだそうなる前、理想に燃えていたとはいえ、そのような余裕が無かつたときはどうだろう。

少なくとも彼の審美眼は確かなものだ。彼の名前で発表された絵はどれも人の心に残るものばかりだ。時に繊細で、時に大胆な筆遣いで描かれる彼の絵は、見る者の心を掴んで離さない魅力を備えている。そうした絵を見抜く力は彼に備わっていた。

「だとすると昔、最初に彼が過ちを犯したときというのはそこには悪意なんて無かつたのかもしれないよ?」

「どういうことだ?」

長々と語ってしまったているが、雨宮さんも喜多川君も身を乗り出して聞いており、退屈そうな様子は見受けられない。むしろ、早く続きを聞かせると先を促すような雰囲気さえ感じた。

もしかすると最初は本当に弟子が師匠にアイデアを渡したのかもしれない。生活に困窮してくる師を哀れに思った弟子が自らの名で発表するよりも師の名を使った方が話題に、金になるからと。

何を描いたかより、誰が描いたかが時に絵の価値を大きく左右してしまうことがあるのは芸術という定量化できない世界では避けられない事態かもしれない。前衛芸術の世界を見ていると特にそう思ってしまう。

そして本当にそうだったとしたら、そのことに葛藤しなかつたわけが無いんじゃないだろうか。彼のインタビューでは、芸術が真にモチーフや表現で評価される世界になって欲しいと同門の画家と熱く語り合つたと述べている部分もある。

「けれど時を重ねる毎に、名が売れば売れるほどに、絵そのものの価値より、斑目一流斎の名前の価値が重くなっていくことに彼自身気付いてしまったんじゃないかな。あるいは名を売り、芸術界を変えようとすればするほどそんな世界に染まっていったのかもね」

若いときにああはなるまいと年長者を見ていた者が、いざその歳に



なってみるとなりたくないと思っていた者と同じ振る舞いをしていた、なんて話はそんなに珍しい話でもないわけだから。

「僕には事情も何も分からないけど、悪い側面しか無い人間、良い側面しか無い人間って結構珍しいものだと思うよ。白黒で割り切れるような単純に評価できるものじゃないんだから、人間って」

それこそ芸術のように。だからこそ絵や彫刻、その他芸術作品は人間の割り切れない微妙な色彩を表現出来るんじゃないかと思う。人間は0と1のデータじゃないってことを思わせてくれるものだと、勝手に僕が感じているだけなのだけれども。

「だから問答無用で裁く、という前に少しだけ相手の事情も見て、その上でどちらに天秤を傾けるべきかを考えられたら良いよねっていう話でした。ごめんね、好き勝手に語っちゃって。特に喜多川君にとつては不快だったと思うから謝らせて欲しい」

直接の被害者を前にして、関わったこともない人間が想像で好き勝手にしたり顔で喋ってしまったのだ。良い気分になるはずが無い。僕は頭を下げて謝意を示す。盗作された被害者の前で加害者を擁護するようなことを言ったのだ、殴られてもおかしくない。というか半ば殴られることを覚悟していたのだけでも、いつまで経っても予想していた痛みはやってこなかった。

「……いや、頭を上げてくれ。まるで斑目本人を見てきたように語るから驚いた。腹立たしい気持ちもあるが、だからと言って全てを切り捨てる気にもなれない話だった」

喜多川君から返ってきたのは驚くほど理性的な言葉だった。部外者が偉そうに語った内容なのに受け止めようとしてくれるとは思わなかった。僕が彼と同じ年齢、立場であれば間違いなく知った口を聞くなと怒り狂っていたであろうに。

「副会長、怪盗団が次のターゲットを斑目に行っていると聞いたら、あなたはどう思う？」

「怪盗団が……？」

雨宮さんの言葉に、僕の頭の中にあつた疑問が一つ氷解する。何故雨宮さんが斑目の弟子である喜多川君と親交を持っているのか、そし

て斑目の悪行を知っているのか。なるほど、怪盗団は新たな仲間を見つけたということなんだろう。

「鴨志田先生と同じように近いうちに斑目は自らの悪行を自らの口で告白することになる、ということかな？」

「そうなる」

「なるほど。もし斑目のやっていることが事実だとすれば、証拠も無く、正規の手段では暴けない悪事を犯人自身の口から白状させることについて否やは無いよ。懸念はあるけどね」

「懸念……？」

雨宮さんが首を傾げるので、僕はスマホを取り出してあるサイトのページを呼び出す。画面に現れるのは黒と赤を基調としたホームページ、怪盗団らしいチャンネルなるサイトだ。

「怪盗団がどうやって犯人に自白させているのか、その手口も気になるけど、今は置いておこう。ただ、怪盗団は警察や検察にも出来ない何らかの方法で悪事を犯人の口から自白させられる集団なんだよね」話しながら僕の頭の中には薬物や拷問といった物騒な単語が浮かんでくるが、鴨志田先生が自白したあの日、雨宮さんはそうした非法な手段を怪盗団は使っているのかという僕の質問に否定を返してくれた。ならばそれを信じてあげないといけないだろう。

「だとすると怪盗団は自分達がターゲットにする相手を慎重に決めなくちやいけない。そして自らの行いがどんな結果を導こうとも、たとえ誰に何を言われようとも受け止めなくちやいけない。意図した結果にならなかつたとしてもね」

「どんな結果を導こうとも……」

怪盗団のチャンネルには、日夜様々な書き込みがなされている。そこにあるのは泣き寝入りするしかなかった被害者達が最後に縋らんとする悲痛な声だ。僕はこんな悪趣味なものがあつてたまるかと顔をしかめたくなるのを堪えた。

このサイトを作った人間がどういうつもりなのかは知らないけれど、その人はこれがあることによる弊害を軽く見ているのだと言わざるを得ない。怪盗団は神様でも何でも無い、ただの人だ。けれどこの

サイトはそんな怪盗団に無数の人の気持ちを無遠慮に積み上げていく。過度な期待も失望も、向かう先は全て怪盗団だ。画面の向こう側で今まさに傷ついている人が、実在するかも分からない謎の存在に解決を祈る。それは宗教と何ら変わらないと僕には思えてしまう。なお質が悪いのは本当に救われてしまう人がいること。救われること自体は悪くないが、望みを見れば人は継りたくなる。行き着く先は自らが掲げた鱒の頭を無批判に信じる過激な信奉者達の発生と、それに反発する人間の争い。最後に矛先が向かうのは小さな善意から始まったであろう怪盗団への中傷であることは想像に難くない。

誰かを救う怪盗団をもっとも追い詰めるのは、それに救われてきた者達だ。そのとき、怪盗団は誰に救いを乞えば良いのだろうか。

「怪盗団が誰なのかは僕には想像もつかないけれど。願わくば怪盗団が自らの信念を見失わないことを、最初に志した理念が大衆の無責任な願いに埋もれてしまわないことを祈るよ」

偉そうなことを言っている自覚はある。けれど、目の前の少年少女達が不幸になるかもしれないときに口うるさくなってしまうのは僕だけじゃないと思う。

そして僕の考えていたことが杞憂に終わったなら、そのときは僕を盛大に馬鹿にすれば良い。晴天の日に雨傘を持って外出するような、空模様一つも読めぬ心配性もいたものだ。

Hooking the edge of an  
idiot

ルブランでの喜多川君との邂逅から数日、意外なことに世間はいたつて穏やかな日常を送っていた。雨宮さんは斑目を次のターゲツトにしたと言っていたが鴨志田先生のとりのように予告状が出ることもなく、今日も斑目画伯の個展は開催されている。

ただそんな何事もない一日が過ぎていくというのは僕にとっては結構嬉しいことだ。今日も今日とてバイトが無い日の常、僕は放課後を生徒会室で過ごしていた。

「何を見てるの？」

「んー？ いやちよつと気になったことがあつて調べものをね」

いつもと違うのは日課の読書ではなく、自分の中に生じた疑問を解消するために調べものをしていったこと。僕の手の中にある冊子が気になったのか、対面に座っていた新島さんが僕の手元を覗き込んでくる。

「学園の生徒名簿？　なんでそんなものを？」

「まあ僕のしようもない疑問の解消のためだよ。知りたいことは知れたから大丈夫」

僕は新島さんの質問をはぐらかして名簿をパタリと閉じる。僕が言うつもりが無いということが分かったのか、新島さんは不機嫌そうに頬を膨らませてこちらを睨み付けてきた。

「あなたってそういうときは絶対に何も話してくれないわよね」

「うーん、まあこれはそんなに大した話でも無いからね」

場合によっては大した話になるのかもしれないけど、こういうときは大抵僕の勘違いで話が終わったりもするものだ。発端は僕の些細な勘違いなわけだし。

それを伝えても新島さんは納得した様子を見せてはくれなかった。それどころかますます彼女のご機嫌は傾いていく。

「こつちには散々お節介を焼くのに自分のことになると自分だけで抱

えようとするのはずるいわよ」

痛いところを突く彼女の指摘に、僕は苦笑いを浮かべる。そういえばついこの前に一人で突っ走ってしまうのは僕の悪い癖だと謝ったばかりだったつけ。

そうは言っても彼女は彼女で怪盗団の正体を突き止めようだなんて案件を抱えているわけで、僕としては自分のせいで彼女の捜査が進んでいないことを自覚しているのでこれ以上の面倒事に巻き込むのは気が引けた。

「僕がお節焼きなのはどうにも改善できない性分みたいだから諦めてお世話されてくださいな」

「もう！ そうやってはぐらかしてばかり……私だって力になってもらった分は力になりたいと思ってるんだから」

「まあどっちかと言えば今の僕は新島さんの悩みの種そのものだけだね」

「そう思ってるのならさっさと白状して私に協力して！」

僕が茶化すように言うとな新島さんは呆れたように大きなため息を溢した。なんかこういった気の抜けたやり取りをすればするほど彼女に嘘をついているのが心苦しくなってくるな……。でも僕が緩衝材になってないと真面目な彼女のことだから抱え込みすぎて前の三島君のように雨宮さん達に高圧的に当たってしまうかもしれない。僕としてはそれはお互いにとって良くないんじゃないかと思うので出来るだけそういった苛立ちや怒りは僕に向いて欲しいところだった。

僕はまあまあと新島さんを宥めながら棚に名簿をしまうために席を立つ。そしてそのまま生徒会室を出ようと扉に手を掛けた。後で戻ってくるつもりなので荷物は部屋に置いたままだけど。

「あら、どこに行くの？」

「喉乾いたから飲み物でも買いに行こうかとね」

「珍しい、いつもならコーヒー飲んでるのに」

「コーヒーはつい最近お気に入りのお店が更新されてね。インスタントは我慢してるんだよ。たまには高校生らしく炭酸ジュースでも買お

うかと」

「へえ、あなたがそこまで言うなんてよっぽどのね」

「うん、今度新島さんも一緒にどうかかな？ 美味しいコーヒー屋を紹介するシリーズ第二弾ということだ」

「ええ、楽しみにしてるわ」

そう言っ互いにクスクスと笑いながら、僕は生徒会室を出た。向かう先は体育館だ。今日は確かあの部活が使用している日のはずだから、僕の目的の人もいるだろう。

僕は頭の中で先ほども見ていた一年生の生徒名簿を思い返していた。僕の勘違いなのか、あるいは裏にこれまた面倒な事情が隠れているのか。どちらか判断はつかないけれど、出来れば僕の勘違いであつて欲しいと思いつながら僕は体育館へと歩を進めた。

体育館に到着してみれば、そこには部活の関係者以外にも何人もの生徒が集まっていた。皆目的とするところは一緒だろうけれど。

ひととき大きな歓声が上がった方へと目をやれば、僕の探していた人物が体育館の中心で今まさに軽やかに躍動しようとしているところだった。

「すげーよな、芳澤」

「次の大会で復帰だろ？ 普段より気合い入ってそうだな」

周囲から聞こえてくる声は耳をそばだてるまでもない。体育館の中心で衆目を集めている彼女こそ秀尽学園が鴨志田先生と並んで全面的にバックアップしているスポーツ特待生の芳澤さんだ。新体操部の期待のホープとして、そして日本の新体操界を担っていく人材としても世間から注目されている。そんな彼女はリボンを使った演技中らしい。意思を持たないリボンが、彼女にかかればまるで生きていくかのよう動く。彼女の動きに合わせてリボンはうねり、彼女の周りを踊る。

誰もが彼女の演技に目を奪われる。それは彼女が過去に交通事故

に遭い、そこから奇跡の復活を果たしたという噂も手伝って見る者の心に何かを訴えかけてきているようにも思えた。

「すごい……」

隣で見っていた女生徒が小さく洩らした。確かにその通りだ。凄いという言葉しか出てこない。とはいえ僕は彼女の演技を見るためだけにここまで来たわけじゃない。僕は彼女の演技から目を外し、体育館の入り口にある自販機のところに向かう。

どこことなく、彼女の演技に痛々しいものを感じてこれ以上見ていられなかった、というのも理由の一つではあったけれど。

しばらく待っていると、休憩のためかタオルを片手に芳澤さんがやってきて、先客である僕の姿を見てペコリと頭を下げた。

「おっと、お疲れさま。休憩の邪魔になっちゃったね」

「いえいえ！ 大丈夫です！」

白々しく頭を下げると、芳澤さんは慌てたように首を振った。そう返してくれることを見越していたとはいえ、あんまりこういうことはしたくないな。

僕は小銭を取り出して自販機にいれると、スポーツドリンクを買って彼女に手渡した。

「お詫び、というわけじゃないけどどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

芳澤さんは恐縮しながらもスポーツドリンクを受け取り、ベンチに腰かけた。僕も僕で自分用の飲み物を購入して柵にもたれかかる。

「騒がしくてごめんね。練習に集中したいだろうに」

「いえそんな、副会長さんに謝ってもらうことじゃないですし」

「外野で見ても良い気分はしないけれど、僕の自己満足で謝ってるだけだな、これは。ますます申し訳ない」

問題を解決することも出来ないのに謝られても芳澤さんにとつては迷惑でしかないと思い直して頭を下げる。確かに今の発言は我ながら何様のつもりだと言いたくなるものだった。

「ああいえそんな！ 頭を上げてください。注目されるのは仕方ないと思いますし、それを誰かのせいにしようだなんて思いません！」

芳澤さんは慌てたように否定してくれる。純粋な彼女にこうまで言われると良心がじくじくと痛む。いや、彼女に危害を加えるようにいう気持ちは全く無いのだけれども、彼女の貴重な休憩時間を削ってしまったということが申し訳ない。

「強いね、流石は新体操界のホープだ」

「ホープだなんて……そんなことありません」

彼女はそう言って表情に翳りを見せた。そこには謙遜というよりも、もつと暗い意味がありそうなものに見えた。それが意味するところは分からないが、彼女も重たいものを抱えているのかもしれない。いや、オリンピック候補などと持て囃されている裏側には、計り知れないプレッシャーがあるのだろう。それこそ鴨志田先生に向けられていたもの以上に。

「ごめんね、プレッシャーを掛けるつもりは無かつただけ」

「いえ、分かっていますから……。副会長さんには転入してからお世話になってますし」

彼女のお世話をしたことなんて転入して数日の校舎案内とその他雑務くらいのものだけれど、鈴井さんと言ひ彼女と言ひ、僕と関わりのある女性は律儀というか何というか。

気にしないでと苦笑すると僕は柵から身体を離す。

「さて、あんまり長居しても迷惑だろうから僕はもう行くね。まだ練習すると思うけど、怪我しないようにね」

「はい、ありがとうございます！」

「あ、そういえば芳澤さんって兄妹とかっている？」

休憩所を離れる直前、僕は肩越しに彼女を振り返って問う。彼女は一瞬キョトンとしたような顔を見せたが、

「はい……、妹がいますよ？」

そう答えた。

「妹さんも新体操をしてるの？」

「ええ、そうなんです！　いつか二人でオリンピックに出ようって約束してるんです！」

妹さんの話題になると、彼女の表情が明るくなり、イキイキと話し



始める。彼女にとって自慢の妹らしく、両拳を小さく振って力説してくれる。

「自慢の妹さんだね」

「ええ、そうなんです！」

「あはは、その話はまた聞きたいね。それじゃ、僕はこれで」

「はい！ いつでも話しますよ！」

そうにこやかに笑う芳澤さんを残して僕は休憩所を後にする。あ  
のとき僕に生じた違和感は恐らく勘違いでは無いとして、これについ  
ての手がかりを知っている人がいるとすれば、彼くらいのものだろ  
う。

「人が評価するのは作品ではなく儂の名だけ……」

「評論家が熟知り顔で芸術を批評する……」

「何故儂は弟子からアイデアを奪ってまで……」

「これは、斑目の声か……」

あちこちに装飾華美な自画像や自刻像が立ち並ぶ虚飾の美術館。  
斑目パレスと呼ばれるそこに潜入していた怪盗団は、パレスの外れ、  
主の認知が薄くなるそこにひっそりと隠れるように配置されていた  
ものを手に取れば、今度は蓮と祐介の頭に声が響いた。

「フォックスにも聞こえた？」

「ああ、何故俺達以外に聞こえないのかは分からないがな」

蓮と祐介が他の面々を見渡してみれば、モルガナや竜司、杏は何を  
言っているのか分からないと首を傾げて二人を見ていた。

「以前に鴨志田パレスでジョーカーが聞いたというイシの声か？」

モルガナの言葉に蓮はコクリと頷いて返した。モルガナは腕を組  
んでうんうんと唸り始める。

「分からん……。前はジョーカーだけで今度はフォックスもだ」

「ジョーカーの言ってるイシの声ってこのパレスとは食い違ってる感  
じだよ。何だか、後悔してるみたいな……」

「後悔……」

杏の言葉を小さく反芻する蓮。彼女の言葉に、蓮の頭には数日前に交わした会話が過る。

「天秤を傾ける……」

「天秤、アイツの言葉か」

蓮が呟いた言葉に祐介が反応する。彼との会話の後、パレスから小さく響く声に導かれた先にあったのがモルガナ曰くイシと呼ばれる物。鴨志田パレスにあったものと同じだ。違うのは蓮が手に取ったときに聞こえてきた声の主とそれを聞き取った人物。

イシの声を聞いた人物の共通点、もしかするとそれは。彼女の頭の中でまた『彼』のことが良く分からなくなる。

「パレスは主の歪んだ認知で生まれるもの。けれどもセーフルームしかり、歪んだ認知に晒されていけないところもある。彼と関わることでそれを鮮明に感じ取れるようになった？」

「どうだろうな。単純に俺が斑目と関係が深いから、という線もある」「ジョーカーの言ってる彼ってのは？」

「副会長のことじゃないの？ この前も副会長に会ったって言ったし」

首を傾げたまんまの竜司に杏がそう返す。蓮も彼女の言葉を肯定するように頷いた。

「鴨志田パレスにいたあの人は他のシャドウとは違っていた」

「アイツが意識してるか否かはともかく、パレスかワガハイ達に何らかの影響を与えてるのは間違い無い。この一件が終われば一度メントスでアイツのシャドウを探してみるのも良いかもしれないな」

けど今はそんなことよりパレスの攻略だと息巻くモルガナの言葉に蓮達も頷く。気になることはあるが、先にこのパレスを攻略してしまわないといけない。自分達は天秤をどちらに傾けるべきか、そして自分達の天秤は今どちらに傾いているのか。蓮の頭の中には彼の言葉はいつまでも木霊していた。

# Unfulfilled ideal

才能が枯渇した虚飾の大罪人。

斑目一流斎殿。

権威を笠に門下生から着想を盗み、盗作すらいとわぬ、芸術家。

我々は全ての罪を、お前の口から告白させることにした。

その歪んだ欲望を、頂戴する。

心の怪盗団『ザ・ファントム』より。

斑目の個展も一時の熱狂ぶりがやや落ち着いた頃となつた5月末のこと、個展が開催されている会場の至るところに貼り付けられた予告状により、その熱狂は再燃することになる。

「予告状。鴨志田先生のとときと同じか」

僕はと言えば、休日だけでも珍しくバイトのシフトも入っていないので本でも買おうかと渋谷にまで繰り出してきたのだけれど、そこでこの騒ぎを目の当たりにすることになる。

個展会場が続く廊下や、果ては建物の外にまで、とにかくやたらめつたらに貼られたそれは個展に興味の無い通行人すら足を止めて見るほどのものだった。

「何これ？ 盗作？ あの斑目一流斎が？」

「歪んだ欲望を頂戴するってどういうこと？」

「心の怪盗団？」

「そーいや最近変なサイトが出来てたよな？ SNSで誰か呟いてたぞ」

道行く人が予告状を眺めて口々に怪盗団、というワードを呟く。そして手元のスマートフォンに目を落とし、操作を始めるのだ。恐らくは怪盗団の名を検索し、あのサイトに辿り着くのだろう。なるほど、センサーシヨナルな宣伝だ。

僕はそれを横目に個展会場へと足を向ける。チケットも無いが、運が良ければ当日券もまだ買えるかもしれない。そう思つて急いでみれば、会場の入り口近くに見覚えのある男の子が立っているのが見え

た。相手も僕のことを覚えてくれていたようで、こちらを見て一瞬驚いたように目を丸くしたが、すぐに小さく微笑むと手を上げて僕を呼んだ。

「やあ、今日も来てくれたんだな」

「おはよう、喜多川くん。ちよつとこんなものを見かけてね」

怜悯な目を和らげて歓迎の意を示してくれる喜多川くんに、僕はここに来る道中で拾った予告状を見せる。彼はそれを見ても大きく表情を変えることはなかったけれど。

「そうか、確かに会場の外にまでばらまかれていたからな。じきに他の関係者も騒ぎ出すだろう」

「その言い方だと君の、というより君達の仕業だったりするのかな？」  
「あなたには俺の心を救ってもらった恩がある。だが、悪いがこれについては教えられない」

僕がいつ喜多川君の心を救ったのかはよく分からないけど、知らないとも分からないとも言わず、教えられないと言った彼の口ぶりからどういふことかは十分に理解出来た。

鴨志田先生のときのことを考えれば、数日以内にでも斑目は自らの盗作を暴露し、世間に向けて謝罪することになる。世界的に有名な芸術家の醜聞に世間は大きく揺れ、この出来事は多くの人の記憶に残るだろう、心の怪盗団の名前と共に。

「今日は個展を見に来てくれたのか？」

「ああいや。表でこれを見つけたから様子を見に來ただけだよ。チケットも無いし」

「そうか……。いや、良ければ今日も見に行ってくれ。俺と一緒になら入れるからな」

喜多川君はどうやら僕を招き入れたいらしい。僕の考えすぎかもしれないが、この予告状を出したことによる騒ぎを僕にも見て欲しいということなのだろうか。

僕としてももう一度個展の絵を見てみたいと思っていたところだ。盗作が事実だと分かった今、本当に斑目が描いた絵に対して僕は何を感ずるのか、それが少し気になったから。

「良いの？ それならありがたく入らせてもらおうかな」

「ああ、是非見て行ってくれ。今日は取材で斑目も来ている」

他の人の目が無く、事情も知っている僕だけれど、弟子である喜多川君が師の斑目を呼び捨てにしているのを聞くとぎよつとしてしまふ。彼に案内されるままに個展会場を歩いていけば、テレビカメラと業界人らしいスーツ姿の男性に囲まれた斑目の姿が目に入る。

「今日も個展は大盛況ですな！」

「流石は日本画の大家、斑目先生です」

「次の個展はパリになるかもしれませんな」

口々に斑目を褒めそやす業界人達の関心は、誰一人として彼の描いた絵には向いていないように見えた。絵の良し悪しが分かるだなんて口が裂けても言えないけれど、それでも彼が描いた絵が誰にも顧みられていないように思えてあまり気分が良い光景ではなかった。

「どうした、海藤？」

「いや、何でもないよ」

横を歩く喜多川君が僕の様子がおかしいと気付いて声を掛けてくるが、この内心を上手く言語化出来ないと思った僕は何も言わずに視線を絵に戻す。

「斑目先生、少しお耳に入れたいことが……」

と、群衆の中心にいた斑目にそう言って近づいていく男を視界の端に捉えた。僕と喜多川君は順路に従って絵を見て回りながら、その群衆に近付いていった。

「……だこれは！」

「至る所に……外では結構な騒ぎに……」

小さな声で話しているため途切れ途切れにしか聞こえないが、時折耳に入る斑目の声が、彼の内心に生じた怒りの大きさを感じさせる。

「盗作が事実だとも？」

「いえそんな、滅相も……」

斑目に予告状の件を報告しに行った男性は彼の剣幕にすっかり肩を縮こまらせてしまっている。

「良いところばかりの人も、悪いところばかりの人もいない。あの日

あなたはそう俺達に言ったな」

「……ルブランでのことだよね？」

先程までの柔和な笑みはどこへやら、今は忌々しそうに顔を歪めている斑目を眺めながら、喜多川君は小さく呟いた。

「俺は斑目の心の歪みを見た。斑目は人を人とも思わない外道だ」

「……そっか」

眉間にシワを寄せて斑目を睨み付ける喜多川君からは、今の斑目が抱えている以上の怒りを秘めているように感じられた。何があったかは分からないけれど、ここまで喜多川君が怒りを募らせ、斑目を見限るに至った何かがあったんだろう。

「俺もあなたの言葉を否定するつもりはない」

だが、と喜多川君は続ける。

「悪いところばかりじゃなくとも、その悪いところをきちんと清算してからじゃないと俺は奴の良いところに目を向けられそうに無い。だからこうするしかなかった」

「うん……」

「本当に奴が自身の行いを悔い改めて謝罪をしたその時、俺は初めて奴を曇り無き眼で見ることが出来ると思っている」

「喜多川くんがそう思うのなら、それで良いんだと思うよ」

僕が言えることはそれだけだ。ただの部外者でしかない僕が彼に對して偉そうなことを言える筋合いは無いし、彼もそんなことを求めている訳ではないと思う。

「ねえ喜多川くん。君がそう思うのは、他の誰かからそう乞われたから？ それとも、君が君の心に従った結果なのかな？」

「安心してくれ。これは俺がそうと決めたからだ。どこかの誰かを勝手に代弁したものじゃない。俺は、俺達は自らの心に従って決め、その結果を受け止めると決めた」

喜多川君は僕の目を見てそう言った。そこに嘘や迷いは無い。その様子を見れば、僕の心配は無用だと、余計なお世話だということは明らかだった。

「なら僕の心配はただのお節介だったね。変なことを聞いてごめん

ね」

「そんなことは無い。あの言葉のお陰で一時の感情に振り回されることなく、決められたんだ」

そんなに大それたことは言っていないのだけれど、喜多川君は穏やかに笑った。

斑目に見つかる前に少し抜ける、騒ぎは気にせずゆっくり見ていくと、言っていて喜多川君は個展会場を後にした。僕はその言葉に甘えて一枚一枚の絵をじっくりと鑑賞させてもらう。

個展に飾られている絵は抽象画だけじゃなく、人物画や風景画もある。以前来たときは抽象画に惹かれてそちらに時間を割いていたため、今日は風景画の方を眺めることにした。

風景画はどの絵も細い筆を使った繊細なタッチで描かれた絵ばかりだ。木の葉の一枚一枚まで表現した絵は、描くのにどれだけの時間を費やしたのだろうかと思ってしまう。

「すまない、先程までここに長身の男子学生がいたと思うのだが……」  
僕が絵を鑑賞していると、背後からそんな声がかかった。

「えっと、喜多川くんですかね？ 彼なら少し外すと……え？」

「おや、君は」

答えながら振り向いてみれば、そこに立っていたのは着物に身を包んだ老人。日本画の大家、斑目一流斎その人だった。

「祐介はどこかに行ったのか、まったく……」

「すみません、お力になれず」

はあとため息をつき、両腕を組んで隣に並ぶ斑目に僕は頭を下げる。

「ああいや、気にしないでくれ。それより、今日も来てくれたのだね」

「はい、前回は風景画にあまり時間を割けなかったので、今日はそれを見ていこうかと」

「なるほど、では今日も聞かせてくれないかね。君はこの絵についてどう思う？」

隣に立つ斑目が指差したのは一際大きな額に入れられた絵。日本の象徴である富士山を描いた絵だ。墨の濃淡だけで景色を表現する

水墨画で描かれたそれは、他に飾られている絵が彩り鮮やかな色彩で描かれているだけに余計に目を惹いた。

山の麓の森、そして山の中腹には雲がかかっており、雲海の上に浮かぶ富士山はそこが人の領域ではない、神域だと思わせる威容を携えていた。

「この絵は儂がまだ若い頃、絵のモチーフを求めてあちこちを歩き回っていたときに目にした光景だよ。今日の個展に合わせて過去の記憶を思い出しながら描いたものだ」

絵を眺めながらしみじみと呟く彼は、どこか懐かしむように目を細めた。

「恐らくこの構図の富士山はどこからも見えない。儂の朧気な記憶を頼りに描いたものだからな。だから写実画ではなく、心象画と呼ぶべきものかもしれん」

「そうなんですネ……、記憶を頼りにこれだけの絵を描けるなんて凄いです……素人丸出しの感想でお恥ずかしいですが」

「ハハハ、この程度なら美術学校の生徒でも描けるものだろう。言ってしまうえば凡作だよ、これは」

そう言って笑う斑目。どこか自嘲するような色を滲ませるその言葉に引つ掛かりを覚えながら、僕は絵に付けられたタイトルに目をやった。

「届かぬ理想、ですか」

「そうだ。儂の記憶の風景よりも本当の富士山はもっと美しく、人の想像の及ばぬ神秘性を湛えている。それを表現するにはとても足りぬ諦めを表した名付けだよ」

彼の解説を聞いてからもう一度絵を見る。雲海の上に浮かぶ富士山と麓の森、間を隔てる厚い雲は、それこそ彼が言う理想の壁を表しているのだろうか。

人の領域を越えた場所にある富士の山頂、斑目はそこに辿り着こうと森に分け入り、理想と現実の壁で挫折したのだろうか。取り留めの無い妄想が頭の中に広がる。

「君ならこの絵にどのようなタイトルを付けるだろうか?」



インタビュウを受けた日と同じ問いを、彼は僕に向けた。僕に向けられた彼の目は、僕には読み取れない感情を見せたまま、純粹に僕の答えを待っているようだった。

僕は俯いて深く考え込む。今のタイトル以上に相応しいタイトルが無いと思えるくらい、僕は彼の言葉に納得してしまっていた。けれど、あのときのインタビュウと同じように、彼は僕なりの答えを聞きたいのだと思い、考えを巡らせる。

再び視線を上げて絵を眺めてみれば、山の中腹にかかった雲海に細いながらも切れ目があるように見えた。それは僕のただの見間違いかもしれないけれど、

「目指す頂、というのはどうでしょう?」

「ほう、その意味するところは?」

「まだ諦めていない、理想と現実の間にある分厚い壁を認識しながらも、そこに至りたいという気持ちが残っている。これは僕の考えすぎなのかもしれないですけど、ほら、この辺りは少し雲が薄く描かれているように見えたもので。相変わらず素人考えですけどね」

僕が指差した部分を見つめ、斑目の表情に少し驚きの色が混じる。指摘されて初めて気付いた、とでも言うように。

「……なるほど、なるほど。やはり君の着眼点はとても面白い。儂ですら気付かなかつたよ、まだそんな思いが残ってはいようとは」

「いえいえ、素人の妄想ですから」

「そんな素人の妄想ですら、儂のような老いた芸術家には貴重な着想なのだよ。ありがとう」

斑目はそう言って僕に向かって小さく頭を下げた。かの大先生に頭を下げさせた高校生なんてどれだけいるのだろう。周りの目もあつてすこぶる居心地が悪いのだけれど、僕は苦笑いで彼の言葉を受け取った。

「あはは、何だか照れますね、そう言われると」

「照れることはあるまいよ。君の言葉は、今一人の芸術家を助けたのだから」

斑目は柔らかな笑みを浮かべて僕を見る。今の彼を見ていると、彼が

盗作をしているとはとてもではないが信じられない。まさしく絵に描いたような理想の芸術家といった様相なのだから。

彼の弟子である喜多川君の証言と、予告状を見ていた先程の剣幕を知らなければ、僕は今でも彼が盗作をしていることを信じていなかったと思う。

僕は気まずい思いを飲み込んで再び富士山に目を向ける。届かぬ理想。その名が示す意味が、ピタリとはまったように感じる絵だ。もしかするとこの絵は、数少ない彼が自ら手掛けた絵なのかもしれない。

もしそうだとすれば、彼はどのような気持ちでこの絵にその名を付けたのだろう。

## Reveal the ostentation

「僕は人としてやってはならぬことをしてしまいました」

その言葉と共に始まった斑目の緊急記者会見を見ようと、渋谷の街頭モニターには人だかりが出来ていた。個展の最終日に合わせて急遽セツティングされたそれは、当初は斑目の次の個展に関するサプライズニュースだと思った人が大半だっただろう。

個展最終日となった6月5日。その日に斑目が口にしたのは、あらゆる人の予想を裏切ったスキャンダルだった。

「僕は弟子から着想を盗み、自分の作品として発表することを繰り返して参りました」

肅々と自らの罪状を自白する斑目に絶え間なくフラツシユが焚かれる。日本を代表する芸術家の口から放たれた爆弾発言を、あらゆる報道機関が一瞬たりとも逃さぬとばかりに待ち構える。

「僕は、いつしか芸術というものを見失い、俗世に染まり墮落してしまいました……」

弟子のアイデアを盗むばかりか、住み込みであることを良いことに虐待紛いのことまで繰り返していた。自分が良いと思った絵は世間にも受ける。そこに斑目というブランドが冠されていけばなおさら。

最初は生活に困窮し、たった一人の弟子に土下座までしたという。膨らみ続けた罪悪感はしかし、それで得られた偽りの称賛に塗り潰され、かつては自らを高めるために磨いた審美眼はいつしか虚栄心を満たすことのみ使われるようになった。

かい摘まんで話される言葉一節一節を切り取ろうとしているかのようなフラツシユの量。それに晒される斑目は眩しさに顔をしかめることこそあったものの、しかし最後まで取り乱すことはなく机に額がくつつかんばかりに頭を下げた。その瞬間に一際大量のフラツシユが焚かれた。

「現在のお弟子さんである喜多川君からも作品を盗んでいたということでしょうか!？」

「今まで被害に遭ってきた元弟子の方々についてはどう思われている

のですか！」

「何故今になって告白しようと考えられたのでしょうか！」

矢継ぎ早に投げ掛けられる記者の質問にも、斑目は大きな動揺を見せることはない。ゆっくりと頭を上げた彼は、報道陣を見渡すと再び口を開く。

「仰る通り、唯一残ってくれた祐介からも僕は盗作を繰り返していません。見下げ果てた人間です。これまでの弟子にも、謝罪だけで足りぬことは重々承知ですが謝罪したいと思っております」

そこで一拍の間が空く。

「今さらなんと愚かなことを、と思われることでしょうか。犯してきた罪を今になって自覚してしまったのです。この罪を誰かに裁いてほしい、裁いてもらわねばならないと思ったからです」

そこまで言いきった斑目の頬に一筋の涙が伝う。顎髭に達し、そこで初めて気付いたように斑目の顔が歪む。涙を流す自分の浅ましさを忌々しく思うように乱暴にハンカチで顔を拭うと、再び頭を下げた。

「僕は芸術を汚し、人の道を踏み外した外道です。大変、申し訳ございませんでした……」

その言葉を皮切りに記者団の質問がさらに加熱する。そこで僕はモニターから視線を外した。彼は最後まで毅然として自らの罪を受け止めようとしているように見えた。少なくとも僕にとってはそう思えた。当事者の喜多川君や、斑目の元弟子達にとっては許せることではないのかもしれない。それは当然の話だ、芸術家としての将来を絶たれた元弟子にしてみれば斑目が一度謝ったくらいで自らの人生を歪めたことを許せるはずがない。だから斑目はそれに向かい合っただけで償い続けなくてはいけないのだろう。たとえ許されないとしても。鴨志田先生と同じように、彼もまた考えることを止めて、ただ裁かれるのを待つだけではないけない。

モニターに目を奪われていた人々は、熱を帯びた口調で口々に先程まで見ていたものについて語る。

僕はポケットに入ったスマホが震えるのを感じて取り出してみれ

ば、クラスのグループチャットが鴨志田先生の時と同じような今回の事態に大きな反応を見せていた。

「海藤くん……?」

「おや、新島さん。奇遇だね」

聞き慣れた声が出たと思えば、僕の前には剣呑な表情の新島さんが立っていた。

「相変わらず騒ぎの渦中にいるのね。紛らわしい真似をしないでほしいわ」

「なんで休日に顔を合わせて早々に僕は怒られてるんだろう……」

中々に理不尽なことを言われているのだけれども、新島さんはやれやれとまるで僕が悪いかのようにため息をついた。何故僕が問題児かのように扱われているのだ。いや、問題児かもしれないけれども。

「予告状の出たあの日、あなたが斑目の個展に居たのを見た人がいるのよ」

「あー、うん。それについては色々あったというか……ね」

誰かに見られていたのか。ふと気になったことが裏目に、いやこの場合は疑いを逸らせて良かったというべきなのだろうか。

「ハア……私はあなたが怪盗団じゃないってことを証明しようと頑張ってるのに当の本人が自分から疑われるようなことをしてるなんて……」

「そんなことを言われてもですわね……」

新島さんは相変わらず僕を怪盗団にしないようにと頑張ってくれているらしい。自分から疑われるようなことを言っておいてなんだけれど僕は怪盗団じゃないので彼女が心配するようなことは無いのだけれど。それを言うわけにもいかないの僕は曖昧に笑うしか出来なかった。

「これで怪盗団は世間でも一躍有名になったわけね。これもあなたの思い通り?」

「ざらりと自白させようとしてない? 思い通りも何もないんだけど」

「私の見立てだとあなたは怪盗団そのものじゃなくともそれにかなり

近くて怪盗団の動きをある程度把握出来ていると思うのよね。だからあなたは怪盗団を庇えるし、私の動きを牽制出来る」

困った、僕の同級生があまりにも鋭すぎる。殆ど見抜かれてるじゃないか。僕の人生経験、と言つて良いか微妙なところの記憶がなければあつさりと動揺が表に出てしまつていたことだろう。というか今でも結構背中には冷や汗が浮かんでる。

僕は表情だけは平静に、新島さんに笑いかける。

「まあまあ、そんなに疑わしいなら場所を移してじっくり話でもしようか?」

「ぐぬぬ……そうしたいところだけど今日は他に用事が……」

「あらら、それは残念」

新島さんは悔しそうに口の端を歪めていた。僕はそう返してそれじゃあと一言告げる。どうしてこのタイミングで会つたのかと思つたが、彼女も用事があつてこの辺りに出てきていただけらしい。

尚も後ろ髪引かれていそうな様子の新島さんだったが、僕はそれに苦笑しながら踵を返し、駅へと向かう。

「儂の中にまだほんの一欠片でも、芸術家であつた頃の心が残っていることを思い出させてくれた人がいました。身勝手な話ですが、儂はその人に恥じぬように生きねばなりません……」

背を向けたモニターから流れる斑目の言葉。彼が言う人とは喜多川君のことなのだろうか。もしそうなのであれば斑目は今度こそ自身の納得がいく絵を描いてほしいと思う。彼自身も傑作だと自慢できる作品を、今度は見てみたいと思つたから。

「その君、ちよつと良いかな?」

彼女と別れて駅に着いた僕の肩を、その言葉と共に誰かが叩く。今日はよく声をかけられる日だな。一体誰がと思つて振り向けば、そこにいたのは茶色い髪を肩まで伸ばし、もうそろそろ暑くなつてきた頃だというのにブレザーと黒い手袋、そしてアタッシュケースとかつち

りした格好の青年だった。にこやかな笑みを浮かべた彼を周囲の人々が何やらヒソヒソと噂しているような気配で遠巻きに眺めているあたり、もしかすると有名人なのだろうか。生憎とテレビもあまり見ないので芸能人だったとしても分からないので大変申し訳ない限りだ。

「ええっと、誰かと間違えてませんかね？」

「いやいや、間違えてなんか無いよ。秀尽学園の海藤徹くん、だよね？」

一方的に顔と名前を知られている、というのは案外気分が良くないものなのだと僕はそのとき初めて知った。僕が警戒した雰囲気を感じ取ったのか、目の前の青年は慌てて手を振った。

「あつと、いきなり話しかけてごめん。僕はこういう者なんですけど」

そう言つて僕に差し出された名刺を見てみれば、『明智吾郎』の文字。これは、世間に疎い僕でも名前くらいは知っているぞ。確か、最近話題の高校生探偵、だっけか。

名刺を渡せばなんとかなると思つていたのか、目の前の明智青年は困つたような笑みを浮かべていた。

「高校生探偵の明智吾郎さん、ですか。名前くらいは知ってますけど」  
「あ、はは。これでもちよつとは有名になってきたと自惚れてたんだけど、まだまだだなあ」

明智君は苦笑しながら頭を掻く。それで、その高校生探偵が僕にいったい何の用なのだろう。それを聞いてみれば、彼は気を取り直すように咳払いを一つ挟んで口を開いた。

「心の怪盗団、君ならそれについて何か知っているんじゃないかと思つただけけど。良ければどこかで座つて話でもしない？」

どうやら彼の用件は先程からモニターで中継されている斑目の件に絡むことらしい。彼が懐から取り出したのは、僕も持っている赤と黒のカード。ちょうど先週、それと同じものがあちこちにばらまかれていたところだ。僕も一枚持っている。

そのまま明智君に促されるまま駅前のカフェに連れ込まれた僕は、コーヒーを片手にワッフルを頬張つてニコニコと笑う彼と向かい

合っていた。

「いや、ごめんね。朝から何も食べてなくてさ。これが今日初めての食事なんだ」

「はあ、そうなのね」

聞きたいことがある、と言いながらワッフルをもふもふと食べ進める明智君を眺めながらコーヒーを啜ること数分。ひと心地ついたらしい彼はコーヒーを飲んで満足そうに息を吐くと、アタツシユケースを開いて一枚の紙を取り出した。

「お待たせ、聞きたいことってというのはこれのことなんだ」

「これは……」

机に並べられたのは先程明智君が懐から取り出したのと同じ赤と黒のカード。そこに記されていた名は、鴨志田先生の名前。

「秀尽に通う知り合いから手に入れたんだ。この予告状、そして心の怪盗団というワード。君は確か、鴨志田が出頭したときにテレビでインタビューを受けていたよね？ それに斑目の個展でもインタビューを受けていた。鴨志田と斑目の件、君はどちらにも関わりを持っていて。君なら色々話を聞けそうだと思うてさ」

つらつらと語る彼はなるほど、探偵らしくよく調べられている。新島さんとは違って表情こそにこやかだけれど、その目の奥には油断ならない光が宿っているのが見て取れた。それは彼が敢えて隠さなかったのかもしれないけれど。

「話、ね。それならこのコーヒー代くらいは持つてくれるのかな？」

「確かにそうだね、もちろん払わせてもらおうよ」

「よし、それじゃあ僕もワッフルをもらおうかな」

「え……？」

げっ、という表情をした明智君をよそに僕はワッフルやスコーン、おかわりのコーヒーをずけずけと注文する。何せ初対面でいきなりカフェに連れ込まれたんだから、これくらいは許されても良いだろう。

「さて、じゃあ聞かせてもらいたいな。鴨志田と斑目、この二人が急に自分の罪を告白して世間を騒がせている事件。僕はこれを改心事件



と名付けて調査してるんだ」

「改心事件、ね」

なるほど、言い得て妙だ。確かに二人とも人が変わったように、改心とでも言うほどの心変わりをを見せていた。

「心の怪盗団。団、というからには複数人なのかな。彼らは予告状の中で歪んだ欲望を頂戴する、と言ってているよね。これについて、事件に近い位置にいた人間として何か思い当たることは無いかな？」

「思い当たること、と言われても。正直に言うときっぱり分からないな」

「まあそうだよね……。じゃあ君から見ても鴨志田と斑目、両方と因縁のあった人もしくは人達に心当たりはあるかな？」

「因縁か。鴨志田先生とはむしろ僕が一番因縁が深いと思うけどね」  
これについては恐らく本当だ。流石にあそこまで鴨志田先生と揉めた生徒はそういないと思う。斑目と因縁のある人、と言われてもピンとくる人はいないと答えた。喜多川君の顔が浮かんだものの、それを彼相手に口に出すのはまずいということくらい僕でも分かる。

それから明智君は二つの事件に関して様々なことを根掘り葉掘り聞いてくる。それに対して正直に答えることもあれば、少しぼかしたりして、のらりくらりと会話を続けていく。

3杯目のコーヒーマグが空になるくらいでようやく彼の質問は尽きたのか、満足そうに4杯目のコーヒーマグを注文していた。

「ありがとう、色々と参考になったよ。コーヒーマグ代を払う甲斐は十分にありそうだ」

「そんなに大した話はしてない、と言うと奢りの話が無しになりそうだからどういたしまして、と言っておこうかな」

運ばれてきたコーヒーマグを口に含んで一息つく。このカフェは前までお気に入りだったのだけど、ルブランを知ってから少し物足りなくなってきた。

「そういえば、これは雑談なんだけどさ。君は春先から騒ぎになっている精神暴走事件について知ってるかな？」

「それくらいなら、新聞でもよく取り上げられてるしね」

明智君が切り出したのは彼の言葉通り春先からニュースやワイドショーでよく取り上げられるようになったワードだ。大人しく、何の変哲もない人がある日豹変して凶悪な事件を引き起こしてしまう。一件だけならともかく、それが何件も連続して、しかし容疑者は誰も繋がりが無い不可思議な事件。

「僕は精神暴走事件はどこか裏で繋がっている一連の事件だと考えているんだ」

彼はそう言っただけで話し出す。彼が警察に協力する中で得られた情報、そこで覚えた違和感について。初対面の僕に話して良い内容なんだろうかと首を傾げたくなるけど、流石にそのあたりの情報管理はきちんとしていると思いたい。

「そして、今回の二件の改心事件も変則的な精神暴走事件として繋がっていると、僕は読んでいる」

「へえ、それはまたどうして?」

「どっちの事件も、容疑者の人格が豹変するという点は共通している。それに手口が全く掴めないこともね」

「それだけで二つの事件を繋げようとするのは暴論では?」

「現代の警察は無能なんかじゃないからね、その科学捜査を以てしても手がかりの一つも掴めない事件なんて稀だよ。そこに何の繋がりも無いと考える方がむしろ不自然だ」

「なるほど……」

彼の言うことにも一理あると考える。とはいえ、このまま彼に同意して話を終わらせるのも何だかなあという気持ちになってしまう。

「じゃああえて反対の立場、二つの事件は無関係という立ち位置で考えてみようか」

「へえ、面白そうだね」

僕は顎に手を添えながら新聞で得た情報を頭の中で整理する。それと鴨志田先生と斑目の二つの改心についても。

「鴨志田先生と斑目の事件はどちらも予告状がキーだと思う。なら予告状が見つからない精神暴走事件は浮いてしまっている」

「例えば心の怪盗団の真の目的は直近二件の改心事件で春先の精神暴

走事件は彼らが使った口口の試運転だった、とすれば？」

「そう考えると本命の方がより手ぬるい結果に終わるのがよく分からない。彼らが名を売りたいとしても規模が大きな精神暴走事件で声明を出さない理由になるだろうか」

「怪盗団は今回の二つの事件で自らを義賊だと主張したいとすれば大きな被害を出した精神暴走事件ではむしろ名を出したくないだろうね」

「そうなのだとすれば、たかが一学園の教師の醜聞を告白させるのが初陣というのが分からない。精神暴走事件を起こすくらいに実験を重ねたのなら、いきなり斑目クラスの相手を狙った方が名を売るには有効だ」

「精神暴走ではなく改心の試運転、だとすれば？」

「それこそ精神暴走の過程で検証しておくべき内容だろうね。むしろ、鴨志田先生の件こそ怪盗団の真の初陣だと考えた方が納得できない？ それで自信をつけたから、世間的にも話題になるターゲットを選んだ」

もちろん本当のところ、怪盗団がどうしても鴨志田先生と斑目をターゲットにしたのかについては想像がついている。けれどそれはここで口にするべきじゃないし、今まで表に出ている情報だけから考えるとしたら僕が言った内容になるだろうと思う。

僕の考えを聞いた明智君は少し考え込むように視線をテーブルに落とす。

「ま、あくまでただの妄想だけどね。本職の探偵ならもう考えたことなのかもしれないけど」

「いや、君の考えは非現実的だと切って捨てるには惜しい……」

そう呟いて視線を上げた明智君は再び感情の読めないニコニコ顔になっていた。

「やっぱ君に声をかけたのは間違いじゃなかったよ。名刺に書いてある番号は仕事用だから、改めてこれ、僕の連絡先ね。これからもちよくちよく君の話聞かせてもらっても良いかな？ もちろん僕からも何か協力できることがあれば力になるからさ」

「え……、まあ、話をするくらいなら」

そう言つて明智君に差し出されたメモを手にとると、そこにはメッセーリアプリのIDが記載されていた。後で連絡先に追加しておいてくれということなのだろうか。

「いやあ、こんなに話せる人が僕と同年代にいるなんて嬉しいなあ。特にこういう推理みたいなことになるにあんまり僕と対立意見を言ってくれる人が最近少なくてね」

「テレビに出るくらいの探偵と張り合える推理力は無いんだけどね……」

まさかこんなところで有名な探偵の連絡先を手に入れることになるとは。

「探偵王子の再来なんて世間では言われてるけど、流石にあの探偵王子もここまで有能な助手はいなかっただろうね」

「誰が助手だ」

なぜか勝手に助手認定までされていた。初対面から距離の詰め方が凄いな、この高校生探偵は。

# Detective's right-hand man

「それで今調査に協力している案件なんだけどね……」

電話口の向こう側でニコニコとしている顔が目には浮かぶような口調で話してくる相手に向かって、僕は何度目かになるため息を吐く。こんなことは失礼だというのは分かっているけれども、今電話をしている相手に対してそのような気遣いは無用だということはここ数日で明らかになっていいるのだから。

「あのね、明智くん。今は何時か分かっているかな？」

「今？ 朝の7時半だよね？」

僕の質問の意図が全く伝わっていないことがよく分かる口調で相手、明智君は電話越しに答える。

「そう、朝の7時半なんだ。学校に来て朝の読書でもしようかと思っ  
ていたところなんだよ、僕は」

「おっと、それは申し訳ないね。それじゃあ手早く用件を話すよ」

暗に電話を切ってくれないか、という僕の願いも空しく、彼は話を続ける。あの日、カフェで明智君と連絡先を交換してからしばらく、恐ろしいことにかの高校生探偵は僕に毎日連絡を寄越してくるようになっていた。

それもただの雑談ならばまだ良い、というより当初は本当に雑談がメインだったはずだ。警察の人とのやり取りや、事件現場で気を遣うこと、他にはテレビなんかにも出ているので忙しくて学校にも中々登校出来ず、友人関係に苦労しているといった愚痴のようなものまで、話題には事欠かなかった。僕も自分の馴染みの無い世界の話だと興味深く聞いていたのだけど、いつしか今日のように彼が今警察と協力して追っている事件について話すようになったものだから僕は不味いことを聞いてやいないかと日々戦々恐々としている。

「この前ニュースにもなっていた通り魔事件なんだけどね、防犯カメラと目撃証言から容疑者は3人まで絞り込めたんだけどそこからの

決め手に欠けていて」

「どうしてそうやってホイホイと一般人が聞いちゃいけないようなことを聞かせてくるんだ君は……」

今日の案件も例に漏れず一般高校生が聞いちゃいけない守秘事項の気配がしていた。あの日、別れ際に助手などと嘯いた明智君であったが、本当に僕をそういう扱いにしようとしていないだろうか。

「まあまあ、君の考えを聞かせて欲しいんだ。あの日から何度か連絡を取り合ってるうちにやっぱり君の推理力は素晴らしいと思ってるね。僕には無い視点をもたらししてくれる」

「素人に推理をさせないで欲しいなあ……」

「そう言わずに。今回の事件も精神暴走事件の一つかもしれないと個人的には睨んでいてね。容疑者の一人は大学生の男で……」

僕のぼやきをさらりと受け流して事件に関する情報をペラペラと話す明智君。どうやら僕は完全に彼の助手扱いになっていているらしい。機密情報の取り扱いやら何やらうるさいだろうと窘めたこともあったのだけれど、そのあたりは気にしなくても平気だと爽やかに返されてしまったって何も言い返せなくなった。

そしてこうやって話し出した彼はあの爽やかな印象からは想像もつかないくらいにしつこい。僕が何かしら考えを話さないと解放してくれない。この男、他に友達がいらないんじゃないかと言いたくなるくらいに。

「それで、君はどう思う?」

「どう思うと言われてもなあ」

話し終えた明智君が僕を促すが、ニュースや新聞でも大した情報が出ておらず、彼から聞いた話だけで全てが見通せるほど僕は頭が良いわけではない。うんうんと唸ってみるも僕の頭に大した考えは浮かんでこない。

「というか探偵でもない一般人に何をさせてるんだ君は」

「そんなこと言うけど、前にこうやって相談したときはすぐに興味深い推理を返してくれたじゃないか」

「それは君があんまりにもしつこいから苦し紛れに言ったただだよ」

「苦し紛れにしても、あれのお陰で捜査が前進したから僕は頼りにしてるよ」

人から頼りにされるのは嬉しいのだけど、明らかに僕には荷が勝ちすぎている案件だ。何にしても今もらった情報だけで考えられることなんかどうせ既に検討され尽くしたものでしかないと伝えれば、明智君は渋々といった様子を隠すことも無く、

「仕方ない、それじゃあまたいつものカフェで」

と譲歩したようでもまったく譲歩してくれていないことを言っただけだ。

「どうして僕の放課後の予定をすぐに押さえようとするんだ……」

「まあまあ、良いじゃない。大人ばかりを相手にしているから君みたいに同年代の男子と話せる機会は逃したくないんだよ」

「そういうのは同じ学校の同級生を相手にすれば良いのに」

「僕はどうも学校じゃ浮いてる、というか有名になりすぎて皆遠慮しちゃうからね、君みたいに物怖じせずに関わってくれる人は貴重なんだよ」

何を言おうと僕を逃してくれるつもりは無い明智君に僕は朝からどうしてこんなことになったのだと天を仰ぐ。仰いだところで見えるのは見慣れた生徒会室の天井しかないのだけど。

「おっと、それと話は変わるけど、怪盗お願ひチャンネルを教えてくださいありがとうございます。あんなものがあつたなんて知らなかったよ」

「あれが怪盗団の調査に役立つかは怪しいところだけだね」

「そんなこと無いさ。やっぱり僕の助手は優秀だね」

「助手はやめてくれ」

電話越しにクスクスと笑っている明智君にそろそろ数えるのも億劫になってきたため息をこぼす。どうしてこうなったんだろう。

そろそろ電話を切っても良いかと聞いてみれば、明智君は少し焦つたような声で僕を引き留める。

「最後に聞かせて欲しいんだ。君にとって怪盗団は正義かな、それとも悪かな？」

明智君の質問は街頭インタビューでも聞かれそうな単純なもの

だった。けれども僕はその質問に対して気楽に即答することは出来ない。それは怪盗団が誰なのかを半ば知ってしまったという理由もあつたが、それ以上に僕には判断の出来ないことだと思うからだ。

それをそのまま明智君に伝えてみれば、要領を得ないといった声色で先を促された。

「彼らの善悪を判断できる材料が僕には無いからね。表に出ない悪事を暴く。それは善行にあたるものかもしれないけど、その過程では今の社会法規に照らしてみれば悪行とされることも含まれているかもしれない」

「冷静な見方だね。世間では、頼りにならない警察に代わって悪を裁く義賊、だなんて言ってる人もいるけど？」

「その世間は一部の大きな声の人の意見が強く反映されがちだからね」

だからあまりSNSなんかは好きになれない。怪盗お願いチャンネルのようなネット掲示板も。人の複雑で立体的な内面を単純で平面的な一面にまで貶めているような気がしてしまうからだ。

「なるほどね、何だか安心したよ。この前もラジオで怪盗団に否定的なことを話したら一部のリスナーからバツシングされて凹んでたんだ」

「それで僕にこんなことを聞いてきたのか」

「改心事件が精神暴走事件と繋がっているとしたら、怪盗団は洗脳、催眠その他の方法で人の心を操れる可能性がある。事の善悪はともかく、手段の是非は問われて然るべきだと、法治国家である以上私刑はダメだって当たり前のことを言っただつてもりなんだけどね」

明智君も僕と同じように大きなため息を吐いた。なるほど、高校生探偵で有名人ともなればそういった心ない声というものもよく届くのかも知れない。特に怪盗団に救われた人からすれば彼の言葉は許せるものではなかっただろう。自らの恩人が犯罪者だと暗に言われて怒らない人間はいないのだから。

そういう意味では僕も明智君に怒るべきなのかもしれないが、あま



りそういう気にもなれなかった。それは彼の言にも一理あることが分かっていくからだ。

「なるほどね、まあ僕もその意見には頷けるかな」

「君ならそう言ってくれると思ってたよ」

電話越しでも分かるくらい、ほっとしたような声だった。爽やかで柔らかな表情を崩さない明智君だが、一見して平気だからと言って内心までそうであるとは限らない。対面して、あるいは電話で直接話していれば分かることも、文字越しでのやり取りになると忘れてしまう人が多いのは悩ましい。

ただ、僕は明智君のように完全に怪盗団に敵対する考えというわけではない。これは僕の悪い癖でもあるのだけれど、僕はわりとどっちつかずな態度を取ることが多い。それは良く言えば中立的だけど、悪く言えば優柔不断だ。良くないことだと自覚しつつ、それでも僕はこの態度を捨てられない。だから僕は続けて口を開く。

「それでも、怪盗団は手段の善悪を踏まえた上で自らのやり方を貫くと決めたんじゃないかな。最後は自分達の手でケジメをつけると僕は思ってるよ」

「……そうか、君はそう思うんだね。やっぱり、僕と似ているようでどこが違う考え方だ」

そう言った明智君の声は先程と比べて落ち着いたものになっていた。ともすると少し落ち込んでいるようにも思えるような声色だったが、そこまで彼にとって心外な言葉だっただろうか。

僕がそう思っただけだと首を捻っていると、明智君は長電話も良くないからと会話を切り上げた。毎日毎日長電話してきてるのはそっちじゃないかと言えば互いに少し笑い、また放課後にと一言交わして電話を切る。

電話を切って時計を見れば、時間は既に8時を10分程過ぎていた。生徒会室でコーヒーでも飲みながらのんびりと本に没頭するには少々心許ない時間だ。僕はスマホをポケットにしまうと、鞆を肩に掛けて部屋を出た。朝のHRが始まるまでは教室で読書をすることにしよう。

放課後、今日は生徒会の雑務が色々溜まっていたことを思い出した僕は遅れることを明智君に連絡し、生徒会室に再び足を踏み入れる。教室を出たのが少し遅かったからか、部屋には既に先客がいた。

「海藤くん……」

「新島さん、お疲れさま。他の皆はまだ来てないんだね」

「お疲れさま。今日は他の子達は用事があるみたいよ」

椅子に座って書類の束を前に思い詰めた表情をしている新島さんに声をかけてみれば、彼女は顔を上げて挨拶を返してくれこそするものの、浮かない表情のままだった。

「元氣無いけど、何かあった?」

「いえ……、何も」

何も無いわけが無い顔をしているけれど、彼女は詮索を拒むように書類を手にとって視線を落とした。僕に触れて欲しくない話題のようなので、僕も彼女に倣って机に積まれた書類をぺらりと捲って目を通していく。

それからしばらくは会話もなく、紙の上をペンが行き来する音だけが響いていた。僕はあえてあまり新島さんに視線を向けないように、けれども自然体で仕事を進めていくけれど、彼女の方は普段通りとはいかないようで、チラチラとこちらを見てくる気配が伝わってくる。

「……何も聞かないのね」

「聞かせてくれるの?」

「……」

「言いたくなければ無理に話さなくても大丈夫だよ。この程度で僕と新島さんが友達でなくなるなんてことも無いと思っっているしね」

友人だからと言って何もかも晒け出さねばならないなんてことは無い。親密になればなるほど、むしろ話しくくなることもあるしね。話したくないけど聞いて欲しい、そう思っているのなら話せるように、話したくなるのを気長に待つよ。

そう伝えてみれば、新島さんはますます沈んだ表情になってしまふ。どうしよう、僕の善意が何故か彼女を追い詰めてしまっている。そこまで考えて、彼女が何に思い悩んでいるのかに思い当たる。

「校長に怪盗団のことについて急かされたりした？」

「っ！」

大袈裟に肩を跳ねさせる新島さん。なるほど当たりみたいだ。

「このままだと僕を最有力容疑者として警察に突き出すとも言われたのかな」

あの校長だと言つてそうだ。そこまで彼に敵視されているとは、半ば予想していたけど僕の穏やかな高校生活はもう望むべくも無いのかもしれない。

「どうして……」

「ん？」

「どうしてそんなに平気な顔してられるのよ！」

新島さんは手に持った書類を机に叩きつけて立ち上がった。

「鴨志田のときもそう。自分がどうなつても大丈夫、みたいな顔して！ それで周りの人間がどれだけ心配してるのかも考えないで！

あなたがそんな風だから、私は……！」

悲痛な顔で僕に詰め寄る新島さん。怪盗団調査を言い渡された彼女は、何の手がかりも得られないまま斑目という次なるターゲットの改心を許した。そのことに彼女が責められる謂れは一切無いが、校長はお気に召さなかつたらしく、彼女にプレッシャーを掛けたらしい。

「落ち着いて、新島さん」

「落ち着いてるわよ！」

「とりあえず深呼吸しようか、ね？」

僕の呼吸に合わせるように、新島さんが肩を上下させる。数度繰り返せば、少しは落ち着いたのか、先程よりは表情もマシに見えた。

「どうして怪盗団を庇うの。彼らが正義だと思ってるから？」

似たような質問を今朝も受けたな、とこんなときに呑気なことが頭をよぎった。人はとかく物事を正義か悪か、白か黒かの二元論で語りたがる。もちろんそれを否定するつもりも無いのだけれど、人つてそ

れだけじゃないと僕は何度も色んな人に語ってきた。理解を得られたことは少ないけど。

「新島さんはどう思う？」

「私にとっては面倒で頭を悩ませる案件でしかないわ」

正義とか悪とかどうでもいい。そう嘯いた彼女の表情は口にしたことが本心では無いことが見て取れた。

「……私は、役立たずなんかじゃない！」

小さく呟いた彼女の言葉。僕にも聞かせるつもりは無かっただろうそれは、彼女が心に抱えた重たいものを想像させるものだった。

「副会長、ちょっといい……?」

ためらいがちな様子でそう言うのは普段あまり会話を交わすこともない他クラスの男子生徒。メガネをかけた物静かな、齒に衣着せず言うならば少し暗い彼が、昼休みに僕を訪ねてきた。挙動不審とも思えるくらいにビクビクしている彼の様子に用件を察した僕は、人いないところに行こうと言って席を立つ。向かう先は屋上だ。

最近、といつてもここ数日の話だけれど、こうして声をかけられることが増えた。本来ならば交友関係が広がると嬉しく思うところなのだけれど、そうはいかない事情もある。

「その、僕と同じクラスの人に脅されて……助けに来てませんか!」  
屋上に出た彼の第一声は半ば予想通りのものだった。相談内容は大抵決まってこれだ。彼のような相談を僕に持ちかけてくる人は少なくない。

鴨志田先生の一件で、僕は良くも悪くも名が知れている。それ以前からもそうだったかもしれないけれど、特に目の前の彼のように気弱な子ほど、同じクラスに頼れる友人も少なく、藁にも縋る気持ちで僕のところに来ることがある。もちろんそういつた人たちを邪険に扱うわけにはいかないため、両者から事情を聞き出し、僕に出来る範囲で事態の收拾に努めるのだけだ。

今日相談を持ちかけてきてくれた彼の悩みは、以前からからかってくることの多かったクラスメイトが最近度を越して因縁をつけてくるようになったというものだ。カツアゲ紛いのことまでされておおり、お金を払わないと暴力を振るわれることもあったという。

秀尽学園は曲がりなりにも進学校だ。もちろんやんちゃな生徒もいるにはいる。スポーツ推薦制度もあるため、全員が全員、勉強を頑張っているとは言えない。それでも、学力的にはある程度均質化されており、故にそこまで荒れた環境ではない。

だというのに、ここ最近、それも6月に入ってから僕のもとには今日の彼のように恐喝紛いの行為で金品を巻き上げられたといった

トラブルが多く舞い込むようになっていた。これまでも無いわけではなかったが、最近は異常だ。校内にもどことなくピリピリとした雰囲気漂っているようにも思える。

「なるほど、事情は分かった。僕の方から相手方には話をしておくよ。君はお金を払う必要はない。もし顔を合わせるのが怖ければ数日は休んでも良いと思うよ」

「あ、ありがとうございます！」

僕の言葉に、相談者は大袈裟に頭を下げる。本当に、ここ数日ですっかりこういった案件の対処に慣れてしまった自分がいる。あまり嬉しくないことだけれど。

相談者の彼から相手の名前を聞き、とりあえず休み時間は教室にいないこと、放課後になったらとにかく早く帰宅することを言い含めておいた。今日の放課後に相手の生徒に会って事情を聞き出せば少なくとも今日は彼が被害に遭うことも無いだろう。

相手方の事情とやらも、ここ最近の嬉しくない経験値によつて僕は何となく察しがついてしまっているのだ。

「最近校内の雰囲気がおかしくありませんか？」

放課後、生徒会室には珍しく副会長の僕と書記、会計の三人だけが集まっていた。新島さんは用事でもあるのか、まだ来ていない。

「おかしい、っていうのはどんな風におかしく思うの？ 会計くん」

「そりゃ、なんかピリピリしてるっていうか……。副会長だって色々相談受けてるじゃないですか」

会計の彼が言うことに僕は頷いた。この異様な気配はどうやら僕の考えすぎというわけではないらしい。

「そうそう、私の同級生にも急に金遣いが荒くなったり、かと思ったら凄いやつしてお金貸してって言って回ってる人とかいたよ」

同調するように書記の子も身近で見た様子のおかしい人物を教えしてくれた。名前を聞けば、僕も何度か相談されたことのある人のことだった。

「トラブルもあちこちで起きてるし、なんか怖いですよね……」

会計の言葉に僕はここに来る前に聞いた話を思い返す。昼休みに

頼まれたことを早速片付けようと、僕はHRが終わるや件の彼の下へと向かい、人気の少ない教室で事情を聞き出した。最初は話すのを渋っていた様子だったけれど、僕が大体の事情を察していることが伝わったのか、ぽつりぽつりと話してくれ、最後には彼からも助けて欲しいと頭を下げられてしまった。

彼に聞かされたのは所謂闇バイトと呼ばれる部類の話だ。おいしいバイトがあると昼間の街中で声をかけられ、その甘言に乗ってしまつたら最後、違法行為の片棒を知らず知らずのうちに担がされ、気がつけばそれをネタに脅迫されてしまったという。

バイトの内容が路地裏のコインロッカーに小さな封筒を入れるだけという手軽なものであったのに対し、提示された報酬は真面目にアルバイトに精を出すのがバカらしくなるような金額。遊ぶ金欲しさについつい手を出してしまい、封筒を運んでいるところ、お金を受け取っているとところを写真に撮られ、後で中身が違法薬物と聞かされたらしい。

どうしてそんな見るからに怪しいバイトに手を出してしまったんだと言いたくなるが、秀尽学園がなまじ進学校であることが悪く作用したと僕は思っている。良くも悪くも平均以上の家庭で育ってきた生徒が多い。それに中学校までとは比べ物にならない環境変化の中にいるのだ。遊びに行ける範囲も、交友関係の広さも、興味の幅もこれまでとは桁違い、けれども自分の自由に使える金は少ない。更に社会の悪意に晒された経験も殆ど無いのに、本人たちの中には根拠の無い全能感がある。思春期特有の何者にでもなれそうなのその気持ちと、経験の浅さ、そしてまさか自分が騙されたりはしないなどという無根拠な思い込みが付け入りやすい隙となつてしまつているのだと思う。「……そうやって怖いと思えることは大事だよ。くれぐれも、危ないことには首を突っ込まないようにね」

僕は目の前に座る二人にそう言い含める。それからは僕も手早く自分の分の仕事を片付けると、さっさと荷物をまとめる。今日はバイトのシフトが入っているのだ。

「お先に失礼するよ。君たちも無理しないようにね」

「お疲れさまでーす」

「副会長も気をつけてくださいね」

後輩たちの声を背に受けながら生徒会室の扉を開く。そういえば結構時間が経ったと思うけど、今日は新島さんの姿を見ていないな。真面目な彼女が何も連絡無しに帰るとは中々考えにくいのだけど。

そう思いながら昇降口に近い階段に向かえば、上階から下りてくる雨宮さんとばったり顔を合わせた。

「あ」

「おや、珍しいね。帰宅部なのに残ってるなんて」

雨宮さんは特に部活動にも所属していないので、放課後に校内に残っていることは少ない。それこそ丸喜先生との面談や、図書室で勉強していたり、あるいは僕と本の感想会を開いているときくらいだと雑談の中で話していた記憶がある。

「……ちよつと、人と会う用事があったから」

「なるほどね。もう帰るなら途中まで一緒にどうぞ？」

「……うん」

浮かない表情をしている彼女が少し気になったので誘ってみれば、彼女は少し躊躇いを見せたもののコクンと頷いた。校門を出てから少しの間は僕も彼女も口を開くことはなかった。こういうときは男の方から気の利いた話題の一つでも提供するべきなのかもしれないけれど、今はそういう雰囲気でも無いような気がしていたので黙って歩く。

「……副会長はこの前のテレビを見た？」

「この前、つていうと君がスタジオで明智くんと討論していた番組のことかな？」

「そう」

僕が聞き返してみれば雨宮さんは頷く。先週の日曜日のこと、雨宮さん達2年生は社会科見学として色々な職場へと見学へ向かったのだ。彼女が選んだのはテレビ局。そこでたまたま、明智くんが出演するワイドショーを観覧していたらしい。途中でお客さんにインタビューするコーナーが始まり、そこでマイクを向けられた雨宮さん



が明智くんと怪盗団の善悪について論じる一幕があつた。もちろん雨宮さんの顔は映されてはいなかったが、特徴的な制服と声で知り合いならば誰が話しているかはすぐに分かつただろう。

「明智は怪盗団は悪だと言つた。人の心を勝手に弄ぶ犯罪者だと。私は怪盗団は罪もない人の心を踏みにじつたりしない正義だと思う。あなたはと思う?。」

「怪盗団の善悪ね。最近本当に似たようなことをよく聞かれるよ」

明智くんに新島さん、そして雨宮さん。こんなに短期間で怪盗団について質問されるとは思わなかつた。やはり斑目という大物が怪盗団によつて改心され、人々の関心を惹いてしまったからなのだろうか。明智くんと新島さんはともかく、雨宮さんは特に怪盗団に対する周囲の人々の認識が気になるようだ。

「僕が言えることは以前にルブランで君達に言つたこととそう変わらないよ」

「怪盗団は自分達の行いの結果を受け止めなくちゃいけない?」

雨宮さんはあの日の僕の言葉を思い出そうとするかのように顎に人差し指をやり、視線を宙に彷徨わせながら呟いた。

「そう。怪盗団の採っている手段はきつと僕の想像も出来ないことだ。突然人を改心させてしまう方法なんて考え付かないからね。だから肯定も否定もしたくない、というのが本音。もちろん、無理矢理心を変えてしまつているのだとすれば、褒められた行為じゃないと思うよ。それだけは明智くんに同意だ」

「それはその力が悪用されてしまうかもしれないから?」

「その力が怪盗団の望まぬ方向に作用したとき、一番傷つくのが怪盗団本人だからだね」

僕の言葉の意図が読めないと言わんばかりに雨宮さんが僕を見つめる。明智君が話した精神暴走事件と改心事件の関連性。二つの事件をどちらも怪盗団が引き起こしたとは考えていない。しかし二つの事件が似ているのも事実ではある。すると、怪盗団が改心させようとした結果、誤つて精神暴走事件を引き起こしてしまう可能性はゼロじゃないのだと思つてしまう。斑目の改心を経て、彼らは自分達の行

いの影響力がどれほどのものを徐々に分かり始めてきていることだろう。それは世間も同じだ。これから怪盗団には多くの声が、目が向けられることになる。救いを求めるもの、近しい人が不本意な改心をさせられたと恨みをもつもの。そこに本当に怪盗団の関与があつたかは関係なく、彼らは自分達ではコントロールし得ないものに自分達の動きを規制されてしまう環境へと自ら足を踏み入れてしまった。

大衆はある意味身勝手だ。勝手に救いを求めて継ぐくせに、何かが起こると手のひらを返す。どれだけ賢明な人間でも、自分の心が操られるかもしれない者を庇い続けることは難しいだろう。怪盗団は自らの力の性質故に、誰一人味方がいない状況になつてしまう危険性を秘めている。現代社会において、法の外にいるものは法によつて守つてもらえなくなることの恐ろしさを、怪盗団には味わつて欲しくはない。

ただ、それとは別に怪盗団そのものの善悪については、僕に思うところはなかった。

「怪盗団の善悪を問うことつて、僕にとっては無意味なものだと思うんだ」

「それはどうして……?」

僕の言葉に雨宮さんは首を傾げる。まあこれは僕のただの持論でしかないから、怪盗団本人達の心の内は本当は違うのかもしれない。

「怪盗団は世間の人達に認められたいと思つて、改心なんてものを始めたのかな?」

「それは……」

雨宮さんは何かを言いかけて口をつぐむ。けれど僕には、後に続く言葉が何となく予想できた。

「誰かを助けたい。このままじゃダメだ、そう思つたのが怪盗団の源流なのかな、と僕は勝手に思つてるんだ」

鴨志田先生によつて心に深い傷を負つた鈴井さん、自らの陸上人生を絶たれた坂本君、関係を強要されていた高巻さん。そして体罰によつて身も心も傷ついていたバレー部員達。そんな人達を放つておけなくて、助けたいと思つたから、彼らを虐げる大人達が許せなかつ

たから怪盗団は立ち上がったのだと僕は思っている。そこに、誰かからの称賛を求めたり、認められたいという気持ちはあつたんだろうか。

「無垢な善意と反抗心が怪盗団の原動力だったんじゃないかなっていう推理。最近できた知り合いのせいでこんな取り留めもないことを考えるようになったよ」

「無垢な善意と反抗心……」

僕の言葉を噛み締めるように呟いて反芻する雨宮さん。彼女の表情には、思いもしないものを見た、という感情が見てとれた。

「実際はどうか分からないけどね。これも僕の勝手な希望だから。でも、世間からどう思われても自分が正しいと思つたことを貫く。それが時には悪だと言われたり、時には正義と称賛されたり、でもそれを気にせず自らのスタイルを崩さない。それって怪盗っぽくてカッコ良くない?」

なんちゃって、と言って笑う。これは僕が考えるカッコ良い怪盗像なだけで別にこうあるべきだという一般論でも何でも無い。けれど、雨宮さんなら意外と共感してくれるんじゃないかと思つている。

「4月に雨宮さんと怪盗アルセーヌについて感想会したじゃない?」

あのときに君が語ってくれたアルセーヌの美学、僕は好きだよ」

「怪盗の美学……。美学がある方がカッコいい、確かにそうかも」

僕の言葉に、雨宮さんもやはり共感できる点があつたらしい。うんうんと頷いて微笑んでいた。さつきまで浮かない顔をしていたから少しでもそれが晴れて良かった。

「やっぱり副会長は少し不思議。世間だと怪盗団が正義か悪かで盛り上がってるのに」

「かもね。でも、こんな変な奴がいたって良いと思わない?」

そう言つて僕と雨宮さんは笑つた。

僕としては悲しいことに、あの日の新島さんの一件以降、僕は彼女から避けられているようだった。時おり後ろを尾けてきている気配を感じるが、そちらに視線を向ければ彼女は僕と目を合わせることもなく走り去ってしまう。

入学して以降、勉強の面でも生徒会活動やその他課外活動の面でも仲良くやってきただけに、自分でも意外だけど割りとダメージは大きい。

「それであんまり元気が無いわけだ」

「君とこうやって頻繁に顔を合わせても良いと思う程度にはね」

「あはは、ひどい言い種だなあ」

今日も今日とて爽やかさを全面に押し出した笑顔で僕のイヤミを笑って受け流す高校生探偵に、僕はジト目を送った。もはや恒例となってしまう駅前のカフェでの明智君との交流は、恐ろしいことに今まで全ての回が彼からの誘いによるものだ。

「それで、電話でも言っていたけど僕に聞きたいことがあるんだよね？ これまで色々僕の捜査にも協力してもらったことだし、もちろん力を貸すよ」

「君の捜査への協力は単に僕が巻き込まれただけなんだけどね。まあ良いや」

僕は注文したコーヒーで口を湿らせると、最近秀尽学園に漂う不穏な気配、それと学生達の間には流れるおいしいバイトとやらの噂について話す。あれから、僕の方でも校内で聞き込みをした他、渋谷はセントラル街をバイト帰りに歩き回ってみたりなどしている。

その結果、学生の間で流れている噂についてもある程度の裏は取れてきた。驚くことにおいしいバイトが実際に行われるのは昼間から夕方メインであり、日が沈んでからは勧誘も、実際に物を運ぶのも一切行われていない。更に知らずに運び屋にされている被害者達は、多くが駅前のロッカーなど人目の多いところが目的地に設定されていた。

この絵図を描いた人間がどれほど用心深く、抜け目無いのかがひしひしと伝わってくる。勧誘のタイミングが昼間から夕方ということでは、学生達の警戒心が多少なり緩んでしまう。夜という時間帯はそれだけで後ろ暗いことを想像させ、人の警戒心を高めてしまうものだ。そして目的地が路地裏などではなく、駅前のロッカーという点も巧い。そんな堂々としたところであれば、大したものを運んでいるとは思いにくい。更に脅迫材料となる写真を撮影するにも通行人に紛れやすく、被害者が見られないように警戒していたとしても盗撮から逃れることは非常に難しくなる。こうして犯人グループは何も知らない学生達を騙し、盗撮した写真を材料に金を脅し取っている。

「なるほど……」

僕が話し終えると、明智君は何かを考え込むように顎に手をやって黙り込む。なので僕は自分の考えを引き続き口にする。

「末端で動いているのはヤクザ、とまではいかない半グレの若者。不思議なのは最近になって活動が活発になったことだけど、根拠地は恐らく渋谷だ」

「……渋谷を根拠にしていると思ったのはなぜ？」

「最近になって活動が激しくなったことが一つ。ネットでも調べてみたけど、こういう話は日本全国で無いこともない。だけど5月末から6月にかけて被害者が急増しているのは東京の渋谷。トップの差配がもっとも早く反映されるのは当然その支配力が強いところのはずだよ。だとすると渋谷はトップかそれに近い人物が影響力を及ぼしやすいところになる」

「そうだね、そう考えるのが自然だ」

明智君がそう言いながら足元のアタッシユケースを自分の膝に乗せ、中から一枚の書類を取り出して机上に差し出した。

「この件については僕も警察から捜査協力を受けていたんだ」

彼が差し出した紙には、「渋谷を中心に発生している学生脅迫事件の顕著な増加について」との文字。中身に目を通してみれば、警察も僕と同様に今の状況を把握しているらしく、パトロールの強化、捜査に乗り出しているらしい。あまり成果を挙げられていないのが苦し

いところみたいだけど。

「警察が主犯と睨んでいるのはこの男、金城潤矢。これまでも違法薬物所持や反社会的勢力との繋がりが疑われて警察の強制捜査の対象にもなったことがある男だよ」

明智君が指差した先には金城と思われる男の写真。ふくよかな身体を包むけばけばしい紫色のスーツに黒いシャツ。明るい茶髪に恐らく純金であろうネックレスや指輪などのアクセサリー。それらに装飾されたふてぶてしくカメラ越しにこちらを睨み付ける目。

なるほど、偏見かもしれないけれどいつそ清々しいほど裏側の人間だと思える風体だ。

「そこまで分かっているなら警察ももっと積極的に動けるんじゃないの？」

「それがそうもいかないんだよ」

僕の疑問に明智君は悩ましげに眉を寄せる。

「過去の強制捜査は警察としてもかなりの勝算があったにも拘わらず空振り。そして今回の件についても有力な容疑者ではあるものの捜査に踏み切れる証拠が揃っていないんだ」

明智君の説明になるほどと頷く。やはり相手はかなり狡猾な手合いらしい。とするとさつき語った不思議な点がより浮き彫りになる。警察の強制捜査、明智君も言ったように、警察も勝ち目がある、半ば勝ちを確信した状態で捜査に踏み切ったはずだ。なのにそれを掻い潜ったほどの用心深さと対応力がありながら、なぜ今になってここまですぐに事を進めようとしているのだろうか。

金城の動機は資金調達であるのは間違いない。学生をターゲットにしてしているのは社会的地位も低く、そして親という確実に搾り取れる対象を巻き込めるからであるからに違いない。加えて容疑者として挙げられていながら証拠を警察が掴めていないという。ここまで周到な手段を用いることが出来る人物が、どうして急速に被害者を増やすような真似をしたのだろうか。僕が金城の立場であれば、目を付けられないように各地でじつくりと事を進めると思うのだけだ。

「……金城は主犯格かもしれないけど、更に上に指示を出している者

「がいるよね、これは」

「やっぱり君もその結論に至ったね。僕の見込んだ通りだ」

僕の呟きに、明智君がニヤリと笑った。その顔は、普段の爽やかさが鳴りを潜め、どこか好戦的な色を窺わせるものだった。

「ドラマや映画だとこういう人の上に本物のヤクザがいて、そこに納める金を金城が稼いでいるっていう展開がよくあるよね」

「そう、君の言う通り僕もその線を疑っているんだ。そしてこのことが僕が捜査に苦戦している原因でもあるんだけどね」

金城だけでここまで警察の捜査を掻い潜れるのは不自然だと明智君は語る。警察の強制捜査も事前にその兆候をキャッチできていたのだとすればそれも頷ける。

「だけど厄介なのは金城のバックについている人間について調べを進めても手がかりすら掴めないことなんだ」

明智君はそう言うと言を落とす。これまで大人顔負けの推理力で警察にも頼りにされているだけあって、こうした調査がうまくいかないということは彼にとつても歯痒いものらしい。

彼は自身が捜査を進めてきた内容をかい摘まんで説明してくれる。それを聞きながら、僕は頭の中で言い様のない違和感が生まれるのを感じていた。

金城の狡猾な立ち回りとそれに反する性急な動き、その動機と恐らく更に上にいるであろう黒幕。これが単純に金城を中心としただけの規模の小さい事件で終わるものだろうか。まだ僕が、それどころか明智君ですら見抜けていない何かがあるのだと僕の脳内で何かが訴えていた。

「資金……」

「ん、なにか引つ掛かるものがあつた？」

考えを巡らせる内に口を衝いて出てしまっていたらしい僕の呟きに、明智君が耳聴く反応する。僕は彼への返答もおざなりに、再び机上に置かれた紙に視線を落とす。

反社会的勢力との繋がりの証拠は無い……、それが本当だとしたら。

違法薬物。金城の資金調達の方法は薬物売買かもしれないがそれによつて得られる資金は莫大なものはず……、今回彼が学生を相手に脅迫をしてまで資金を調達しようとしている動きは性急過ぎやしないだろうか。

違法薬物売買で得られる以上の資金が早急に必要になった。そのため金城は上にあたる人物から資金調達を命じられたのだとすれば、直近でそうした資金源が潰されるような大きなニュースはあっただろうか。

そこまで考えたところで、ふと視界の中に不思議そうな顔でこちらを見ている明智君が入る。その瞬間、僕は頭の中に引つ掛かっていたものに気付いた。これが僕の単純な思い過ぎしなのか、あるいは何かとんでもなく大きな事件の一端に手をかけようとしているのかは分からない。僕は心臓が痛いくらいに脈打つのを感ずる。

「……斑目」

「斑目？」

「彼は記者会見で言っていたよね、サユリの贋作を作つては売り捌いていたと。彼自身も相当溜め込んでいただろうけど、彼の資産がここに流れ込んでいたかを警察は調べた？」

「いや、まだそこまではしていませんと思うけど……」

「斑目が逮捕されてから入れ替わるかのように今回の事件が現れたんだ。どちらも共通するのは大きな金の流れが発生していること。そもそも盗まれたはずのサユリが表のルートで出回ることが無いと考えると、金城と斑目は資金の流れで繋がっていたと考えられない？」

「まさか……」

飛躍し過ぎた僕の妄想だと言われてしまえばそれまでだ。けれど、本当に裏で斑目と金城が直接的、間接的に繋がっていたとすれば、金城のバックにいる人物は単なる反社会的勢力に収まる人ではないかもしれない。

「明智くん、これが僕の考えすぎだと、飛躍した妄想だと思う？」

「……常識的に考えれば、その可能性は薄いと言わざるを得ないね。斑目と金城の件に繋がりはない。少なくとも僕はそう考えているよ」



「それは何故？」

「僕は怪盗団が金城の部下である可能性を考えているからさ」

「……怪盗団が？」

明智君の口から出たのは、僕にとっては一笑に付してしまうような内容。けれど、彼の表情は真面目そのものであり、ふざけて言っているわけではなさそうだ。

「僕は君と違って精神暴走事件と改心事件は繋がっていると考えている。どちらも怪盗団が実行犯だという僕の推理に基づいて金城と怪盗団の繋がりに関する僕の推理を話すね」

明智君曰く、金城が警察の強制捜査の情報を掴めたのは怪盗団の持つ人の心を操る何らかの術によるものだという。金城の所業に目を向けられそうになれば、それを逸らすように精神暴走事件、改心事件を引き起こしてきた。世間の目が怪盗団に向いている今ならば、多少は派手に動いたとしても問題ない、むしろ警察に睨まれても怪盗団の力を使えば逃れられると確信しての動きだと明智君は語った。

なるほど、彼の言うことにも一理ある。怪盗団が僕にとって本当に正体不明の集団であったならば、僕もその可能性を考えたくもしい。

「僕の中では斑目と金城はむしろ敵対していた、という線が濃厚だよ。薬物売買の資金源かロンダリングルートで二人が競合した可能性も考えられるからね」

「敵対していた……ねえ」

僕はそれについてはあまり得心がいかなかった。違法薬物の売買と贋作絵画は客層も流通ルートもそこまで被ることは無い、むしろ薬物売買で得た資金を贋作絵画を通してロンダリング出来ることを考えれば、二人は協力関係にあったと考えても良さそうだと思うってしまうのだ。けれどこれは僕が怪盗団と金城に繋がりはないと強く信じているが故の推理。言ってしまうえば現時点では明智君の推理と僕のそれに優劣は無いのだ。

「その顔はあまり納得していないって顔だね」

「ごめんね、明智くんの推理を否定したいわけじゃないんだ。でも

引っ掛かる点がどうしても飲み下せない」

「構わないよ。むしろそうやって僕と違う視点を持っていながら、それを僕に納得させるレベルで話してくれるから僕は君を信用してるんだしね」

「だけど、これ以上はあまりここで話すべきじゃないかもしれないと明智君は周囲に視線を巡らせる。その意図は僕にもすぐに伝わった。ここは渋谷駅前のカフェだ。金城の手の者がどこにいるか分かったものじゃない。見る限りはあからさまな風貌の人間はいないものの、狡猾な立ち回りの出来る金城の部下にはもちろんそれ以外の人間もいるだろう。ただでさえ明智君がいることで周囲の耳目を集めやすいのだから、彼の懸念は尤もだと思う。」

「それじゃあ今日はこのあたりにしておく?」

「いや、僕はもう少し話したい。この件については僕と君とで異なる視点から推理していかないと手がかりは掴めないと思うからね。ちよつと待ってて」

もう切り上げようかと提案すれば、明智君はそう言って席を出す。スマホを見ながらお手洗いに向かっていき、誰かと電話しているようだ。時おりこちらに視線を向けながら。

電話自体はすぐに終わったらしく、明智君は爽やかな笑みを浮かべながら席へと戻ってきた。

「良かった。今日は予定が空いていたみたいだ」

「誰との電話だったんだい?」

「僕が今協力を依頼されている人だよ。この件について警察とは別口で捜査を進めていてね、僕は警察とその人の両方と情報をやり取りしながら捜査しているんだ。君の推理は彼女にとっても参考になると思ったからね、今後も君が動きやすいように僕の助手として紹介しておこうと思つて」

「助手、というのはあんまり領きたくないけれど、気遣いには感謝するよ。それで、その人つて?」

「新島冴さん。今新進気鋭の敏腕女検事さんだよ」

## Eyesight of judgement

明智君に連れられてやってきたのは銀座の小料理屋だった。電話口で新島さんに指定されたお店らしい。大きな看板も無く、表通りからは一本入り込んだ路地にあるところから知る人ぞ知るお店といった場所だろうか。

入り口を開ければ純和風な落ち着いた佇まいにこうした所に縁遠い僕は内心たじろいでいたけれど、明智君は慣れた様子で女将さんに挨拶をしたかと思えば店の奥へと歩を進めていく。

「……フツツ」

「人が緊張してる様子を笑うのはあまり良い趣味とは言えないと思うけど？」

僕が固くなっているのを横目に見た明智君がクスリと笑った。自分でも情けない限りだけどこんな見るからに高級でございというお店なんて僕の記憶にはそう無いものだから仕方ないだろう。というか同じ高校生なのに慣れた様子の明智君がおかしいのだ。やはり芸能人は違うということなのだろうか。

「ごめんごめん。君がそんな風に固くなっているのは珍しくてね。なんだかずっと君にはどこか遅れているような気がしてたから、こうやって人並みに緊張することもあるなんて親近感を覚えただけさ」

「僕は芸能人の君とは違ってどこまでも一般人でしかないはずなんだけどね……」

妙に僕を持ち上げてくる明智君についていくこと少し、通されたのは奥まったところの個室だった。既に相手は到着しているらしく、明智君は気負った様子も無く引戸を開いた。

「やつと来たわね」

「お疲れさまです。冴さん」

腕を組み、少しピリピリとした様子で僕らを迎えたのは黒いスーツに身を包んだ伶俐な印象の女性。色素の薄い髪は一見して儂い印象を与えそうだが、青紫色に濃く引かれたアイシャドウと吊り目気味の鋭い眼差し、何より身に纏う雰囲気彼女という人間のあり方を率直

に表していた。

「それで、そつちが電話で話していた彼ね」

「ええ、そうです。それより、僕らも座って何か注文しても？　もう良い時間だしお腹ペコペコで」

新島さんの姉らしく、凄く美人なんだけど初対面だとかかなり気後れしてしまう雰囲気の女性だな。僕を値踏みするように観察する新島冴さんに頭を下げながら明智君の隣、新島冴さんの正面に腰を下ろす。

「えつと、はじめまして。海藤徹です。秀尽学園の3年生で、なんでか知らないけど明智くんの助手、みたいなことになってます」

「……新島冴よ」

よろしく、と言って差し出された右手を僕もおおずおわずと握る。なんだろう、敵対的とも違うけれど、何故か警戒されているような気がする。

「真からたまに話は聞いているわ。同級生に凄く優秀な男子がいるって。名前も合ってるし、探偵の助手をしているってことを踏まえても海藤君がそうなのよね？」

「あー、はい。そうですね。新島さん、いやどっちも新島さんだからややこしいな。真、さんとは生徒会でも一緒に活動してまして」

「最近避けられてるから寂しいんだよね」

「余計なことを言うのは止めてくれないかな、明智くん……」

横から茶々を入れてくる明智君にため息を一つ。そのタイミングで女将さんが注文を取りに来てくれた。こういった店が初めてだし自分の手持ちも心許ないと考えているとこの場の会計は新島さんが持つてくれるとのことだ。そこまで生活が苦しいということは無いだろうけどこんな高級そうな店でそこまで甘えるのもいかなものかと葛藤していると明智君が僕の分まで無遠慮に注文を済ませてしまった。

「君は少し年長者への敬いというか遠慮というものがあつた方が良いと思うけど」

「冴さんが奢ってくれるっていうんだからそれに存分に甘えるのはあ

る意味敬っていることになるさ。ですよね、冴さん？」

「……それで頷かなかつたら私が狭量扱いされるだけじゃない。別に気にしないで良いわよ、海藤くんも。それと呼びにくいだろうし、明智くんと同じように下の名前で呼んでくれて構わないわ」

「そういうことでしたら、お言葉に甘えて。ごちそうになります、冴さん」

新島さん、もとい冴さんは先ほどの僕と同じように小さくため息を吐くと気を取り直したように足を組み直して僕らを見据える。

「さて、それじゃあ話を聞かせてもらおうかしら。明智くんも認めている推理を。高校生だからって子供扱いしないわ、ここのお代を出す甲斐があると期待しているわ」

「それに見合うだけのものは僕には分からないですけど……」

過分な期待をされていることに喜び以上のプレッシャーを感じながら僕は口を開く。話すのは先ほどまでカフェで明智君とも話していた内容だ。再度口にすることで自分の中でもう一度整理するという考えもあった。

僕の考えの前提となっている条件は三つだ。

一つ目、数年前から世間を騒がせている精神暴走事件と今年に入ってから始まった改心事件に繋がりはない。

二つ目、斑目による贋作絵画の流通と金城の生業は本人達が直接知らぬところで繋がっていた可能性がある。

三つ目、斑目と金城のバック、上に立つ人物は恐らく単なる反社会的勢力に収まらない人物である。

改めて並べてみると、我ながら一つ目の条件以外はドラマや映画の見すぎだと言われても仕方ないくらいに荒唐無稽だ。ただの一般人が少ない情報を無理矢理繋げただけの推理とも呼べない妄想なのだからそうなるのも致し方ない。

「……明智くん、あなたは海藤くんの言っていることがどこまで合っていると考えているの？」

話を聞き終えた冴さんは明智君に水を向ける。

「僕はそもそも彼の話す推理の前提条件である精神暴走事件と改心事

件の繋がりを否定してますから、そういった意味では合っているとは言いがたいですね。でも、金城の後ろにいる人物がただ者ではない、それは僕だけじゃなく冴さんも分かっていますよね。あれだけ僕らが調査しても手がかり一つ掴めなかったんだから。事件の時系列からそのことだけでなく金城と斑目の繋がりにまで洞察が及ぶ、それも僕や冴さんみたいな情報網が無い人間がですよ」

僕の助手として紹介するのに不足は全く無いですよね？　と言って明智君はニコリと笑った。

「……斑目の取り調べはあまり進んでいないわ」

少し考え込むような沈黙の後、冴さんは彼女が所属している地検特捜部の調査状況について話し始める。いや、僕が聞いちやダメなことだらけじゃないかと慌てて止めたが、明智君の助手なら問題ないと言いつて切られてしまい閉口する。ここで僕が明智君の助手でもなんでもないと言ってしまうえば僕だけじゃなく冴さんまで守秘義務違反だなんだで問題になってしまう。こうやって僕が逃げられなくするため、に散々と助手だなんだと吹聴していたのか、と僕はジロリと明智君を睨み付けてみれば、彼は何も悪びれた様子無くいつもの爽やかな笑みを返してきた。巻き込まれることは分かっていたけど、ここまで渦中に入り込むだなんて思ってもみなかった。

「秀生なら鴨志田の件も知ってるわよね？」

「ええ、まあ」

「鴨志田と斑目はどちらも心の怪盗団のターゲットになった。精神暴走事件との繋がりはともかくその二件には確実な繋がりがあつたのよ。けれど二人とも何かをされた記憶は無いと言っている。ある日突然、自分が今までしてきたことがとても罪深いものだと思つて自責の念に耐えかねたと」

脅迫や薬物の痕跡も無い、ただ人が変わったかのように殊勝な人間になり、自分の悪行を明かす。だからこそ警察も検察も取り調べしようとして自首、自白以外の調書の書きようが無いのだという。

「人なんてそう簡単には変わらないわ。ということは何かの外的要因であそこまで変わったはず。だというのにそこだけがブラックボツ

クスになっている。そういった意味では精神暴走事件も同じなのよ。ただ結果の方向性が犯罪を自白するか、犯罪をさせるかの違いがあるだけ」

だからこそ私も明智君の言う通り精神暴走事件と改心事件には繋がりがあると考えているわ。

冴さんはそう締め括った。つまりは僕の考えは可能性としては薄いものだと、彼女も考えているということだろう。もちろん、僕自身もこの推理が容易く信じてもらえるわけが無いことを分かっている。客観的に事実を並べてみれば精神暴走事件と改心事件には類似点が多い。そうなれば繋がりを疑わない方が不自然だ。僕は単純に、怪盗団が精神暴走事件に拘わっていないことを知っているだけなのだから。

とはいえ、それを明かしたところで事態はより悪化するだけなのでどうにか二つの事件が繋がっていない理屈をこじつけなくてはいけない。

「これは明智くんも前に話したんですが、精神暴走事件は今も起こっている。二つの事件が同一犯によるものなら改心事件にしないのは何故でしょう」

「精神暴走事件は一般人がある日突然犯罪や事故を起こすわ。改心事件とはターゲットの選定基準が違う」

「正義の怪盗団と精神暴走事件の黒幕の二つの仮面があれば動きやすくなる。金城はそれを利用してると僕も考えているよ」

冴さんの言葉に明智君も続く。仮にも助手と言っておきながらどうしてそちら側に味方するんだ。せめて君は僕の味方になっていてほしいんだけど。

「そうであれば精神暴走事件も改心事件もその発生によって金城に利する必要がある。冴さん、数年前からの精神暴走事件の発生前後で誰が得をしたのか、あるいは損をしたのかは分かりますか？」

「それは……でもそんなもの調べようが無いわ。明智くんに頼んでも明確な繋がりは見えてこなかった」

「今の日本経済はあらゆる業界、人間が絡み合っているからね、どこか

が崩れたことによる影響は崩した本人にも計り知れないと思うよ」

チリ、と何かが引つ掛かった感覚が僕の中に生じた。けれど僕がその輪郭を把握する前にその感覚は消えてしまう。僕は目を閉じて熱くなりかけた頭を冷ます。落ち着け、変なことを口走ってはいけない。

「本当にそうですかね。それなら改心事件は金城に利する結果になったと言えますか？」

「僕が推理している斑目と金城の対立関係があつた場合は、少なくとも斑目事件は金城の利益になつているんじゃないかな」

それはカフェでも話した明智君の推理。けれど僕がどうしても飲み込めない点だ。斑目と金城の繋がり、どうしてここまで違和感があるのか。冷静に考えれば、明智君の言っていることも尤もな内容のはずなのに。

「……これ以上話しても恐らく平行線になるだろうね。それじゃあ少し論点を変えよう。もし怪盗団が金城の部下じゃなかったとしたら、彼らは金城をターゲットにするかな？」

「多分だけどするだろうね。今までの怪盗団の行動、といっても二件だけだけど。それを考えれば怪盗団は案外単純な行動原理で動いていると思うから」

「単純な行動原理？」

「そうです。怪盗団はどちらの事件でも明確に被害者を救うことを命題としています。鴨志田事件のときは彼に虐げられたバレー部員を、斑目事件のときは才能を盗まれた弟子達を。しかもその被害者は誰もが社会的には地位が低い学生や一般人、表立って動けなかつた弱者でした。だとすれば今回のように学生がメインで狙われている事件に彼らが動かないという可能性は低いでしょう」

「弱者のための改心事件。怪盗団のプロファイルとしては理にかなっているね」

疑問を呈する冴さんに僕は僕なりの考えを伝える。このプロフィールについては明智君も同意するようで、僕の隣でうんうんと頷いていた。ただ、冴さんはどこか気に入らないようで、ただでさえ鋭い目



を更に細めて僕を睨み付ける。

「怪盗団は正義だとしても言うつもり？」

「いいえ？　僕は善悪を論じるつもりはありませんから」

「え……？」

僕の返答が意外だったのか、先ほどまで鋭く細められていた冴さんの目が驚きに丸くなる。その反応が面白かったのか、明智君は横で声を殺して笑っていた。どうやらこの問答をさせることも明智君の狙いの一つだったらしい。

「怪盗団の善悪の定義は無意味だと思いますよ。だって被害者を取り調べても不法行為は無かったのでしょうか？　だとすると現行法では罪に問えない手段を用いている可能性が高い」

「つ……！　それでも、彼らのやっていることを野放しには出来ないわ！」

「ええ、野放しに出来ないから今こうして動いているし、それが検察である冴さんの信念なんでしょう」

「信念……？」

「違いましたか？　冴さんは男社会の検察庁にしながら圧倒的な実力で評価されている方だと、真さんから聞いていますよ。自分にとっての憧れで、尊敬する姉だと」

夜討ち朝駆けが常態化していると言って良いのが検察庁を始めとする司法の世界だ。日本では起訴された刑事事件の有罪率は99.9%と言われており、これは世界では類を見ない数字になっている。確実に勝てる戦いしかしないだとか、強引な手法による捜査が含まれているだとか言われてしまう面もあれど、そう揶揄されても検察の執念深さと圧倒的な捜査力は称賛されるべきだろう。そしてそれを支えているのが検察の血の滲むような努力なのだとすれば、そこで頭角を現している冴さんがどこまでずば抜けた力の持ち主であるかは良く分かる。女性だからと色眼鏡で見られてもおかしくない中で、それも両親もいない環境で妹を少なくとも経済的には不自由させること無く高校まで通わせているのは尊敬に値する。

そんな冴さんを支えているのは検察としての法の番人としてのプ

ライドなのだろう。だから法に頼らず、法の目を盗むような輩が許せない。

「その姿勢は認められるべきものですし、僕は尊敬します。真さんから聞くだけで凄いなと思いましたから」

とはいえ最近は避けられていてそういう話も出来てませんけどね、と自分で言っていてまた少し凹む。やめてくれ、慰めるように肩を叩かないでくれ明智君。そんなことをしてるくせにその分だけ自分に構ってくれる時間が増えたと嬉しそうな顔してるのは分かってるんだぞ。

「そう……、真が」

冴さんは意外そうな、けれどもどこか嬉しそうな面持ちでそう呟く。新島さんも冴さんも二人して素直に自分の内心を相手に伝えたりはしないだろうから、こういったことを聞く機会があまり無かったのかもしれない。家に帰って新島さんがこのことで冴さんにかかわれたら少し申し訳ない気持ち湧いてきたかもしれない。冴さんが表情を緩めたのもほんの僅か、彼女はすぐに表情を引き締める。「と、そんなことはどうでも良いわ。じゃああなたは怪盗団を追う私に協力してくれる、ということが良いのよね？」

「僕が出来る協力なんて大したものじゃないと思いますけどね」

「海藤くんに連絡を取るなら僕にも一言くださいね？ 一応僕の助手なんですから。僕だけハブにするとか泣いちゃいますよ？」

明智君の言葉で先ほどまでの緊張感は霧散する。そしてそのタイミングを見計らっていたかのように女将さんが料理を運んでくる。話している間は聞いちゃマズイことを聞いてしまわないように部屋に近づかないようにしてくれていたのだろうか。

「さて、それじゃあ後は食べながら話そうか」

「どうかどれだけ頼んだのよ、明智くん」

「少しは遠慮する気持ちとか無いの？」

「あれ？ いつの間にか二対一になってない？」

テーブルにずらりと並べられた料理を前に、僕と冴さんは冷たい目を明智くんに向ける。親しき仲にも礼儀ありという言葉をもう一度

辞書で引くべきじゃないかな、この男は。

## Wildcard of judgement

「それで、今は怪盗団のことよりも金城の件だったわね」

僕ら三人で運ばれてきた食事を口に運びながら、話は本題へと戻る。

「正直に言うときつきまで言っていたことが全てよ。金城の動きは警察も検察もマークはしているけど決定的な証拠に欠けている」

冴さんは悔しそうに歯噛みしながらもけれど、と言葉を続けた。

「金城の資金の流れだけじゃ辿り着けなかったところに辿り着く可能性をあなたは示してくれたわ」

「斑目との繋がりですか？　けどそれは確実にあると決まったわけじゃないですよ」

「ええ、分かっているわ。でも私と明智くんだけじゃどうにも手詰まりだったのは事実。そこに新しい切り口を与えてくれたのだから、有効活用させてもらおうわ」

「これは海藤くんを連れてきた僕のお手柄と言っても良いんじゃないですか？」

冴さんの言葉にここぞとばかりに胸を張る明智君だが、君がさつきまで冴さんと一緒になって僕の推理を否定してたのは忘れないからな。いや、彼の考えに納得できないまま真つ向から対立することを言っている僕も悪いんだけど。だけど明智君も恐らくそうした役割を僕に求めているのだろうし。

「探偵王子の再来と言っていた割には助手の方が頼りになるんじゃないかしら」

「おっと、これは困ったな。さつきと僕も個人事業主から法人化して海藤くんを正式に僕の部下にしておかないと」

「二人してただの一般高校生を一体何に巻き込もうとしているんですか」

美味しいものを食べればそれだけで気分は上向く。冴さんも明智君も先ほどまでの鋭い表情は鳴りを潜め、緩い雰囲気の中で食事は進む。

「斑目の資金ルートは特捜部で洗うとして、海藤くん、あなたには過去の精神暴走事件についても一度調べてもらえないかしら？」

「過去の精神暴走事件についてですか？」

「ええ、そうよ。私と明智くんじゃ大したもののは掴めなかった。けれどあなたなら私達とは別の視点で何かを見つけてられるかもしれない」

それにこれは金城についてあなたに情報を流すことの対価よ、と冴さんは続ける。けれどその裏には、ただの一般人でしかない僕が今後明智君だけじゃなく冴さんとも繋がりを持つためにあえて彼女が用意してくれた仕事だということとは分かる。僕がすることと言えば過去の精神暴走事件に纏わるニュースを調べ、そこから思いついたことを話すだけで良いからだ。斑目の聴取、資金の流れを調べなくてはいけない冴さんとは負担が大きく異なる。

「……良いんですか？ 僕みたいな一般人を」

「あなたは明智くんの助手なんでしょう？ 問題ないわ」

「僕を放っておいて話進めないで欲しいなあ。ここに僕を連れてきたのは僕だけど、あんまり深入りさせるのもどうかと思いますよ」

僕と冴さんの間にそう言って明智君が割り込む。明智君としては助手と言って引き込んだとは言え、あまり深くまで関わらせるのは忍びないと思うところがあるのかもしれない。だからこそ冴さんと僕のやり取りの間にクッションとして自身を挟もうとしているのだろう。

「確かに助手と言いましたけど、僕みたいに警察と強い協力関係を築いているわけでもないんだ。彼が万が一金城に目をつけられてしまったら僕や冴さんだけじゃ守り切れない。その辺りも考えて僕もきちんと噛ませてくださいね」

僕の考えを裏付けるように明智君は言葉を続けた。やはり彼なりに僕を案じてくれてはいるらしい。彼は電話やカフェで捜査の状況について僕と話をすることこそあったものの、現場や警察と関わるころへは僕を連れていくことは無かった。それは彼なりに僕を関わらせるラインをきちんと引いていたということなのだろう。だからといって捜査情報を一般人の僕に聞かせるのはどうかと思うけど。

「はいはい、分かっているわ。でも私はこんなところで足を止めていけないの。利用できるものは何でも利用して登り詰めなきやいけないのよ」

冴さんは仕方ないとばかりにそう言うどグイッとグラスを飲み干す。未成年の僕らに氣遣ってか、グラスの中身はただのウーロン茶だけれどその飲みっぷりは中々様になっていた。

「登り詰める……、検事としてもつと上を目指してらっしやるんですね」

「検察庁に入っただけがゴールじゃないわ。もつと上を目指さない」と

「ストイックなんだよ、冴さんは」

当然とばかりに言い切る冴さんに明智君は苦笑する。ストイック、確かにそうなのかもしれないけれど、グラスの向こうに見える彼女の眼には、それだけじゃない感情が見えた気がした。

「検察のお仕事や内情どころか、社会経験すらまともに無い高校生ですけど、冴さんくらいの年齢で今の地位にいただけでも凄いんじゃないんですか？」

「それは勿論そうさ。東京地検特捜部で史上類を見ない最速昇進候補女性だしね」

「それは結局女性という下駄ありきの話よ。これより上を目指すならこんなものじゃ足りないわ」

認めさせてやらないといけないのよ。

そう小さく呟いた彼女の様子は、どこことなく新島さんに怒られたあの日、最後に彼女が呟いていた姿と重なって見えた。姉妹二人とも、僕なんかには想像もつかない事情、内心を抱えているんだろう。

「金城の事件も精神暴走事件も、今は特捜部では私が陣頭指揮を執っているの。この件を解決出来れば次の昇進リストには私の名が載るわ。このチャンスは絶対に逃がせない」

「冴さんって見た目によらず熱くなりやすい質だよな。まあそれだけ野心があるから僕にも声を掛けてきたんだろうけど」

空になったグラスをギョツと握りしめる冴さんとは対照的に、明智

君は飄々とした様子で料理に手を伸ばす。二人の様子を見るに冴さんがこんな感じになるのはそう珍しい光景じゃないのかもしれない。明智君も手慣れた感じで流しているし。とはいえ僕は初対面なのでそこまでふてぶてしくはなれない。

「冴さん、僕が言うのも何様だつて話なんですけど、そこまで思い詰めなくとも……」

「甘いよ、それじゃー!」

宥めようとしたのだが、かえって火に油を注ぐ結果になったようだ。グラスを強く机に叩きつけて冴さんは僕を睨みつける。おかしいな、冴さんが飲んでるの本当にウーロン茶だよな。もしかしてお酒入ってたりしないか?

明智君の方をチラリと見てみれば、彼は我関せずとばかりに食事を楽しんでいた。どうやら助け舟を出してくれるつもりは無いらしい、薄情者め。

「私はどこに行っても舐められてるのよ。何が史上最年少の女検察官よ。結局は女だからつて下駄を履かせてやったからと周囲は私を見るわ。私が私自身の能力でやり遂げたことも、私よりも無能な男のくだらない酒の肴にしかならないのよ!」

自分で話しているうちにボルテージが上がっていつてしまっているのか、彼女の口調も熱を帯び始める。

「どいつもこいつも、怪盗団が正義だの悪だの勝手なことばかり言つて! 怪盗団は法で裁けない悪を裁く? 警察や検察が無能とでも言うつもり?」

「いつの世も当事者以外が好き勝手に風説を流布して当の本人が苦勞するというのは変わらない図式ですね」

「まったくよ! うちの内部にも怪盗団の支持者が現れる始末よ。自分達の仕事を何だと思ってるのかしら。拳句の果てには真まで怪盗団が正義だなんだと……」

冴さんの言葉に、僕は新島さんがあの日どうしてあそこまで思い詰めていたのか、その原因の一端を掴んだ気がした。恐らく校長に急かされたことに加え、冴さんとも口論になったんじゃないだろうか。怪

盗団の正義について。彼女も校長に言われて独自に怪盗団を探っている。そんな中、周囲では怪盗団は正義だと言う人が増えていく。彼女にとって自分がやっていることの正しさが分からなくなってきたのだとすれば。そしてそのことをふと冴さんに漏らしてしまい、同じくピリピリしていた冴さんがこんな調子で言い募ったのだとすれば。

そこまで考えて、今更ながらにもう少し彼女を気遣ってあげるべきだったと後悔する。冴さんと二人暮らしをしているのだから、冴さんがこんな調子では家でも心休まることは無かっただろう。彼女は僕にかけられた疑いを晴らそうとしてそこまで心労を抱えていたのだ。そんな彼女を前に当の本人である僕が暢気な顔をしていたのだから、よく僕はあの時殴られなかったものだと思う。

「……さつきも僕が言った通り、怪盗団の善悪を問うことは無意味だと思いますよ」

「なに、私にお説教でもするつもり？」

「いえ、そんなつもりは無いですよ。ただ、冴さんは優秀なのは間違いないんですから、周囲の雑音に耳を貸して冷静な判断力を無くすのは勿体ないと思います。冴さんにとっては聞くに堪えない言葉であっても、そこから何かのヒントを得られるかもしれないです」

なるべく落ち着いた口調を心がけて話すも、冴さんは僕を見てハツと鼻で笑う。

「何も知らない部外者はそうやって簡単に言えるわよ」

「そうですね、僕は確かに部外者で冴さんの悩みなんて一割も理解できてません。出過ぎたことを言っちゃいましたね、すみませんでした」

「……私こそ大人げないところを見せたわね」

僕が頭を下げたところを見てヒートアップしていた頭が冷えたのか、冴さんはそう言ってグラスの中の氷を口に含んだ。

「いえ、ただの学生が知ったような口で話すなんて癪に障って当然です。怒鳴られてないだけマシですよ」

「ここまで物分かりが良い人をただの学生呼ばわりは無理があるわね……」



そう言つて冴さんは苦笑すると、女将さんを呼んで追加の飲み物を注文する。

「何をしてでも上を目指したいのは偽りない私の本音。でも、だからといってみっともない姿をあなたや明智くんみたいなお子どもに見せるのは違うわね。今思えば真にもキツく当たっちゃったし……」

「上を目指すことつて悪いことでは全くないんですから、それは否定されなさいよ。真さんにはフォローしてあげて欲しいですけど、僕や明智くんはサンドバックと思つて色々ぶつちやけてしまつても良いんでは？」

「あれ、これつて僕も巻き込まれるの？」

「今までよくも知らん顔してむしむしと料理を食つていたな。絶対に逃がさんからな」

串焼きに手を伸ばしていた明智君がげえつ、と言いたげに僕と冴さん両方に視線を行き来させるが、この場にいる以上逃すわけがない。というか僕と冴さんの間に本来はクッションとして君が挟まるようになっていただろうに。何故面倒な空気になつたら存在を消して逃げようとしてるんだ。

「……フフツ、それじゃあこれからもストレスが溜まつたらこうして愚痴に付き合つてもらおうかしら」

「ええ……、冴さんの愚痴は長いんだけどなあ。どう責任を取つてくれるんだい、ワトソン君？」

「そう言いながら笑つてるあたり満更でも無いんじゃないのかな、ホームズ君。というか僕は元軍医じゃないぞ」

食事の席故のアイスブレイクが功を奏したのか、冴さんも初めて顔を合わせたときよりは表情も柔らかくなつた。明智君にとつては予想外のこともあつたかもしれないけど、今日この場に来て一番胃を痛めたのは間違いなく僕だと言つてよいと思うから僕は謝るつもりは無い。

それからは残つた食事を平らげる、といつても大半は明智君が食べてしまつており、僕と冴さんで残つたのを分けて腹に収めて終わりだった。無遠慮に注文しておいて更に遠慮無く食べ進めてるあたり、

爽やかな探偵王子の顔は外行きの顔で、本来は結構なやんちゃ坊主な性格なのかもしれないな、彼は。

「ふう、食べた食べた。こういうお高いところはお金を出してくれる人と来るに限るね」

「こういうことしていると友達無くすよ、君」

「良いんだよ、助手がいるんだから」

「僕は逃がさないつもりか、君は」

店を出てぐつと伸びをした明智君と並ぶ。その後ろからお会計を終えた冴さんが店を出てくる。

日はすっかり沈んでしまっていて、そういえば帰るのが遅くなる連絡を家に入れたつけかどふと頭を過る。

「今日はありがとう、二人とも。これから情報共有を期待しているわ」

特に君にはね。

と言って冴さんは改めて僕に右手を差し出してくる。最初の頃よりも表情が柔らかくなつたそれは、今度は手に取るのにあまり緊張しないで済んだ。

「どこまでお力になれるかは分かりませんがね」

そう言って差し出した右手に、人の皮膚とは違う感触が伝わる。ザラリとしたそれは、恐らくは紙。柔らかな笑顔のまま、冴さんは握つた右手の中指だけに力を入れて何度か僕の右手に合図を送ってくる。この人、どこまでも抜け目無いな。やっぱり新島さんのお姉さんだ。

「それでも、よ。何かあればまた明智くんを通して連絡するわ」

「あまりお呼びが掛からないことを祈ってます」

表面上は何でもない様子を装いながら、僕は右手の中に隠した紙をそのままポケットへと持っていく。

「その祈りが届くと良いわね、バーノン君？」

「バーノン？ 誰ですか？」

「あら、ワトソン君だったかしら」

冴さんの言葉が引つ掛かった明智君が聞き返すが、冴さんは言い間違えたと白々しく誤魔化し、タクシーで帰るからと駅前では明智君と僕

とは別れた。

僕と明智君も帰る方向が違っていたので駅で別れることになる。見慣れた最寄り駅にまで帰ってきてから、僕はポケットに入れていた紙を取り出す。それは一見すると何の変哲もない冴さんの名刺だ。けれど裏返してみればどうして明智君にも秘密で渡してきたのか、その理由がそこに書かれていた。僕をとことん利用するつもりなのは確からしい。そこにあったのはメッセージアプリのID。恐らくは冴さんの連絡先だろう。そしてその傍に添えられたひとこと。

Dear My Wildcard

案外、冴さんってカジノとか好きなのかもしれない。

「だけどダイ・バーノンとか普通の高校生だと知ってる人の方が少ないと思うよ……」

僕の稚拙なトリックを見ての命名だとしたらあまりに名前負けしていると言わざるを得ない。得難い人脈を得られたんだからあまり文句は言えないけれど。

# The Hanged Man and The Devil

凶らずも冴さんと連絡先を交換した翌日、僕は今日も懲りずに渋谷のセントラル街へと繰り出していった。

相変わらず今日も新島さんとは顔を合わせられていない。遠目にはチラリと顔を見ることは出来ただけで、表情は深刻さを増しているように見えた。心配して声を掛けようとしても僕の顔を見るとバツの悪そうな顔をして逃げていくのでどうにも追いかけて感じると感じるとのまま、放課後になってしまったわけだ。

大半の人が待ちに待ったであろう週末の土曜日だけど、あいにくと今日は雨模様であり、セントラル街もいつもの賑わいを見せていなかった。こういう日は恐らく金城グループも動いたりはいらないだろうが、逆にこういう時にこそ聞き込みをして情報を集めていきたい。

そう思った僕が訪れたのはセントラル街の裏路地に位置するモデルガンショップ。店の位置も日陰な上、店主が不愛想な男一人ということもあって中々足を踏み入れ難い雰囲気漂っている店だ。けれどミリタリーマニアからすればそこで販売しているカスタムモデルのモデルガンは非常に精巧であり、マニアからすれば堪らないものだという。それが目的ではないにせよ、どうせなら目に見てみたいと思う。

「……いらっしやい」

ガラス戸を押し開けた僕を出迎えたのは、小さすぎて聞き逃してしまいそうなほどの声。目を向けてみれば部屋の中だというのがイヤーマフを着けた男。彼が恐らく店主なのだろうが、帽子のつばから覗く目はこちらをギロリと睨みつけているようにも感じた。僕は小さく会釈すると店内を物色する、ように見せながら店内から裏通りに目を光らせる。

今日のような雨の日には表通りは雨音と人通りで話をするには騒

がしい環境だ。そうなれば、人気の少ないところに自然と足は向く。後ろ暗いことをするつもりがある人間ならなおさら。

この場所の情報くれたのは明智君だった。彼なりに犯人グループの出没地点の候補なんかはリストアップしているらしく、相手に顔を見られないようにすることを条件に張り込みに適したこの店を教えてもらったのだ。

「……」

先ほどからカウンターの向こう側から刺すような視線を感じる。恐らくは僕が客ではないことを察したのだろう。とはいえ、何か事情があると察して追い出さないでいてくれるあたり見た目にそぐわず優しい人なのかもしれない。そうして店に並んでいるモデルガンの出来や、値段に驚きながら見張ることしばらく、傘を差した三人組が路地に入ってくるのが見えた。そのうち一人は秀尽学園とは別の学校の制服に身を包んだ男子学生だ。メガネを掛けた彼は人目を気にしているのか、あるいは残りの二人に怯えているのかは判断出来ないが、しきりに周囲に視線を巡らせている。一方でその男子生徒と共に歩く二人は金髪、茶髪といった明るい色の髪を肩まで伸ばした男性であり、両側から男子生徒と肩を組んで路地裏へと誘っていた。

「あそこまであからさまにやると逆に不審に思われないものなのかな……?」

ここ最近はこの辺りを重点的に警察もパトロールしていると明智君は言っていたけれど、この雨で人々が差している傘が目くらましになっってしまったのだろうか。

僕は手に取っていた雑誌を棚に戻すと、店を出ようと歩を進める。「何するつもりか知らんが止めとけ」

けれど僕の足はカウンターからの声で止められた。声の主に目をやれば、キャスケットの奥から鋭い目が店外で繰り広げられている光景を睨みつけていた。

「あそこで絡まれてるのはお前の友達か？」

「……いえ、そういう訳じゃ無いです」

「だったら厄介事に首を突っ込むのは止めとけ。ガキが一人突っ込む

だところで、カモが増えるだけだ」

店主の言葉に僕は何も言い返せずに視線を泳がせる。確かに僕があそこに行ったところで確実にあの男子生徒を助けられるとは限らない。それどころか、あの二人組の機嫌を損ねて僕の見えないところでより酷い目に遭わされる可能性もある。

「だけど放っておくわけにも……」

「そういうのはサツの仕事だ。ガキのやることじゃない」

その言葉はごく尤も。鴨志田先生の一件でもそうだけど、自分の力量を弁えずに突っ走ってしまうのは僕の悪癖だ。

「あいつら、この前もここで別の学生を脅してた」

「ここでどうして通報してくれないのか、と言うことは簡単だけど僕はぐつと言葉を喉の奥に押し込めた。厄介事に巻き込まれたくないのは誰だって同じだ。それにこの店主にとって今絡まれている学生は赤の他人だ。自分が半グレやその上の人間に睨まれる可能性を考えれば見て見ぬふりをするのも無理はない。

「……なんだ、てつきりどうして警察に言わないのか、なんて言われると思っただが」

「見ず知らずの人を助けるのは美德ですけどね。ああいう手合いに絡まれるリスクを考えれば易々とは出来ないでしょう。特にこうして店を構えられている方にとつては」

「ガキのくせによく分かってんじゃねえか」

僕の言葉に店主は小さく笑った。そうして僕と店主が話している間に男子学生と二人組は姿を消していた。

「それで、なんでお前はあんな危なそうなことに首突っ込もうとしてやがる?」

そう問われ、僕はこうして動いているわけをかいつまんで話す。もちろん明智君や冴さんとの繋がりは伏せているが。店主も先ほどの一幕を見て見ぬふりをしたことにどこか思うところがあるのか、自分が今まで目撃した現場について僕に聞かせてくれた。

聞けば、彼の店の付近はやはり普段から人通りが少ないこともあってこうした場面を目にすることが何度かあったらしい。多くは学生

が二人組の男に恐らく金が入っているであろう封筒を手渡している場面。店内が薄暗いことから店主が現場を目撃していたことはあまりばれていないのかもしれない。

「俺から話せるのはそれくらいだな。この情報が役に立つかどうかは分からんが」

「いえ、助かりました」

「ふん、その制服を着た奴には借りがあるからな」

僕がお礼を言うと店主はキャスケットのつばを押さえてぶっきらぼうに返す。見た目は厳つい人だけれど、悪い人では無いんだと思う。少なくとも子供に対しては。

「それじゃあその子にも感謝しておかないといけませんね。また何かあったらご相談させていただくかもしれませんが、僕は海藤と言います。お名前をお伺いしても？」

「……岩井だ。あんまりこういうところに来るもんじゃねえだろ。お前みたいに真面目そうな奴は特にな」

お互いの名前を交換し、僕は店を後にした。空模様はまだ暗いものの先ほどまで降っていた雨は今は止んでいた。

時計を確認すればもうすぐバイトの時間だ。今日の聞き込みはこの辺りにしておくしかないか。

「お疲れさまでしたー」

相も変わらずバックヤードでデスクワークに忙殺されている店長に一声かけてファミレスを後にする。

辺りはすっかり日も沈んで暗くなっており、もうそろそろすれば学生が補導される時間になるだろう。帰る前に本屋にでも寄って行くかなどと考えていると、ポケットの中のスマホが震えたのに気付いた。取り出してみれば、見慣れた人物からの着信だった。

「こんばんは。電話をしてくるなんて珍しいね、雨宮さん」

「遅い時間にごめん。今から少し時間ある？」

電話越しに聞こえた声はいつも通りの落ち着いた様子だったけど、どこか申し訳なさを感じさせるものだった。

彼女の用件はと言えば、今から新宿に来てくれないかとのこと。会わせたい人物がいるからと。時間も時間なのであまり遅くまでは無理だということは伝えたが、それでも食い下がるので場所を聞いて向かうことにする。

「……本当にこの場所で合ってるのかな」

雨宮さんに指定された場所は新宿の雑居ビルに入っているバー。店名は「にゅうカマー」。店の佇まいから見ると、どういう店なのかは大体予想出来るけど、それだけに入るのに躊躇してしまう。

「ええい、このままここに突っ立ってても仕方ないか」

だけどもあんまりぐずぐずして雨宮さんを待たせるわけにもいかない。僕は意を決して店の入り口をくぐった。

「いらっしやい……ってボウヤ、あんたいくつよ？」

店に入っただけで位置しているカウンターの奥からそう声がかかる。声がかからなくとも僕の視線はそちらに釘付けにされたことだろう。紫色に染められた髪、対照的に暗い色合いの着物。褐色の肌に濃い化粧のコントラストが凄まじい。

「ララちゃんその子私のお客さ〜ん！」

面食らって黙っていた僕だったけど、店の奥から響く女性の声に意識がそちらに向く。店の奥の方にあるテーブル席には、サングラスを頭に付けたジーンズ姿の女性と雨宮さんが隣あって座っていた。女性の方は薄暗い店内なので見辛いが、顔が赤くなっているように見えるし、手に持ったジョッキからお酒が入っているのは間違いないさそうさ。隣に座る雨宮さんは、こっちを見ながら申し訳なさそうな顔をしていた。

「アンタねえ、学生を二人もこんな時間にウチに呼ぶんじゃないよ」

「ごめんごめん。あ、この子にも何か出してやってよ」

手招きされるままにテーブル席に向かえば、女性は自身の隣をパンパンと手で叩く。隣に座れということだと解釈して腰を下ろせば、逃がさないと言わんばかりに肩を組まれた。強いアルコール臭、一口も



酒を飲んでいないはずなのに酔っぱらってしまうのではないかと思うほどだ。

「雨宮さん、用件っていうのはこの人のこと？」

「……ごめん」

助けを求めるように雨宮さんを見れば、彼女は目を逸らして一言だけ呟いた。

「んふふ、キミ、斑目の個展でインタビュー受けてた子だよな？  
うっひょー、良いネタになりそうじゃん」

そう言つてニンマリと笑う彼女に、僕が呼び出された理由は粗方想像ついた。どうやら彼女もまた改心事件を追う人物の一人であるらしい。

「あ、まだ名乗ってなかったね。あたしは大宅一子。週刊誌の記者やってるんだけど、キミから怪盗団の事件について聞きたいな。つてこの子に紹介してもらったんだよね」

「なるほど、雨宮さんを手助けする見返りか何かということですね。僕は海藤徹と言います。出来れば次からは素面のときに会えたらと思いますよ」

大宅、と名乗った記者はごめんごめんとケラケラ笑いながらジョッキを更に叩いた。記者との繋がりは僕からしても願ったりな点もある。あるのだけれど、酔っ払いの相手を素面でするのは中々厳しいものがあるのも確かだ。申し訳ない気持ちはあるんだろうけど、雨宮さんに対して少し恨めしい気持ちを抱いてしまった僕を誰が責められようか。

「雨宮さん。出来れば次からは面倒な手合いに会わせる前は心づもりをさせてもらえると助かるかな」

「……善処する」

その言い方は結局改善してくれなさそうな気がするんだけど？

# Compound eyes and preening

岩井さん、大宅さんといった面々と繋がりを作ることが出来た翌日。休日ということもあり、僕は朝から昼過ぎまでファミレスのバイトに精を出したあと、捜査の進捗共有を行うということで明智君とカフェで落ち合うことになった。

「……僕もその人と同じことを言わせてもらうね。君は自分の出来ることと出来ないことの線引きが危うすぎるよ」

昨日の出来事を話せば、開口一番明智君は厳しい表情でそう言った。

「僕だって実際に現場で動くのは本職の警官に任せているんだ。いくらネームバリューがあるとは言っても、いやなまじ名前が売れてるからこそ僕は単独で動いたりなんかしない」

容疑者に警戒されるし、場合によっては自分が危険にさらされて周囲に迷惑をかけることもあるからね、と明智君は続けた。

「君の行動力は称賛に値するし、それで得られた情報で僕も冴さんも助かると思う。だけどそれで君が危ない目に遭うのは僕らの望むところじゃないからね」

「うーん、仰る通り過ぎて返す言葉も無い」

一から十までの正論で僕は気まずさを紛らわすように頬を掻くことしか出来なかった。

「でも、そうは言いながら君を巻き込んだりやった僕にも責任はあるんだけどね」

「それについては僕の方も望んだところもあるから一概に明智くんを責めることは出来ないよ」

眉尻を下げて浮かない表情をする明智君。新島さんといい、明智君といい、僕は身近な人に心配をかけてばかりな気がする。そういう意味では僕は問題児なんだろう。

「……よし、それじゃあ反省会はここまでにして。君が集めてくれた

情報と僕の方で集めた情報のすり合わせをしていこうか」

「分かった。僕が得たのはさつき話したところが大きなところかな。あんまり大した情報は得られてない」

「そんなことないさ。僕は警察が集めた全体的な情報しか掴めてない。そこに実際の現場を目にした君の情報が合わさればより推理の精度は上がる」

そう言っただけを取り直すように微笑んだ明智君は、カップに残ったコーヒーを飲み干した。僕もそれに続いてカップに口を付ける。ここからは僕と明智君で集めた情報を基にブレインストーミングのようにお互いの考えを挙げていく。二人組の服装、様子はどうかだったか、被害に遭っている子はどの学校が多いのか、今でもバイトに手を出している子の数は増えているのか、そうした細かな情報を積み上げて互いの言葉で互いの推理を研磨する作業が始まるのだ。

「今でも被害は拡大し続けている。どうにもならなくなって警察に泣きついてきたパターンがメインだから、まだ何とか隠している件を含めると無視できない規模になるね」

「ここ数日はバイトに誘われたっていう子の話はあまり聞かなくなっただけかな。入口の勧誘は終わり、搾り取る時期に入ったんだと思う」

「警察への通報が増えていることと一致するね。それと被害に遭っている子の在籍校だけど、君が予想した通り秀尽生みたいにそこそこの進学校の生徒がメインのターゲットになってるみたいだ」

「金を脅し取るという目的を考えれば狙うのはある程度裕福な家庭だと思っただけだね。けれど秀尽は僕が聞き込みをしているのもあつてか皆警戒心が増してきていると思うよ」

「その通り。だから最近では秀尽以外の高校でも被害が出始めている。例えば洗星高校なんかだね。芸術系の学校で、家が裕福な子が多い」

「そこまで手を広げているなら、そろそろ金城にも手が掛かりそうだと思うけど」

「そもそも金城の居場所が掴めてないんだよ。どうやら女の家を転々としているみたいだね。彼の家は警察が張り込んでるけど全く姿を見かけてないらしい」

周囲の喧騒に紛れるような声量で、僕と明智君は互いに言葉を重ねる。机の上に広げた地図には、僕が勧誘や脅迫を目撃した地点、警察のパトロール経路なんか書き込まれていく。

それを眺めているうちに、違和感が僕の中に生じる。勧誘や脅迫が行われていた場所は、警察のパトロール経路と重なっている所も多い。だというのにここまで警察がしつぽを掴めていないのはどういうことだろう。

「おかしい。警察だつてきちんとパトロールをしているのにどうして彼らは現場を押さえ切れていないんだ」

「確かにね。彼らのパトロール経路は周期も順路もランダムだ。それを全て掻い潜っている」

複数に色分けされた経路には、それがいつ行われたものなのかも同時にメモされている。僕が現場を目撃した日時も同様だ。それを重ねて見てみれば、彼らの犯行が巧妙に警察の目を逃れて行われていることに気付く。いくら警戒しているとはいえ、ここまで監視の目を盗むことが出来るだろうか。

「……以前に冴さんとも話したこと、金城のバックについている人物だけ」

「明智くんの言いたいことは分かる。警察関係者もバックにいる可能性が高い、そうだよな？」

僕の言葉に明智君はコクリと頷いた。

「実際に怪しい人物は何人かいるんだ。そうした人は僕の個人的な伝手でマークしてもらってる。決定的な証拠は掴めてないけどね」

「だけどここまで組織的に動かせるんだ。多分、現場レベルでの関わりなんかじゃない。もっと上の方かもしれない」

「そうだとすると今の僕らじゃお手上げだ。冴さんがどこまで影響力を及ぼせるかに懸かっているね」

明智君でお手上げだとすると、僕に出来ることも無いだろう。僕は警察関係者に知り合いもいなければ、明智君のようなネームバリューで動かせる人もいない。それにこれ以上は僕の立ち入る領分じゃないと、明智君は暗に言っている。

「でも、そうだね。ここまで情報が集まれば、警察に共有してパトロール経路のランダム化を更に工夫したり規模を大きくすることで動きを掴めるようになるかもしれない」

「それは朗報だ。出来れば早めに動いて欲しいけど」

「そこまで保証は出来ないかな。警察も大きな組織だからね。動くまでにどうしたって時間はかかるよ」

明智君がそう言って肩を竦める。口惜しいけれど、仕方ないと割り切るしかない。組織が大きくなればなるほど、その動きは鈍重になってしまう。それは手続きが煩雑化し、責任の所在がばらけてしまうから不可避なことだ。その代わりに個人とは比べ物にならない規模での活動が可能になるのだから。

「ありがとう。冴さんと会ってからまだほんの数日だけど、相変わらず君は僕に有益な情報をもたらしてくれる。有能な助手だね」

「僕が出来るのは足で稼ぐことくらいだからね。後はホームズに任せよ」

僕が言うとも明智君は可笑しそうに手を口に当てて笑う。けれど、すぐにその顔は真剣なものに変わった。

「任されたよ。だからこの件についてのこれ以上の深入りは止めて欲しい」

「……それはどうして?」

「君の聞き込み活動は秀尽生の被害を減らすのに少なからず効果があったんだ。だけど、それは同時に君の存在が金城に知られるリスクも示している」

明智君が言わんとすることが大体読めてきた。僕自身、あまり自覚はしていなかったが、どうやら明智君から見て僕は動きすぎたらしい。

「これ以上動くとも金城に目を付けられる?」

「もう既に目を付けられていてもおかしくない。相手はどこまで情報網があるか分からない手合いだ。君なら引き際を見誤ったりしないと思いたいけど、これについては僕の方が一日の長がある。ここは僕の指示に従ってくれないかな」

明智君の言葉に僕は口を閉ざして少し考え込む。確かに彼の言う通り、僕が金城に目を付けられてしまっている可能性はある。聞き込みの過程で街中でたむろしていた不良学生や、怪しい風体の人なんかにも声を掛けたことがあるため、そうした人々のうち誰かが金城とながっていた場合、僕の名前まではいかなくとも僕が存在自体は知られている可能性は高い。

そうすると金城が僕に目を付け、次のターゲットないしは排除すべき対象と見なすこともあるだろう。僕の頭の中には前世と思わしきぼんやりとした記憶があり、同級生よりも少しだけ冷静に物事を見れるからとはいえ対外的にはただの高校生だ。社会においては何の力も持っていないし、そうでなくとも家族を人質なんかに取られてしまえば僕に採れる手段は殆どない。

そうした諸々を考慮した上での明智君の言だということは理解できた。納得できていない内心もあるのは確かだけど、理屈で考えればここらが引き際だ。むしろタイミングとしては遅いかもれない。

「……分かった。僕はここらで手を引くよ。後は周囲の被害者のケアに回ることにする」

「うん、分かった。それも君にしか出来ない立派な仕事だよ」

明智君はホツとしたように表情を緩めた。彼なりに僕を心配してくれていたのだろう。僕は人の心配を蔑ろにしてしまいがちだけれど。

「冴さんの方には僕から言っておくよ。この件に関してはこれ以上は立ち入らせないようにつて。金城を捕まえられたら、また君の知恵を貸してもらおうことになると思うから」

「金城が捕まったらそこから先は警察の仕事だし、それこそ僕の出る幕は無いと思うけどね」

「そんなことは無いさ。それにこの事件に限らず手伝ってもらいたいな。優秀な助手を休ませる理由も無いしね」

少しげんなりとした顔の僕を見て、明智君はまたクスクスと笑ったのだった。

と、そこでポケットに入った僕のスマホが震えたのを感じる。取り

出してみれば、画面には新島真の文字。どうやら新島さんから電話のようだ。最近はあまり、というか全く話も出来ていないので意外だった。直接会って話すのは気まずいから電話にしたというところなのかもしれない。僕としても電話でもなんでも彼女と話が出来る機会は望むところだった。

明智君に一言断って席を立ち、一度店外に出て電話に出る。

「もしもし、新島さん？」

電話口にいるであろう新島さんに声を掛けるが、返答は無い。もしかしたら間違えて保留になってしまっているのかも耳からスマホを離そうとしたとき、

「もしもし。君が海藤クン？」

聞き慣れない声が電話口から響いてきた。

「今のあなたは私の人生を浪費してるだけ」

「怪盗団を見つけ出さないと君だって困るだろう？」

「君って言いなりの良い子ちゃんタイプなんだね」

脳裏に何度も響く声。それは尊敬する姉のものだったり、自らが通う高校の校長のものだったり、姉を通じて顔見知り程度の仲だった有名な高校生探偵のものだったり。それ以外にも多くの声が真の中で木霊していた。

生徒会長なんだから。

頼りになるんだから。

勉強できるんだから。

周囲から寄せられる無言のプレッシャーは真の心を確実に蝕んでいた。今は亡き、憧れの父の背中を追うと自分出来ることを精一杯頑張ってきた。尊敬する姉に失望されないように、有名な進学校に入学し、成績だつてトップクラスを維持してきた。最初は自発的な動機だったそれは、いつしか周囲からの期待に応えなければというものに変わり、気付けば自らを強く縛り付ける鎖となっていた。

「新島さんって凄い勉強できるんだね。これでも中学生のときは学年トップを譲ったこと無かったんだけどな」

そんな中、高校に入学した自分の前に現れた一人の男子生徒。彼は他の人間とは全く違っていた。隔絶していた、と言っても良い。

勉強は出来る、それも頗る。それだけじゃなく人当たりも柔らかく、運動だつて決して不得意じゃない。自然と周囲に人が集まり、彼を頼るけれど、それを彼は何も負担に思わずサラリと片づけてしまう。それでいて、誰とも深く関わろうとしないように思えた。周囲との視線が違うのだ。彼だけ一段高いところにいるような、彼自身も含めて俯瞰しているような視点で物事を見ている。

だから彼は真に過度の期待を寄せることは無かった。友人として、そして時にはライバルとして心地よい距離感で常にいてくれた。

安心できた。彼ならば自分を過度に理想を押し付けたりしないから。

憧れた。周囲からの期待という名のプレッシャーを涼し気に受け流し、それでいて応えていく姿に。

……そして妬ましかった。自分に出来ないことが出来るその姿が。生徒会長となり、彼を副会長と据えられたのは真にとつてとても幸運なことだった。彼は融通の利かない真の性根を理解し、それを補つてくれる。時には正論をぶつけすぎて険悪になりそうなき時も彼が仲介してくれば丸く収まることがあった。

それを頼もしく思うと同時に、チクリとした棘が内心に降り積もっていくことに気付いたのはいつのことだったか。気付けばテストで鎬を削るのは周囲の期待に応えるというよりも彼と張り合えるのがそれくらいしか無いのではないかという焦燥感が動機になっていた。

だからこそ彼が怪盗団の疑いを掛けられていると校長に聞かされた時、真の胸中にはわずかに仄暗い喜びが生まれたのだ。

自分だつて彼を助けることが出来る。自分でも彼に頼られるはずだ。

困っているであろう彼を助けたい、そう思う気持ちの中に、上記のような心持ちが全く無かったかと言えば？になる。だというのに、当



の本人は何も気にした様子がなく、いつものように誰かの心配をしてばかりいる。

どうしてそこまで悠然としていられるの？

私の助けが当てにならないから？

私はそこまで頼りない？

周囲からかけられるプレッシャーと相まって彼女の心に浮かんだそんな感情はどうにも制御出来なくなった。結果、彼女は暴走し、怪盗団の正体を突き止めたかと思えば今はこんなところで床に押さえつけられてしまっている。

「ハッ、名前どころか住所まできっちり登録してんじゃん。まっじめ〜」

床に押し付けられた自分を見下しながらニヤニヤとスマホを弄る男を精一杯の敵意を籠めて睨みつける。だが、それを可愛いものを見るように鼻で笑って目の前の男、金城は真の後に続いて根城としているクラブに押し入ってきた招かれざる客たちを見渡す。

「お前らもバカだよね〜。こんなところにガキだけで乗り込んできて何が出来るとっ〜んだよ」

酒と煙草が一緒に写った写真を撮られてしまい、真を追って来た怪盗団の面々も冷や汗を垂らす。前科持ちに問題児、班目の元門下生とスキャンダルには事欠かないメンバーだ。写真をばらまかれてしまえば、事実はともかくとして彼らの風評は今度こそ地に落ちる。

「まったく。お前らみたいなガキ見るとイライラすんだっつのお、あつたあつた。生徒会長さんなら当然連絡先持つてるよね〜」

金城は目的の物を見つけたとスマホを弄る手を止める。何をしているのかが分からなかった真達だが、金城のスマホを耳に当てる仕草で誰かに電話を掛けたことは分かる。

「もしもし、新島さん？」

そして電話口から聞こえてきた声に真の身体が強張る。どうして彼が巻き込まれることになるのだ。

「もしもし。君が海藤くん？」

真の顔が真っ青になっていくのも無視して、金城がことさらに暢気

な口調で話しかける。まるで友人と話しているかのような気安い様子で。

「俺の名前、金城っていうんだけどさ。君なら分かるよね？ オタクの生徒会長さんがさあ、俺のところにずかずか踏み込んできてよく分かんない言いがかりつけてきてめっちゃ迷惑してんの。これ、どうやって責任取ってくれる？」

彼を助けようと思って起こした行動が、結果的に彼をも巻き込み、より窮地に陥れる結果になってしまった。自分の無力さと向こう見ずな行動の結果に、気丈に堪えていた真の視界がぼやける。

「……はじめまして、金城さん」

「お、挨拶出来んじゃない。真チャンと違って礼儀正しいね、キミ」

だからといって許さないケド。と金城はニタリと笑った。

「真チャンとそのお仲間にも俺が受けた被害を金で払ってもらってもりなんだけどさ。キミも連帯責任だよな？ だから……」

二週間後までに二百万用意しろ。

金城は底冷えのするような低い声で告げる。高校生に提示するには法外に過ぎる金額に固まっていた怪盗団の面々も抗議しようとするが、周りを固める金城の部下に黙っていると恫喝された。

「……ずいぶん吹っ掛けますね」

「もうすぐボーナスだ。お父さんに泣きつけば何とかなるだろう？」

「素直に払うとでも？」

「払わなきゃお前の家族を直接脅す。親がまともに職場行けないようにしてやるよ。コソコソと嗅ぎまわりやがって。俺が気付かないとでも思ったか？ ネズミが」

「嗅ぎまわったおかげであなたから接触してきてくれた。警察に通報します」

「サツが動くより俺がお前の人生滅茶苦茶にする方が早いんだよ、馬鹿が。振込先は真チャンから聞けや。覚悟しとけ、お前の人生終わらしてやるよ」

それだけ言うと金城はそれ以上話す気は無いとばかりに通話を切り、スマホを真に投げて寄越した。

「はい、これで俺の用事終わり。お前らも帰っていいよ。金だけキツ  
チリ用意しとけ？ 出来ないなんて抜かしたらどうなるか、分かって  
んだろうな？」

金城との電話の後、この件の扱いをどのようにしようかと考えた結果、ひとまずは明智君に相談しようという結論に至り、席に戻った僕は早速電話のことを切り出した。

「金城から直接連絡が……？」

どういう繋がりかで、というところは新島さんが関わっているということをお教えるのは気が引けたため相談を受けた生徒から連絡先を聞き出された、という内容で誤魔化すことにした。この件は冴さんにも共有することになるだろうし、今の冴さんがこれを聞けばまた新島さんと喧嘩になるんじゃないかということをお危惧したためだ。

「……クソが」

僕の話聞き終えた後、明智君の口から飛び出したのは普段の彼からは想像もつかない言葉だった。思わず彼の顔を二度見してしまう。その視線に気づいたのか、彼の表情が分かりやすくしまった、というものに変わる。

「珍しいね、君が口調を荒げるなんて」

「……油断したよ。外じゃ出さないようにしていたんだけどね」

僕がにやりと笑って指摘すれば、彼も諦めたように笑って自分の失言を認めた。

「メディアに出ることも多いからね、普段の口調は余所行きだよ。本当はこんなお行儀の良い喋り方じゃないよ」

「なるほどね、ということは実は一人称も僕、なんかじゃなくて俺だったりするのかね」

それに対して言葉を返すことは無かったものの、肩を竦めて目を逸らした明智君の反応で答えは聞くまでもなく分かった。

「そんなことより、今は金城の件だよ」

一度咳払いを挟んで空気を切り替えた明智君は、気を取り直して表情を引き締める。

「僕の嫌な予想が思った以上に早く現実になってしまったね。やはりこれ以上の深入りは厳禁だ」

「もうこの上なく深入りしてしまっていると思うけど?」

「今は金銭要求による圧力に留まっているけどもし彼らが僕の推理通り怪盗団と繋がっていたとしたら、最悪は君が精神暴走事件のターゲットにされるかもしれない。その可能性は看過出来ないね」

明智君の言葉に僕はなるほどと頷かざるを得なかった。明智君は怪盗団が精神暴走事件と改心事件の犯人だという線で推理している。その場合、金城は怪盗団を僕にけしかけて僕を警察の知り得ない方法で排除することも可能だと考えられてしまう。彼が僕を心配そうに見ているのはその可能性が彼にとつて現実的に思える程度には今の僕が危うい状況にいるからだろう。

「君が個人的に行った調査だけじゃなく、僕とも繋がっていることも向こうは知っているのかもしれない。だからこそこうして金城自身が動いて牽制してきたと僕は考えているよ」

「……なるほど、尤もな言い分だ」

「この件は本格的に僕や冴さん、警察に任せて欲しい。さっきの電話は録音しているよね?」

「もちろん」

明智君の言葉に頷く。金城、という名前が聞こえた瞬間にスマホの録音ボタンを押していた。相手が僕に接触してくるというチャンスを得たのだから。とはいえ録音したとしてもあまり有力な手掛かりにはならないかもしれないという思いが僕の中にはあった。

「でも惜しいことに金城は用件だけ伝えてさっさと電話を切っちゃったからね。居場所の手掛かりにはならなさそうだ」

「その辺りは相手も考えていただろうしね。金城が昼間の根城にしているのは部下からの接触を考えれば昼間は営業していないクラブやバー辺りかな。そういうところは防音もしっかりしているから外の音も入ってこないし、易々と居場所のヒントを与えるようなことはないだろうね」

それに分かったとしてもその場所はまだ二度と使うことはないだろうし、と僕が呟いた言葉に明智君も肯定の意を返す。明智君に明かすつもりは無いが、新島さんが金城の下に乗り込んだのであれば、い

くら脅したとはいえ彼女が警察に駆け込んだときのことを考えて金城は再び地下に潜ったことだろう。それもあつたから金城は電話越しとは言え僕と直接言葉を交わそうと考えたのだ。どうせ今いる場所に戻ることは無い。ならば周りを飛び回るうざったい羽虫にもついでに釘を刺しておこう、そんな考えで。

「居場所の手掛かりにならないとはいえ金城を検挙した後の有力な証拠にはなるさ、その録音は。後でデータを僕に送っておいでくれないかな？」

「もちろん。冴さんには？」

「そっちにも僕から共有しておくさ」

僕の録音はどうやら冴さんにも共有されるらしい。となれば新島さんを示唆するようなところは削っておきたいが。

生憎と機械に疎い僕では録音したデータを違和感無く編集するだなんて芸当は不可能だ。このデータはそのまま渡さざるを得ないかもしれない。

「ところで、話は変わるんだけどさ」

と、僕の意識は明智君のその一言で思考の海から現実へと引き戻された。

「金城は間違いなく法律的に、道徳的に悪事を働いている。君の協力のお陰でそう遠くないうちに金城は捕まることになる、いや僕と冴さんで必ず検挙してみせる。ただ、例えばの話、君の考え通り怪盗団と金城が実は敵対していたと仮定したとして」

金城が鴨志田や班目と同じように改心した場合、君はそんな金城にも許される機会は与えられるべきだと思うかい？

僕にそう問いかける明智君は、柔和な笑みを浮かべた瞳の奥に灼け付くような光を忍ばせていた。その問いの中には、恐らく明智君にとって譲れない何かがある。彼の価値観の根本となつている何かに基づいて、今彼は僕にこの問いを投げかけているのだと感じさせるほど、彼の放つ光は強烈なものだった。

その問いに対して曖昧で適当な答えを返すことは許されない。今までも僕は問われたことに対しては僕なりに誠実に返答してきたけ

れど、今回は求められるレベルがまた一段違っていると思わされた。僕は少し黙って机の上で組んだ両手に視線を落とす。視線の先で親指同士をくつつけたり離したりを繰り返して思考に没頭する。

「僕は何があろうと許されたい、許されちゃいけないと思っっているよ。探偵としてだけじゃない、僕自身の価値観としてだ」

黙っている僕に対して明智君は言葉を重ねる。

「悪に堕ちた以上、相応しい落とし前を付ける必要はある、もちろん程度はあるけどね。だけど悪事に手を染めた人間が自分は許されたいと思うだなんて、そんな都合の良い話は無いだろう？」

被害者も犯人に許しを乞うたはずなのに、それを聞き届けなかった人間が同じ立場になったときに許されるだなんて甘い話があつてはいけない。

明智君の言葉はおおよそ多くの人が法や倫理の観点はともかくとして感情的には同意できるものだ。被害者にしてみれば、加害者がいくら同情を誘う背景があつたとしてもそれを許さなければいけないなんて通るはずもない。そしてそんな悪を許せないからこそ、明智君は探偵として事件を解決し、被害者を救おうとしているのだろう。

「……僕はどうもこの手の話になると理想論や概念論に終始する癖があつてね。それでも良いかな？」

「……聞かせて欲しい」

僕が言うと、明智君は口元で手を組んでこちらを半ば睨みつけていると思えるくらいに強く見据えてきた。それほどまでに、この問いは彼にとって重たいのだ。だからこそ適当なことを言ってしまうわないように、僕はいつも以上に言葉を選んで口を開く。

「許すべきか、許さないべきか。感情面でいえば、被害者は一生許さないと思う。僕だつてそれを否定する気は無いよ。けれど、それと加害者が許されたいと思うことは矛盾しない。許される機会を与える誰かがいても良いんじゃないかとも思うよ」

「そう考えた理由は？」

「金城の件もそうだけど。僕は金城の犯罪者としての面だけを今見ている。僕は今金城に脅されていて、金銭的にも社会的にも被害を受け

そうになっているし、既に被害を受けている人もいるからそれに対しては然るべき裁きが下される。けれどそれは僕や被害者が下すんじゃない。この国というシステムが裁くんだ」

「今の世の中では不当に重い罪や軽い罪にされている、上級国民や汚職、裏取引だなんて話もあったりするよね？」

「世の中に溢れている言葉のどれほどが確たる根拠に基づいた主張なんだろうね。結局人は自分の見たいものを見たい側面で、自分の価値観に沿った解釈で切り取ってしまう。僕だって、君だってそうだろう？　そして僕は悪人を裁くのは怪盗団でも探偵でも無いと思ってるよ」

僕は悪人は正義によって裁かれる。生憎とそんな幻想を抱いてはいない。悪人を裁くのは正義などという曖昧な概念では無い。

「だからこそ、罪を裁かれた後に許されたいと思うことは誰も否定出来ないんじゃないかな」

「その意見はむしろ被害者の心を無視しているんじゃないかな」  
「被害者が加害者を許したくないと思うことも否定しないよ。ただそこに正義、という概念は入り込めない。そんな錦の御旗が無いと続けられない感情は、持つだけその人を苦しめてしまうと僕は思うから」

人を許す、許せないという話に登場するのは当人たちの感情だけであって外野が持ち出す正義とやらはただのノイズでしかない。

では何故正義が持て囃されるのか。誰もが正義を語りたがるのか。あるいは加害者でさえも、正義に裁かれる自分を語ってしまうのか。「人ってやっぱり楽しみたいじゃない。正義つてさ、楽なんだと思うよ。考えなくても良くなるもの、自分の行いがどういふ結果を齎すのか。自分が悪人だと自覚している人も、どうしてそれをしているのか。何故し続けているのかを考える必要が無くなるんだよ。いつか正義が裁いてくれるから。けれどそこで思考停止せず、悔やみ続け、贖い続けた人に一分の報いも無いなんていうのは少し悲しいかなって思ったりもするね」

「……だから悪人にも更生の機会は等しく与えられる？」



「それで許されるかどうかは分からないけれどね。でも死ぬほど悔いて、その後の人生を捧げてでも贖おうとしている人がいたとして、それを踏み躪る行為は部外者には許されない。この国の法は少なくともそれを許してはいない。正義と悪という簡単な二項対立に逃げ込んでしまおうとそこで思考停止してしまう。僕はそうなりたくないっただけだよ」

こんなこと言っているから僕はどっちつかずで中途半端な人間なんだろうけどね。と言って自嘲するように笑う。僕のこの考えは多分僕の中にある前世と呼ぶべき記憶に由来するものは間違いない。

誰だか分からない人の一生を、その人の目を通してものに客観的に見てしまっている。常にここでは無いどこか別のところに、まるでもう一人の自分がいるような心地になる。言ってしまうえば僕は僕自身を過剰に客観視してしまっている。現実味が薄い、と言っても良い。

少しずつ擦り切れて色褪せてきているものの、この記憶は僕の人格形成に多大な影響を与えたまま今日に至ってしまっていた。

「……例えば、例えばの話だ。僕みたいな一見普通の高校生が、裏では何人も殺していたとして」

僕の言葉を聞いて目を瞑って何か考え込んでいた明智君だったが、再び口を開いた彼の表情はもはや普段の人当たりの良い笑顔など欠片も無くなっており、ナイフのような、どこか冷たい印象を与える無表情で語る。

「その動機が他人からしてみればとてもくだらない子供の癩癩のようなものだったとして、それでも君はその子が心の底から悔いていると言える許されても良いと思うのかい？ 君の近しい人、それこそ生徒会長さんがソイツによって犠牲になっていたとしても」

彼の言葉に僕の脳裏に新島さんの顔が浮かぶ。例えば彼女が僕の知らないところで犠牲になったとき、僕はこんな冷静な気持ちでいられるだろうか。恐らく不可能だ。許せないと思うし、復讐したいと思う。けれど、

「僕は僕の復讐心に正義、なんていうレッテル貼りを許すつもりは無

いよ。許されたいと思う気持ちを否定しない。けれど僕は許さない」  
「例えその犯人が僕だったとしても？」

僕の答えに、明智君は意地悪な笑みを浮かべて言葉を重ねる。本当に意地悪な質問だ。新島さんは大切な友人だけど、それはそれとして明智君との関係も今の僕にとっては心地良いものなのには違いないのだから。

「君が？もしそうだったのなら君はホームズじゃなくてモリアーティだね。そのときは僭越ながら僕がホームズになってライヘンバッハの滝と一緒に飛び込んであげるさ」

「そっか……。君はそう言う、言ってくれるんだな。ま、そうはならないだろうけど、万が一そんな状況になったら、俺は悪役らしく嗤ってやるさ」

「……君が俺って言っても今までのイメージとのギャップが酷いよ？」

唇の端を吊り上げて笑う明智君は、確かに悪役のような雰囲気を見醸し出してはいた。けれどどこかホツとしたような様子にも見えただのは僕の気のせいだろうか。

金城と対面した翌日、その放課後に真は怪盗団と合流して金城の認知世界、パレスへと足を運んでいた。金城にカモとして認知された今であれば中に浮かぶ金城のパレス内部に向こうから招き入れてくるだろうというモルガナの言通り、巨大なUFOのような金城のパレスが真を認識した瞬間に入り口までの階段を出してきた。

「やっぱりな。ワガハイが睨んだ通りだ！」

狙い通りの展開となつてしめたものだど笑いながら階段を上るモルガナと、その後ろに続く真と怪盗団の面々。

「認知世界……。金城は渋谷をこんなものだど認識しているのね」

階段を上るにつれてあたりの景色がよく見渡せるようになり、真は眼下に広がる光景に顔を顰めた。道行く人は自分が自由に金を引き出せるATMと見なす認知、そして宙に浮かぶ金城の居城は自分が誰にも捕まらないという自信の表れだろう。

「けど、どうして金城がここまで自分が捕まらないと自信を持てるの？」

階段を上りながら、真は自問する。強引に過ぎる手段とはいえ、一介の高校生である自分ですら金城に会うことが出来たのだ。そんな程度のリスク管理で警察の捜査を逃れることが出来たなんて思えない。一介の高校生で何も出来ないど油断していた？ それとも他にも目的があつた？

「何か考え事？」

「あ、ええ。金城がどうしてここまで迂闊に私と顔を合わせようとしたのかが気になったのよ」

いつの間にか隣に並んでいた蓮。横から顔を覗き込んでくる彼女に真は自分の考えを話す。

怪盗団であると疑いをかけ、そして証拠を掴んで半ば脅すように金城の件を解決するように迫った。それに対して竜司や杏、祐介は当然反発した。彼らが真に向ける目は厳しく、それこそ杏からは面と向かって役立たずだと言われてしまったのだ。にも拘らず、蓮だけはい

つも通りの態度を崩さなかった。怪盗団の証拠を突き付けたときは表情を少し歪めたものの、冷静に金城について聞き込みを行い、解決しようと動いていた。

(だから海藤君も蓮を気に掛けていたのかしら)

脳裏に過るのは副会長が蓮と時折生徒会室で繰り広げていた本の感想会。趣味が合ったのか、読んだ本について語る二人の顔は扉を隔てて会話こそ聞こえなかったものの楽しそうだった。

怪盗団への当たりが強くなったことに、それも関係無いかと言われると、真は口ごもってしまう。自分よりもよっぽど早く、徹と距離を詰めた蓮に思うところが無い、とは言い切れない自分がいることを、真は微かに自覚していた。それは頼りになる片腕を奪われたことによるものなのか、あるいは仲の良い友人が自分よりも仲の良さそうなお人といるときを見てしまったときに感じる何かか。いやいやそのままでは子供染みた考えを持ってはいないと真は頭を振った。

「気になることはあれば直接金城に聞けば良い。認知世界の金城に」  
「……そうね、そうするわ」

そう言つて上を見据える蓮を、真は少し眩しいものを見るように目を細めた。彼女は自分の置かれた状況を嘆くだけではないけななことをきちん認識している。彼女にまつわる噂を耳にして、勝手に彼女の為人を決めつけていた自分がいることを真は恥じる。4月に徹も言っていたではないか、会ってもいないうちから決めつけるのは良くないと。

「雨宮さん、ごめんなさい」

「? 昨日のことならもう謝ってもらった」

「昨日のことだけじゃないわ。あなたのことを誤解して、偏見を持っていた。生徒会長なんだから、そんなことしちゃいけないのに」

「気にしなくて良い。私は気にしてない。でも、そう言ってくれることは嬉しい」

蓮で良い、そう言つて差し出された右手を、真はおずおずと握り返した。

そして一行は階段を上りきる。そこで目にしたのは金城銀行、とで

かでかと看板を掲げた豪華な建物。

「ATMの人間から吸い上げた金は自分の懐、つまり自分の銀行にしまいこんでるってわけかよ」

建物を見上げながら忌々しそうに呟く竜司。それを横目に蓮は別の物に目を奪われていた。

それは青いオーラをまとった鉄格子の扉。自分だけにしか見えていないと思われるベルベツトルームへの入り口だ。その傍らに立つ看守の双子、カロリーヌとジュステイーヌが蓮に向かって手招きをしていた。それに従って蓮はベルベツトルームの入り口へと近づいていく。

「よく来たな、囚人」

「主がお伝えしたいことがあると仰せです。ついて来なさい」

顎を上げて勝気な様子のカロリーヌと、平坦な口調ながら有無を言わせぬ様子ジュステイーヌに続いて蓮はベルベツトルームへと足を踏み入れる。黒のロングコートが特徴的な彼女の怪盗服は気が付けば白黒模様の囚人服へと変化し、周囲の景色が粗末なベッドが備え付けられた見慣れた牢屋に変わる頃には、彼女の足に重たい鉄球が結び付けられていた。

「ようこそ、私のベルベツトルームへ。これで三人目のターゲットになるか」

鉄格子の向こう、長鼻にぎよろりとした大きな目、黒いスーツに白い手袋を身に付けた老人は地の底から響くような低い声で蓮に言葉を掛ける。

「更生が順調に進んでいるようで何より。私も導くものとしてお前の更生の行き先を楽しみにしている」

だが、とイゴールは言葉をそこで一度切った。

「私ですら関知していない不確定要素が紛れ込んでいる」

いつも要領を得ないことを言うイゴールだが、今の彼の言葉には蓮でも感じ取れるほどの苛立ちが含まれていた。

「主の言う通り、このパレスには本来混ざり込むはずの無い因子が紛れ込んでいます。私も、カロリーヌもその気配を感じている」

「お前の更生に対してどれほどの影響があるか分からないからありがたいかも知告して下さったのだ。感謝しろ、囚人！」

イゴールに追従するジュステイーヌとカロリーヌ。しかし、ジュステイーヌは言いながらもどこか腑に落ちない顔をしていた。

「ですが、そこまで不穏な気配とは私には思えません。むしろ、どこか懐かしいような……」

「何か言ったか、ジュステイーヌ？」

「……いいえ、何も」

カロリーヌが怪訝な顔をしてジュステイーヌに問いかけるが、ジュステイーヌは気のせいだと自分に言い聞かせるようにそう言っただけから目を逸らした。

「……いずれにせよ、お前も警戒しておくことだ。これで更生が滞ることの無いようにな」

イゴールはそう言うと言った手を解き、右手をヒラリと振る。それは彼がこれ以上話すことは無いという意を表している。

「話は以上だ。精々励めよ、囚人！」

主の意図を汲んだカロリーヌが警棒を一度鉄格子に強く叩きつけると、あたりにサイレンの音が響き始める。この音は蓮が現実、あるいはパレスに引き戻される合図だ。蓮の意識が徐々に遠のいていく。鉄格子の冷たさも、足首に嵌められた枷の重さも、全てが遠退いて。

「……い、蓮？ おーいー！」

そして気が付けば蓮の顔の前でヒラヒラと心配そうな表情で手を振る竜司の顔が視界に広がる。どうやらベルベットルームに居る間、こちらでぼうっとしている蓮を心配してくれていたようだ。

「大丈夫か？ またボーっとしてたぞ」

「……大丈夫、行こう」

竜司の問いかけに蓮は短く返すと、金城銀行を見上げる。イゴールの言う不確定要素、蓮は口にはしなかったものの、思い当たるものが無いわけではなかった。班目を改心させた後、モルガナと相談してメモントスを探し回ったものの見つけれなかった。パレスでのみ顔を合わせる事が出来た彼が、イゴールの言う不確定要素だというの

だろうか。

「銀行か、パレスってどうして皆趣味悪いんだろ」

蓮の後に続きながら、杏がため息混じりに零す。そうして真を加えた怪盗団一行はついにパレスの中で金城と対面することになる。自身を銀行の頭取と認識し、弱者全てを金づると見なす歪んだ認知の主と。

「……………」

「……………」

突然だけれど、誰かこの状況から助けてくれないかと言いたい。明智君との話を終えた数日後、いつもの通り登校した僕は日課となっている読書のために生徒会室の扉を開いた。

そうしてしばらく本を読んでいたところ、まだ8時にもなっていないというのに新島さんが姿を現したのだ。驚いて目を見開く僕と対照的に、新島さんは僕がいることに特に驚いた様子も無く、むしろ僕がいることに安堵したように息を吐くと、僕の対面の席に腰かけた。そして彼女は口を開いて何かを言おうとしては言葉が見つからないのかまた口を閉じる、ということは何度か繰り返し、僕もそれに対してどう反応すべきか分からないまま本から目を上げられない状況が5分ほど続いていた。

「……………」

今僕が目を上げれば恐らく新島さんと目が合うだろう。それくらい視線が対面から注がれていることが分かる。僕としても彼女と仲直りしたいのだけれど、僕も何と言えば良いのか言葉を探しあぐねているのが現状だ。

……とはいえこのまま黙って続けるわけにはいかない。僕はパタンと小さな音を立てて本を閉じると、意を決して新島さんと目を合わせる。僕と視線がぶつかった新島さんは分かりやすく肩を跳ねさせた。

「おはよう、新島さん。挨拶が遅れてごめんね」

「お、おはよう」

「この前は大変だったね」

彼女が切り出したかったのはこのことだろうと思って話題を提供してみる。僕の予想は当たっていたようで、彼女の顔が露骨に曇った。

「その、私のせいで……」

「ごめんね、新島さん」

「……どうしてあなたが謝るのよ」

僕が謝罪を口にするのと新島さんが泣きそうな目で僕を見るが、この前の件に関しては僕の責任も多分にあると思うのだ。

「僕が新島さんに心配かけてばかりだからね。僕がぼんやりとしてばかりだから気を揉んで何とかしようとした結果、金城のところに乗り込んでいっちゃった。僕はそう予想したんだけど違ったかな？」

「……だけどそれで結局あなたに迷惑を掛けちゃったわ」

新島さんはそう言って視線を机上に落とす。やはりと言うべきか、僕を巻き込んでしまったことにかかなりの責任を感じてしまっているようだ。僕としては既に明智君や冴さんと組んで調査をしていたので遅かれ早かれ巻き込まれていただろうと僕は思っているが、それを伝えたところで彼女の気が楽になることは無いだろうし、更に心配をかけてしまうだけだ。

「先に迷惑を掛けたのは僕だよ。だからここは両成敗ってことでどう？ これを機に仲直り出来ると嬉しい」

「でも……」

僕が右手を差し出すけれど、新島さんは口ごもり、手を取るのを躊躇っていた。

「新島さんの気が済まない？」

「……あなたが私を許してくれるとしても私の気が収まらないわ」

真面目な新島さんらしいセリフだ。彼女が信奉する正しさが彼女を許さないんだろう。それはとても尊い気質だけど、それによって彼女は昨日のように自分を追い込んでしまった。僕は席を離れると、彼



女の隣に立つ。新島さんは席に座ったまま、僕を見上げていた。目線を合わせるために膝をつく。

「え、っと……」

「自分に厳しいのは美德だけだね。そうやって自分を追い詰めるのは良くないかな。僕も悪いところがあつて、新島さんも少し先走つてしまった。ここはそういうことで良いじゃない」

「そうやって優しくするのはズルいわ……」

「新島さんと気まづくてあんまり話せなかつたのが寂しかったんだ。早く仲直りしたい僕のワガママだよ」

僕がそう言うと、新島さんは一瞬泣きそうな顔をしたかと思うと、ぎこちないもののようにやく笑顔を見せてくれた。

「……この件は絶対に私が何とかしてみせるわ。そうじゃないときちんとあなたに謝れないもの」

「あんまり気負い過ぎないで欲しいけどね。でも、僕を助けてくれると嬉しい」

「ええ、巻き込んでおいてどの口が言うと思われるかもしれないけれど、私があなただけを助けるわ。……そのための力も得たんだから」

「うん、頼らせてもらうね」

僕が差し出した手は、今度こそ彼女に手に取ってもらえた。

「お姉さんとも早く仲直りしなよ？」

「うん……、ってどうしてあなたがそのことを知ってるの!？」

「あー、ちよつと色々縁があつてね」

「色々？ 色々って何があつたの？」

「新島さん？ ちよつと怖いよ？ それに別に冴さんとは何も」

「冴さん？ お姉ちゃんを名前と呼んでるの？」

「待って、なんでそんなに鬼気迫つた表情なのさ。怖い、怖いから！」

その後、明智君と親交があつた関係で一回会つただけだと説明しても尚疑いの目で見られる羽目になった。仲直りしたはずなのに、新島さんから向けられる目は余計に厳しくなつた気がする。

Special Providence watch  
hes over idiots?

「最近はバレー部の子達も立ち直ってきているみたいだね」

明くる日、僕は珍しく放課後に丸喜先生のカウンセリング室へと顔を出していた。ここ最近はお互いに忙しかったこともあり、初対面のとさきのようあまり落ち着いて話をする機会が無かったのだけど、今日はたまたま廊下で出くわして他に予定が無ければ話でもどうかと丸喜先生から誘われたのだ。

「代わりに闇バイト絡みでトラブルが発生したりしているみたいですけどね」

「ああ、やっぱり君も知っていたんだね。僕のところにも何人かの生徒が相談しに来てくれたよ」

金城関係のトラブルは丸喜先生も耳にするとところだったらしく、コーヒーとお茶菓子を用意しながら曇った表情で嘆息する。彼は僕にカップを差し出すと、三人掛けのソファに座る僕の斜め前に位置する一人掛けソファに腰かけた。

「そういえば人は対面するよりもこうして斜めになるように座った方が威圧感が無く話しやすい気分になれるのだったか。こうした細かな気遣いが出来るところもカウンセラーならではのだと思っ」

「インスタントで悪いね。お菓子は自由に食べてくれても良いから」  
「ありがとうございます。生徒会室でも普段からインスタントですし、やっぱり学校となると本格的な器具なんかも使いにくいですね」

「そうだね、それにコーヒー以外にも揃えておこうとするとどうしても一つ一つにはあまりお金を掛けられなくて」

安月給だからねと苦笑する丸喜先生に、校長に言えばそれくらい揃えてもらえないんですかと疑問をつい口にしてしまう。

「相談してみたんだけどね、カウンセリング業務に本当に必要なものとは認められないと言われてしまったよ。確かに必須では無いから

ね」

だから備品は結構私物もあるんだよ、と丸喜先生は部屋を見渡す。流石にソファや机なんかは学校の備品だけど食器やお菓子他細々としたものは丸喜先生が自腹で買って来たものだという。学生にとっては自腹とはいえ好きなお菓子を学校に持って来ることが出来るというのは嬉しいかもしれない。

「ハハ、確かにね。それは僕の特権かも」

丸喜先生との会話はサラサラと静かに流れる小川のような心地で、穏やかで他愛無い、意識していないと翌日には話した内容も忘れてしまうような会話だ。けれどそれがカウンセリングとしては結構大事なのかもしれないと感じた。話している側が気負うことなく話せる。出会って間もない人間であつてもそんな空気を丸喜先生は醸し出しているということなのだから。

「そういうえば今日は何か用件があつて僕を呼んだんですか？」

一通り会話を楽しんだ後、僕は気になつていたことを切り出す。普段から丸喜先生とは廊下で顔を合わせる事が無いわけではない。そうしたときは互いに挨拶や立ち話程度の雑談に興じることもあるため、こうして改まって呼ばれるということは何か話したいことがあるのかも知れないと気になつていたので。

それを伝えると特に大それた用事があるわけじゃないんだけどね、と言つて彼は笑つた。

「あんまり他の生徒との会話内容を明かすわけにはいかないんだけど、これまでカウンセリングしてきた生徒から度々君の名前を聞くことがあつたからさ。僕が来る前からいろいろと相談に乗つてあげていたんだろう？」

「あー、まあ僕がしたことと言えば本当に話を聞いてあげたくらいですけどね」

丸喜先生に言われて振り返つてみれば思い当たる節が無いわけではない。男ということもあつて新島さんより相談しやすいのか、生徒会に入つてからは男子生徒からよく相談事を持ちかけられたりしたことがある。鴨志田先生と揉めていた頃は体育館を優先的に使うバ

レー部と他の運動部の軋轢なんかをどうにかしようとか方に顔を出していたからそのうち男女問わずに困ったことがあれば取り敢えず僕に話しておけば良いみたいな雰囲気が一時期あったのは間違いない。行き過ぎるときは新島さんが間に入って止めてくれたりしていたみたいだけど。

「それを言ったら僕の仕事も話を聞くことだよ」

それに話を聞くことって案外難しいものだよ、と丸喜先生は言う。カウンセラーが相談を受ける上で最も苦労するのが相談者から話を聞く、特に本音を聞き出すことだという。相談したいことがあるからとカウンセラーを訪ねても、最初から赤裸々に自身の内心を吐露できる人はそうそういない。

「当たり前だよ、会ったばかりの人間なんだから。そういう人たちの為にこうやって雑談ベースでアイスブレイクをするんだけど、これがまた難しいんだよ」

「まあ僕が同じ学生だっていうのも大きいと思いますよ。僕達からすれば丸喜先生はやっぱり大人ですからね、多少は身構えてしまうのも仕方ないんじゃないですか？」

「あはは、学生の君にそこを氣遣われるのもカウンセラーとしては情けないなあ」

困ったように後頭部を掻く丸喜先生。言われてみればその通りだな。年下から氣遣われるのってダメージが大きいな。僕が色々変なものを抱えているせいであんまり年相応の考え方をしていないからその辺りの意識が出来ていなかった。

「でも先生のお陰で鴨志田先生の被害に遭った子達も元気になってきたんでしよう。二ヶ月でそれは凄いことですよ」

鴨志田先生の影響は何もバレー部に限った話じゃない。それこそ他の運動部で体育館の取り合いになったときに鴨志田先生に酷いことを言われた子もいるし、陸上部のように廃部一步手前まで追い詰められた例もある。被害者は数人程度で収まるわけもないのだけど、丸喜先生はそれを二ヶ月である程度立ち直らせていったのだ。どのような話術を使えばそれが出来るのやら、僕には想像もつかない。

僕がそのことを正直に話せば、丸喜先生は照れたように笑いながらも自分だけの功績じゃないと謙遜した。

「それこそ君のお陰さ、海藤君」

「僕ですか？」

「ああ、君が生徒の相談に乗ってくれていたことで皆の心のバランスが何とか保たれていたんだ。特に、鈴井さん」

その名前が丸喜先生の口から出たところで、カップを傾ける僕の手がピクリと震えた。

「君が止めていなければ恐らく彼女の心には消えない傷が残っていた。一朝一夕のカウンセリングではどうしようもないほどのね」

話しながら、丸喜先生は手に持ったカップをぎゅっと握りしめる。最悪の事態が起こったときに鈴井さんがどんな行動をしてしまうのか、これまで多くの患者を診てきた彼だからこそ想像してしまったのかもしれない。

「そういう意味でも、君には本当に感謝しているよ。だけど、当の本人である君自身の心が休まるときがあんまり無いんじゃないかとふと気になってね。人から頼られる人ほど、内側に溜め込んでしまいがちだから僕で良ければ話し相手になろうかと思って。回りくどくなっただけ僕が今日君を呼んだのはそういう目的があったんだ」

「そうだったんですね、気を遣わせてしまったみたいでなんか申し訳ないです」

「そこで謝罪が出るあたり本当に君って学生じゃなくて社会人みたいだよねえ」

丸喜先生の言葉に内心ギクリとしてしまったが、表情には出さずにコーヒーと共に飲み下す。確かに僕は相談を受けるタイプではあるけど誰かに相談をする人間では無かったなと思う。

「と、君を呼んだ理由はそんなところだけ。どうだろう、何か話したいことはあったりするかい？ もちろん雑談でも構わないよ。僕としては君と他愛無い話をするだけでも楽しいからね」

丸喜先生はそう言って微笑む。何でも良い、と言われると改めて何を話したのかと思ってしまう。少し目を伏せて考えを巡らせてい

た僕だったけれど、ふと思い当たることがあった。雑談のネタにするにはあまり向いていない話題かもしれないけれど。

「それじゃあ、ちよつと気になって聞きたいことがあるんですけど」

「僕にかい？ 良いよ、何でも聞いてくれて」

「前からカウンセラーって仕事に少し興味があつたんですよ、心にトラウマを抱えてしまった人をどういう風に癒すんだろう、とか」

「お、僕の仕事に興味を持ってくれたんだね、それは嬉しいなあ」

僕の言葉に丸喜先生は破顔する。

「僕の話、というよりも単純な興味を優先して申し訳ないんですけどね」

「気にしなくて良いさ。むしろ君みたいな子にカウンセラー、臨床心理士に興味を持ってもらえるのはとても嬉しいからね」

それから丸喜先生はそれはもう嬉しそうに話をしてくれた。カウンセラーとしてどのようなことを心がけているのか、どのような手法を用いているのか。

「よく催眠術でコインを左右に振ったりするよね？ あれって実は心理療法でも似たようなことをするんだけど」

そう言つて丸喜先生はポケットからジツポライターを取り出して火をつけた。そしてライターを僕の目線の高さに持ち上げ、左右にゆらゆらと揺らす。

「こうしてライターの火とか、人の指を左右に振つて目で追つてもらうんだ。人の脳は左脳と右脳がそれぞれ異なる役割を担っているんだけど、それを脳梁と呼ばれる器官が連結しているね。こうして視線の動きを左右に振ることで脳の働きを活発にするほか、脳梁の情報のやり取りを実際に活発化したりするとも言われているんだ。そしてトラウマの原体験となつている記憶を呼び起こし、言語化、客体化することでその記憶を適切に受け止められるようにするんだよ」

ライターやろうそくの火を使うのはそれが人によつては安心感を与えることにも繋がるからと言う。もちろん火にトラウマがある人に対してそんなことをするわけにはいかないけれど。

「まあこうした本当に治療らしい治療をすることって珍しいけれど

ね。多くは会話や文字起こしで記憶を言語化することが大事な。トラウマを抱えている人はまず原体験を適切に追想することが出来ないからね」

「なるほど、トラウマは過度に過去の記憶を恐れているからまずはそれを主観的な記憶から客観的な記録に変換する、と」

「呑み込みが早いね、その通りだよ。心の病ってそれこそ病気やケガみたいに治療法、特效薬が無いし、カウンセラーや心理士のやっていることって治療と言いながら会話をするだけだから軽んじられることもあるんだけど、きちんと方法論は策定されているし、素人とプロのカウンセラーじゃ採れる手段も効果も変わってくる、れっきとした医療行為なんだよ」

そう語る丸喜先生の顔は自信に満ちていた。それはきちんと努力を積み重ねてきた人特有の自負であり、自身の職分に対する責任を感じているからこそそのものだ。

「海藤君はカウンセラーにすごく向いていると思うよ。僕と同業になったら恐ろしいライバルになるんじゃないかと思うくらいにはね」  
「いやいや、大袈裟じゃないですかね」

丸喜先生は冗談めかした口調だけど、その目はキラキラと輝いてこつちを見ているあたり僕がもう少し興味を見せたら本当に色々勉強道具とかを貸して本格的に教えてくれるんじゃないかと思わされる。もちろん興味が無いわけじゃないんだけど、本当に聞きたいことはそれだけではない。

僕は嬉しそうな丸喜先生に申し訳なさを感じながら、聞きたいと思っていたことを口にする。

「それじゃあ例えばなんですけど、強いトラウマを抱えて、どれだけ時間をかけても言語化すら適切に出来ない患者がいた時ってそれでも諦めずに正攻法の治療を続けるんですか？ あるいはその記憶、原体験を変えてしまう、みたいなことって出来るんですか？」

「記憶や原体験を変える？ どういうことだい？」

「例えばトラウマ自体を無かったことにする、とか。トラウマの記憶はあるけど自分はその当事者じゃない、傍観者みたいな立ち位置だっ

たと錯覚させてしまつて強制的にトラウマを客観化させるようなことは出来るのになつて。トラウマを感じている自分を他人に置き換える、みたいなイメージですかね」

「……トラウマを感じている自分を他人に置き換える」

僕の言葉を聞いた丸喜先生から柔和な笑顔が消えた。顎に手を当て、僕の言葉を真剣に吟味しているらしく、目を閉じている。

「面白い発想だけど、それはオススメしないな。そうやって認知をすり替える手法は無い、ことは無いよ。言つてしまえば催眠術は人の無意識に働きかけて認知を弄る技術だからね。けれど心理療法にそれを応用して仮に治療出来たとしても、いつ暗示が解けて再発するから分らない。それこそずっとカウンセリングし続けるか、余程強固な暗示を掛けるかしないかね」

僕としては本当にそれで患者が救われるなら良いけどね、と丸喜先生は付け足した。

「患者が救われるなら、ですか」

「ああ。耐え難い現実には押し潰されてしまうくらいなら、甘美な夢であつても希望を持って生きられる方が良い。僕はそう思うよ」

「そう、ですね。全てを終わらせてしまうよりは、その方が良い、というのも理解出来なくも無いです」

丸喜先生の言葉は確かにその通りだと頷けるものだったが、僕は素直にそうだと頷くことは出来なかつた。甘美な夢に気付かず生き続けられるほど、人は強くも無いと僕が思っているからかもしれない。

例えば認知をすり替えて他人に成り代わつたとして、本当にそれでその人は救われたと言えるのか。僕はそれを易々と肯定出来そうになかつた。



Revelation of the Wheel  
of Fortune

「事情は凡そ明智君から聞いているわ。大変なことになったわね」

「いきなり二百万なんて吹っ掛けてくるあたり、ビビらせることが目的だと思ってますけどね」

丸喜先生と話した数日後、朝から忙しいだろうに冴さんが電話をかけてきてくれた。

「まだ録音は受け取ってないけれど、金城本人が脅迫したという証拠は非常に大きいわ。高校生一人を脅すのにあまりにも高い代償を払った。何が何でも捕まえてみせるから、あなたは私と明智君に任せて自分の身を第一に考えてちょうだい」

「すみませんが、お願いします。協力すると言っておきながら早速こうしてお手数を掛けてしまってますが」

「それこそ気にしないで。明智君がホームズであなたがワトソンなら、さしずめ私はレストレード警部かしら？ それにあなたは私の切り札なんだから。精神暴走事件の改めての分析を心待ちにしているわ」

冴さんの口調は初めて会った時よりも幾分か柔らかく、少しは心に余裕が出てきているのかもしれないと思えた。少なくとも僕や明智君と話している間は、彼女も多少はストレスから解放されているのかもしれない。検察庁に勤めている大人の助けになれているのだと少しは自惚れても良いのかな。ともかく冴さんにはまだ録音が渡っていないようで良かった。明智君にデータを渡すときに新島さんの名前を出さないようにしてほしいとお願いしたんだけど、どうやら彼は律義に約束を守ってくれているみたいだ。

「それについては過去の新聞をちよこちよこ漁っているのもう少し時間が欲しいですね」

「新聞なのね、今時珍しい情報収集のやり方ね。てっきりネットを利用するものだと思っていたわ」

「アナログ人間なものですから、僕は」

「……なんだか色々歳に見合わないわね、あなた。話せば話すほど上司や先輩と話している気分になるわ」

冴さんはそう言ってクスクスと笑う。内面と外面の食い違いについては僕も自覚している分改めて他人から指摘されるとギクリとしてしまう。もちろん表には出さないけれども。

「けど、金城は悪手を打ったわね。あなたに手を出されて明智君が珍しくお冠よ」

「そうなんですか？」

「ええ、昨日も金城の根城候補のクラブに強制捜査が入ったわ。奴は捕まえられなかったけれど、確実に安全圏を削り取っているわ」

場所の特定も含めた陣頭指揮を明智君があそこまで積極的に取っているのは初めてのことよ。

そう言った冴さんの言葉の裏には、どこか面白がっているような色が含まれているのに気付いた。普段はクールな明智君が熱くなっている理由が僕だとしたら冴さんからしたら彼の中に年相応の感情を見出して微笑ましく感じられるものなのだろうか。

「僕としてはそれで明智くんが危ない目に遭わないかも心配ですがね」

「安心して。むしろ警察と表立って協力関係にある分、明智君の方があなたよりは安全だから」

「なら良いんですけど。僕は僕で出来るだけ自衛するようにはしてきます」

「そうしてちょうだい。お望みなら警察に依頼してこつそりと護衛を付けることも出来るけれど？」

「それについては少しだけ待ってもらえませんか？」

「あら、どうして？」

冴さんに問われて少しだけ言葉に詰まる。僕が新島さんを人質に取られて脅されている以上、僕が金城に怪しまれた場合、真っ先に被害に遭うのは僕ではなく新島さんだ。なので僕としてはしばらくは金城に目を付けられない程度に大人しくしておく必要がある。その

ために店長に泣きつかれたけれどバイトもしばらく休ませてほしいとお願ひもしたのだ。僕一人が被害を被るならともかく、お店にまで迷惑がかかってしまうのは申し訳ない。

だけどせっかく明智君が隠してくれたのに頼んだ当の本人である僕がバラしていくわけにはいかないだろう。どうやって誤魔化したものか。

「今の金城は僕に接触した直後から捜査が苛烈になってきたと思っている。そうすると僕と警察の結びつきを疑うでしょう?」

「それは……、確かに言われるとそうなるわね」

「そんな僕が警察の護衛を付けてもらったら用心深い金城は絶対に気付く。今はまだ脅迫程度で済んでますけど、もし繋がりがあると思われたらもつと直接的な手段に訴えかけてくるかもしれない。だから、明智くんと冴さんが早く金城を捕まえてくれることを期待してますよ」

「まったたく……。そう言われたら頑張らざるを得ないわね、大人としては。報酬は高くつくわよ、バーノン君?」

「この前も思いましたけどダイ・バーノンなんて今時の子は分からないですよ。というか今時じゃなくてもマジシャンとかに詳しくないと分からないと思いますけどね」

「……でもあなたは分かるじゃない」

「そういう意味では僕も若くないのかもしれないです」

「……なんだかショックだわ」

遠回しに若くないと言われたことに傷ついたのか、少し拗ねたような口調になる冴さん。電話越しでも唇を尖らせている画が想像できず僕も笑ってしまった。その気配を感じ取られたのか冴さんが何か言いたいことでも? と問い詰めるモードに入ったので話題を変え、るために新島さんのことを切り出してみる。

「そういうえば、真さんとは仲直りできました?」

「それは……、まあ、最近は忙しくて」

口ごもった冴さんの様子に、この人、気まずさを仕事で紛らわせるなど悟る。僕と軽口を叩けるくらいになってるんだから早く仲直

りすれば良いのに。

「遅くとも金城の件が終わったら仲直りしましょうね？」

「……善処するわ」

「それ結局何もしないやつじゃないですか。気まずいなら僕も間に入りますから」

「流石にそれは大人として情けないから遠慮しておこうかしら……」

そう思うなら仲直りしたら良いじゃないですか、という言葉は飲み込んだ。冴さんも割と本気で凹んでいそうなので僕がこれ以上言うことでもないだろうし。

そして放課後、今日は生徒会活動も休ませてもらい、さっさと帰ろうと鞆を肩に掛ける。そして窓から校門の方へとちらりと視線を向けた。これは金城からの電話があつてから不本意ながら日課になつてしまったのだけれど、僕が秀尽学園生だということは向こうもとつくに分かつている。そこから僕に更にプレッシャーを掛けようと思えば、例えば配下を使って僕の家を突き止め、家族の行動パターンを割り出す、といったこともしてくると僕は考えていた。

まあ窓から見ただけで僕を尾行しようとしている人間がいるかどうかなんて僕には分かるわけも無く、後は適度に寄り道して尾行されていたとしても撒けるかどうか試すくらいだろう。

「尾行されてませんように。フィジカルで迫られたら当然負けるからね」

小さく呟きながら僕は校門を出て駅へと向かう。同様に下校している秀尽生に紛れながら歩き、いつも乗っている電車とは別の電車に乗る。目指すは新宿だ。たまにはいつもと違う本屋に足を運ぼう、というのと本当に尾行されていたら新宿辺りは夜になれば警察が見回りをしていたりするのでそこに厄介になろうというつもりだった。

「ということやって来たは良いものの、本屋だけで時間が潰せるわけもなし」

新宿に着いて早速本屋に足を運んだのだけど、店舗がそれほど大きくないので早々に目ぼしいものは見終わってしまった。お陰で僕を尾けていそうな人がいることはまあ分かったから良しとするけど。やはり時間を潰すなら神保町の古本屋に行くべきだな。あそこなら何時間でも過ごせる自信がある。

一つしかない入り口で待ち伏せされていては尾行を撒くも何も無いので僕は諦めて街をぶらつくことにする。

「あ、あの、そのあなた……！」

そうやってブラブラしていると、どこからか声が掛けられた。人間というのは不思議で、自分に向かって掛けられている声というのは名前が無くても何となく分かってしまうものだ。何かと思つて声の主の方に振り向けば、表通りから少し裏に入ったところ、その道脇に折り畳み式の机の上に青紫色のクロスを敷いただけのテーブルと同じく折り畳み式の椅子という簡素に過ぎるテーブルセットからこちらを見据えている金髪の女性と目が合う。

「僕に何か？」

「あ、すみません。少し不思議な雰囲気を感じたもので。その、占いにご興味はありますか？」

近づいて行つてよく見れば、テーブルの上にはタロットカード。こういうときは水晶玉なんじゃないかと僕の中のステレオタイプな場末の占い師像との違いを感じながら、僕は促されるままに彼女の対面の椅子に腰かけていた。

「不思議な雰囲気ですか？ ただの高校生なんですけどね」

「ええ……、でも明らかに変な……。いや、ちよつと占わせてもらつても良いですか？ これについてはお代は要らないので」

まさか初対面の人に変、とまで言われてしまうとは思ひもよらなかつた。まあお代も不要で占つてくれるのだから折角なので占つてもらおう。

そう思つて領けば、彼女は一言お礼を言つてからタロットカードを慣れた手つきで切り始める。僕にも何回かカットするように促しながら、僕にはあまり理解できないけれど恐らく決まりがあるのだろう

形にタロットカードを順番に並べていく。

そうしてカードを一枚一枚開いていくたびに、彼女の顔が不可解なものを見るような表情になっていくのを面白く感じながら眺めていると、最後の一枚を前にして彼女の手が止まった。

「やつぱり今まで見てきた人とは違います。目の前にいるのはあなた一人だけのはずなのにまるで別の人も同時に占っているような……」  
「それは、ちよつと僕に言われてもよく分からないですね」

冴さんと言いいこの人といい、僕が関わる年上の女性は鋭い人が多くないだろうか。というかこの人の占いの腕はもしかしなくても確かなものみたいだ。

「あ、そうですね、ごめんなさい。でもやつぱり私の直感はずししかったみたいです。明確な道筋の見えない人なんて今までいませんでしたから」

そう言いながら彼女が開いた最後の一枚に描かれていた絵は中央に丸が描かれ、四隅に天使、獅子、鷲、牡牛のシンボルが配置されたカード。

「運命の輪の正位置、ですか。確かにその通りかもしれませんが」

「どういうことですか？」

「運命の輪は逆らうことの出来ない宿命だったり、人間を超越した力、そして吉も凶もないニュートラルな心情を表したりします。何となく私があなたに感じた雰囲気に沿っていると思ったので」

「宿命ですか。そんな大したもの抱えていないと思ってるんですけどね」

ただ、金城に絡まれてしまっている今現在を不運な宿命と捉えるなら確かにその通りかもしれない。

「でも、例えば悪いことが自分の身に起こったとしても、そこまで強く嘆いたりはしないんじゃないですか？ 自分の不運を呪ったり、誰かに責任を転嫁したりはしない、そういう人が運命の輪に表されることが多いんですね」

「へえ……」

言われてみればそうかもしれないと思う。僕の場合は性格的な問

題というよりも前世の記憶という経験の差、と言っても良いか分からないけどそういった類のものだと思うけれど。この人の言うことはどうやら並外れたコールドリーディングの技術によるものと言う訳でも無さそうだ。もちろんこちらを観察しているのは分かるけれど、コールドリーディングをする人はそれをあまり感じさせようとはしない。特に占い師みたいな自身の言葉を客に信じさせたい人は占い師自身の超人的な能力を信じさせるために心理学的な技術を用いていることは極力隠そうとする。

そういう意味では僕の反応を窺うような素振りを隠さないこの人は職業占い師としては未熟だと言えるかもしれない。それ以上にこの人の占いの腕を信じかけているけれど。

「こんな人もいるなんて、東京は凄いですねえ」

「僕としてはいきなり占われて感心されて喜び半分困惑半分ですよ」

そう言って朗らかに笑う占い師さんに色々と考えていた自分が逆に間抜けみたいに感じてしまう。

「ああ、確かに名前も名乗らずいきなり不躰でしたね、すみません」

御船千早、と名乗った彼女はにつこりと笑って頭を下げる。名乗られておいて名乗り返さないのも座りが悪いのでこちらも自己紹介をして占いというよりもどこかの飲食店で相席になったときのような微妙な雰囲気になる。

「ええっと、それで私としてはお時間を頂いてしまったのでよろしければ何か占いしましょうか？ お代は結構ですよ」

「本当ですか？」

僕としては御船さんの占い師としての実力に疑いは無いので常識の範囲内であればお金を払うのも吝かでは無いのだけど、一回無料で占っていただけのことなので厚意に甘えておこう。

「今現在困ってることなんですけど、僕を尾行している人がいるので何とか撒きたいんですけど、どうしたら良いですかね？」

「えっと……、それは警察に相談した方が良いのでは……？」

# The ultimatum to bank

「それで、事情は分かったけどだからってウチに来るのはどうなのよ……」

「いやあ、ご迷惑お掛けします。しばらく匿ってもらいたくて」

占い師の御船さんと別れた後、尾行してきている人間をどう撒くかを考えた末に僕が訪れたのはBARにゆうカマーだった。

カウンターの向こう側にいる店主のララさんはやれやれとため息を零しながらウーロン茶の入ったグラスを僕に差し出してくれる。

「迷惑とか思わなくても良いわよ。ウチは多少の風評被害を受けてもビクともしないわ。というかこういふときこそ警察を頼りなさいよ」「ストーリー被害って中々警察も動きにくい面がありまして……」

特に僕のようにまだ尾行されている気がする、というだけでは中々警察も動いてくれないのだ。明智君に言えばそれでも何とかしてくれるかもしれないけれど、今は金城のアジトを潰すので忙しいだろうし、少し連絡を取るのが躊躇われる。

「にしても、高校生を脅すなんてシャバいことする半グレもいたもんね」

「今も昔もそういう輩から見れば学生っていうのはカモでしょうから」

大人というには肉体的にも社会的にもひ弱で、そのくせ年頃の万能感があつて向こう見ずな面を見せる。悪どい人間にとっては垂涎の的だろう。

良く冷えたウーロン茶で喉を潤していると、店のドアが開いて来客を知らせるベルが鳴った。

「ララちゃん！ とりあえずビールちょうだい！」

入ってきたのはサングラスを頭に乗せ、ジーンズに黒シャツといったもの格好をした大宅記者。彼女は店に入るなり大声でビールを所望し、僕の隣にどかりと腰を下ろしてこちらを見やる。

「それで？ 結構面倒な手合いに絡まれてそうじゃん？ 店の前で普段は見かけない奴がウロチョロしてたし」



そう言う大宅の目は油断ならない鋭い光を放っていた。記者特有の、美味しそうなネタを見つけたときに放つ光だ。酒が入っていたときも情報の選別眼は確かなものだったけれど、まだ酒の入っていない彼女が浮かべる野性的な笑みは普段がどうあれ彼女が有能な記者だということを感じさせるものだった。

「話すと長くなるようで短いんですけど……」

彼女に対しては隠すことでもない上、有益な情報の一つでも貰えないかという打算も込みで僕は事情を彼女に話す。ララさんが毎日のように飲みに来る大宅さんに小言を言いながら三杯目のビールを注ぎ終わる頃には一通りの事情説明は済ませることが出来た。

「なるほどねえ、あんたも結構な案件に首突っ込んだね」

「金城の居場所に心当たりなんかあったりしません？ 幼気な学生を助けると思って」

「自分の口で言うあたり全く信用ならないのよ、あんたの幼気は」

それに警察が掴んでいる以上の情報は無い、と大宅は苛立たし気に呟いた。どうやら金城の用心深さは筋金入りらしい。大宅も上司から投げられた仕事を処理する傍ら、金城については探っているらしいが巧妙に足跡は消されてしまっており、候補は挙がるものの決定打にはならないと言う。

「おかしくない？ 相手はただの半グレよ？ 本職のヤクザがバックにいるとしてもそこまで痕跡を消せるもんじゃないでしょうに」

大宅の言を聞いたララさんがカウンター越しに怪訝な表情でこちらに身を乗り出してくる。そんなララさんに同調するように大宅もアルコールでやや赤らみ始めて据わった目でジョッキをガン、と机に叩きつけた。

「ほんとそれよ！ どうしてただの半グレの元締め程度がここまで痕跡消せるわけ?! 絶対におかしいでしょ！ この裏にはデカい闇が潜んでると睨んでるわ」

そこからは彼女の酔いどれ推理ショーの始まりだった。やれ警察上層部が金を握らされて捜査妨害しているのだの、果てには政治家と癒着していて不可侵領域になっているのだの様々な推理を披露してく

れる。酔い交じりの妄想も多分に入っているだろうけど、彼女の推理は僕や明智君のそれとも合致している所が多少あり、彼女が独自に集めた情報から推理したのであれば彼女は想像以上に色々な伝手を持っていて優秀なのだろう。あるいは僕や明智君の考えたことが酔っ払いの妄言と同レベルということなのかもしれないが。

「それはともかく、あんたも気を付けなさいよ。あたしの記者としてのカンが言ってるわ、金城の件はヤバいってね。似たようなヤマを追いかけてたあたしのカンだからまあ外れてないわ」

「そうは言われても既に目を付けられてしまった後ですしねえ」

気を付けたところで向こうが見逃してくれる段階は過ぎてしまっている。後は明智君と冴さんが金城を捕まえてくれるのを祈ることしか出来ないのだ。

「その割にはまったく焦ってないあたり、警察に相談できるアテでもあるんでしょ？ その伝手を使って保護してもらうなりすべきでしょうが」

「ララさんにも言われましたね、それ」

あはは、と苦笑して話を濁す。今は僕の保護よりも金城の捜索に力を割いて欲しい。僕の動きが鈍っていて、尚且つ警察が活発になり始めているとしたら金城もこちらにあまり構っていられないんじゃないかないかと期待もしている。あるいは僕が情報を流したと激昂して更なる無理難題を突き付けてくる可能性も考えられるけれど。

そうやって酒も入ってヒートアップしていく大宅さんを横目に、僕は空になったグラスを持って立ち上がる。

「ララさん、ウーロン茶ありがとうございます」

「気にしないで、その酔っ払いにツケとくから」

「ええ〜？ ヒドイよおララちゃん！」

「良い歳して高校生の前で酔っばらってる報いでしょ」

ブーブーと文句を言う大宅さんを無視してララさんは僕からグラスを受け取る。

「ま、その酔っ払いはともかくとして、危ないことに首を突っ込んだりするもんじゃないわよ」

「仰る通りなんです、知り合いが困っているのを見るとどうにも放っておけなくてですね」

「ハア、受け答えは歳不相応なくせにそういうところは歳相応なんてチグハグね、あんた」

ため息交じりに零された呟きに苦笑を返す。自覚しているのだけれど、中々改善出来ないあたりこれは僕の生来の気質だ。それもここまで根が深いと今生に限らないものなのだろう。

「あたしはただのバーの店主だから大したことはしてあげらんないけど、困ったことがあったら寄りなさい。話くらいは聞いてあげるわ」  
「ありがとうございます。ララさんとの話はテンポが合うのか楽しいですからね、流石はバーのママです」

「だからそういうところが歳不相応だつてんだけど……、まあいいわ」  
ララさんはそう言って一度店の奥に引っ込んだかと思えば、パンパンに膨らんだごみ袋を持ってカウンターに出てきた。

ごみ捨てにでも行くのだろうかと思っていると彼女はついておいでと言わんばかりに手招きする。

「ほら、あんたはこっちに来なさいな。あたしが店の前の連中を惹きつけてるうちに帰るんだよ」

「何から何までありますがどうぞございます」

ララさんのご厚意に甘えてまだ飲み足りないと思ふと騒ぐ大宅さんを見つめてララさんは店の扉を開ける。雑居ビルの一室を借りているこのバーには裏口という洒落たものは付いていないため、どうしても出入口は一つに限られてしまう。ただし、雑居ビル自体には裏口は存在しているのだ。ララさんはそのガタイの良さと扉を巧みに利用して雑居ビルの入り口から僕の姿を隠すと、そのまま裏口に繋がる通路を示してくれる。

「行きな。表の連中はしばらくはあたしの姿に注目するだろうからね。適当に因縁も付けて絡んでおいてあげるわ」

「何から何までありますがどうぞございます。今度お礼させてください」  
「なら店の手伝いでもしてもらおうわ」

ララさんの姿に隠れながら、示された通路へと潜り込むと裏口の扉

の前で少しだけ立ち止まる。

「なにジロジロ見てんのよアンタたち。そんなにオカマが珍しいっての?」

「ああ?」

そしてララさんが口論を始めたのを聞くと扉をそつと開けて路地へと出ていく。後は駅まで走るだけだ。

僕は後日改めてお礼を言いに来ないといけないと心に誓うと、夜の新宿へと駆けていくのだった。

## 海藤 徹様

過日の損害請求の件につきまして、生じた損害が予想以上であったため、

下記の通り追加請求とさせて頂きますことを連絡いたします。

つきましては先日お伝えした支払期日までにご用意ください。

追加請求額 金二百万円也

翌日、朝一番に僕のスマホに届いたメールには金城からの慇懃な脅迫が書き連ねられていた。そして添付されていたのは僕が校門から出てこようとするとところや、駅に向かって歩く姿を撮影した画像。僕が金城の監視下にあることを知らせるためのものだろう。

「こうして連絡を寄越すっていうことは明智くんが想定以上に追い詰めてくれているってことだよね」

メールの文面にも予想以上の損害とある通り、金城にとっても自身の逃げ場であったクラブが複数強制捜査の対象になったのは意外だったのだろう。たかが高校生と油断していたら、そこから思わぬところに繋がって自身を窮地に追い込もうとしている。だから起点と考えられる僕をこうして脅しにかかる。

「だけど僕の家を押さええているわけじゃなさそうだし、まだ猶予はありそうだ」

金城なら僕の住所が分かればそれを示唆する画像を添付しないは

ずがない。だけど、メールに添付されていたのが新宿を歩いている姿までであるあたり、やはり昨日の尾行はララさんのお陰で撒けたらしい。とするとこのメールは金城の焦りを反映しているものだと思うって間違いなさそうだ。

僕は送られてきたメールをそのまま明智君と冴さんに転送する。金城が直接脅迫してきた貴重な証拠だ。今回については僕の名前しか出ていないから何も隠すことなく二人に共有することが出来る。

「お、早速明智くんから返信だ」

二人にメールを転送してから五分も経たないうちに明智くんから返信が来る。そこには捜査は順調に進行していること、尾行されていると感じたら最寄りの交番に立ち寄って助けを求めるようにとの内容が書き連ねてあった。警察には情報提供者として保護してくれるように根回しまでしてくれるらしい。至れり尽くせりの対応だけど、昨日はあんまり頼るのもなあと思った矢先にこれだから少々心苦しい。

その数分後には冴さんからも返信があり、明智君と似たような内容でこちらを案じてくれていることが伝わる文面だった。ありがたいことに僕の周囲には頼れる人が多い。二人にはお礼のメールを返し、さて朝のHRまで恒例の読書でもと考えていたところで生徒会室の扉が開いた。

「おや、珍しいお客さんだね。おはよう、雨宮さん」

「おはよう」

扉の向こうにいたのは癖のある黒髪に眼鏡といういつもの風貌の彼女。眼鏡の奥の目はこちらを案じる光を宿していた。

「金城から脅迫されると、聞いた」

「……それは新島さんから?」

僕が問い掛けると彼女はコクリと頷いた。

「新島さんといつの間にか仲良くなったんだね。良いことだと思うよ」

「うん、真は心強い仲間になってくれた」

あの日、新島さんが言った私が何とかしてみせる、という言葉の意

味が今の一言で繋がった。つまりはそういうことだ。あの日以来、彼女が生徒会室に顔を出す頻度が少し落ちたのも頷ける。何にせよ、新島さんと雨宮さんが対立することにならなくて良かった。

「そう、それなら安心かな」

「金城のことは、近いうちに何とかする」

そう言った雨宮さんの目は強い意志を宿していた。斑目が怪盗団のターゲットになったと僕に告げたときと同じ目だ。

「金城は裁かれるべき悪だと怪盗団は考えた。副会長は斑目のように、金城にも情状酌量の余地はあると思う？」

「……流石に僕もそこまで聖人にはなれないよ」

雨宮さんの問い掛けに僕は首を左右に振ってそう答える。本当の聖人であれば金城にも救われるべき事由を見出せるのかもしれない。けれど僕は全知全能でも無いしそこまで慈悲深くもなれない。

「直接の被害者にもなった僕が言えることは、金城が一刻も早く捕まってこの騒ぎが収まって欲しい、ということだけかな」

人には善悪両方の側面がある。その言を違えるつもりは無い。けれど、僕には金城の善性を見つけ出せるほどの彼との繋がりは無かった。ただそれだけだ。僕の言葉を聞いた雨宮さんは、少しの沈黙の後口を開いた。

「……例えばの話。金城は幼い頃から家族にも、友人にも恵まれず、誰からも愛されずに育ったとして」

幼少期から誰にも認められず、褒められず、植え付けられた劣等感に苛まれ続けた結果、金城は周囲全てを敵と考えるようになった。彼を正道に立ち返らせることが出来たチャンスはそこで潰え、後に残ったのは自らの肥大したコンプレックスを解消するためだけに周囲を食い潰す醜悪な欲望のみ。そうなったとして、金城の悪性は本人が元々持ち得た特性なのか、あるいは周囲の環境がそうさせたのか、そこに金城を擁護する余地はあるのか。

まるで見てきたかのように金城の境遇を語る雨宮さんは、僕に再び問い掛ける。そうだったとして、金城は許されるべきか、そうでないか。

「……金城の犯してきた罪を裁くのは僕じゃない。そしてその上で僕は金城が真に更生したときに、それを受け止めてあげられる人がいれば良いと思う、とだけ言っておこうかな」

「それは金城がまともになれば、罪を償えば許すということ？」

「一個人として、金城を許せるかと言われると素直にハイとは言えないかな。僕だけならともかく、新島さんを巻き込んだことの方が僕にとっては許し難いことだから」

僕がそう言うと、雨宮さんは目を丸くして驚きを露わにした。

「副会長が怒っているとは思わなかった」

「僕だって人間だもの、怒ることくらいあるさ。それを表に出しても何もならないと思っているから隠しているだけ」

金城の罪の軽重はそういう個人の感情とは別のところで勘案されるべきものだから、僕の個人的な好悪とはかけ離れたところで金城には裁きが下されることだろう。

「僕としてはさつき言ったことが全てだよ。金城が更生したときに、受け止めてあげられる人がいても良い。それは少なくとも僕では無いけれど」

「……そう、副会長が真のことを大事に思っているのがよく分かった」

「新島さんだけじゃなくて友達は皆大事に思ってるよ？　もちろん雨宮さんも大切な友人だし」

「……これは強敵」

そう言って雨宮さんは先ほどまでの緊張感を緩めて呆れたようにため息を吐いた。

金を貪る暴食の大罪人、

カネシロ ジュンヤ殿。

詐欺に明け暮れ、未成年だけを狙う愚劣な手口。

我々はすべての罪を、

お前の口から告白させることにした。

その歪んだ欲望を、頂戴する。  
心の怪盗団『ザ・ファントム』より。

翌日、一夜にして渋谷の街中に貼られたその予告状は、ターゲットである金城のみならず、斑目のときを上回る人々の目に触れるところとなり、人々の心に怪盗団という存在が深く刻みつけられるきっかけとなった。



The bank of Gluttony goes bankrupt

「おいおい、どうなってんだよこれ……」

「まさかここまで予告状が劇的な効果を見せるとは」

「いや、鴨志田の時も斑目の時もこんなことになって無かったっしょ」  
予告状を出したその日、金城のパレスに乗り込んだ怪盗団一行の前に現れたのは昨日までと大きく様相を変えた暴食の銀行の姿だった。

その姿に竜司、祐介、杏の三人が唾然として口を開く。

「銀行が、燃えてる……?」

「予告状を出すだけでこんなことになるものなの?」

渋谷全てを自らの懐を潤すための資金源と考え、警察にも誰にも捕まらないという金城の自負を示す銀行はあちらこちらが炎に包まれていた。

モルガナも竜司達に劣らず目を丸くして驚いている。怪盗団として初仕事になる真だけが唯一、よく分かっているいと他の面々を見渡している。

「銀行も墜落してる」

蓮は渋谷のセントラル街に立つ自分たちが銀行を目の前に捉えられていることに気付く。今まで宙に浮かび、金城に客として認知されていたならば入り口に辿り着くことさえ出来なかった彼の居城が今は地に墜ちていたのだ。

「予告状を出されたことで自分が捕まるかもしれないと怯えている、ということかしら?」

「どうだろう。金城は自信家。あの予告状だけでここまで大きく認知を変えるとは思えない。それに斑目も鴨志田も、パレスの警戒度は上がっていたけどどこまで大きな変化は無かった」

真の疑問に蓮は今まで自身が見てきたものを語る。斑目を改心させて怪盗団の知名度が上がったとは言っても世間的にはまだまだ眉唾物の噂の一つに過ぎない。そんなものが金城に予告状を出したと

して、自分が捕まらないと絶対の自信を持っていた金城が揺らぐだろうか。怒ることはあっても金城の自信の源である銀行が失墜するような認知の変化は引き起こせないと蓮は考えていた。

「そうね、私もそう思うわ。ということは金城の認知にここまで大きな変化を起こしたのは私達じゃない。何か別の要因があるのよ。金城が誰にも尻尾を掴ませないと考えていた自信。その根底が揺らいでしまうような何かが」

真も蓮に同意して自分の考えを述べる。竜司や杏、祐介は二人の間で交わされる会話についていけず、目の前の光景をただしげしげと眺めることに終始していたが、モルガナは真と蓮の間に割って入る。

「それを考えるのも良いが、その前にさっさとオタカラを奪う方法を考えた方が良いぜ。ここまで大きな認知の変化だ。ワガハイ達が探り当てたオタカラまでのルートがガラツと変わっちまつてる可能性もある」

何より、とモルガナは銀行の入り口に視線をやる。それに釣られて皆がそちらを見れば、銀行の入り口からはガードマンが後から後から湧いて出てきており、墜落した銀行の周辺に広がっていく。そして興味を惹かれて集まってきた金城の認知上の人間、ATM人間を殴ったり、蹴り飛ばして周囲から排除しようとしていた。

「今までのパレスとは警戒度が段違いだ。これじゃ近づくことすらままならないかもしれないぞ」

「……確かに、それはかなりまずい」

「オタカラが具現化しているのは一日が限度なのよね？ このまま手をこまねいているわけにはいかないわ」

モルガナの懸念に、真は拳を握り固めて突き合わせる。強硬突破も辞さないというその態度に、祐介がそれを宥めた。

「落ち着け。恐らくオタカラの前には金城のシャドウが待ち受けている。奴と戦う前に消耗するのは可能な限り避けるべきだ」

「でもよ、これじゃ忍び込むのも一苦勞だぜ？ ここまで来たら無理やり行くしかねえんじゃねえの？」

祐介の言葉に、真に代わって竜司が反論する。

「でもフォックスの言う通りだよ。斑目にも苦戦したんだから、金城だって強力なシャドウだろうし、消耗してたら負けるかもしれないじゃん」

そんな竜司に杏が噛みつく。意見が割れちまったな、とモルガナが蓮に目配せをする。後はモルガナと蓮の意思表明だが、二人の意見が分かれた場合は結局多数決でも決められない。自分がリーダーとして進めるべきかと蓮は仮面の奥で眉間に皺を寄せる。

そんな怪盗団に近づく影が一つ。

「お悩みのようななら、もしかしたら助けになれるかもしれないよ」

その声に怪盗団の全員が弾かれた様に声の方向に顔を向ける。声の主は、一向にとつて馴染み深いものである一方でこの場にいることが全く信じることが出来ない人物だった。

「嘘だろ……?」

「どうしてあなたがここに……」

「……こんなところで会うなんて思わなかった」

竜司が何度目になるか分からない唾然とした表情を浮かべ、杏も訳が分からないと言葉を零す。蓮だけは、言葉とは裏腹に驚いた様子を見せることはなく、声の主を正面から見据えていた。それはベルベツトルームでのイゴールの発言を聞いてから、こうして会うことを何となく予想していたからかもしれない。

だが、そんな彼らの中にあつて最も大きな反応を見せる者がいた。それは怪盗団の中でも声の主を最もよく知っていると言っても過言ではないもの。

「なんで……」

「今回の件については僕も少し原因になつてるかもしれないからね。ということ、初めまして、怪盗団の皆。僕は海藤徹。副会長、つて言つた方が通りが良いかな?」

小さく零した真の疑問に、普段と変わらず、授業で分からなかったところを質問されたときのような気楽さで答えた徹。

「特にリーダーの君とドクロのお面の君、それと赤いお面の君とは鴨志田先生の城で会つたとき以来かな?」

「コイツ、カモシダのパレスでの記憶を持つてるだ?!」

徹の言葉にモルガナが今度こそ仰天だと目も口も大きく開ける。金城の認知上の存在であるとすれば鴨志田のパレスにいたときの記憶など持ちようが無い。それを持っているということは彼が金城のパレスの外から侵入してきたことを示している。

「斑目が示唆していたワガハイ達以外にパレスに潜り込んでいた奴っ  
ていうのはコイツのことか!？」

「まさか!？」

モルガナの言葉に怪盗団が一斉に身構える。その一方で徹自身は交戦の意思を見せることは無く、むしろ彼らに柔らかに微笑みかけた。

「安心してほしい。僕に君たちと敵対する意思は無い。僕は現実の僕とは無関係だしね。君たちの言葉で言うところのシャドウ、に近いものだけでも、少し特殊な事情があつてこうして鴨志田先生の城のことも覚えてるんだよ」

「シャドウ……?」

首を傾げて問い掛ける蓮に徹のシャドウは首肯する。

「その通り。君たちはこの銀行の最深部に行きたいんだろう? ここまで嚴重な警戒になったのは現実世界の僕が金城と関わったことも発端の一つだからね。そのお詫びと言っては何だけど、とりあえず強硬突破せずとも銀行の中に入るルートを提示してあげることが出来るよ」

徹のシャドウはそう言つて蓮に向けて右手を差し出す。他の面々の視線が蓮に集中した。

「ジョーカー、正直怪し過ぎるがワガハイはリーダーの判断に従うぞ」  
リーダーである彼女がどういう選択をするのか。いずれにせよ彼女の判断を支持する。蓮を見つめる目は皆がそう語っていた。

「怪しいと思われるのは承知の上だよ。けれど今の僕は君たちの味方だ」

揺るぎない視線で仮面の奥の自分を見つめる徹のシャドウに嘘を言っている様子は見られない。そう判断した蓮は思い切つて彼の手

を取る。

「……今はあなたを信じる。けれど特殊な事情というのは？」

「ありがとう。事情については今は言えないかな。これ以上の干渉は偽りの主に気付かれてしまう」

「偽りの主……？」

「ああ、気を付けて欲しい。特に君にはね」

気を惹かれる言葉を散りばめるだけ散りばめておきながら、それ以上話すことは出来ないと徹のシャドウは自身の口到人差し指を添える。

「さあ、案内しよう。こっちにおいで」

そしてそのまま蓮達を先導して歩き始める。何故鴨志田パレスでの出来事を覚えているのか。特殊な事情とは何か。金城の銀行へと繋がる道を知っているのは何故か。聞きたいことは尽きず、どこまで信じて良いのかも分からないが、リーダーが信じると選択した以上それに従おうと怪盗団は彼について歩を進めていく。

その選択が正しかったかどうかは、それからしばらくして金城のパレスが音を立てて崩壊していくことを見ればひとまずは正しいものだったと言えるかもしれない。

「また怪盗団よー！」

「みたいですね。これで僕の考え、怪盗団は金城と敵対しているという推理が優勢になりましたかね？」

放課後、僕は冴さんに呼び出され、明智君と冴さんの三人で以前食事をした小料理屋を訪れていた。まだ食事をするには早い時間のため、飲み物だけを注文した僕は、イライラとした様子の冴さんに苦笑いを返す。

「ところで明智君は？」

「彼なら予告状騒ぎで警察に協力を要請されているわ」

どうやら明智君もこの騒ぎで身動きが取れなくなってしまうって

るらしい。

「誰も彼も怪盗団！ あんなものにこの事件を横取りされるなんて我慢ならないわ」

冴さんは不満そうに呟く。この前のように興奮することこそ無いものの、やはり腹に据えかねるものはあるらしい。そんな怪盗団に妹さんが関わっているかもしれないかもしれませんよとはとてもではないが言い出せなかった。

「けれど今まさに金城の被害に遭っている人からすれば希望になっているのも確かですね」

「……警察が力不足なのは認めるわ。私もあなたから証拠を貰っても肝心の金城本人の身柄を拘束出来てないから動けていない。それを情けなく思う気持ちもあるわ」

ぎゅつとグラスを握り締めて冴さんは悩まし気に眉根を寄せる。

「だけど、だからといってただの一般人がこんな悪ふざけみたいなことをして許されるわけがないわ」

「まあ予告状なんて悪ふざけそのものですしねえ。こんなの怪盗団本人以外の愉快犯が出したといっても分からないですし」

怪盗団の予告状は彼らのトレードマークが描かれた赤と黒のカードに新聞から切り抜いたような文字を並べたもの。複製しようとするれば少し心得のある人間なら簡単にコピー出来てしまうものだ。だからこの予告状が本当に怪盗団のものなのかを判断することは難しい。雨宮さん達を見てなければ僕だってこれまでの予告状全てが同じ怪盗団によるものだなんて信じきれなかっただろう。

「そうよ。こんな悪ふざけに私の道が邪魔されるなんて……！」

もつとも、今の言葉通り冴さんの怒りは怪盗団に対する道義的なものに個人的なものも入り混じっているようだけど。その辺りに関しては冴さんの立場上仕方ない面も多々あるので窺める程ではない。

「これで本当に金城が改心したとしたら、世間は怪盗団を信じる、支持する方向に片寄っていきそうですね」

「それで警察や検察が無能の谤りを受けるのが我慢ならないわ……」

特に金城の件を追っていた冴さんは怪盗団なんてものに先を越さ

れてしまったと検察庁内での風当たりが強くなることも危惧しているらしい。

「女だから、なんて舐めたことを言っている上を何とか認めさせようとしてののに。これでまた足踏みする羽目になるなんてね」

あなたも悔しくないの、と冴さんは問うような視線を投げかけてくる。やや鋭さを感じるその視線を僕もお茶で口を湿らせながらどう返したのかと思案する。

「僕としては、世間が熱狂しすぎてしまわなかが不安ですが怪盗団そのものに対して怒ったりすることは無いですかね」

「どうして？　あなたも鴨志田の件を怪盗団に先を越されて解決された口じゃない。コツコツと証拠を集めていたのに、怪盗団なんてふざけた奴らがこつちを嘲笑うみたいに解決していく。腹立たしくは無いの？」

「そうは言っても、先に解決できなかったのは僕が動けなかったというところもありますし。これは僕が冴さんのように仕事として動いていないから言えることかもしれないですね」

怪盗団が犯罪者を改心させていったからといって警察や検察が無能だと言うことは出来ない。そんなことは少し考えてみれば分かることだけど、往々にして警察はこういうときに嫌われ者になりがちだ。

「どうしても警察とか検察って悪者にされがちですからねえ。反権力やヒールってやっぱり人気出ますし。そういうときはドラマや映画でも権力側が悪役になりますしね」

「普段は恩恵を受けておきながらこういうときは好き勝手サンドバツクにしてくるなんてね……」

やってられないとばかりにグラスを叩る冴さん。

「いずれにせよ、金城が怪盗団によって本当に改心されるかどうかを注視しましょう。警察でも足取りが掴めなかったあの男を怪盗団がどうやって接触したのか、改心の手口については分からないことだらけだけだ」

「鴨志田先生や斑目画伯については取り調べをしたんですよね？」

彼ら二人には少なくとも怪盗団は接触しているだろうし、そこから手口を聞き出すくらいは冴さんなら既に行っているとおかしくないと思っていた僕は思わずそう口にしていった。

「二人とも口を揃えて今まで自分のしてきたことの罪深さに気付かされたと言っばかりよ」

僕の予想通り、冴さんも当然二人に目を付けて怪盗団の手口を知ろうとしたが、二人からは怪盗団と思われる人物に接触された覚えは無く。ただある日突然、自分のしてきたことが途轍もなく罪深く、恐ろしいものだと思ってしまう、自責の念に堪えかねたらしい。

「その話を聞いて私は恐ろしくて仕方なかったわ。改心、と言っているけどそんな生易しいものじゃない。別人だと言っても良いくらいよ、あの様子は」

あんな風に自省する人間が、あつさりと自身の罪を告白するようなことがあるわけが無いと冴さんは言う。そもそも自省するくらいならあそこまで長く隠しておけるわけがないと。

「怪盗団は薬物なんか目じゃない強力な人格変化が出来る。その力が今はたまたま人を救う方向に作用しているだけ。海藤君、私はね、正直精神暴走事件と改心事件の犯人が一緒だろうと違っていようとどちらでも良いわ。でもね、どちらにしても犯人は捕まえて、あんな改心は起こらないようにしないといけない、そう思っているわ」

「それほどまでに怪盗団の力は危険なものだ?」

「考えてみて。姿も見えない相手に自分の人格がある日突然丸つと変えられてしまうことを。それを是としていられるのは傍観者でいるときだけ。怪盗団にせよ、精神暴走事件の犯人にせよ、彼らの判断基準は法じゃなく情よ。そんな曖昧な基準を良しとするのは私の立場としては真つ平ごめんよ」

法の番人として、怪盗団の存在を許容できないと、そう言った冴さんの目には怪盗団に対する私的な怒りは無く、検察として、大人としてのプライドが宿っていた。

「怪盗団の手掛かりに一番近いのはあなた。私と明智君ならあなたから貰った手掛かりを一番効率的に活かすことが出来る。これからも



協力を期待するわ」

「こんな僕で役に立てることがあれば。怪盗団の在り方はともかく、その力の危険性については僕も同じ意見ですから」

「次のニュースです。近頃、渋谷の学生を中心に被害が広がっていた特殊詐欺グループのリーダー、金城潤矢容疑者が先ほど自首したとの情報が入りました。繰り返します——」

静かなルブラン店内に流れるニュースキャスターの声。今日は梅雨も明けた7月最初の土曜日。僕は午前の授業が終わると久々にルブランへと足を運んでいた。

「警察は先日渋谷に撒かれた心の怪盗団からの予告状との関連も睨みながら捜査を続けるとのことですよ」

キャスターの声を尻目に僕は手元のスマホに目を落とす。そこには、つい昨日に金城から届いたメール。

彼が僕に要求していた金はチャラ。尾行で撮影した写真のデータも削除、新島さんにもメールではあるが謝罪をしたとのことだった。短い文章だったが、このメールの翌日に出頭したことから他の被害者にも同じような内容を送っているんだろう。

「心の怪盗団ねえ……、現代に蘇った義賊ってやつかしら。ねえ、マスター」

「あ？ 興味ねえな」

テーブルに座っていた老婦人の言葉にすげなく返す佐倉さん。接客業としてどうなのかと言われそうだが、ルブランのカラーとしてはこれが正解なんだろう。実際、老婦人も気にした素振りもなく料金を払って店を後にしたし。

「ったく、どいつもこいつも怪盗団とはね」

老婦人を見送った佐倉さんはカウンターの向こう側で呆れたようにため息をついて食器を洗う。

「まあ斑目画伯のときと同じことが起こりましたからね。ネットの掲示板なんか也大騒ぎですよ。愉快犯か、義賊かなんてね」

そんな佐倉さんに僕は怪盗お願いやチャンネルの掲示板を見せる。佐倉さんは画面を一瞥するとやれやれと首を振ってすぐに洗い物に戻った。

「んなことで騒げるなんて暢気なもんだな」

「ですねえ。でもある日突然人が変わったように真人間になるなんて変な話、気になるのも分かりますけどね」

「人が変わったように、ねえ……」

佐倉さんは僕の言葉が引つ掛かったのか、小さく呟いて手を止めた。

「どうしました？ 何か引つ掛かるところでもありました？」

「……いや、何でもねえ」

佐倉さんに尋ねてみるも、何かを振り払うかのように首を振ると黙々と食器洗いに戻ってしまった。これ以上何かを聞き出すのは難しいだろうな。そう思っただけで残ったコーヒーを啜っていると、ちょうどお昼時なのも相まって僕のお腹が空腹を訴えた。

「ん？ 昼飯まだ食ってねえのか？」

それを耳聴く聞きつけた佐倉さんが視線を上げてにやりと口の端を上げた。

「学校が終わってすぐ来たものですから。久々にここのコーヒーが飲みたくて」

「学生にしちゃコーヒーの味がよく分かってんじゃねえか。それならついでにカレーも食ってくか？ 自慢じゃねえが、ウチのカレーは

コーヒーと相性バツチりだぜ」

「カレー、良いですねえ。ぜひお願いします。それとコーヒーのお代わりも」

「あいよ」

佐倉さんの売り込みにあっさりと屈した僕はカレーとコーヒーを注文する。元々昼飯もここで済ませていこうと思っただけだったので願ったりといったところだ。喫茶店といえばナポリタンと僕の中では固定観念があつただけけれど、ここはカレーらしい。

しばらく待っていると、食欲をそそるスパイシーな香りを放つカレーが僕の目の前にドンと差し出される。そしてお代わりのアイスコーヒーも。

「お待ちどおさん」

「ありがとうございます。では早速……」

僕はスプーンを片手に早速一口パクリ。市販のカレーよりもやや辛めに整えられた味が舌を程よく刺激し、後を引く辛さに自然と次の一口を頬張っていた。そして熱々のカレーで火傷しそうな口に氷が浮かんだ涼し気なグラスからコーヒートを啜れば、辛みに負けないコーヒートの味が口の中に広がる。水出しなのか、苦みよりも酸味が強く感じられるが、それがまた見事にカレーの辛さをスッキリと洗い流してくれる。なるほど、これは交互にいけば無限に食べられそうだ。

気付けば、話すことも億劫にカレーとコーヒートを口に運んでいた。佐倉さんは自慢じゃないと謙遜していたが、このレベルのカレーは中々お目にかかれないものだと思つた。

あつという間にカレーを平らげた僕は、残ったアイスコーヒートも飲み干し、更に食後のコーヒートまで注文していた。

「いい食いつぶりだったな」

「いやあ、このカレーとコーヒートの組み合わせは良いですね。計算しつくされたカレーとコーヒートの調和でした」

「へへっ」

お腹が満たされ、満足げなため息を零す僕を見てにやりと笑みを浮かべながら、佐倉さんは食べ終わった僕のカレー皿を引き上げて流し台に持っていく。それとほぼ同タイミングで店の扉が開かれ、来客を知らせるベルが鳴った。

「ただいま」

訂正。来客ではなく帰宅だったようだ。肩に鞆を掛けた雨宮さんが入り口に立っていた。鞆からは黒い猫が顔を覗かせている。もしかして彼女って学校に猫を連れて来てるのか？

「副会長、来てたんだ」

「お邪魔してるよ、雨宮さん」

雨宮さんはぺこりと小さく頭を下げると、そのまま2階に上がるのではなく僕の隣に腰かけた。彼女の隣の席に置かれた鞆から黒猫が僕の様子を窺うように顔を出していたので、そっちに向かってヒラヒラと手を振ってみる。けれど黒猫はにやあと一声鳴いたかと思うと

鞆の中に引っ込んでしまった。

「やっぱり警戒されちゃったかな？」

「人見知りの猫だから」

雨宮さんはそう言って鞆のジッパーを開き、中に引っ込んでいた黒猫の頭を撫でる。猫は抗議するように鳴いて身を振るが、逃げたりはしなかった。

「ところで副会長はどうしてここに？」

「このコーヒーのファンだからね。最近忙しくて来れなかったけど、久々に顔を出そうと思って」

懸案事項も一つ片付いたしね、と視線をテレビに向ければ、ニュース番組はワイドショーに切り替わっており、そこでも金城の自首の件が取り上げられていた。ちょうど明智君がゲストとして呼ばれているらしく、司会のお姉さんから話を振られているところだった。

「渋谷で広範囲に活動していた特殊詐欺グループリーダーの突然の自首、これについて探偵の目からはどう見ますか？」

「やはり先日の心の怪盗団による予告状通り、斑目のときと同じく改心が起こったんでしょうか？」

「そうですね。その可能性は高いと思います。斑目も金城も、どちらも予告状が出てから数日後に自白している。それもどちらも人が変わったように。手口としても、犯行後の二人の変わりようからしてもどちらも怪盗団の改心だと言って良いと思います」

「世間では怪盗団は義賊だという見方が強まってきているようですね。以前に明智君が言っていた怪盗団は悪だという論もかなり苦戦を強いられているのでは？」

「僕は別に持論を述べているだけで誰かと論戦をしたいわけじゃないんですけどね。結構叩かれちゃって精神的にも参ってます」

画面の中の明智君は参っていると言いなながらも笑顔を絶やさず、そしてその笑顔も強がりには見えない自然体だ。だからかワイドショーの司会もあまり真剣に捉えずに茶化して話を進めている。

「だけど僕は言い続けますよ。怪盗団のやり方は間違ってる。誰かの心を勝手に弄るなんてやってはいけないことだって。例え結果とし

てそれに救われる人がいたのだとしても。間違ったやり方で得られた結果が正しいものだなんて、僕は言えません。あ、これって別に怪盗団に手柄を取られて僻んでるとかじゃないですからね?」

強い口調で言い切った明智君だけど、最後はおどけて冗談っぽく締めたおかげで番組の空気を壊すことなく進行させていた。ああいうところを見ると彼の処世術、場の空気感を保つ能力は素晴らしいと思わせられる。

「間違ったやり方……。怪盗団はそれでも自分たちの流儀を曲げない」

テレビから聞こえる明智君の持論を聞いた雨宮さんは、それでも強い決意を籠めた目で正面を見据えていた。

「……そうだね、前にも言ったけど、怪盗団は美学を持っている。世間の声なんかには左右されない。僕はそう信じているよ。それに、明智君はもし怪盗団が本当に間違った方向に進んでしまえばそうになったとき、怪盗団を止めてくれる力になると思う」

僕がそう言うと、雨宮さんは意外そうに目を見開いて僕を見た。

「副会長は明智君の味方?」

「味方、かもしれないね。彼の考え方は僕のそれとも通ずるところがあるし、個人的な親交も持っているから」

「……そう」

雨宮さんはそれだけ言うと、少し沈んだ様子で視線を手元に落とし、彼女にとっては身近な人物が怪盗団に真っ向から対立している人の味方だと明かされたものだし、この反応も仕方ないか。

僕としては怪盗団を捕まえようとか、彼らの正体を白日の下に晒そうなどという考えは無いのだけど、明智君に協力し続けていけばいつかはそうなるときが来るかもしれない。そのとき、僕は雨宮さんと明智君のどちらかを選ぶ必要があるのだろうか。

「雨宮さん、僕は……」

そこで僕が何を言おうとしていたのか。自分でも纏まらないままに口を開いたは良いものの、そこから先の言葉は出てくることは無かった。

雨宮さんの時と同じく、来客を知らせる入り口のベルが再び鳴ったからだ。

その音にカウンターの奥に引っ込んでいた佐倉さんが表に顔を出した。

「いらつしや……つてなんだ、あんたかよ」

そして彼にしては珍しく、表情に苛立ちを見せて出迎えの言葉を言い切ることは無かった。

「それでも客として来たつもりなんだけど、随分な挨拶ね」

聞き覚えのある声に僕の視線も自然と入り口に向けられる。

「冴さんじゃないですか」

「海藤君、奇遇ね」

店に入ってきたのは、もう暑くなってきたというのに相も変わらずスーツに身を包んだ冴さん。カウンターに座った僕と目が合うと驚いたように眉を上げ、佐倉さんに向けていた険しい表情をやや緩めると雨宮さんとは反対側、僕の隣に腰を下ろした。

「……ご注文は？」

「アイスコーヒーを」

そんな冴さんに佐倉さんは普段よりも無愛想な態度で対応する。そして冴さんの方もそれを気にした様子も全く見せず、淡々と注文を済ませると僕の方に向き直った。

「海藤君はどうしてここに？」

「きっかけは彼女を送ったことですかね。今はこのコーヒーのフアソだから通っているってだけですけど」

冴さんの問いに僕は隣にいる雨宮さんを示しながら説明する。雨宮さんも冴さんの方にペこりと頭を下げると、簡単に互いに自己紹介を済ませた。

「なるほど、だとしたら私とここで会ったのは偶然ということね。てつきりあなたもこれを知ったから来たのかと思ったわ」

「これ？」

冴さんはそう言いながら肩掛けの鞆から紙の束を取り出して僕に差し出す。こうして簡単に見せてくれるということは極秘の捜査資

料では無いんだろうけど、隣に雨宮さんもいるのに良いんだろうか。そう思いながら手渡された紙束の表紙を見てみれば、そこには見慣れない文字の羅列。

「認知訶学……？」

「そう。怪盗団の改心事件を追っているうちに私が見つけた可能性よ」

紙束は恐らく論文なのだろう。

『人の集会的無意識と認知の関わりについて』

著者：一色若葉

「認知訶学。これが怪盗団の改心手口に迫るヒントになる。私はそう思っているわ」

そう言った冴さんの目は、この前に会った時と打って変わり、ギラついた光を放っていた。



R a i s e a s i c k l e — s h a p e d n  
e c k

認知詞学。寡聞にして覚えの無い学問の名だ。冴さんから受け取った資料をパラパラと捲りながら流し読みする。

「既存の認知科学よりもより心理学、精神分析に寄った内容、といった印象ね」

資料に目を通す僕の横で冴さんが簡単に説明してくれる。確かにこの論文の中にも心理学用語が散見される。そもそも論文のタイトルにもなっている集合的無意識、なんてもろにユング心理学だし。

「人間は物理的な世界とは別に自分だけの認知の世界を有している、ですか。それを心象世界、あるいは認知世界と呼ぶと」

「認知の世界、というのがどういふものかは皆目見当もつかないけれど、認知世界がその人の世界の捉え方と考えればそれを何らかの方法で歪ませることで廃人化、あるいは改心が可能かもしれないでしょう？」

冴さんの言葉になるほど、と呟く。認知世界が想像出来ないけれどその中にも例えば『自分』が存在するとすれば、それに対して働きかけることで現実の『自分』にも影響を与えられる。そしてその方法を探求しているのが認知詞学ということなのだろう。

「その資料は渡しておくから暇な時にでも目を通して置いてちょうだい」

「良いんですか？」

「私はもう読んだし構わないわ。オープンソースの論文だからあなたでも検索すれば見つけられる資料だもの。それにあなたの見解も気になるわ」

冴さんはそう言って佐倉さんが運んできたコーヒーに口を付けると、満足そうに息を吐く。

貰えるものはありがたく貰っておこうとは思うけれど、それよりも僕が最初に感じた疑問はまだ解消されていない。

「ところで冴さん。認知訶学については何となく分かりましたけど、それとこの店に来たことと何の関係が？ 佐倉さんにも邪険にされましたし」

「それは……」

僕が聞くと冴さんは少し言い辛そうに言葉を濁した。

「おい、お前さんこの検事さんと知り合いか？」

と、いつの間に来ていたのか佐倉さんが僕の前に立っていた。胡乱な目を冴さんに向けたままであったが。

「ええ、知り合いといえばそうですけど」

「ならお前からも言っといてくれや。あんまり人様の家庭事情に首を突っ込むんじゃねえってな」

佐倉さんの問いを肯定すれば、それに返されたのは苦言。なるほど、詳しいことはさっぱりだけど冴さんと佐倉さんの間に何かゴタゴタがあったことは分かった。

「こちらとしては捜査に協力を願ひ出たまでなのだけど」

「だからつていきなり家に押しかけてくるような真似するんじゃねえ。追い返したら今度は店にまで来やがって」

「冴さん……」

なるほど、冴さんのことだから怪盗団事件の手掛かりになりそうだからつて居ても立つても居られなくなってしまったんだろう。冴さんと明智君が中心になって追っていた金城の件も怪盗団が解決してしまったことで世間は怪盗団に肯定的な声が目立ち始め、警察に向けられる目は厳しいものになった。そんな状況の中、金城事件を追っていた二人の立場が良いものになったとは、表情こそ冷静なまま取り繕っているものの冴さんの膝の上で握り締められた拳を見てもあまり想像できない。

「冴さん、僕が言えたことじゃないですがあまり焦って物事を進めるのは拙いですよ」

「でも、ようやく掴んだ手掛かりを……」

「分かります。冴さんにとって譲れないものがあるということも。けれど、僕らがそんなやり方で進めてしまつてはますます怪盗団を支持

する理由を与えるだけになります。僕らは正しいやり方で正しい結果を、人々の支持を受けて得ないと意味が無いと思いませんか？」

冴さんが言葉を荒げそうになる前に遮り、言葉が続ける。怪盗団のやり方を認めないのであれば、僕達は正道を行かないといけない。それは難しく、遅々として進めない足下の不安定な道のりだが、そうして出来た足跡はその後に続くものにとって固く舗装された道になっていることだろう。僕の言葉に冴さんは悔しそうな顔で俯き、黙り込んでしまう。

これだけで終わってしまったのはただ冴さんの立場を悪くしただけになってしまう。当然、僕はここで終わらせる気は無かった。僕はカウターの奥に立つ佐倉さんに目を向ける。俯いてしまった冴さんを見て、佐倉さんも先ほどまでの刺々しさが多少は和らいでいるように見えた。

「……佐倉さん。ご迷惑をお掛けしたのはすみませんでした。ですが、もし協力出来ることがあれば協力して頂けると助かります。冴さんが追っている事件はそれだけ難解で、僅かな手掛かりも見逃せない」

「その検事さんを随分と庇うじゃねえか」

「僕は冴さんの協力者ですから」

「……ハア、何も関係ないお前さんにそこまで言われちゃあな。分かったよ。だが、そう易々と協力出来るなんて言えねえ。詳しいことは言えねえが俺一人の問題じゃねえからな」

ただ、コーヒーを飲みに来るくらいなら邪険にしたりなんかしねえよ。

佐倉さんはため息を吐いて後頭部を掻きながら、諦めたように言った。協力を取り付けることは出来なかったけれど、冴さんが店に来る度に喧嘩する、といったことにはならなさそうだ。

「おい、検事さんよ。俺達もちつと頭を冷やそうや。高校生のガキにここまで言わせてお互い情けねえったら」

「……そうですね。この前はすみませんでした」

佐倉さんと冴さんがお互いに頭を下げてこの場は収まった。幸い

にして僕ら以外にお客さんがいなかったのでお店の雰囲気が悪くなって居心地の悪い思いをする人は出なかった。佐倉さんと冴さんが一旦は和解したことで解決、と言っても良いだろう。

「海藤君も、ごめんなさい。あなたは何も悪くないのに頭を下げさせてしまうなんて。大人として失格だわ」

「気にしないでください。協力できることは協力するって言いましたし。僕の頭を下げるくらい安いものですよ」

冴さんに謝られるが、僕としては何も気にすることではないと思っている。そもそも高校生の子どもが頭を下げたくらいで許してもらえるのだから、佐倉さんの懐が深かったというだけだ。それに今回のことはお互いに引くことが難しかっただけで、少しのきっかけさえあれば僕の謝罪など無くても和解出来ただろうし。

「なあ、海藤君よ。お前さん、いつもそうやって人助けをしてるのかい？ 検事さんも言ったが、お前さんが頭を下げる必要は無かっただろ」

僕と冴さんの様子を見ていた佐倉さんがふとそう口にした。

「流石に誰彼構わず、なんてことは無いですよ？ でも友人や知り合いは出来る範囲で助けてあげたいじゃないですか」

「こりやまた……いや、何でもねえ」

僕の答えを聞いた佐倉さんは何故か呆れたような目で僕を見ると、手の付けようがないと言わんばかりに首を左右に振った。

「何ですか？ 気になるんで言ってくださいよ」

「……取り敢えず横にいるのを放って話をするのはマズいだろうよ」

そう言つて僕の冴さんが座っている方とは逆隣を指差す佐倉さん。そういえば先ほどから雨宮さんを見無視して話を進めてしまっていた。いや、雨宮さんからすれば冴さんは初対面なので話に入れなかったのだろう。確かに申し訳ないことをしたと彼女の方へと顔を向ければ、雨宮さんはいつもと変わらない……、変わらない？ 無表情ではあったが、どこか目が据わっているように見えた。

「雨宮さん、ごめんね。急に知らないところで雰囲気悪くなって居心地悪くしちゃって」

「……それについては気にしてない」

気にしてないんだ。それはそれで心が強いな、雨宮さん。というか彼女の鋭い目は冴さんや佐倉さんでは無く僕に向けられているような気もするけれど。

「副会長は真のお姉さんとしても仲が良かったと、真には言っておく」「ちよつと待って欲しい」

そして雨宮さんは空恐ろしいことを口走ったのだった。何故か最近の新島さんは冴さんの話題が出ると露骨に機嫌を傾けるのだ。冴さんを名前呼びしているということで現役の検事も真つ青の追及を受けたというのに、雨宮さんからのタレコミがあつたらその再来、ないしはそれ以上の追及を受けることになるのは想像がつく。

それだけは思い留まってもらおうとあれやこれやと言葉を並べ立てていると、それを見ていた冴さんがクスクスと笑っているのが目に入った。なんならカウンターの奥の佐倉さんも面白そうな顔でこちらを見ている。

あなた達の仲裁でこうなつたんですよ！　と言いたい気持ちになつたが、今の雨宮さんから注意を逸らせば間違いなく新島さんへのタレコミは避けられなくなるのでどうにも出来ないまま、僕は何故か浮気現場を見つかった不貞の夫の気分で言葉を紡ぐしかなかったのだ。

その後、何とか雨宮さんの機嫌を取り、まだどこかぎこちなさが残るものの、冴さんも交えて他愛ない雑談で時間が過ぎていった。

「さて、私はそろそろ行くわね」

雑談がひと段落したところで、腕時計を確認した冴さんがそう言つて席を立つ。気付けば結構な時間が経つていたらしい。

「また資料に目を通したら連絡を頂戴。こちらでも引き続き手掛かりが無いか明智君と協力して探っていくから。とはいえ、現状は明智君頼りになっているけれど。この資料も明智君から貰ったものだし」

冴さんの言葉に僕は再び手元の紙束に視線を落とす。初めて会つた日、怪盗団の手口を警察が何も掴めていないと言っていた。あれから明智君も何か手掛かりは無いかと執念深く探っていたらしい。冴

さんに共有しておいて僕に言わなかったのはこれ以上巻き込むのはいけないという彼なりの気遣いだろうか、それをふいにしてしまったとしたら少し申し訳なく思う。だけど、この手掛かりは僕にとっても大きなものだ。

「これまでよりは少しはお役に立てるかもしれませんが、冴さん」

「あら、何か心当たりでもあるの？」

「直接の手掛かりになるものじゃないと思いますけどね」

そう言った僕の脳裏には一人の先生の姿が思い浮かんでいた。

丸喜拓人。カウンセラーとして心理学や精神分析に長けたあの人であれば、認知訶学についても何らかの知見を持っているだろうことは想像に難くない。

怪盗団を捕まえる、正体を暴くつもりは僕には無い。けれど、怪盗団の改心がどのようにして為されているのか、それが本当にこれまで改心のターゲットになった人物に悪影響を与えていないのかについては調べていく必要がある。金城事件が怪盗団によって解決されてしまっただけから世間の声が怪盗団支持に染まっていくのを見て、その思いは強くなっていた。

精神暴走事件と改心、この二つが本当に同じ手口で、ただ結果だけが違うコインの表裏のような関係であるとするならば。世間からの過熱する期待が怪盗団の面々に何を強いることになるのか、僕の頭の中に最悪の想像が浮かんできってしまう。その想像が現実のものとなったとき、僕はそれでも怪盗団を庇いきれるかと問われれば、すんなりと首を縦に振ることは出来ない。

だとすればそうならないために僕は出来ることをしなきゃいけないのだと思う。

たとえその過程で怪盗団と対立してしまうことになるのだとしても。

Interlude — Examination  
period —

きつかけは新島さんからの一通のメッセージだった。

《試験前だし、良ければ一緒に勉強会でもどうかしら?》

毎度試験期間前となると彼女と放課後にテスト対策をするのは何度かあったことだが、こうしてメッセージが来るのは珍しい。僕としては断る理由は無いので了解の返事をしつつ、どうかしたのかと聞いてみる。

既読はすぐに付いたけれど、そこから少し間が空いてから返事が書き込まれる。

《ちよつと手がかかる後輩もいるから……、助けてくれると嬉しいわ》  
彼女のメッセージ、それと最近の彼女が誰とよく一緒にいるだろうかと考えてみれば、自ずと浮かぶ顔は限られてくる。なるほど、そういうことなら臨時の教師役としての務めを果たすでしょう。

《それじゃあ去年の過去問も持っていくようにするよ》  
《助かるわ》

たった四文字だけれど、スマホを片手に頭を抱えている新島さんの姿が目には浮かぶようだった。

それから時間と場所を聞き、僕は早速とばかりに引き出しの中を漁る。忘れないうちに鞆に詰めておこう。

そして明くる日、放課後になると僕は新島さんから聞いた場所へと足を運んでいた。ご丁寧に地図のリンク先も送信してくれていたが、その場所は僕にとっても馴染みのある場所だったので迷うことはなかった。何ならちよつと前にも来たことがある場所なのだから。四軒茶屋駅を出てすぐにある純喫茶。扉を開けば来客を告げるベルの音が鳴る。

「いらっしやい……、っってお前かよ」

「遠慮無いですね、佐倉さん」

カウンターの奥にいる佐倉さんは僕を見るとそう言って手元の新

間に目を落とした。それに対して苦笑を返していると佐倉さんはあつちあつちと言うように奥の席を指差す。そこにはこつちに手招きしている新島さんと目を丸くしている坂本君、高巻さんがいた。学校が違うけれど喜多川君もいるらしい。

「ちよ、真の言つてた強い助っ人つて副会長のことかよ!」

「そうだけど? 私だけじゃ坂本くと杏の二人は手に負えないもの」

「そんなバツサリ言う!」

新島さんに散々な評価をされているらしい坂本君と高巻さんは二人してぎやーぎやーと抗議しているが、あんまり騒がしいと佐倉さんに怒られるよ、とカウンターを指差せば眼鏡の奥から鋭い眼光を向ける佐倉さんを見て二人とも不承不承ながら口を噤んだ。

「さて、それじゃ助っ人も来たことだし、始めましょうか」

二人が口を閉じたのを見計らって新島さんが空気を切り替えるように手を叩いた。そうしてテーブル席で男女に分かれ、僕は喜多川君も含めた男性側を担当することになった。自分の試験対策も並行しながらとなると結構忙しいが、何とかなるだろうと僕は高を括つていた。

それが間違いだと気付くのにそう大した時間は掛からなかったのだけれど。

「だあー! もうワケ分かんねえ!」

「まあまあ落ち着いて、坂本くん。数学って公式の使いどころを覚えるのが定期テスト対策みたいなものだからさ、過去問見て類題を解けるようにしておこうか」

「ちよつと良いか。俺もここが分からなくてな」

「どれどれ……、英語かあ。特にこの構文はややこしい……まずは主語をはつきりさせることからだけど……」

「構文か、俺にはさっぱりだ」

まさか坂本君だけでなく喜多川君まで勉強が割と苦手だったなんて思いもしなかった。喜多川君に関しては得意と不得意がはつきり分かれている感じだが、不得意に関してはほんとにさっぱりと言った



具合だった。坂本君？ 彼に関してはノーコメントだ。とりあえず過去問だけでも完璧に仕上げてもらおう。僕自身の試験対策はいつもの予習復習の延長でしかないからまだマシだ。そこでふと気になったので女子グループの方へと目を向けてみると、新島さんが高卷さんに教えている最中だった。あちらも中々苦戦していると見える。端に座っている雨宮さんは特に躓いた様子も無く淡々とこなしているところが救いと言えらるだろうか。

「秀尽は授業の進みも速くて中々ついて行くのがしんどいよね。覚える公式も多いけど、テストで頻出のものだけでも覚えておけば赤点は回避できるよ」

「……うーっす。やるしかねえか」

坂本君も喜多川君も根は真面目だから、やるとなると頑張ってくれ。苦手ゆえに集中力が続かないところはあるけれど、そこは適宜こつちがフォローすれば良い。二人から来る質問に答えながら、僕は教科書とノートを簡単に見返していく。基礎的なところは押さえられていたから後は先生方のたまに出るマニアックな知識を頭の片隅に詰め込んでいく作業だ。

そういった調子の僕はともかく、新島さんは自分の勉強もあるだろうし、少しくらい助け舟を出した方がよいだろうか。というか新島さんもこつちをチラチラ見ている。僕は坂本君に過去問とその類題をどっさり渡してげんなりさせておいてから、高卷さん達のいるテーブルへと向かう。

「高卷さん、新島さん。今は何をしているの？」

「ああ、古文をちよつとね……」

ちよつと疲れたような様子の新島さんが僕の方にテキストを差し出してくる。

「もうさっぱり。同じ日本語なのにどうしてこんなに違うのよ」

高卷さんと言えば、全身で疲れたことを表現するように机に突っ伏していた。なるほど、クォーターの彼女にとっては日本語だけならまだしも古文になるとお手上げらしい。まあ1000年もすれば言葉なんて変わり過ぎてもはや異国語だからね。それを高卷さんに伝

え、教科書に目を通す。

「古文は動詞、形容詞、敬語、助動詞を覚えれば、まあ何とでもなるさ」  
「覚えること多すぎ！」

「あはは……、最低限の暗記は仕方ないよ。これも過去問を見て出題されそうなところを集中的に覚えようか。とりあえず定期テストを乗り越えられるように対策すれば良いから」

そう言っただけで早々に教科書を閉じて過去問を広げる。後は問題を解きながら、分からなければ都度教科書を開いて確認しながら進めてもらおう。

「……ありがとう。過去問を持って来てくれて助かったわ」

僕の前に座る新島さんが自分の勉強を進めながらそう言う。もちろん新島さんも過去問を持っているだろうけれど、坂本君と高卷さんの二人分となるとコピーまではしてられなかっただろう。

「どういたしまして。いつもより賑やかなテスト対策になって楽しいね」

「そうね、でも手がかかるのは考えものよ……。ところでここなんだけど」

その言葉と共に新島さんが差し出してきたノートに視線を移す。新島さんは文系科目を、僕は理系科目をどちらかというど得意としているため、互いにテスト前になるとこうやって不得意分野を教え合ったりする。

「……なるほどね、助かるわ」

「いつも理解が早くて教える側としては助かるというか手が掛からなくて少し寂しいというか」

簡単に解説してみればすぐに理解してしまう新島さんは本当に優等生だと思う。手が掛からないから大人にも頼りにされちゃうんだろうけど。そういう意味では僕は坂本君や高卷さんのように手が掛かる子の方が可愛いと思える性質なのかもしれない。

そう思っていると、肘を突かれる感触がする。そちらに目を向ければ隣に座った雨宮さんがじつとこつちを見て教科書を差し出していた。

「副会長、ちょっと教えて欲しい」

「はいはい。雨宮さんも数学か……」

こうして質問に答えているうちに、今度は坂本君が音を上げ、そしてついでとばかりに喜多川君も質問を持ち込んでくる。そしてひと段落したと思えば今度は高卷さんが自分の番だと過去問を僕の前に広げる。

あれよあれよと言う間に僕は男子と女子のテーブルを行ったり来たりして教える羽目になっていた。なるほど、塾の先生ってこんな感じなのかもしれない。自分の勉強がそこまで切羽詰まってなくて良かったと今日ほど思ったことは無い。

「終わった——！」

そうやって机に突っ伏した坂本君の声を皮切りに、テーブルには弛緩した空気が漂う。気が付けばすっかり日も沈んでしまっている。後半は皆が黙々と自分の勉強を進めていたから今日一日で結構詰め込むことが出来たんじゃないだろうか。

「疲れたあ、でもこれだけやったんだし、試験もバッチリだよね」

「副会長のおかげで俺もテスト対策が捗った」

佐倉さんが厚意で淹れてくれたコーヒーに舌鼓を打ちながら、高卷さんも喜多川君も満足げな表情で言う。

「僕としても結構頑張って教えたから皆には良い点を取って欲しいな」

「うっす、頑張りまーす！　そんでさ、テスト終わったら皆でパーツと遊びに行こうぜ！」

僕の言葉に威勢よく返してくれた坂本君の提案に、口々に賛成の声が上ががる。テストが終われば後は終業式を残すのみだし、これから夏に向けてお祭りなどのイベントも増えてくるから高校生にとっては楽しみな時期だろう。

高卷さんがスマホで近場のイベントを検索し、これはどうとこちら

に画面を示してくれる。見れば、ちょうど試験期間終了後にこの辺りで花火大会があるらしい。

「良いわね、私も心配事が片付いたし、羽を伸ばしたい気分だわ」

新島さんはそこまで言っただけで僕の方を見る。

「海藤君も一緒に行かない？」

「僕も良いのかい？」

今日は臨時で呼ばれたことだし、お邪魔するのみなあと考えていると新島さんからのお誘いを受けた。

「いやいや、ここまでしてもらつといて誘わないとかありえねーっすからー！」

「ああ、この礼は祭りの屋台で奢ることで返そう。竜司が」

「って俺かよー！」

「一番お世話になったのは竜司なんだから当然でしょー？」

喜多川君と高巻さんが結託したことで坂本君の旗色が悪くなる。

確かに今日一番時間を取って教えたのは坂本君だと思ふ。

「副会長、どう？」

雨宮さんがそう言っただけで首を傾げる。せつかくのお誘いだし行けるなら行きたいものだが高巻さんの見せてくれたイベントの日時を確認する。

「ん、この日は……」

「もしかして先約があるの？」

提示された日程がどこか引掛かかったので鞆から手帳を取り出してパラパラと捲る。新島さんが表情を曇らせているのに心苦しさを感じながらもその日の予定を確認すれば、そこにはしっかりと先約の記載が入ってしまった。

「あちゃあ、その日はバイトのヘルプをお願いされてる日なんだよね。毎年絶対人手が足りなくなるからって。そうか、そういうことだったのか」

イベントの日は僕のバイト先で店長から継られて急遽シフトに入ることになっていた日だった。なるほど、皆このお祭りに出掛けてしまふから人手が確保出来ずにあそこまで焦っていたのか、あの店長

は。

自分はお祭りやイベントの日なんてあまり意識しないものだから、言われるがままに予定を空けてしまっていた。

「バイト……、そう、それなら仕方ないわね」

「ごめんね、どこかで埋め合わせはするから」

新島さんはそう呟きながら肩を落とす。高巻さんがしようがないねと言いながら新島さんの肩に手を置いて慰める。そこまで落ち込まれるとは思わなかったので非常にいたたまれない気持ちになる。どうしよう、店長が泣くこと覚悟でやっぱり休みますと言ってみようかと迷う程度には。

「皆もせっかく誘ってくれたのにごめんよ」

「いや、バイトなら仕方ないですよ」

「ああ、副会長の分も竜司にはしつかり奢ってもらうことにするさ」

「お前には奢らねえからな！」

「……残念。だけど先に予定が入っていたなら仕方ない」

坂本君と喜多川君は気にするなど笑ってくれる。雨宮さんも少し落ち込んだようだがそう言ってくれた。ううん、皆にも個別で何か埋め合わせを考えておこうか。

「まあ僕のごとは気にせず皆で楽しんでおいでよ。せっかくテスト勉強頑張ったんだから、赤点で補習になんてならないでね？」

「センパイ、なんで俺の方をじっと見てるんすか……?」

それは君が一番心配だからだよ、坂本君。

テスト期間中の校内、特に三年生のフロアは少しピリピリとした雰囲気漂っている。それは夏休み直前ということもあり、大学進学を目指す学生は受験を意識し始めるということもあるが、それ以上に教師陣からプレッシャーを掛けられているからだ。

「今回のテストでは大学入試レベルの問題が前提となります。現役生は夏休みが本番と巷では言われますが既に受験は始まっていますよ。期末テストでまともに点数が取れなければ現役合格は非常に厳しくなると考えてください」

テスト前に学年主任から告げられた宣告に学生たちは大層ビビらされた。鴨志田先生の一件があつて以降、今年の三年生に掛けられるプレッシャーは今までの比では無くなった。それは今まで鴨志田先生というブランドで生徒を集めていた学園がそれに胡坐をかいていられなくなった故の焦りともとれる。そのため、先生方の授業進度、レベル共にこれまで以上となった結果、学生に掛かる負担も相応に上がってしまったというわけだ。

僕としては勉強を特に苦と思わない性根のおかげか、普段の予習復習の時間が少し伸びたくらいだと思つたわけだが、遊びたい盛りの高校生にとってはテスト前に勉強する範囲が増えるのは苦痛でしかない。

テスト前に新島さんが僕を勉強会に誘つたのもそういった理由があつたのだと思う。

「けどそれも今日で終わりだ」

最後の科目の終了を告げるチャイムと共に、周囲からは悲喜交々、やや喜色の多い声上がる。僕も歓声を上げることがは無かったが、疲れたのも確かなので息を吐いて椅子の背もたれに身体を預ける。

その後、夏休みこそ受験生の天王山だと口酸っぱく繰り返す担任の言葉を聞き流して放課後になると、周囲は担任の言葉など初めから聞

いていなかったかのように夏休みの予定について熱心に語り合う。

僕の席にはテストの結果が早くも気になる生徒達が数人集まっては問題を見直し、自分達の出来を確認していた。残念ながら僕の席に集まった子達は夏休みは予備校に通い詰めらしく、周りの子のように遊ぶ予定は無いと肩を落としていたが。予備校には通ってないが僕もバイトや家の予定で自由な時間があまりあるとは言えないので似たようなものだ。

「それじゃ、少し気が早いけど良い夏休みを」

予備校で勉強詰めの同級生達にとっては皮肉かもしれない言葉を掛けて僕は教室を後にする。まだ昼も過ぎたばかりの時間だし、折角テストも終わったので生徒会室で久しぶりにのんびりと本でも読んで過ごそうと思った。

「流石に今日は誰も来てないよね」

生徒会室に足を運んでみれば、予想通り鍵が掛かっていたので予備鍵で開錠して中に入る。夏で暑いけれど、冷房を効かせて熱いインスタントコーヒーを啜りながらの読書というのも乙なものじゃないだろうか、などと思いながらエアコンを起動してポットの湯を沸かす。せっかく私立の良い学校に通っているのだからこういうところは贅沢していかないとね。

「さてと、それじゃ早速……」

そうして手早く準備を終えた僕は本の世界へと没頭する。今日の本は神保町の古書店で見つけた妙に懐かしい印象の本だ。

どれくらいの間が過ぎたかは分からない。だけど、読書の前に淹れたコーヒーがすっかり冷めてしまうくらいには時間が経っていたらしい。

湯気も立たなくなったらそれに視線を移した僕は、そこで初めて僕の前に誰かが座っていることに気付いた。

「っ!? ……って、雨宮さんか」

「……どうも」

僕の前に座っていたのは雨宮さんだった。彼女も机の上に本を広げて読書に勤しんでおり、僕の声に視線を上げた。

「声を掛けてくれたら良かったのに」

「集中していたようだったから、悪いと思って」

「どうやら本に集中しすぎて彼女が入って来ていたことに全く気付いていなかったらしい。」

「テストも終わったのに、帰らなくて良いの？」

「ちよつと副会長と話がしたかった」

テストから解放された喜びのままに坂本君あたりが彼女らを遊びに連れ出したりしそうなものだけど。そう思っていると彼女の用件は僕らしい。それなら猶更声を掛けてくれればよかったのに。そう伝えれば、雨宮さんは別に待っているのは苦痛じゃないと首を横に振った。

「と、それじゃあ雨宮さんの分もコーヒー淹れようか？ それともどこか場所を移す？」

「今日は他に誰も来ないだろうし、ここで良い」

「じゃあコーヒーを淹れるよ。相変わらずインスタントだからルブランのコーヒーには及ばないけどね」

戸棚から余ったマグカップを取り出すと、彼女の分のコーヒーを淹れて差し出す。熱いから氷でも入れて冷やせば良いんだけど、流石に冷蔵庫までは生徒会室に設置することは出来なかったので我慢してもらえない。部屋は冷やしているから多少はマシだと思いたい。「それで、僕に話して？ 最近やれてなかった感想会でもまたやる？」

「感想会ももちろんやる。けど、今日の本題は別」

本題は別だけど感想会はやるのか。いや、僕としても楽しいからそれは良いんだけど。

雨宮さんは本をパタリと閉じると、カップに口を付けて少しコーヒーを口に含む。湯気で白く曇った眼鏡の奥で、ほんのわずか、目を閉じたかと思うと僕の目を正面から見据える。

「副会長は怪盗団を追う人の協力をしている、そうだよな？」



「……うん、そうだよ」

雨宮さんが口にしたのはあの日、冴さんがルブランを訪れた日のことだった。あの日のやり取りを見れば、怪盗団を追う冴さんと僕が協力関係にあるのは誰だって分かることだろう。

「副会長なら、怪盗団の正体にも見当がついているはず。なのに検事にそれを伝えないのは何故？」

「……それは半ば怪盗団の正体を告白しているようなものだと思うけど、良いのかい？」

彼女の問いは尤もな疑問ではあるが、それを問うということは今まで触れなかった怪盗団の正体に踏み込んでしまうものだ。

「僕は怪盗団の正体を知らないし、知るつもりもない。それは本当のことだよ」

僕の言葉に雨宮さんは、今更だと言わんばかりに薄っすらと笑みを浮かべていた。

「けれどそれは検事に有力な手掛かりを隠す理由にはならない。特に協力関係にあるならなおさら」

そう言う雨宮さんの目は鋭く細められている。そこには誤魔化しを許さないという彼女の意思がありありと見て取れた。どこかでこの強い光を帯びた目を見た気がする、記憶を辿れば、金城に脅迫を受けた日、明智君に問い掛けられたときの目と同じなのだと思いついた。

対照的に思える雨宮さんと明智君だけど、似ている所もあるんだなとこんな時に暢気な考えが頭に過る。

「僕は怪盗団のやり方とその力に危惧を覚えてはいるけれど、だからといって怪盗団を捕まえてやろうとか、その正体を暴こうというつもりは無い。怪盗団はこの国の法とは異なる理で、困っている誰かを助けることを信条としているんだろう？」

「法では裁けない、明るみに出てこない悪を怪盗団は裁く。怪盗団は正義だと、私は思っている」

雨宮さんは怪盗団は正義だと言い切った。彼女の信念に照らして怪盗団は間違っていないと、彼女は確信している。

「この話、以前にもしたかもしれないけれど、そうだとしたらそれで良いんだよ、雨宮さん」

「え……？」

僕があっさり肯定したことが意外だったのか、雨宮さんは驚きに目を丸くした。だけど、僕としては彼女の考えが以前と変わっていないこと、誰に言われるでもなく、彼女が自分で考えた結果として怪盗団を肯定していることに安心した。それは怪盗団が世間に認知され、大衆からの無批判な支持を受けても彼女の根っこには影響を与えていないことが分かったからだ。

「怪盗団の善悪を論じることの意味は無い。この結論は僕が前にも言った時から変わらぬ。僕はどこまで行っても、怪盗団が意図しない結末を引き起こしてしまったときのことを危惧しているだけだよ」「それはどうい……？」

「明智くんは怪盗団の改心事件と精神暴走事件が同一の手口で行われたものだ」と推理していた」

その言葉に、カップを持つ雨宮さんの手がピクリと震えた。その反応が出るということは、彼女も心当たりがあるということなのだろう。ならばやはり怪盗団と精神暴走事件の手口は同じ。怪盗団のような改心を起こせる手口を持ちながら、その結果は似て非なるもの。「警戒した方が良い。怪盗団の力は誰も知り得ない特別な力、という訳じゃ無いんだ」

ともすればその力は悪用されることもある危険なもの。そして現に悪用されている。

「少なくとも精神暴走事件の犯人は怪盗団のやっていることを理解している。そして、君たちが足を踏み外すのを待っているはずだ」

「怪盗団に罪を被せるため？」

雨宮さんはやはり頭が良いし、勘も鋭い。僕が少しヒントを出すだけで、過去に僕が言った杞憂が杞憂で無くなりつつあることを察したらしい。

「怪盗団の力は危険だ。それは怪盗団だけでなく、それを利用して大勢の人間を苦しめている人もいるからだ。前は言及しなかったけれ

ど、今回は言っておこうか。僕は怪盗団の信念は否定しないけれど、怪盗団の力は否定するよ。誰かの心を歪め、場合によっては死に至らしめる可能性のある力、それは今の人間の手には余る力だ」

「……たとえばそうすることではか救えない人がいるとしても?」

「怪盗団が正義だとしても、その力を誰かを救うために振るうののだとしてもね。その力に頼らないといけないことに情けなさを感じこそすれ、それに依存することはしちやいけない」

依存した先に待つ結果は、自らの力に溺れ、大衆そのものの心を操ろうとする暴走した怪盗団の姿だろうから。僕はそんな怪盗団を見たくないし、だからといって怪盗団が精神暴走事件の犯人として心無い中傷に晒され、傷ついてしまう姿も見たくはない。

だから怪盗団の力を掣肘する、そんな勢力を一つは作っておきたいと思うのだ。怪盗団に頼らずとも良くなるように。雨宮さんは僕の言葉を聞いて俯き、そしてポツリと呟いた。

「怪盗団はいらない?」

「僕の友達がそれによつて傷つくかもしれないのならね。金城の件で僕は怪盗団に助けられた。だけど、無批判で怪盗団を信奉することは出来ないかな」

「……そう」

僕の答えを聞いた雨宮さんは何かを考え込むように再び視線を机に落とす。

「だけど副会長は怪盗団を捕まえようとはしない。やっぱり良く分からない」

「そうだね、我ながら本当に中途半端な人間だと思うよ。まあ、そういう中途半端なりに怪盗団の味方ではいるつもりだってことも信じてくれると嬉しいかな」

「分かった。今はそれで納得しておく」

煮え切らない回答であったが、雨宮さんはひとまずは納得してくれたいらしい。

怪盗団の力を否定しておきながら、怪盗団そのものを捕まえようとは思わない。それどころか、怪盗団を庇おうと考えている。かと思え

ば、怪盗団を追う勢力を支援し、怪盗団の動きを阻害しようとしている。僕がやっていることは一貫性が無く、怪盗団とそれを追う冴さん達どちらの邪魔をしているのかもしれない。だけどそんな中途半端な僕の行動原理はいたって単純だ。

「雨宮さん。僕は怪盗団よりも、君の方が大事だよ」

「——え!？」

今日の会話で一番大きいかもしれない声を出した雨宮さんだけど、そこまで驚くようなことだろうか。

「怪盗団があることで雨宮さん達が傷つくようなことは許容できない。友人が泣いている姿を見たくないと思うのは誰だってそうだろう?」

「……達。そう……達か……」

続けて僕が言ったことの一部を雨宮さんは小さく繰り返し、それから何故かまた鋭く目を細めて僕を睨みつけた。

「副会長はいつか刺される」

「ええ……?」

唐突に物騒な予言を雨宮さんに告げられた。

「あまりそういうことを言わない方が良い。多分厄介なことになる」  
「どういうことを言わない方が良いんだ……」

何を指摘されているんだろう、僕は。困って視線を雨宮さんから逸らすと、壁に掛けられた時計に目が留まる。結構な時間話し込んでいたらしい。話の流れが分からないけれど、僕にとって良くない流れであることに間違いは無いので流れを変えるために口を開く。

「ところで、そろそろ良い時間だけど感想会はどうしようか?」

「それはやる」

僕が言うや否や雨宮さんは自身の鞆から読み終わったのだろう本を取り出した。本のタイトルは、幻の女教皇。

中世ヨーロッパの伝説で九世紀に女教皇として在位したとされるヨハンナを題材とした本だった。

学識高く、優しい人柄で多くの民衆に慕われたとされる女教皇。彼女の人柄を示すエピソードについて語る雨宮さんと、その学識の深さ

を称えるエピソードに注目した僕。怪盗団についての問答を忘れ、僕と雨宮さんは女教皇についてしばし語り合ったのだった。

Interlude—After a display  
of fireworks—

「今日は本当にありがたいがどうねえ、副店長」

「まあ人がいなくて困ってるなら出来るだけ助けますよ。あと副店長じゃないですから」

テスト期間が終わり、花火大会があるとのことで老若男女問わず通りが賑わっているであろう今日という日。僕は以前に店長からお願いされたということで人手の足りないバイト先のヘルプに駆り出されていた。

花火大会には屋台も出るので、多くの人はそこで腹を膨らませるものだと思っていたが、花火が始まる前に腹搾えを済ませて場所取りに向かおうと考えるもの、暑い中で屋台に並ぶことを嫌って涼しい店内で食事だけは済ませようとするものもいたようで、店内はそれなり以上の賑わいを見せていた。それでいて店側の人数はいつもより少ないのだから忙しさは推して知るべしだ。

「毎年この時期になると人手不足でパンクするんだよねえ、うち。そりゃ駅前立地だから仕方ないんだけどさ」

「学生バイトが主力だところこういうときに人手を集めにくいから大変ですね」

今は客の入りも一段落し、昼過ぎから入っていた僕も少しの休憩を摂ることが出来ていた。冷房の効いた休憩室内で、店長と取り留めの無い世間話に興じる。

「そう言う意味じゃ海藤くんは良かったの？ 誰かに誘われたりとかしなかった？」

「あー、誘われはしましたねえ」

「だったら別に休んでも良かったのに」

「とはいえシフトに入るって言ってしまった後でしたし」

「うあー、これは私が悪いやつだなあ」

「いえ、別に店長が悪いわけじゃ」

店長が決まり悪そうに頭を搔くが、シフトに入ると決めたのは自分だし、それで後から友人に誘われたからと先約を反故にってしまうわけにはいかないだろう。

「君は本当に責任感が強いねえ。でも、まだ高校生なんだからさ、もう少しワガママになってもバチは当たらないよ。高校生の友人達との花火大会なんて一生に三回しか経験出来ないウルトラレア体験だよ？ ……私は体験出来なかったけど」

「最後に悲しいオチをつけるのやめましょうよ……」

途中まではカッコいい大人に見えたのに、最後の一言で急に悲しさが増した。僕は店の前にある自販機で購入したは良いもののまだ開けていない缶コーヒーをそつと店長の前に差し出す。

「とりあえず、これどうぞ」

「うう……、優しさが心に沁みる。これで君が学生じゃ無ければ……」

「はいはい、そんなこと言ってないでそろそろ戻りますよー」

店内が少し騒がしくなってきた。次のお客さんの波がやって来たのかもしれない。過去のトラウマを自分で掘り起こしておいて機能不全に陥っている店長を引っ張りながら僕は休憩室を出た。

もう少しワガママになっても良い。両親からも似たようなことを言われた覚えがあるけれど、どうにも僕は年相応の振る舞いが中々苦手らしい。

ふと耳を澄ましてみれば、窓の向こうから微かに雨音。どうやらせつかくの花火大会だというのに夕立が来てしまったみたいだ。これは……。

「店長」

「嫌だ、聞きたくない」

「雨降ってききましたよ」

「聞きたくないと言ったのに……」

「一緒に頑張りましょうね」

「……あーい」

夕立が降り始めて一時の雨宿りのために店内に入る客、そして屋台で食事をし損ねた人々が押し寄せたこともあつて一時的に戦場の様相を呈した店内を店長が目を回しながら、僕も珍しくヘトヘトになりながら捌ききつた後、ようやくこれまた波が一段落して一息つけるようになったので、僕はフラフラと休憩室に引っ込んだ。

「疲れた……」

今日ほど分身出来ればと思つたことはないかもしれない。流石に三つのテーブルに同時に出現して注文を取ることなんて出来ないし、だからといって店内を走るわけにもいかない。だけど何とか捌ききつたのは偉いぞ、僕。

そう思っていると、休憩室の入り口からげっそりとした表情の店長が顔を覗かせた。

「海藤くん、今日は本当にありがとね。疲れただろうし、上がったも良いよ」

「良いんですか？ まだお客さん多いでしょう」

「大丈夫大丈夫、もうすぐ次のシフトの子達も来るし、一番忙しいところは乗り切つたから。雨降つてるし、私の置き傘持つていきなよ。黒だから男が使つても違和感無いし」

店長はそれだけ言うとはヒラヒラと手を振つて再びホールに戻つていつてしまった。店長なりに気を遣つてくれたのだろうか。とはいえ今から帰つても花火大会帰りの客でごつた返した電車に乗ることになりそうだけど、まあここで僕が残つても店長に余計気を遣わせるだけだし、甘えておくとしよう。そう考えて僕は更衣室に行くと、手早く着替えを澄ませる。

「……まだ時間あるだろうし、ルブランに寄つて行くのもアリかもしれない」

着替えながらふと思ひ立つたことだけど、意外に良い案かもしれない。ルブランならあまり混んでないだろうし、お腹も空いてきたからついでにカレーが残っていたらそれを食べて帰るというのも良い。

そうと決まれば善は急げだ。僕はさつきと帰り支度を済ませ、ホー



ルを早歩きしている店長に傘の御礼を一声かけてからファミレスを後にした。

予想通りと言うべきか、駅には雨に降られて帰ろうとする花火大会客達で混み合っていた。皆雨に降られたせいか濡れており、それもあつて駅構内は温度、湿度共に中々のものになつてしまつていた。うーん、これはやっぱり時間をずらすべきだったかもしれない。

「——海藤くん？」

そう思っていると、聞き覚えのある声に背後から呼ばれた。そういえば彼女らも花火大会に参加していたんだつた。たまたま帰る時間が被つたのだろうか。凄い偶然もあつたものだ。

「奇遇だね、新島さん……つて、結構降られたみたいだね」

「まあ、周りの他の人と同じくね。傘も持つてなかつたし、コンビニの傘も売り切れてたから、このタオルだけでどうにかしてた感じ」

そう言つて手に持ったタオルをヒラヒラと振る新島さん。なるほど、結構な雨だし、花火大会の人が殺到したらそうなるか。それにしても災難な。

僕は手に持った傘に視線を落とす。店長から借りたものだから流石に又貸しはマズイか。ルブランに行くのはまたの機会にしよう。

「最寄り駅から歩くなら送ろうか？ 借り物だから又貸しは出来ないけど、それ以上濡れて帰ると風邪ひきそうだし」

「良いの？ それは助かるわ」

僕の提案は新島さんに快く受け入れられ、僕は新島さんと電車に乗り、最寄り駅から彼女の家まで同道することになった。

「今日は花火は見れた？」

「見れはしたけど、その後これだから最高の思い出つてわけにはいかないかも」

駅からの道すがら、彼女と今日の花火大会についての話が弾む。

「蓮と杏も浴衣が似合つてて可愛かつたわよ？ 来れなくて残念だったんじゃない？」

そう言つて新島さんがからかうように目を細めて笑う。確かに、あの二人なら浴衣もよく似合うだろう。とはいえ、今僕の隣にいる新島

さんも相当の浴衣美人だからそれを見ただけでも僕は割りと思まれている側じゃないだろうか。

「そういうことさらっと言うの、本当に良くないと思うの……」

新島さんは自分が褒められるのに慣れていないのかそう言う顔を赤くして目を逸らした。濡れた浴衣が彼女の身体に張り付いてしまっているのであまりジロジロと見るのは憚られたが、まあ視線を下に向けてないからセーフだと自分に言い聞かせた。

「ま、こういう機会がまたあったら次は出来るだけ参加したいと思うよ」

「言ったわね？ 言質取ったから」

「新島さん、言い方が冴さんみたいだよ……」

抜け目無いところとか特に。やっぱり姉妹なんだろうなあと考えていると、新島さんが一転して不機嫌そうな目で僕を睨んでいるのに気づいた。あれ、僕何か怒らせるようなこと言ったかな。

「そういうところ、良くないわよ」

「ええつと……」

僕が口ごもっていると新島さんはますます顔をしかめていく。唇も尖らせて私不機嫌ですアピールを始めていた。新島さんが怒るようなこと、もしかしたらと思いついたのは一つだけ。まさかと思いがらも口を開く。

「冴さん……っ？」

「……」

確かめるために再度口にすると、新島さんは気まずそうに目を逸らした。最近の新島さんはお姉さんの話が出るとこうなる。いや、僕が新島さんに隠して冴さんと怪盗団に関連する情報のやり取りをしていたから思うところは当然あることは分かっていた。だけど今はただの世間話の範疇だと思うのだけだ。

「というか！ どうしてお姉ちゃんの名前呼びなのに私は名字なの！？」

「それは冴さんに名字だとややこしいから……」

「それなら付き合いが長い私の方を名前で呼んでも良いんじゃない

「？」

「あー、えつと、そうかもしれない、ね？」

突然何か吹っ切れたかのように僕に詰め寄る新島さんに、タジタジになりながらどうどうと宥めすかす。というか目のやり場に困るから本当に落ち着いてほしい。

「とりあえず新島さん、ちよつと離れよう？」

「いーえ、離れないわ！　　というかまた名字で呼んだわね!？」

「分かった、分かったから！　　真、ちよつと離れて！　　目のやり場に困るから！」

「目のやり場……？　　何を言って……きやあ!？」

僕の言葉にようやく今の状況に気づいたのか、自分の姿を見下ろした真が顔を羞恥に染めて飛びすさる。雨に濡れないように追いかけて傘の中に入れてあげるが、彼女は僕とは反対方向を向いたままこちらを見ようとはしない。

「はあ、もしかして名前呼びじゃないから冴さんの話題が出るたびに不機嫌だつたりした？」

「う……」

凶星だったのか背中越しに気まずそうな声が聞こえる。なるほど、確かに友人が知らないうちに自分の身内と知り合っていて尚且つ自分以上に親密になっていたら思うところもあるだろう。そう考えると彼女の反応も微笑ましいものに思えてきた。

「あー、大丈夫。あんまり下は見ないようにしてたから」

「そこじゃないわよ！」

僕の言葉に真がこちらを向き直つて言う。僕は分かった分かったと言いながらハンカチを渡した。さつき傘から出たせいで少し雨に濡れてしまっているし、彼女が手に持ったタオルは既にかんりの水を含んでいるのでそれよりは僕のハンカチの方がまだ用を為すだろう。

「はい、とりあえずこれで水気拭いて。風邪ひいちゃうから」

「あ、ありがとう……。ていうかさつき真って……!？」

「やっぱり苗字で呼んだ方が良かった？」

「い、いや……名前で、良いです」

そう言うとは僕は僕からハンカチを受け取ってはいそいと濡れた髪や顔を拭う。

「それじゃ、行こうか。早く帰ってお風呂に入らないとね」

彼女の側に傘を傾けて、また歩を進める。少しむず痒くなる沈黙が流れるが、またポツリポツリと会話が始まる。

「そういうえば、お姉ちゃんと仲直り出来たよ。まだちよつと気まずい時もあるけど」

「そっか、それは良かった」

冴さんもきちんと真との溝を埋めようと動いたらしい。

「でも、お姉ちゃんからと……、あなたの話が出てくるのはなんか複雑よ」

「うーん、それについては冴さんと協力関係にあるだけに仕方ないとしたか」

「……怪盗団は正義だと、私は思うようになったわ。お姉ちゃんがたとえ怪盗団を捕まえようとしているとしてもね」

「うん、真はそれで良いと思うよ。僕は僕で、怪盗団に頼らなくても良くなるようにしたいと考えてる。それにこうして意見が食い違って、各々の立場が変わったとしても、僕と真は友人だし、こうやって一緒に帰ることも出来るじゃない。怪盗団に関する考え方の違いなんて、日常の雑談ネタの一つでしかないんだから。あんまり深刻に考える必要なんか無いさ」

「雑談、そう……、そうよね。と……あなたの言う通り。私もあなたとの関係がこれで終わってしまうなんて思わない。雑談でちよつとくらい意見が違ってたってね」

そう言っただけはクスクスと笑う。僕にとって、雨宮さんや真と怪盗団のことで異なる意見を持っていたとしても、それは単なる日常の些細な一コマでしかない。願わくば、彼女らにとってもそうであって欲しいと思う。

そうして真と話しながら歩くうち、彼女が住むマンションまでたどり着いた。

「今日はありがとう。花火は一緒に見られなかったけど、こうやって

話せて楽しかったわ」

「こちらこそ、真の浴衣姿も見られたし、僕にとっても良いことがあったよ。次の機会を楽しみにしてる」

「うん。また機会があったら声を掛けるわね。それじゃ……」

とそこまで言つて、真は口を閉じて躊躇いがちに視線をあちこちに彷徨させたかと思えば、一度目を閉じて深呼吸をすると、覚悟を決めたようにこちらを見つめた。

「おやすみ、と、徹」

「……うん。おやすみ、真」

僕が言い返すや否や踵を返してマンションへと入っていく真を微笑ましく思いながら見送る。僕が名前で呼んだお返しに真も僕を名前で呼ぼうとしてくれていたのか。僕が名前呼びで、真が苗字呼びだと不公平だと思ったのだろうか、律儀なことだなあ。

Interlude—Three women make a market—

テスト期間が終わったある日、怪盗団の面々で行くお祭りを前にして蓮と杏、真の怪盗団女子三人の姿がファミレスにあった。

「ガールズトークしようよ！」

きっかけは杏の些細な一言だ。怪盗団のメンバーとしてついに三人目の女子が加わった。怪盗団という大きな秘密を共有する三人が他とは一線を画す連帯感を持つのは当然の話で、そして怪盗団の男メンバー、竜司、祐介、そしてついでにモルガナも除いた女子だけの集まりなんかを開きたくなるのもむべなるかな。

蓮と真も、特に真はそうした遊びやガールズトークといったものに疎く、それだけに興味を惹かれて参加しないという選択肢は無かった。そんなわけで、テスト期間も終了したことだし、お疲れ様会も兼ねて男子禁制の会がこうして開催されたのだった。

「それでさそれでさ、やっぱり女子が集まったら話題は一つだよね！」  
ドリンクバーで思い思いの飲み物を用意し、注文したポテトを囲んで杏が興奮したように話を切り出す。

「チキチキ女だらけのコイバナ選手けーん！」

「何を話すのかと思ったら……」

意気揚々と告げられた議題に真が呆れたように零し、蓮は我関せずとポテトを摘まんていた。

「ちよつとノリ悪い〜」

二人が乗り気でないことを見て取った杏が不満げにストローを啜える。だが、それに対する真と蓮の反応は淡泊だった。

「そう言われても特に話すことがない」

「右に同じく、よ」

すげなく返した蓮に同調する真。だが、杏は二人のその言葉を聞いてもめげない。むしろ楽しそうに口を歪めて真に目を向けた。

「またまた〜、蓮はともかく真は副会長とどうなのよ？」

「か、彼とはただの友達よ……?」

「動揺している」

「どうして蓮までそっち側に行くのよ……!」

杏に水を向けられ、少し口ごもったところを蓮に指摘される。あっさりど構図は二対一となってしまう、真の戦況は不利になる。

「それで、実際どうなのかなって。結構噂になってたりするしね。二人が付き合ってるんじゃないかって」

「っ、付き合っては無いわよ!」

「付き合っては無い、と」

「言葉尻を捕まえて変に誘導しないの!」

杏が切り込み、蓮が些細な違和感を指摘する。二人の見事なコンビネーションに翻弄された真は、一旦自分を落ち着かせるために飲み物を口に含むと、この窮地を切り抜ける方策を考える。

「海藤君とはそういう関係じゃないから。というか、誰に対してもあの人は同じような態度じゃない」

「うーん、確かに言われればそうなんだよねえ」

冷たい飲み物で熱を持ち始めた頭が冷えたのか、真は冷静に返す。

杏も真の言葉は否定出来ずにポテトを口に啜えて眉根を寄せる。

「副会長は誰に対しても同じ態度かもしれないけど真は副会長には他の人とは違う態度になる」

「ちよ、蓮!」

だが杏の追及は防げて蓮は防げなかった。怪盗団のリーダーだけに観察眼と冷静な判断力はメンバー随一である。使い所がガールズトークではあるが。

「それを言ったら蓮だって副会長と仲良さげじゃん?」

「何故背中から撃ってくる……!」

コイバナという戦場では敵も味方も無いらしい。杏の無慈悲な援誤射撃によって蓮も砲火に晒されることになる。

「そう! 蓮も彼と本の感想会とかしてるの知ってるんだからね!」

「何それ何それ! 私も気になる!」

背中から撃たれた蓮をこれ幸いと真は追及する。便乗して矛先を

逸らす狙いがあるのと同時、真自身も蓮と徹の感想会なるものが気になつていたのは確かなので一石二鳥とも言えた。遠目にも楽し気な様子で生徒会室で話し込む二人が気にならないわけが無かった。そして感想会については杏も初耳だったようで、彼女も身を乗り出して蓮を問い詰める。

「あ、う……。別に、読んだ本の感想を言い合つてるだけ」

少し口ごもった調子で否定する蓮に対し、杏は獲物を見つけたとばかりにニヤニヤと笑みを浮かべる。

「おやあ？」

「これは怪しいわね……」

誤魔化すように俯いてストローに口をつける蓮を微笑ましいものを見る目で眺める二人。怪盗団として活動しているといつもクールで、年齢に見合わぬ冷静に皆を引つ張つていく頼れる女リーダーが、今は年相応の反応を見せている。そのギャップに二人の胸中にえもいわれぬ感情が広がっていく。それと同時に真の中には何故か不安にも似た焦燥感が生じていたのだが、本人はそれを見ないふりをしながら話を続ける。

「でも実際さ、副会長と一緒にいて楽しいのは確かなんでしょ？」

「それはそう。でも真に悪い」

「なんでそこで私が出てくるのよ?！」

自分だけが的にされてなるものかという蓮の企みにより、安全圏に逃げたと思つていた真も再度舞台に引きずり出されることになった。

「花火大会に誘つたけど来てくれなくて残念だったね」

「う……。それは、そうなんだけど」

ルブランでの勉強会で杏が発案した花火大会に徹を誘つたが見事に躲されたことを思い出して真の顔が沈む。

「せつかく真がこんなにアピールしてるのにな」

「あ、アピールとかじゃないから！ ただ友達として一緒に……」

「大丈夫、私も杏も真を応援してる」

「だから違つてば……!」

違う、と言いなながら顔を赤くさせていては説得力も何も無いだろ



う、という言葉は杏も蓮も口に出さないだけの優しさがあった。

「副会長は放っておくといつか刺される。だからそうなる前に真が捕まえておくべき」

「刺されるの!?!」

つい先日あった出来事を思い返ししながら蓮は真面目な顔で真に忠告する。

「……いや、確かにその可能性はあるかも」

「杏まで!?!」

そう言う杏の脳裏に過るのはここにはいない彼女のもう一人の親友の顔。いや、彼女に関しては事情だから仕方ないと思うが、それにしたって徹の対応は出来すぎだと言いたくなくても仕方がなかった。淡い憧れで済んでいるからまだ良かったが、それに留まらなかった子もいるだろうことは想像に難くない。

「副会長って実際優しいし、頼りになるから狙ってる子もいたりしそうじゃない?」

「だけど副会長は誰に対してもある一線以上の距離を詰めようとしな

い」  
杏の疑問に対し、蓮はそう徹を評する。蓮が見る限り、徹の交友関係は広い。廊下で見かければクラスを超えて色々な人と話しているのを見かけるし、実際頼られているのだと思う。しかし、いつも一緒にいる、例えば蓮にとつての怪盗団メンバーのように、共に苦境を乗り越えるような仲間とまで言えるほど深い仲の人間はそういないのではないかと睨んでいた。

「副会長は自分で完結してる。だから頼りになるけど、誰かに頼ったりしない」

鴨志田のときもそうだった。徹は蓮達を頼りにしていると言った。結果として鴨志田を改心させ、問題を解決したのは怪盗団だったが、それまで鴨志田を抑え、なんとか解決しようとしていたのは徹の方だ。蓮の中では、怪盗団が何もしなくても徹が鴨志田の件を解決していたのではないかという思いもあった。

それもあり、蓮は徹がどこか自分達と距離を感じることになるとな

くだが不満を感じていたのだった。

「……そうなのかしら。別に私はそんな風に感じたことはないけど。花火大会の後も……」

蓮の言葉があまりしっくり来ていないのか、顎に手を当ててそう呟く。蓮や杏に聞かせるつもりのない独り言のような呟きだったのだろうが、同じテーブルに座っている二人の耳にはしっかりと聞こえていた。それも聞き逃せないワードまで。

「花火大会の？」

「……後？」

杏と蓮が見事なコンビネーションで真に詰め寄る。真はしまった……、と言わんばかりの表情になるが、もはや逃げられない。

「あの花火大会の後で副会長と会ってたり？」

「待ち合わせ？」

「ち、ちがっ！ たまたま駅で徹と会っただけで……！」

「徹？」

オウム返しに蓮の言葉に、真は更なる失言を悟る。杏の顔が面白いものを見つけたと言うように口角が上がっていくのが真にとっては死刑宣告をする裁判官のようにも見えた。

「名前呼びとかずいぶん仲良くなってる〜！」

「まだ私達は副会長呼び。一步リード？」

「リードとかそういうのじゃないから！」

なんとか矛先を蓮にも逸らそうとしていたが、今の失言でターゲットは真に完全に固定されてしまった。二人の猛攻に屈した真は、花火大会の後、徹と連れ立って帰ったことについて口を割ることになった。

「た、たまたま駅で一緒になって、私が傘も持ってなかったから濡れて帰るのもってことで送ってくれたのよ」

「うんうん、それで？」

「そ、それで、色々話すことがあって……」

「色々とは？」

「どうして私はこんなに追い詰められてるのよ……」

パレスやメモントスの戦闘などよりもよほど真は疲労しているように感じた。特に姉が名前呼びされているのに自分は苗字のままだと駄々を捏ねるような調子で徹に迫ってしまったことを思い出すと顔から火が出そうな気分になんてなってしまう。それも雨で濡れた浴衣のせいで色々と気まずいような思いもした。やはりあの時の自分は熱でも出ていたんじゃないだろうか、そう思うほどにあのときの自分はどうかしていた。それでも徹に名前呼びをされて、自分も彼を名前呼び出来たことを後悔する事は無いが。

「そんな顔をして何を思い出したのかな〜?」

そしてそんな真の様子を見逃してくれるような杏ではない。杏たちに話すことで先日のことを思い出してしまった真を、ここぞとばかりに追い詰める。

「だ、だから……! その、徹が私のことは苗字で呼ぶのに私のお姉ちゃんは名前で呼ぶから、ず、ズルって」

自分の口から友人にそれを説明することのなんと気恥ずかしいことか。言葉は尻すぼみに小さくなっていき、ついに俯いて何も言えなくなってしまう。

「真、よく頑張った」

「なんで追い詰めた張本人に慰められてるのよ、私は……」

そんな真を労うように、蓮が真の頭を撫でる。杏はどうして自分は真の対面に座ってしまったのだと後悔した。この可愛い生き物を何故抱きしめられる場所に座らなかつたのかと。蓮がやっているように真を撫でて愛でてやりたかつた。

ただ、今日は予想以上の収穫があった。真と徹の進捗を聞くだけでももうしばらくは楽しめるだろうと杏はご満悦だった。自分の親友から相談を持ち掛けられてはいることも思うと板挟みになっている感もあるが、それとこれとは話が別なのだ。

「あの副会長の牙城を崩した。やはり真は優秀な参謀」

「どうしてこんなところで私が評価されてるの……」

「けど真には先を越された」

「…………え?」

「あ、失言」

「ちよつと蓮？　今のはどういうことなの!？」

話が別と言ったが前言撤回。あの副会長は中々厄介な火種になりかねない。杏は目の前でわちやわちやとする二人を見ながら内心汗をかくのであった。

「認知訶学……これまたマイナーなものを知っているんだね」

期末試験の結果も発表され、無事に終業式を迎えた日。僕は冴さんから貰った資料を片手に丸喜先生のもとを訪れていた。

試験に関しては今回も学年首位の座を守ることになった。新島さんは雨宮さん他後輩の面倒を見ていたこと、それに加えて教師陣の容赦のない出題に点数を少し落としてしまったようで、次こそは勝つと息巻いていた。

「怪盗団の改心事件に絡んで僕の友人が見つけてきたものです」

「改心には認知訶学が関係している?」

僕が持ってきた資料をパラパラと眺めながら丸喜先生は呟く。

「物理的な世界とは別に、その人だけが持つ認知世界が存在する。認知世界はその人の認知によってその様相を変える。裏返せば認知世界を何らかの手段で他者が改変すればその人の認知に影響を与えられる。一色若葉さんのこの論文はその可能性を支持するものだとは思っています」

「……そうだね。君の考えは概ね正しいものだと思おうよ。その可能性をより確実にすることが、僕の学生時代のテーマだったんだから」

カウンセラーである丸喜先生はやはり認知訶学について知っていた。何なら、僕の予想以上に深く知っているようだった。

「認知訶学について教えていただいても?」

「うーん、とはいえ僕が話せることもあんまり多くないんだけどね。この分野が出来たのってそれこそここ数年、しかもパイオニアである一色博士が既に亡くなっているから……」

「亡くなっている?」

「そうだよ。それも認知訶学について大きな学会での発表を控えた時期のことだったからね。それもあって今じゃ下火になってしまっ

いるよ」

丸喜先生の話では、元は心理学と認知科学の一分野として派生した学問ではあるが、一色若葉という天才が現れるまでは物好きだけが研究する与太話の類だったそうだ。

その人の認知によつて世界の見え方は変わる。哲学に半分足を突っ込んだ言説に加え、更にその認知が一つの世界を形成しているなどという話は多くの科学者の物笑いの種でしか無かったという。しかし、一色若葉はその世界の存在を確信し、それを外部的に変化させる手段についてまで構想を持っていたと言う。その実績もあり、認知訶学は一躍学会の注目の的になった。資金難に喘いでいた研究機関も、一色若葉の功績によつて補助金を受け取ることが出来るようになり、研究の見通しは明るいものになりつつあったらしい。

だけど、その矢先に一色若葉の訃報が届く。それが学会に与えた衝撃はかなりのものだったという。

「何せ界限では一番大きな学会だったからね。一色先生も相当気合が入っていたらしいよ。ただ一方で私生活では追い詰められていたらしくてね、シングルマザーで仕事と育児の両立が難しくなり、育児ノイローゼになっていたかもしれないなんてことを言っているニュースカ新聞記事もあつたと思うよ」

一色若葉の死により、認知訶学は牽引する存在を失い、再びマイナーな学問に逆戻りしてしまったらしい。彼女が残した研究データやメモもあるものの、それを紐解ける人物も極僅か、更には目立った進捗を生み出せないとなれば、スポンサーが離れていくのにそう時間は必要無かつただろう。そんな認知訶学に丸喜先生が興味を持ったのは、大学の講義の中でその名前を知ったことがきっかけらしい。

「認知世界において、その人がどのように世界を認知しているかが分かれば、心理療法は更に適格な手段を以て患者の治療にあたる事が出来る。トラウマ治療の為と言ってトラウマを捏造する、ということが無くなるわけだからね」

丸喜先生は心理学を専攻する中で一色若葉の論文を知り、興味が湧いた。しかし、認知世界というものはそもそも観測することも出来

ず、一部の研究機関くらいしか専門的な設備を備えていなかったため、丸喜先生に出来たのは過去の文献調査くらいだった。

「一色先生は認知世界にはその世界の主、認知している人ともいえる人物がいると言っているんだ。それはその人の無意識の人格であり、だからこそそこで話される内容に嘘は無い。催眠療法よりもよっぽど効率的にその人の無意識に干渉できる手段だね」

「ですがそれは認知世界に干渉出来る術を持った人物がいたとすると、非常に危険なことになりますよね？」

丸喜先生の話聞いて思ったことがそれだ。怪盗団の改心然り、精神暴走事件然り、一色若葉の論文の通りだとすれば、認知世界の主、すなわち無意識に干渉して改心や暴走を引き起こしていることになる。改心と暴走をどのようにコントロールしているのかは分からないが、素人から見ればその二つの間に違いを見出すことは出来ない。

「君の言う通り、認知世界を他者から自由に改変されるなんて悪夢以外の何ものでもないね。本人すら与り知らないところで自分の意識が改変されてしまうんだから。その危険性については一色先生も別の論文で言及していたよ。ただ、認知世界はその主を守る防衛機構を備えているはずだとも述べていたけどね。人にはそれぞれパーソナルスペースがあつて、そこを他者に侵されると不快に思うように、不快、という感情の動きは無意識での排除機構だという説だね。他には実験的な内容だけど、認知世界に意識的に防衛機構となる存在を置く方法についても検討したものがあつた気も……」

僕の懸念は、一色若葉にとつても自明なものだったらしい。とはいえ、今まさに精神暴走事件、改心事件という形で認知世界を改変した事例がある以上、その防衛機構とやらにも穴はあるんだろう。あるいは怪盗団や精神暴走事件の犯人はそういった防衛機構に対抗する手段を持っているのかもしれないが。

「だけど、認知訶学か。確かに言われてみれば……」

「丸喜先生？」

丸喜先生はふと何かを考え込むように視線をテーブルに落としたり。

「……いや、何でもないよ。それより、君の疑問に答えることは出来た

かな？」

丸喜先生は思うところがあるようだが、それを口にするつもりはな  
いらしい。僕としても聞きたかったことは聞けたので深く突っ込む  
こともしなかった。

「それより、さつき君はこの資料を友人からもらったと言っていたね  
？」

「え？ はい、そうですけど」

僕の答えに、丸喜先生は少し表情を曇らせた。

「最初に言っただけど、認知訶学は今となつては学問としては下火、かな  
りマイナーな分野になつてる。そこに目を付けて、尚且つ怪盗団の改  
心や精神暴走事件との繋がりを見出すなんて普通の人じゃかなり難  
しいことだと思う」

「つまり？」

「君の友人は元々認知訶学を知っていたのかな？ もしそうだとすれ  
ばまだ良い。だけど、これだけは心に留めておくべきだよ。君達が、  
いや君が相手にしようとしているのは人の心を本人が知らぬ間に改  
変できてしまう力を持つ人間だ」

丸喜先生があえて言葉にしなかったことは、しかし彼が僕一人を指  
して言ったためにその含意を僕に教えることになった。もちろん僕  
の思い込み、思い過ごしなのかもしれないけれど。

明智吾郎は怪盗団や精神暴走事件の犯人と何らかの関わりを持っ  
ているからこそ、認知訶学についての知見を持っており、それに目を  
つけることが出来た。

「……気を付けるようにします。とはいえ、無意識に干渉してくる相  
手に僕の警戒がどの程度通用するかは分かりませんがね」

「ああ、十分に用心してほしい。僕は君と話す時間が好きだからね」

その可能性を否定する言葉が僕の口から出ることは無かった。僕  
自身、あり得ることだと思ってしまったから。

けれど、それでも僕にとって明智君は信用に値する、信用したいと  
思える人間であることに変わりはない。



丸喜先生との話を終えた僕は、帰りの道すがら、頭の中で会話の内容を反芻していた。

育児ノイローゼで亡くなったとされる一色若葉。直接の死因は車に撥ねられたことらしいというのは過去のニユース記事を検索して知ったことだ。当時の目撃者の証言では、横断歩道で娘と信号待ちをしていた彼女は、突然フラフラと車道に飛び出し、そのまま車に轢かれた。程なくして遺書が関係者に公開され、そこには育児について悩んでいたという記述があったことから育児ノイローゼによる自殺ということでのこの一件は決着してしまった。

「育児ノイローゼ……」

シングルマザーであれば確かに仕事と育児で忙殺されてしまい、精神的に疲弊していた可能性は否定出来ない。僕には想像することしか出来ないが、プツリと糸が切れてしまったようになってしまったのだとしても頷ける。

「だけど何だ、この違和感は……」

あまりにも話が出来過ぎていないか、と思うのだ。

新進気鋭の学者で、大きな学会での発表を目前に控え、その直前で育児ノイローゼで自殺？

更にはそれ以降、認知訶学の研究は下火になった。だというのにそれと入れ替わるようにして精神暴走事件と思しき事件が発生するようになった。一色若葉の自殺は数年前のこと、一方で明智君の捜査情報と過去のニユース、記事の洗い直して精神暴走事件が発生するようになったのも数年前。この妙な符合は偶然なのだろうか。

陰謀論と一蹴されてしまえばそれまでの話だけれど、一色若葉の研究が精神暴走事件の犯人によって悪用されてしまったとする。その場合、悪用する犯人が最初に狙うのは誰になるだろうか？ 僕が認知世界の存在とその力に気付き、悪用したいと考えたとして、最もその邪魔になりそうな人物と言えば、まさしくその研究の創始者であり、対抗手段を考案する人物、一色若葉になるだろう。

だとすると、精神暴走事件の最初の被害者は他ならぬ一色若葉になるんじゃないだろうか。

「丸喜先生はスポンサーも離れていったと言っていた。全てが彼女の研究の有用性から目を背けるためのもの？」

考えれば考える程、精神暴走事件の背後にいるのはただの一個人であるなどとは思えなくなってきた。それどころか、一企業で終わるかも怪しい話だ。

だけど、ここまではまだ僕の妄想に過ぎない。この仮説が正しいかどうかは検証する必要があるし、その検証については明智君にも、冴さんにも、雨宮さん達にも知らせることは出来ない。何かあったとき、僕一人で手に負える話ではなくなってしまった。

「最初に話を聞くべきはやっぱり、この人しかいないかな」

僕はそう呟いて足を止める。一度深呼吸して心を落ち着かせる。もしかしたら、いや恐らく確実に話を聞く過程で怒らせてしまうだろうから、その覚悟をするために。そして、意を決して僕は扉を開く。扉に付けられた、来客を知らせるベルが軽やかな音を立て、カウンターの奥にいた人物が眼鏡の奥から僕をじっと見据えた。

「いらっしやい」

「どうも、佐倉さん。また来ちゃいました」

ルブランのマスター、佐倉さんはそう言う僕を見て少しだけ呆れたように笑ったのだった。

The Hierophant and Ali  
baba

「ほらよ、アイスコーヒー」

「ありがとうございます」

カウンターに座った僕に差し出されたのはグラスにたっぷり汗をかいて冷たさをアピールするアイスコーヒー。ストローで一口吸い上げてみれば爽やかな酸味と仄かにフルーツのような甘みを感じる香りが鼻に抜ける。

「美味しい……。これは水出しですか？」

「へえ、分かるのかい」

「コーヒーは好きなので、それなりに勉強したりもしてます」

水出しは普通の抽出とは違って苦みよりも酸味が強調され、より華やかな香りを楽しめるのが特徴……。だったと思う。何より日中の猛暑で渴いた身体にスツキリとしたこの味は病みつきになると思う。使われている豆や、カウンターから見えるサイフォンなんかをネタに雑談をしていると、佐倉さんは気を遣ってかクツキーも追加で出してくれた。「普段は女にしかやらないサービスだがな」とのことなので、結構レアなサービスなんじゃないだろうか。

「学生でここまで話せる奴がいたとは驚きだな」

「実際に焙煎したことも無い頭でつかちなだけですけどね」

「馬鹿言え、その歳で焙煎機まで持ってたら出来すぎだ」

店内は珍しく僕以外に誰もいないので、自然と佐倉さんとの会話も弾む。このまま話していても楽しいし、何ならこの空気を壊したくないから今日はこのまま帰ってしまおうかという誘惑まで感じるが、今日ほど話を切り出すのに良いタイミングは中々訪れないと自分に言い聞かせ、僕は残ったコーヒーをグイッと飲み干した。

「……佐倉さん」

「なんだ、神妙な顔しやがって」

おかわりのコーヒーを淹れてくれながら、佐倉さんは雰囲気の変

わった僕を怪訝な顔で見つめた。

「今から、僕は佐倉さんの触れられたくないことに触れてしまうかもしれない」

「……あの検事の差し金か？」

僕の言葉に、佐倉さんの表情が険しくなる。僕が何を言おうとしているのかを半ば察したのだろう、冴さんとの繋がりを疑ったようだ。「違います。僕が自分で調べて、その上で佐倉さんにお話を伺いたいと思っただけです。冴さんは無関係です。ただ、もしお話を聞かせていただけたとして、冴さんに聞かれた際は佐倉さんが許す範囲で情報を共有することもあるかもしれません」

でも今回は僕が勝手に推理し、佐倉さんに話を聞こうと思っただけだ。その責任を冴さんに被せるのは許されない。もちろん、今言っただけに情報共有をすることだってあるかもしれない。だけどそれも佐倉さんが許可したらの話だ。聞いた本人が言いふらしてほしくないことを僕は口にしたりするつもりは無い。

「……ハア、そこであの検事のせいにしときや楽だつづうのによ」

「往々にして正しいやり方は面倒でしんどい方法って相場が決まっていますから」

「それで、俺に聞きたいことってのはなんだ？ 聞くだけは聞いてやる。答えるかは保証しねえ」

「構いません」

少なくとも佐倉さんに門前払いをされることは無かった。後は僕が頭の中に組み立てた話をするだけ。

佐倉さんが差し出してくれたお代わりのコーヒーで口を湿らせると、僕は話し始める。

一色若葉と認知訶学。その大きな発展を前に非業の死を遂げた稀代の天才は、一般的には育児ノイローゼによる自殺とされている。実際、彼女には当時中学生になる一人娘がいたということは口きがないメディアが暴き立てていた。研究と育児の両立というストレスに耐えきれず、ある日突然車の前に身を投げ出したとされる彼女。だけど僕はそこに違和感を覚えた。

「本当に若葉さんは自殺したんでしょうか？」

「……続ける」

「彼女が研究していた認知訶学とは人の無意識に意識的に働きかけ、トラウマや精神疾患への治療に応用することを期待されていました。ですが、それは裏を返せば人為的に精神疾患を発症させられる技術とも言えます。使い方によれば巨万の富を築き、大きく言ってしまうと世界を支配することだって出来るかもしれない。そんな技術です」

だから思うのだ。一色若葉の研究は、それを利用、悪用したいと望む勢力によって独占されてしまったのではないかと。それを許さない一色若葉が真つ先にその技術の犠牲になってしまったのではないかと。

「以前、秀尽学園の生徒名簿を確認する機会があつて、そのときにたまたま目に入ってしまったんです」

佐倉双葉

同じ姓は偶然の一致だろうか、僕にはそう思えなかった。そして冴さんがしつこく佐倉さんを訪ねたことを聞いて繋がった。

「双葉さんは若葉さんの娘さんじゃないですか？ 何らかの理由があつて佐倉さんが引き取った」

「……だから双葉に話を聞かせろつてか？ お前の勝手な推理とやらを補足するためにアイツのトラウマを穿り返せば満足か？」

話の持つて行き方がまずかった。佐倉さんがますます険しい表情をして僕を睨みつけている。

「違います。僕が話を聞きたいのはあくまで佐倉さんです」

「俺は何も知らねえ。若葉がどんな研究をしたたかなんて……」

「そこじゃないんです。そんなものは大事じゃない」

「はあ？」

僕が否定したことが意外だったのか、先ほどまで険しい表情をしていた佐倉さんが今度はポカンとした顔で僕を見つめていた。

だけど本当に僕は一色若葉の研究そのものに興味など無いのだ。それを深く知ったところで、確かに怪盗団や精神暴走事件の手口には近づけるかもしれないけど、僕の知りたい核心には近づけない。

「僕が聞きたいのは佐倉さんから見た若葉さんです」

「俺から見た若葉？」

「はい。佐倉さんから見た若葉さんは育児ノイローゼに見えましたか？ 研究と娘さんの板挟みになって自ら命を絶つほど追い詰められて見えませんか？ 双葉さんを引き取るくらいには若葉さんと親交があつただろう佐倉さんから見て、どうだったかを聞きたいんです」

佐倉さんはしばし考え込むように額を掻くと、一度大きくため息をついた。

「……いや、少なくとも俺から見て、若葉は自殺するような状態じゃなかった。うちに来たときはいつも双葉の話をしてたもんだ。研究で疲れてたのは確かだろうがな。それでも、学会が終われば双葉を連れて旅行に行くなんて言ってたんだぞ。誰が自殺するなんて思うんだよ……」

佐倉さんが語ってくれたのは、僕が半ば予想していた内容だった。やはり、一色若葉は自殺するほど追い込まれた精神状態ではなかったのではないかという見方が強まった。もちろん、本当のところはどうだったかは分からない。けれど、この説を採用すれば彼女の死によって下火となった認知訶学研究、入れ替わるように発生し始めた精神暴走事件の関係性について、辻褄が合うこともある。ただの考えすぎ、陰謀論だと言われてしまえばそこまでだけだ。

「それだけ聞ければ十分です。僕の中で、若葉さんは彼女自身の研究内容によって狙われた、という仮説の信憑性が高まりました」

「……だがよ、遺書には育児に疲れたただの双葉に対する恨み言が書かれてたんだぞ。それで双葉はトラウマを抱えちまったんだ」

「その遺書がご本人の書いたものかどうかは分かりませんが。僕がもしも若葉さんの研究内容を狙うとすれば遺書くらいでつち上げますよ。ちようど良いアリバイができたって思いながらね」

佐倉さんは僕の言葉を聞いて怒りに拳を震わせた。僕自身、言いながら反吐が出そうだが、僕の考えが確かなら双葉さんは体の良いスケープゴートにされたんだろう。ノイローゼだと言ってしまえば突発的な自殺にもっともらしい動機をくつつけることが出来る。それ

によって幼い少女に耐え難い苦痛を味わせたとしても、彼女の研究を独占するうま味があると判断したのなら、人によつてはやるだろう。

「そんな、そんなことで双葉が、あの子が苦しめられたつてののか……？」

「僕の勝手な推理に過ぎません。ですが、ニユースになつていて精神暴走事件が若葉さんの研究内容を利用してしているものだとすれば、数年前の若葉さんの死、それと入れ替わるように世間を騒がせ始めた精神暴走事件、人がある日突然豹変し、思いもかけない行動を起こす。一致する符号が多すぎると思いませんか？」

もしかしたら若葉さんは本当にノイローゼになつてしまつていたのかも知れない。それによつて衝動的に自殺に走つてしまつた可能性は否定できない。けれど、近い人目の目というのは案外鋭いもので、双葉さんを引き取る程度には若葉さんと親交のあつた佐倉さんの目から見てノイローゼには見えなかつたというのなら、その見方は割と信用しても良いものだと思は考えていた。

気が付けば、コーヒーに浮かべられた氷も溶けてしまつていた。少し薄くなつたコーヒーで喉の渴きを癒しながら、佐倉さんが落ち着くのを待つ。

「……それで、俺から若葉のことを聞いてこれからどうする？」

ひとしきり毒づいた佐倉さんは先ほどよりは落ち着いた声で僕に問う。

「今回お話を聞けて僕の予想があながち間違いじゃないかもしれないと思えました。だから自分に出来る範囲でもう少し調べを進めてみようと思ひます。このお話は冴さんとある程度共有しても？」

「構わねえよ。直接家だの店に押しかけて来なくなつたが電話はまだ掛かつてくるんでな。これで満足してくれるんなら話してもらつても良い」

だがな、と佐倉さんは言葉を続けた。

「お前さんはこれ以上深入りするのには止めとけ」

「……やっぱりそう思いますか？」

「分かっているんなら言わせるんじゃないやねえ。お前の話が確かならこんなヤマ、高校生のガキ一人の手に負えるもんじゃねえだろ。もし若葉が頭をおかしくされちまったってんならお前さんだつてそれをされるかもしれないねえ。賢いお前なら分かるだろう」

佐倉さんの言葉は正しい。こんな映画みたいな陰謀、とてもじゃないが高校生が知って良いことじゃない。なんなら、今の僕のポジションは物語の途中で消されてしまうような立場なんだろうとも思うけれど、僕はここで退くわけにはいかない。

「佐倉さんの言う通り、これ以上は僕の手に残ると思います。でも、もう少し頑張りたいんですよ」

「なんで……」

「僕の友人が、巻き込まれているかもしれない。僕はそれを放っておけません。それに、双葉さんのことだつてあるじゃないですか」

「双葉？ 会ったことも無いじゃないか」

「でも彼女は秀尽の一年、僕の後輩です。後輩は出来るだけ助けあげたいじゃないですか。お節介かもしれないですけどね」

「……つたく、とことんお人好しだな、お前さんは。損するぜ、その生き方」

佐倉さんはそう言つて呆れたようにため息をついた。僕自身、ちよつと自覚していることだ。

僕の頭には、いつも人当たりの良い笑みを浮かべながら、けれど誰に対しても一線を引いて本心を明かそうとしない彼の姿が浮かんでいた。もし、僕の考えがただの飛躍では無いとして、彼が真実、モリアーティだったとしても、僕は歩みを止めたりはしないだろう。

「僕が少し損するくらいで誰かが喜んでくれるならそれはそれで良いじゃないかとも思いますよ」

「……こりゃ付ける薬はねえな」

僕の言葉に今度こそ佐倉さんは笑った。呆れたような様子だけど、先ほどまでの張り詰めた空気は霧散していた。

その後は、再び他愛もないお喋りに興じながら、お客さんが何人か入ってきたところでお会計を済ませて店を出ることにした。佐倉さ



んから請求されたのは最初に頼んだコーヒー代のみだった。「俺が男にこれだけサービスすんのは稀だからありがたく受け取っとけ」と押し切られてしまい、結局それ以上のお金は受け取ってもらえないままに終わった。相変わらず振る舞いが大人でカッコいい人だ。

さて、聞きたいことも聞けたし、後は過去の精神暴走事件をもう少しだけ洗い直そうかと考えていた矢先、僕のスマホにメッセージが届く。

差出人は……、アリババ？

メッセージアプリを開けば、連絡先に登録した覚えが無いどころか、差出人不明のメッセージが一通。

『お前は怪盗団の一員か？』

そのメッセージに、僕の背中に冷や汗が一粒流れ落ちるのを感じた。

Like finding a needle in a desert

『お前は怪盗団の一員か?』

アリババを名乗る差出人不明のメッセージはそれだけ。だということにその文面から伝わってくる圧力に僕は思わず手が震えるのを感じた。

もう動きを悟られた? にしてもあまりにも早すぎる。佐倉さんに話を聞いた直後にこのメッセージが来るなんて先ほどまでの会話がどこかで聞かれていたとしか思えない速度だ。あるいは丸喜先生のところからだろうか。だとしても数時間程度しか変わらない。

メッセージを見て固まっている僕にしびれを切らしたのか、僕のスマホに通知音と共に新たなメッセージが届く。

『怪盗団の一員ではないのか?』

『ならば何故認知訶学について調べている?』

『その知識を何に利用するつもりだ』

確認するようなメッセージ。そこに微かな戸惑いと警戒が見えた。

これに対しどう返すのが正解か。顔も見えない相手との文字を介した会話は僕の最も苦手とするものの一つだ。出来れば顔を合わせて話をしたいけれど。

『違います。僕は怪盗団ではありません』

『怪盗団では無いのなら何故認知訶学について調べている』

『悪用を企てているのなら相応の報いを受けてもらう』

相手の反応が速くてついて行けない。スマホで文字を打つのは苦手なんだ。

『認知訶学を悪用するつもりも無いです。調べていたのは僕の友人がこれに関連する事件に巻き込まれているから、何とか助けたいと思っただけです』

『……』

『そうか』

『信用は出来ないが、ひとまずは信じることにする』

『だが、怪盗団の一員では無いと言うことはお前から怪盗団にコンタクトを取ることは出来ないのか』

細切れに送られてくるメッセージを追うので精一杯になる。こんな風に話すのなら直接電話をした方が早いと思ってしまうのだけど、流石に正体も何も分からない相手に僕の電話番号を知らせる気にはなれない。いや、もしかしたらもう僕の番号くらいは知られているのかもしれないけど。

『怪盗団にコンタクトを取りたいのは何故？』

『……』

『お前には関係ない』

『ともかく、これ以上認知訶学を調べようとするのは止めろ』

『今回は見逃すが、次は無い』

僕の方から投げかけた疑問に答えることなく、対話は一方的に打ち切られた。メッセージを送り直してもエラーが出て送信することが出来なくなってしまった。

アリババと名乗る謎の人物。彼あるいは彼女は彼女は、僕が認知訶学について調べているという情報を驚くべき速度で捕捉し、更にコンタクトを取ることすら出来ない存在だ。

だが一方で、アリババ自身は精神暴走事件や改心事件には関与していないようにも思えた。二つの事件に関与しており、尚且つ僕の動きを把握出来る程の人物であれば、僕を見逃すことは無いと思う。それほどまでに、僕は危うい立場にいる。それくらいは僕にも理解できる。佐倉さんにだって釘を刺されたのだから。

「と言っても、僕はそれで止まるような殊勝な性格は生憎としてないんだけどね」

誰に言うでもなく呟いた僕は、携帯をポケットにしまおうとしたところで、再度メッセージの着信を知らせる振動を手に感じた。

「……おっと、これはまたある意味タイムリーな人から」

画面に表示された送信者の名前を見た僕はある意味狙い済ましたようなタイミングだと笑ってしまった。実は彼も僕のことを監視し

たりしていないだろうな。あながち間違っていないかもしれない。

メッセージを見たのに返信しないでいることにしびれを切らしたのか、今度は着信。なんてせつかちなんだ。

「やあ、今時間あるかな？」

「返信無いからすぐに電話なんて急ぎの用事かい？ 明智くん」

電話の向こう側でクスクスと笑っている明智君の顔が容易に想像できた。

「急に呼び出して悪かったね」

「本当にね」

「私まで呼び出すなんて余程のことというわけ？」

明智君に指定された場所に顔を出してみれば、そこには彼以外にもう一人、冴さんの姿もあった。

「こうして三人揃うなんていつ以来かしら？」

「基本的に冴さんも明智くんも多忙ですしね」

オフィス街、貸し会議室の一室だろうか。誰にも話を聞かれないようにと考えるとこういう場はちょうど良いのかもしれない。少し小さめの会議室に僕と冴さんと呼んだ明智君は、僕と冴さんの前に簡素に綴じられた紙の束を差し出した。

「今日二人を呼んだのは僕の方で調べていたことがある程度纏まったから、その情報共有かな」

明智君に渡された紙束の一枚目、そこに簡素な字体で書かれていたタイトルは『改心事件の考察と怪盗団を名乗る一味の正体に関する調査書』。

そこにはどこから調べ上げたのか、鴨志田、班目、金城の三名の聴取結果をまとめた三件の改心事件の詳細な時系列。それに名前は伏せられているものの、関係者への聞き込みも合わせて三人のプロファイルリングも込みの資料。

「僕の推理である金城と怪盗団の繋がり、それは今回の金城の自白で

無いと分かった」

資料に目を通しながら、明智君は調査の進捗について話してくれる。

「それについては、僕の推理より君の推理が正しかったということになるね、徹」

「別に推理が当たっていたから嬉しい、という気持ちは特に無いけどね」

「だけでもう一つの懸念。精神暴走事件の犯人が怪盗団と同一人物であるというものについては、今回の調査でよりその信憑性が増したと僕は考えている」

明智君は警察と協力して今回の改心事件の取り調べを進める傍ら、過去の精神暴走事件についても独自に調査をしていたらしい。それによれば、精神暴走によつて事件を起こし、明智君によつて検挙された人間の証言と今回の改心事件のターゲット三人の証言はいずれも重なるところが多いことが判明した。

「精神暴走事件で犯人になった、されてしまった人は皆、ある日突然自分の中の衝動が抑えきれなくなったと言っているんだ。しかも、その証言をした後に獄中でいずれも死亡している」

「……改心事件のターゲットになった三人は？」

「それに関しては今のところ何も」

「その情報だけ聞くと改心事件と精神暴走事件の差異の一つだと僕は思うけど？」

「怪盗団の世間イメージは義賊だ。そのイメージを保つのに、ターゲットが獄中死したなんてニュースは報道されちゃいけないだろう？」

精神暴走事件を経て改心事件を起こした怪盗団、という犯人像を明智君はあくまで崩す気は無いらしい。

明智君にしては珍しく強情だと思えるほどに。

丸喜先生や佐倉さんと話したからでもあるのだろう。僕にとつてその姿は怪盗団に精神暴走事件の犯人であつて欲しいと望んでいるようにも思えてしまう。僕の思い込みのせいであると自分に言い聞

かせた。

「精神暴走事件の主犯は怪盗団、その推理を否定する気は無いけれど、あまりにも拘っているように見えるわね」

けれど、同じことを冴さんも感じたらしい。資料に目を通しながら、それでも明智君の推理に対して冴さんは彼女なりの疑問をぶつけていく。

「精神暴走事件と改心事件を同一視し続けるのも危険だわ。そもそも今まで精神暴走事件でも十分に社会にその影響を及ぼしてきた犯人がどうして改心事件で知名度を稼ぐ必要が出てきたのかしら？」

「それについては犯人に聞いてみないと何とも……。そもそも動機なんて無い。気まぐれ、という可能性も十分にありますからね」

「その動機を考えるのが裁判における検事の仕事だし、事件における探偵の仕事じゃない？」

冴さんの言葉に明智君が言葉に詰まった。そこで冴さんの視線は僕に移る。

「あなたはどう思うかしら？　精神暴走事件と改心事件の犯人は同一犯じゃないという立場に立つあなたの目から見て、この資料はどう映るかしら」

冴さんは僕にあえて見せつけるように資料を掲げる。ここまで強調するということは冴さんが何を言いたいのかは何となく予想がつく。

認知訶学については伏せる。

そう言っているのだ。認知訶学の資料を僕に渡したこと、冴さんは明智君に共有していないはず。冴さんにとって僕が認知訶学を知り、独自に調べを進めているのは彼女以外の誰にも知り得て欲しくない切り札ということなのだろう。僕としても、また違った理由で明智君に僕が認知訶学を知っているということは知られたくない。だから僕は手元の資料から得られた情報だけで話を進める。

「最初に言っておきますけど、明智さんの資料はよく調べられていると思います。改心事件のターゲットとその周囲の人間関係を洗い直し、その上で怪盗団の容疑者として疑いのある人間のリストアップま

でされている。僕が最も疑わしい人物となっているのは、まあ自分でもそうなるだろうとは思ってるから何も言えないや」

資料を捲っていけば驚くほどにその資料の精緻さが伝わってくる。ここまでの情報を集めるのにかかった時間も、それを纏める時間も、想像もつかないものだったに違いない。

容疑者のリストアップにも余念が無い。鴨志田先生の改心をきっかけとしたことから秀尽生に焦点が当てられており、そこから斑目、金城と関係性の絞り込みを掛けていく。驚くことに、雨宮さんや坂本君、高卷さんが既に怪盗団の容疑者としてピックアップされていた。

これまでのターゲット三人全員と多かれ少なかれ関わりがあり、その上でその他の疑わしい人物とも関わりを持っている人物として僕が怪盗団の筆頭容疑者になっているのは我ながらあまり否定のしようが無くて苦笑しか出来ないけれど。

「資料を纏めながら僕も頭を抱えたよ。客観的に考えれば考える程、君が怪盗団であると全てがしっくり収まってしまうんだから」

明智君も僕と同じように苦笑する。そこまで言いながらも、明智君は僕が怪盗団では無いと確信しているらしい。僕もどうして信用されたものだと思う。

「じゃあ僕が怪盗団だと仮定したとして、精神暴走事件が始まったのは僕がまだ高校生にもなっていないかかって頃だ。そんな時分の人間の行動範囲で精神暴走事件を起こす余地があると思うかい？ この容疑者リストはまずその観点が抜け落ちている」

「……続けて」

「精神暴走事件の犯人は怪盗団と同じ力を持っている。それについては僕と君の意見は一致していると思う。その上で違うのはここからだ。精神暴走事件は恐らくその裏に僕らの予想もつかない人物、ないしは組織が関わっている」

「その根拠は何？ 根拠が無ければ明智君の推理と何も変わらないわ」

冴さんからも疑問が飛ぶ、というよりは僕が話しやすいように敢えて話題を振ってくれているんだろうな。ただ、僕だって冴さんや明智

君から情報を貰ってばかりじゃない。自分の足で稼いだ情報だってある。二人のそれよりはよっぽど少ないけれど。

「冴さんに言われた通り、過去の精神暴走事件をもう一度調べました。新聞記事からネット記事、果ては個人のブログまで。漁れるものとはとにかく全部です」

それでも大した情報量にはなっていないだろうけれど、それでも見えてくるものは少しだがある。僕が陰謀論に憑りつかれてしまったというのではない限りだけれど。

「大企業の不祥事、省庁役人や政治家の汚職や醜聞。精神暴走事件は必ずこうした大きな事件とセットで起こっているような気がしました」

「……どういふことだい？　そういう類の話は多くは陰謀論の域を出ない。それこそ根拠が無いと話にならない」

明智君が僕を鋭い目で睨む。探偵として、自身の推理に自信があるからこそ、僕が突然打ち出した荒唐無稽な話は受け入れ難いのだと思う。だけど、僕も無根拠にこんなことを言いだしたわけじゃない。

「個人的に知り合った記者がいます。色々と話を聞けたんですよ」  
怪盗団事件を間近で見てきた人間として、その事件に関して私見も交えて情報を提供する。代わりに僕も僕で知りたいことを色々と聞かせてもらった。元々は週刊誌のゴシップなんかじゃなく、社会部で政治家の動きを追ったりもしていた彼女だからこそその知見、そして情報は僕にとっては千金の価値があった。

この話が終わればまた大宅さんのお酒に付き合う必要があるかもしれない。

「その話とは？」

「精神暴走事件は当時から週刊誌の格好のネタだったらしくてですね。その記者さんが話を聞きだした官僚が次の日には自分の所属する省庁の汚職について全て暴露する遺書を残して自殺したりだとか、当時の大臣は辞任する羽目になったらしいですよ」

「その一件だけで精神暴走事件には政治が絡んでいると？」

「まさか、これだけじゃただの陰謀論だと思うさ。だけど、君が資料に



きちんと書いてくれているじゃないか」

僕はパラパラと資料を捲って目的のページを探し出す。それは斑目と金城の事件聴取の記録。

「斑目は贋作販売で得た資金、金城は特殊詐欺で稼いだ資金を、それぞれどこかに流していたのは確かだ。私腹を肥やしていた分ももちろんあるんだろうけどね。だけどいずれも得た資金の一部は送金していたとある。その先までは言えなかったみたいだけど。君がここに書いている」

「それは……」

「どこまで資金が流れていたかは定かじやない。本当だとすればいくつも口座を経由している。その大元に辿り着くのは容易じやない」

もし僕の予想通りだったとすれば、僕の言っていることは全て自分の身を危険に晒す行為だ。

「この国で一番お金がかかる行為って何だと思う？ 選挙だよ。選挙には大きな金がかかる。ただの一般人が政治家二世に敵わないのはその地盤があるからだけじやない。資金力の差があるからなんだ。動かせる人が違う、動かせる物が違う、出会える人が違う。ここまでの規模に金を集める人間だったら考えることはただ私腹を肥やす、といったものじやない。金で金を集め、金に働かせるんだよ」

「ちよつと待ちなさい。それじやあなたは精神暴走事件の背後にはこの国の政治が絡んでいると言いたいわけ？」

冴さんが信じられないという表情で僕を見る。

「度重なる政治家、官僚の汚職。明日には誰が自分の醜聞を暴露するか分かったもんじやない。その中であつても尚威勢よく言葉を発し、周囲の注目を集めている人物。それが出来るのは自分に後ろ暗いところが何も無い人間か、あるいは自分だけは安全圏にいると分かっている人間だけだと僕は思いますよ」

さあ、明智君、冴さん、あなた達は僕の言葉をどう受け止める？

願わくば、妄想に憑りつかれた人間の言葉だと一笑に付して欲しいものだ。

僕の言葉を聞いた明智君と冴さんはしばらく一言も発さずに黙り込んでしまっていた。

それもそうだろう。自分でもとんでもないことを言っている自覚はある。けれど、考えれば考える程、嫌な方向に糸が繋がっていくように感じてしまうのだ。

そして最悪の方向に繋がってしまう前に、僕はこれを二人に打ち明けることにした。

「……海藤君、あなたはこの事件の背後、精神暴走事件にはこの国の政治が関わっていると主張するのよね？」

「ええ、その通りです、冴さん」

「だけど、だとしたらどうして怪盗団はここまで野放しにされているの？ 精神暴走事件の首謀者からすれば、怪盗団は明確な脅威よ。自分達の手口を知り、それを利用して。いつかは自分達のやっていることにも気付くかもしれないのだから、さっさと潰してしまおうとするのではなくて？」

冴さんが顎に手をやりながら考えを述べる。僕もそこに関しては悩んだところだ。精神暴走事件の犯人が怪盗団の手口を知ったとすれば、それを野放しにして得られるメリットとは一体何だろうか。僕が思いついた考えはそこまで多くは無い。

「怪盗団に罪を被せてしまうつもりではないか、と思います。怪盗団を潰す、というか捜査するのは今まさに僕達や警察が進めてますからね。捕まえた後は精神暴走事件なんかも余罪として被せてしまつて真犯人は逃げおおせる、といった算段じゃないかと」

「手口を知るものが少ないからこそ出来る手、という訳ね」

僕の言葉に納得のいったように冴さんは頷いた。冴さんに関しては僕はあまり説得が難航するとは思っていなかった。むしろ、この場で最も反応が見たい人間が未だに沈黙を保っている。

「君はどう思う、明智くん」

僕は敢えて問い掛ける。これが明智君を不用意に刺激するような

ものだと分かってなお。

かつて僕は彼に言ったじゃないか。たとえモリアーティだったとしても、見捨てないと。

だから僕は目を逸らさない。僕の考えが正しいとしても、まだ彼には別の道を探る選択肢だつてあるはずだ。

明智君は目を閉じていた。誰とも目を合わせたくなかったと言わんばかりに、固く。けれど、僕の言葉に観念したように小さく息を吐くと、その瞼は開かれ、僕と視線がぶつかった。

「君の推理に関して、否定出来る材料は僕には無いかな。怪盗団は精神暴走事件とはまた別軸で話すべき、かもしれないね」

「それだけじゃない。精神暴走事件の背後にある繋がりについて、君はどう思う?」

「……僕から言えることは、君の推理が正しいとすれば僕達全員が今すぐこの事件の捜査から手を引くべきだということだけだよ」

明智君はどこまでも高校生探偵としての仮面を被ったままだった。

「政治が絡んでいるとすればその闇は僕達が想像するよりも深い。そんなの、一介の高校生二人と検事一人で何とか出来る問題じゃない。見なかったことにして、闇に葬るのが正解だ」

「ちよつと待って、まさか見逃すだけでも言うつもり?」

事件から手を引けという明智君に対し、冴さんが語気も荒く詰め寄るが、明智君は一步も引かず、むしろ冴さんがたじろぐ程の眼光で睨み返した。

「じゃあ逆に聞きますが、冴さんは守り切れますか? 感知できない方法で精神を弄り、廃人にしてくる人間を相手に、後ろ盾のない高校生二人と自分自身を」

「それは……」

明智君に問い返され、冴さんは言葉に詰まる。明智君の言う通りなのだ。僕達は今、非常に危ない橋の上にいる。普通に考えて、僕の妄言が確かならもうこれは一介の探偵や検事の手に負えるものじゃない。ドラマや映画じゃあるまいし、僕らだけで解決できるような規模じゃなくなってしまうているのだ。

けれど、そうやって当たり前のことを言っているような明智君の表情が、僕にはどこまでも痛々しいものに見えた。それは僕が彼に対して先入観を持ってしまっているからかもしれないけれど。

「明智君、僕らの手に負えないと言うけど、君ももう手を引くということかい？」

「……精神暴走事件についてはそうせざるを得ないだろうね。怪盗団を追いかけることに専念するよ。改心事件も精神暴走事件も、僕の正義に照らして許せない」

「だけど、そうすれば怪盗団は精神暴走事件という謂れのない罪を擦り付けられることになるわ」

「じゃあ怪盗団からも手を引きますか？ 冴さんはそれで良いんですか？ 上に上がるためのチャンスでしよう？」

会議室内には重たい沈黙が漂う。明智君の言葉は見事としか言いようがない。僕が穿った見方をしていなければ、明智君の言うことは一分の隙も無い、だから冴さんも口を閉ざすしかない。

「海藤君、君にももう手を引いて欲しい。いや、こういう言い方だと良くないな。もうこれ以上は深入りするな。これ以上は、冴さんも、僕だって底い切れないからね」

明智君の鋭い目は次に僕の方に向けられた。彼の言葉はどこまでも正論だ。これ以上は一介の高校生が分け入って良い領分ではない。本当ならここで手を引いておくべきなのだろう。けれど、僕は止まらない、止めれない。

「……無理だよ、明智くん。ここまで知ってしまったら、もう止まれない。それに僕の友達がそれに巻き込まれようとしてるんだ」

「……それは捜査資料にもあった雨宮さんや坂本君のことかな？」

明智君の探るような視線が僕の一挙手一投足を逃さぬと言わんばかりに僕を射抜く。探偵として働く中で培った観察眼を駆使して、僕の些細な反応から全てを詳らかにするために。

「違うさ。巻き込まれようとしているって言うのは君のことだよ、明智くん」

「僕……？」

けれど、僕の言葉に明智君は驚いたように目を丸くした。そこまで意外に思われるようなことを言った覚えは無いのだけれど。

「君は僕のことをただの助手としか思っていないかもしれないけど、僕にとつて君は友達なんだ。その友達が危ない目に遭うかもしれないっていうのに、それを知っているのに助けないっていうのは嘘だろう?」

「何を、馬鹿なことを。だって君は……」

その先にどのような言葉を紡ごうとしたのかは定かではない。明智君は冴さんに視線を向けるとまた表情を硬くして口を閉ざしてしまったからだ。

「……取り敢えず、この話については少し時間を置いて各々考えることにしましょう。明智君の言う通り生半可な覚悟で手を出して良い山じゃないわ」

冴さんのその一言で、今日のところは解散となった。場合によっては、今後は明智君からも冴さんからも僕に連絡が来ることは無くなるだろう。ただ、もしそうなったとしても僕は僕で動くことを止めるつもりは無い。立ち止まってしまうと、言いようのない焦燥に駆られるからだ。

貸しオフィスを出て、一人で電車に乗っていると、僕のスマホにメッセージの着信を知らせる通知が鳴った。差出人は、先ほど別れたばかりの冴さんからだ。

『あの話、どこまで本気?』

『全て本気ですよ』

『そう……。だとしたら、本当に私じゃあなたを守り切れないわ』

『目立たないように動く、という段階はもう過ぎてしまったと思います。後はどこまで味方を増やせるかです』

『検察庁じゃ私は出世頭だけどその分やつかみも多いわ。味方は多くない』

『だったら、敵方への離間工作しか無いでしょう』

『誰が敵かも分からないの?』

『誰もが敵ですよ』

『……本当に、今の私にとってはあなたが切り札ね』

『ジョーカーにしては頼りないですけどね』

そのメッセージを最後に、冴さんからの返信は途絶えた。メッセージを読んだことは分かるので仕事に戻ったのだろう。僕も最寄り駅に着いたので電車を降りる。

「海藤君」

家に帰ろうかと踏み出した足は、背後から掛けられた声でピタリと止まった。

「まさかここまで黙って尾けて来たのかい？」

振り返れば、いつもの柔和な笑みを引っ込め、能面のような表情で僕を見つめる明智君の姿。

「申し訳ないね。だけど、もう少しだけ話がしたかったんだ。君と二人だけで」

「……それなら、少し歩こうか」

生憎と僕の最寄り駅付近にはゆっくりと腰を落ち着けて話せるようなカフェなんかは無く、僕は明智君の案内で彼の行きつけだというダーツバーへと連れて来られた。

「……」

人の少ない端の席を用意してもらい、飲み物を片手に座る明智君は、向こうから誘って来たのにぐっと黙り込んだままだった。

僕も無理に話をすることも無く、グラスに口を付けてゆったりと時間が流れるのを感じる。

「……精神暴走事件の裏には政治が絡む、本気で言っているのかい？」  
どれだけの時間が流れたのか分からなくなってきた頃、ようやく明智君は一言だけ呟くように言葉を発した。

「本気だよ。そして、そこには君も関与していると僕は思ってる」

「……それは事件を調査する探偵として？」

「……かもね」

言葉を濁したけれど、その含意は明智君には十分に伝わったことだろう。

「結局、君はワトソンじゃなくてホームズだった、というわけだ」

「それじゃ君はモリアーティだとも？」

僕と明智君以外が聞いてもおおよそ内容の掴めない会話だろう。だけど、僕達二人の間では十分に伝わる。

「ハッ、俺がモリアーティ？ とんだ買い被りだ」

明智君はそう言うと言と片手で自身の前髪をぐしゃぐしゃと掻き混ぜた。引きつったように片側だけ吊り上げて浮かべる笑み、普段の彼からは想像も出来ない表情だけど、いつもの柔和な笑みを浮かべているときより、明智君は楽に笑っているように見えた。

「ポーロック、モラン、ヘルダー。差し詰め俺はモラン大佐かな」

自分は蜘蛛の巣の中心に座る人物を知っている。暗にそう言う明智君は、目に危険な光を宿して僕を見据えた。

「だけどそうだとして、君が無事で済むわけないよね？」

「……だろうね。だけど、僕は君がポーロックのように手紙を送ってくれることを期待するよ」

「……今更俺がまともな道に戻れるとでも？」

「さあね、それを判断するのは僕じゃない。この国の司法だ。僕はただ、君を待つことしか出来ないよ」

僕の言葉に、明智君は苛立ちを隠せないように舌打ちをする。

「どこまでも、人のことを分かったように……！」

「分からないさ、何一つ分からない」

明智君の言葉を僕は否定する。僕は明智君を理解など出来ていない。だけど、僕は理解できなくとも、信頼している。

「君が裏で何をしているかなんて知らない。僕にとつて明智吾郎という人間は胡散臭い笑みを浮かべて、甘党で、頭が切れて、人との距離感が少しおかしくて、たまに似合わない偽悪的な言動をして、そして僕の友人なんだ。その人の全てを理解するなんて出来ないけれど、僕に見えているその面を、僕は信頼するよ」

「……狂ってるよ、君は」

「自分のことをモラン大佐だなんて言う君に言われたくはないかな」

唇の端を吊り上げて笑う明智君に、僕もいつもより悪そうな笑みを浮かべて返す。自分でも似合わないと思ってるけど。

「俺は止まらない。だけど、手紙を出すくらいはしても良い」

「……そう、じゃあ僕はそんな君を止めてみせるさ」

「どうして君はそこまで出来るんだい？　僕と君は赤の他人じゃないか。それもここ数ヶ月の付き合いしか無いようなね」

「僕は人の付き合いって時間じゃないと思ってるんだよね。それに言っただじゃないか」

僭越ながら僕がホームズになって、一緒にライヘンバッハの滝に飛び込んであげるってね。



## Eyes of anonymous

「続いてのニュースです。昨日に引き続き、メジエドを名乗るハッカーによる企業へのサイバー攻撃が続いており……」

渋谷はセントラル街の街頭モニターに流れるニュースは、ここ最近急速にその名を知らしめているハッカーの話題で持ちきりだった。

メジエド

古代エジプトは死者の書に登場する謎に包まれた神様の名が由来であろうそのハッカーは、連日様々な企業や銀行の隠された不祥事を暴いてはこうしてニュースに取り上げられていた。

警察のサイバー部門もお手上げなハッキングの腕を持っており、メジエドという名以外は何もかもが闇の中にあるハッカーはなるほど、その原典をよく表していると僕は暢気なことに感心していた。

そして僕はと言えば、今日は日曜日ということもあってアルバイトの帰りだった。夏休みなので昼間から学生であろう人もチラホラと店内には見受けられたが、あいにくと僕の知り合いに会うことは無かった。そろそろ日も傾きかけた時間になり、シフト交換の時間になったので帰ろうとしたところで流れたのが先のニュースだった。

「また、メジエドは今回のサイバー攻撃に際しても声明文を発表しており、様々なメディア宛に次のような声明文が届けられています」

我らはメジエド

法の目を逃れる悪を我らは見逃さない

狡猾な悪よ、我らを怖れよ

我らはどこにでもいて、どこにもいない

姿なき正義の目を逃れること能わず

街頭モニターに映し出されたのは黒い背景に緑色の無機質な文字で綴られた声明文。その構成、文面にどこことなく既視感を覚えた僕は、道の端で少し立ち止まって記憶を遡る。

そこで思い至ったのは怪盗団の予告状だ。既に三回も目にした彼らの予告状は黒い背景に赤のアクセントが入り、新聞の切り抜き文字が並べられたようなそれは、今回公開されたメジエドの声明文と似た

印象を与えるものだ。彼らの声明文の内容も、怪盗団を意識しているのではないかと思わせるところがある。

僕がそう感じてしまうのはあるいは、あの日明智君に言われたことに引つ張られてしまっているからかもしれないけれど。

「……怪盗団には死んでもらう」

明智君は無機質な表情でそう言った。

「俺の、彼の計画に怪盗団は邪魔な存在だ」

「けれど同時に、好都合な存在でもある？」

そう問い返してみれば、明智君は微かに唇の端を捲らせて笑った。

「どうしてそう思う？」

「怪盗団は精神暴走事件と同じ手口で改心事件を起こしている。考えるまでもなく身代わりに最適じゃないか」

「……それを企てて、可能にしてしまうような相手を敵に回すことに怖れは無いのかい？」

「味方がいれば、怖くとも進めるかもね」

「俺にそれを期待するのは止してくれ」

僕の視線を振り払うように、明智君は頭かぶりを振った。これはあまりにも甘い期待過ぎたか。けれど、僕はこれを期待で終わらせてしまおうなどとは思っていない。

「君は自分をモラン大佐だなんて嘯くけど、モリアーティじゃないっただけじゃないか」

「何……？」

「君は自分をモラン大佐だと思いつ込んでるホームズかもしれない。僕にはやっぱり、ホームズの役は荷が勝ちすぎるからね。ワトソンの方が性に合ってる」

訝し気な表情を浮かべていた明智君だったけれど、僕の言葉に微妙に目を見開くと、また不機嫌そうな表情に戻ってしまった。

「……怪盗団の名声は邪魔だ。だからこそそれを失墜させるか、あるいは利用するかでまだ揺らいでる」

そして僕から視線を外し、まるで独り言のように小さな声で呟いた。

「……………僕がホームズだというなら、その助手を探偵自身の手で始末させないでくれ」

付け足されたその言葉は、普段の彼からも、そして自分を俺と呼称する彼からも想像がつかない弱々しい口調だった。

それは、彼にとつて僕が簡単には切り捨てられない存在だということとを明らかにしてしまうもので、本来なら彼が見せてはいけなはずの一面のほずで、だからこそそれを僕に見せる程に、彼自身も揺らいでるのだと僕には思えた。

「なら、僕の手を借りなくともライヘンバツハの滝から帰ってきて欲しいな。221Bで君を待つだけじゃ、素直に帰ってきてくれなさそうだからね」

「……………怪盗団に対して手をこまねいているばかりじゃない。既に蜘蛛の巣は張り巡らされてる。絡め捕られないようにしなよ、海藤君」

「徹、とは呼んでくれないのかな?」

明智君は僕の言葉に返答することなく、それだけ言うたダーツバーを後にした。

その日以来、明智君は僕に連絡を寄越すことは無くなった。僕からのメッセージを読むことすら無くなってしまった。

僕を捜査から外すという名目で連絡を絶つたと冴さんには伝えられたらしい。そして冴さんとも連絡を連絡をあまり取らないようになったと冴さんがため息交じりに電話で話してくれた。

「怪盗団を排除する為の蜘蛛の巣。それがメジエド?」

誰に聞かせるでも無く呟いた僕の言葉は、スクランブル交差点の雑踏へと消えていった。

しばらくぼんやりと街頭モニターに映されたニュースを眺めていると、ゲストと呼ばれたのであろう明智君の姿が映し出された。「メジエドは怪盗団とやや似ていますね。どちらも正体を隠し、法で裁けぬ悪を裁くと表明しています。またやり方も企業、あるいは個人

の不祥事を何らかの手段で暴露するといった手口。強く怪盗団を意識しているものと思われます」

「確か過去にもメジエドと名乗るハッカーが様々な企業にサイバー攻撃をしていたんですよね？」

「ええ、その通りです。ただ、そのときは今回のような声明文を出すことも無く、ただサイバー攻撃で得た情報をばら撒いたり、あるいは企業に対して身代金を要求したりと愉快犯のような一面が強かった。そういう意味で今回のメジエドは怪盗団を強く意識していると言えるでしょうね」

キャスターの質問に淀みなく答える明智君は、まさに多くの人が憧れる探偵王子の姿だ。少し前にも似たような高校生探偵が活躍していたのをテレビで見た気がする。確か、白鐘、という名前だったような。

などと益体も無いことを考えながら駅に向かって歩いていった僕は、雑踏の向こう側に見慣れた人影を見た気がして足を止めた。

「今こそ、私達は若者が安心して暮らしていける世の中を作っていかなければなりません。その為に来ることを、私はしていく所存であります！」

駅前でその声を張り上げているのは街頭演説をしているのである。議員先生。のぼりに書かれている名前は吉田寅之助。確か、数年前に不祥事を起こして政界から半ば追放されるような形で身を引いた政治家だったような。いや、そんなことよりもだ。僕の視線は演説をする吉田さんの隣でプラカードを持って立っている彼女に向いていた。こんなところで何をしているんだ、雨宮さんは。

思わず駆け寄ってそう言いそうになったけれど、街頭演説の手伝いをしているのである。彼女に声を掛けてしまうと吉田さんの邪魔をしてしまうことになるので、ひと段落がつくまでは見守ることにしよう。僕は群衆に紛れて彼の演説に耳を傾けていた。

「私は過去に多くの間違いを犯してきた恥ずべき人間です。しかし、そんな私だからこそ、伝えられるもの、変えられるものがあると私は考えています。信じてくれなどとは言えません。ただ、今の私の姿を

見て、私の言葉を聞いて欲しいのです。私と考えを同じくする人が一人でも増えてほしい、そう思つて、私は今ここに立っています」

語る内容はどこまでも抽象的な内容だ。政治家であれば何を変えするのか、どう変えるのかをもつと説明すべきだと感じられても仕方ないと思つてしまうほどの。けれど、内心はどうあれ背筋をピンと伸ばし、ハキハキとした声で話すその言葉は、聴衆の心に引つ掛かる。

よく見れば、彼の足元に置かれた段ボール箱には小さな冊子がぎつしりと詰められていた。なるほど、そこに彼が目指す政治の姿が具体的に綴られているのだろう。街頭での演説はあくまで聴衆の耳を、心を惹きつけるためのもの。そして気になった人間は冊子を手に取り、彼が語る理想とは何かを具体的に知ろうとする。その時点で、ただ雑踏に向かつて自身の考える政策を喚き散らすよりもよっぽど深くその人の心に吉田寅之助という存在は刻まれることになる。受動的に聞かされるのと、自発的に手に取ったのでは記憶への残り方が違うからだ。

見れば、彼の周囲で彼の演説の手伝いをしているように見えるのは雨宮さん一人だけだった。ということは政党に所属していない、かつ後援会なども無い本当に個人で戦っている人なのだろう。だからこそ他とは違う攻め方をする。そうじゃないと組織の差で、資金の差で負けてしまうから。

「……本日はここまでとさせていただきます。ご清聴ありがとうございます」

気が付けば最後まで彼の演説を聞いていた。まばらな拍手が飛ぶ中、僕はプラカードを抱えた雨宮さんの下へと向かう。

「こんばんは、雨宮さん」

「あ、副会長」

僕が声を掛けると、彼女はそこで初めて気が付いたような顔で僕を見た。

「おや、友人かい？」

それに気が付いた吉田さんが僕達の所に歩いて来て、人の好い笑みを浮かべて僕に話しかけてきた。

「どうもはじめまして。雨宮さんと同じ学校に通っています。海藤と言います」

「ご丁寧ありがとうございます。挨拶が遅れてすまないね、吉田寅之助という。しがたない政治家崩れだよ。もしかして演説を聞いてくれていたのかい?」

「ええ、最初は知り合いを見て気になってしまったんですが、気が付いたら最後まで聞いていました。良い演説だったと思います。良ければ吉田先生の冊子を一冊頂いても? あいにくと選挙権は無いのでお力にはなれないですが」

「ありがとうございます。君や雨宮くんのような若者にそう思ってもらえると私としても勇気が出るよ。冊子についてはどうぞ持って行ってくれ。その歳で政治に関心があるだなんて、素晴らしいことだと私は思うよ。投票などということは考えず、是非君の今後に少しでも活かしてくれると嬉しい。それと、先生というのは不要だよ。現役議員ならいざ知らず、今の私はただのしがたない議員志望の人間でしかないのだから。先生、などと呼んでもらうような立場の人間じゃあない」

僕の申し出に、吉田さんは嬉しそうに頷くと、段ボール箱から冊子を取り出して手渡してくれた。コンビニかどこかで印刷したのであろうものを自分で綴じたと思しき簡素な作りだけれど、中身は吉田さんの考えが詳しく記載された立派なものだった。

内容的にもここで立ち読み程度で済ませて良いものだとは思えなかったので家に帰ってからじっくり読んでみようと思つた。肩に提げた鞆に冊子を丁寧にしまい込む。

「ところで、吉田さんと雨宮さんはどういった繋がりですか?」

そして僕は本題に入る。そもそも、僕は演説でプラカードを持っていた彼女を見たから足を止めたのだ。

「ああ、雨宮くんも君と同じく政治に関心を持ってきていてね。他にも、私の演説技術なんかにも目を付けて色々教えて欲しいと言うので、こうして手伝いがたら私の演説を近くで聴いてもらっているんだよ」

彼女は結構鋭い意見をくれて私としても演説内容を見直したりと

助けられている、と言って吉田さんは笑った。

政治に関心を持つている、全てが嘘という訳では無いけれどもどこまでが本音なんだろうかと僕は雨宮さんに目を向ければ、彼女はついで目を逸らした。これは、何か話していない目的があったりするんだろうな。と言ってもそれを暴き立てようだとかそんなつもりは無いけれど。

「そういうことだったんですね。確かに僕も聴いていてすごく内容が入ってきやすい話し方をされるな、と思っていました」

「お、分かるかい？ 私の数少ない武器の一つだからね、そう褒めてもらえるのは面映ゆいな」

「あえて内容を抽象的にしているのも、こうして興味を持った人を取り込みやすくする為、と思っても？」

「それは企業秘密、と言っておこうか」

僕が段ボールに詰められた冊子を指して言えば、吉田さんはそう言って片目を閉じた。案外と強かで、それでいてユーモアのある人なんだなと思う。僕や雨宮さんが一般的な高校生に近い価値観を持っているかと言われると、素直には領けないけれど、それでも若者に好印象を持たれる中年というのは稀有な才能だと思う。

「……副会長、そんなに演説が気になる？」

と、雨宮さんが僕の肘辺り、服の裾を掴まんでクイクイと引つ張る。僕と吉田さんが彼女を放っておいて話しているのが気に入らなかつたようで、少しジト目になっていた。

「おっと、私が雨宮くんの友人に構い過ぎても良くないな。私は毎週日曜日の夜にここで演説をしているから、良ければまた聞きに來てくれると嬉しい。気になることがあれば演説中でも質問してくれて構わないから」

「ええ、またお話を聞かせてください」

僕はそう言って吉田さんと握手を交わすと、彼に促されて雨宮さんを家まで送り届けることになった。

「……ところで雨宮さんはどうしてまだちよつと不機嫌そうなのさ？」

「……気にしないで欲しい」

「そう言われても服の裾をずっと摘ままれてるし」

「これは役得だから」

「一体どういうことなのさ……」

結局、彼女をルブランに送り届けるまで、僕の左肘は彼女の可愛らしい拘束を受けることになったのだった。



## Ear of the devil

「メジエドの怪盗団への宣戦布告から数日。依然として、怪盗団に動きは見られず、各地には不安が広がっています」

テレビから流れるニュースキャスターの声に、僕の視線は思わず店内に備え付けられたテレビへと向けられた。

「また、メジエドの声明から怪盗団を名乗る特殊詐欺被害の報告も増え始めており……」

続くニュースキャスターの言葉に僕の口からため息が零れた。

「怪盗団もメジエドも、匿名の皮を被った義賊気取りだね。そして匿名だからこそこうして他の小悪党に利用される。匿名の正義執行機構なんて警察で十分だと僕は思うけど、マスターはどう思う？」

「あ？ 興味ねえな」

テーブル席に腰掛けた小太りの男が訳知り顔で佐倉さんに語るが、佐倉さんはそれを興味なさげに一蹴していた。そんなぞんざいな対応に客が何も言わずに大人しくコーヒーを飲んでいる辺り、佐倉さんのそんな対応はいつものことらしい。

夏休みのある日、ルブランに昼間から訪れた僕は、相も変わらず佐倉さんから呆れたような目を向けられていた。

「蓮の奴ならいねえぞ」

「良いんですよ。今日は普通に客として来たんですから」

「つたくよお。高校生なんだからもつと洒落たところに行くとかしたらどうだ？ 昼間つからこんな店に一人で来てどうするよ」

佐倉さんの苦言に僕も苦笑を返すことしか出来ない。我ながら高校生のやることじゃないかもしれないという自覚はあったからだ。

そしてコーヒーを片手に読書をしていた僕の耳に届いたのが先ほどのニュースだった。

メジエドによる怪盗団への宣戦布告と、それに端を発した怪盗団を名乗る特殊詐欺の増加。これも明智君が仄めかしていた怪盗団排除計画の一つなのか。そして雨宮さんはその両者をどうにかするため、今日もどこかで集まっているのかもしれない。

「怪盗団の予告状らしきものを送り付け、改心を起こすと脅迫、あるいは正義の為に活動資金を募っているといった文言で金を騙し取る手口の特種詐欺が増加しています。特に一部では怪盗団の熱烈な支持者がおり、そうした人間は支援が出来ると思った、と多額の現金を支払ってしまう事例も出てきています」

「問題はこれが怪盗団本人による犯行か、その名声を利用した第三者による犯行かの区別がつかないことです。メジエドもそうですが、匿名性の高さはそれを利用される危険性も孕んでいます。僕から怪盗団やメジエドに言えることは、こんな馬鹿なことは今すぐ止めて、これ以上の混乱が起らないようにして欲しいということですね」

「ニュースキャスターと共に流れる明智君の声。彼はこの騒ぎに連日テレビに引っ張りだこの様子だ。どこも怪盗団とメジエドの対決に、これまで怪盗団を追っていた明智君の見解を知りたい、そうした需要を満たす為にどのテレビ局も明智君にオファーをしているのだろう。雨宮さん達がこんなことをするだなんて思えないし、思ったくない。これはメジエドの騒ぎに便乗した第三者か、怪盗団を邪魔に思う人間による妨害なのだと思っている。けれどこんなことを僕が言ったところで何の解決にもならないのは明らかだった。」

「そこで、僕のポケットが震えたのを感じ、スマートフォンを取り出すとメッセージの受信を知らせる通知画面。」

『怪盗団を名乗る特殊詐欺とメジエド、あなたの意見が聞きたいわ』  
僕のスマートフォンには、冴さんからのメッセージが届いていた。そして、間を置かずしての着信。冴さんからの着信だろうか、と思っていたら画面に表示されていたのは意外な名前だった。

「もしもし、意外な電話ですね？」

「最近気になるニュースが多いからさあ、是非とも協力者君のお話が聞きたいなあって」

「もしかして昼間っから飲んでます？」

「あ、ばれた？ でもまだ全然酔って無いから平気だよん。アハハ」

「それじゃ、また後で。いつものところでもいいですか？」

「話が早くて助かるなあ！ それでオツケー！」

電話口から聞こえてきた声に、僕は苦笑を漏らしながら席を立つ。相も変わらず面白い人だと思ふ反面、昼間から飲んでるのは社会人としてどうなんだろうと思ふ。

電話を切り、佐倉さんにお会計を伝えて席を立つ。

「友達からの誘いか？」

「まあそんなところですよ」

ここでコーヒーを飲みながらのんびり読書をするのと、週刊誌記者にゴシップネタの取材を受けるの、どちらが高校生らしいかと問われればまだ前者の方がいいかもしれないなあと思ひながら清算を済ませた僕はルブランを出る。まだまだ夏休みも始まったばかり、うだるような暑さだ。

『それに関する情報を集めてきます』

冴さんのメッセージにそう返信すると、僕は駅へと向かった。

大宅さんが半ば根城としているお店、バーにゆうカマーは、昼間だから店先の電気は消えていた。バーだから昼間は営業していないのかもしれない。だとすると大宅さんはどうして店に入れてるのかと思うけど。

雑居ビルの中、店の扉に手を掛ければ、扉はあっさり開いて中の冷気が汗ばんだ僕を包んだ。

「いらつしやーいー」

「……アンタねえ、そろそろアタシも怒るわよ？」

「すみません、お邪魔しますね」

僕の姿を見たララさんはそう言ってこめかみに青筋を立てていた。それに何故か僕が恐縮しながら、カウンターに座る大宅さんの隣に腰掛ける。

「暑かったでしょ？　なんか飲む？」

「それじゃウーロン茶を」

「こんな時間にこんな店に来るなんてね。高校生らしく友達と遊んで

くれば良いじゃないの」

「あはは、自覚はしてます……」

佐倉さんにララさん。今日は同じような苦言を呈される日だ。それだけ僕は高校生らしくないんだらうけど。

氷の浮かんだグラスになみなみと注がれたウーロン茶で喉を潤せば、大宅さんが待ちかねたようにこちらに身を乗り出してきた。

「それでさ、最近もニュースになってんじゃん？ 怪盗団を名乗る詐欺だっけ」

「やつぱりその話ですか」

大宅さんの口から出てきたのは、半ば予想していた話題。ニュースになったから、という訳では無いだろう。ニュースよりも情報の遅い記者なんかいない。彼女なりに掴んだ何かがあるから僕を呼んだのだと思う。

「あの詐欺、ドーにもおかしいんだよね」

「おかしいとは？」

ビールのジョッキを持っているにもかかわらず、大宅さんの目は鋭く細められていた。酔っていない、というのは本当なのかもしれない。

「警察の動きだよ。こういう詐欺って被害が大きくなるからさ、結構警察も本腰入れて動くわけ。今回なんて特に不特定多数の詐欺グループによる活動も考えられるからさ」

だが、今回に関してはその動きが鈍いという。

「メジエド、怪盗団って懸案事項があるのは分かってるけどさ。だとしても遅すぎる。前に君、過去の精神暴走事件だったり政治家の汚職について調べてたりしたよね？」

何か心当たりでもあるんじゃないかなって。

「……悪どい顔してますよ」

「だってこんなに面白そうなネタ、記者として逃すわけにはいかないじゃん？ それに、前はあたしが情報提供したんだし、ギブアンドテイクで何か聞かせてくれても良いんじゃない？」

その顔はいつもの大宅さんの顔じゃない。一人の記者として、特ダ

ネを嗅ぎつけた顔だ。そして僕がそこに繋がる何かを掴んでいると、彼女の記者としての勘が告げているのだろう。逃がすものかという顔、まるで悪魔のようだ、というのと怒られるだろうか。

「僕が何か知っている、というのは確定事項なんですか？」

「そりゃそうじゃん。怪盗団は今回の詐欺に関係してる、なんて流石に思っちゃいけないけどさ。でも、メジエド騒ぎと詐欺被害はホントに無関係？」

「無関係、僕は少なくともそう思っていないですよ」

「ということは精神暴走事件とは関係あったり？」

鋭い洞察だ。なんでこの人がゴシップ誌の記者で半ば干されてるのが分からない。あんまりにも頭が切れるから閑職に追いやられたとか、そんなところだろうか。

「だとしたらどうします？」

「前に聞かせてくれた君の話。精神暴走事件は政治が絡んでるってやつ。あの話がマジなんだとしたら、今回の警察の動きが鈍いのも偶然じゃないってこと？」

大宅さんにこの話をしたのはマズかったかもしれない。今更ながらにそう思い始めた。過去の精神暴走事件やそれに付随する様々な事件を捜査する上で彼女の情報網や調査能力は不可欠だった。けれど、僕以上に好奇心旺盛な彼女は、本当に虎の尾を踏んでしまいかねない。いや、既に踏んでしまっている僕が言えたことじゃないだろうけど。

「大宅さん、これ以上この件に首を突っ込むのは危険ですよ」

「それ、君はすでに危ないところまで首を突っ込んでるってことじゃないね？」

語るに落ちる、とはこのことだろうか。いや、彼女の洞察力の鋭さに負けたのだと思う。

「君が持っているのは他の誰も掴んじやいない情報。そんな記者として垂涎のネタ、逃すと思う？」

「……その結果、翌日には精神暴走事件の被害者になるかもしれないよ」

「既にあたしより深みに嵌ってそうだけどね、君は」

「だからこそその忠告なんですけどね……」

そんなんで踏みとどまってちゃ記者なんて出来ないわよ。そう言って彼女は笑った。つまり、このまま放っておいても彼女は独自に調べを進めていくということだ。

「逆に言えば裏切る心配の無い協力者ってことで、今後ともご鼻屑にね。君にくっついていれば君と同じところまで知っても助かる可能性があるってことだし」

「それ、協力者というか避雷針って言いませんか？」

「そんなこと無いわよお？」

大宅さんはその言葉と共に顔をだらしなく緩めてビールを呷った。

「ま、君のお陰でこの事件の裏には色々きな臭いことが潜んでるって確信できたし、私も気を付けて動くことにするよ」

「ぜひそうしてください。僕も大宅さんがいなくなると困ります」

「やだ、ずっと傍にいて欲しいなんて大胆な告白するじゃん」

一体何をどう聞き間違えたらそうなるんだと言いたくなっただけ、酒臭い大宅さんに拘束された僕は何かを言う気も無くしてしまった。実際大宅さんがいなくなると困るのは事実なんだし、これで慎重に動いてくれるようになるなら安いもんだ。

「それで、あたしが知りたいことは知れたから、また君が知りたいことがあったら調べてあげるよん」

「こうしてまた僕に貸しを作るつもりですか？」

とはいえ彼女の情報網は魅力的だ。調べて欲しいことは山のようにある。

「それじゃまた一つ、調べてもらっても良いですか」

「どこまで調べられるかは分からないけどね」

そう言う大宅さんだけど、彼女の情報網は恐ろしいところまで達している。どこから調べて来たのかと思うようなことばかりだ。

「ではここ一年の裁判所の記録を」

「裁判所の記録？ そんなもの、君だって調べられるじゃん」

「出来れば証言者の記録も一緒をお願い出来ませんか」

「それは……ちよつと厄介だなあ」

そう言つて頭を掻く大宅さん。厄介とは言つても無理とは言わないあたり、彼女の優秀さがよく分かる。

相変わらず僕に引つ付いたままビールを呷る大宅さんを適当に相手していると、カウンターの奥からララさんが凄みを纏わせてこちらにやつて来た。

「アンタね、そろそろいい加減にしときなさいよ」

「ララちゃん、怖すぎい……」

「子どもに色目使つてんじゃないわよ、年甲斐もなく」

「そこまで老けてないやい！」

頼る人は間違えてないはずだけど、大人としてはこの人は間違つてるんじゃないかなあ。

## Disquieting seed

「連日、メジエドによるサイバー攻撃の被害が拡大しており……」

「怪盗団は依然何も動きを見せず……」

「日経平均株価が深刻な下落を示している中……」

「怪盗団を名乗る特殊詐欺の被害も相まって街には不安が広がって……」

街頭モニターから流れるのはあまり景気が良いとは言えないニュースばかりだ。大宅さんに調査をお願いしてから数日、顔も名前も分からないメジエド相手に、怪盗団はいたく苦戦を強いられているらしい。僕はと言えば、今日は珍しい人に呼び出されて学校に来ているところだった。

「急に呼び出してすまないね」

僕を呼び出したその人は、仕事場でもある空調の効いた部屋の中、氷を浮かべた冷たいお茶を出して僕に椅子に座るように促してくれた。

「構いませんよ。今日は何も無い日でしたし、受験生としては良くないのかもしれないですけど、予備校なんかにも通ってませんしね」

暑い日差しの下を登校してきた僕は、椅子に座るとありがたく冷たいお茶で喉を潤す。それを見ながら部屋の主はいつも通りの穏やかな笑みを浮かべていた。

「それで、今日はどうされたんですか。丸喜先生」

お茶を飲んで一息ついた僕は、今日呼び出された理由を問う。今朝、丸喜先生から突然学校に来て欲しいと連絡を受けた時は驚いた。見せたいものがある、という話だったけれど何を見せてくれるのだろうか。

「そんなに大したものじゃないんだけどね、僕が昔研究していた認知訶学の論文が家にあつたから、良ければ少し見せてあげようかと思つて」

そう言つて丸喜先生が差し出してくれたのはいくつかの綴じられた紙束。ありがたいことに全て日本語で書かれているのは丸喜先生



が翻訳してくれたのか。

「オープンソース以外の論文もあるから、君が追っていることのヒントになるかもしれない。流石に持って帰られると困るから、この場で読むだけに留めてほしいけどね」

「いえ、それでも助かります」

僕はそう言つて丸喜先生に頭を下げると、早速最初の論文に目を通し始める。丸喜先生が持って来てくれた論文は殆どが一色若葉が著者のものだったけれど、いくつかは別の著者の論文も混じっていた。とはいえ、引用文献を見ると一色若葉のものばかりなあたり、やはり彼女がこの研究においてパイオニアであり、その他とは一線を画す頭脳、理解を持つていたことが窺える。

それからしばらくは沈黙が部屋を支配していた。丸喜先生も本に目を落としており、時折空になったグラスにお茶を注いでくれる。その気遣いに感謝しながら、僕は丸喜先生が持って来てくれた論文を読んでは横に積み上げていった。

人と世界は自分の無意識によつて歪んで認知される。それが認知世界。

認知世界は物理法則に加えて認知の影響を強く受ける。人が思い込みで火傷をしてしまうように。それが本物だと思えば認知世界ではおもちやの銃が本物になるだろう。

認知世界を変化させるには大きなきっかけが必要だ。例えばその認知世界を形成している本人の無意識に影響を与えるような何か。

そしてその認知世界には、それを形成している本人ともう一つ、核となるものが存在している。それは本人の大切なものだったり、特に印象深いものだったり様々だ。

外敵による変化を阻止する為に自身の認知世界には防衛機構が備わっている。そして無意識が意識に影響を与えるように、意識も無意識に影響を与えられる。

最後の論文を読み終える頃には、グラスに浮かんでいた氷は全て溶けてしまっていた。

「どうだろう、少しは役に立ったかな」

僕が読み終えたことを察した丸喜先生がそう言って手にしていた本を閉じる。

「ええ、とても参考になりました」

「それなら良かった」

僕の答えを聞いた丸喜先生は嬉しそうに表情を緩めた。

「専門的な内容なのに、一度読むである程度理解できる辺り君はやっぱり優秀だね」

「素人の浅い理解なだけですよ」

丸喜先生が感心したように言うが、僕としては研究内容を深く理解することを求めてはおらず、ただ自分が気になった部分を拾い読みしているだけなのだから褒められるようなことじゃない。とはいえ、これを読んで僕の中に新たな疑問が湧いてきたのもまた確かだ。

「丸喜先生。一つ質問しても良いですか？」

「ああ、何でも聞いてくれて構わないよ」

僕が問うと、丸喜先生は嬉しそうにそう言ってお茶のお代わりを注いでくれる。それで少し口を湿らせた僕は、論文を読んでいく中で新たに湧いた疑問を口にした。

「認知世界の他に、集合的無意識の話が出て来てるんですけど、この二つの話って僕の中ではしっくり来ないんです」

「へえ、それはどうして？」

丸喜先生に先を促され、僕はまだ纏まり切っていない疑問をどうか紡ぎ出していく。

集合的無意識は人々が無意識下で共有している世界、それに対して認知世界はその人が無意識に世界を歪んで捉えているもの。その二つは併存するものなんだろうか。そもそも、歪んで捉えていると言っても多くの人はそこまで歪んだものの見方をしていないわけじゃないだろう。誰もが人を怪物のように感じたり、都合の良い人形のように見たりすることは無いと思う。じゃあ多くの人の認知世界はその人が物理的に目にしている現実世界をそのまま反映しているはずで、尚且つ人は誰もが外からの情報でものの見方をあっさりと変えてしまう。被害者が加害者に、加害者が被害者に見えることだってある。

そしてたいいていの場合、そうした認識は多くの人に共有される。それが集合的無意識なのだとしたら。

「二色若葉先生が述べている認知世界というのは、限られた人にしか無いものなんじゃないかと思うんです。自分の認知で現実が歪んで見える。そんなに強烈な自我を持った人なんてそう多くないんじゃないかって」

「……逆に多くの人は集合的無意識に影響を受けていると?」  
「僕の勝手な妄想ですけど」

だからもつと恐ろしいのは誰か個人の認知世界を恣意的に歪めてしまうことじゃない。集合的無意識そのもの、大衆が影響を受けるものに対して致命的な働きかけを出来てしまうことじゃないだろうか。

「認知訶学は認知世界の存在を示唆していて、その認知世界が複数人に共有される。一部の人間は共有された認知世界に収まらない歪んだ認知を持っていて、それが単体の世界として成立する?」

「認知世界なんて大層な代物を僕が持っているとは思えませんし」  
「どうだろうね……。けれど大衆の認知世界か、その認知世界を支配出来た人間がいると恐ろしいことになるね」

丸喜先生は僕の危惧するところを読み取ったらしく、真剣な顔で何やら考えを巡らせている。

「その世界を支配する存在がいたとすれば、それはまさしく神と言っても良いかもしれないね」

「あの男。この世界に足を踏み入れたことも無いのに、この世界のことを知っている」

「あの男? あの男って誰なの、双葉?」

砂漠の中、死したファラオを安置するピラミッドと化した佐倉双葉の認知世界の中、その世界の主である双葉シャドウは蓮達の前に現れてそう告げた。要領を得ない双葉シャドウの言葉に真がそう問いかける。

「あの男は何者だ？ 何故お母さんと私のことを調べようとしている？」

真の問いにしかし、双葉シャドウは答えることは無く、独り言のように呟くばかり。怪盗団一行は怪訝な表情を隠せないまま、双葉シャドウに近づこうと足を踏み出す。

「あの男は何かを追っている。それが私とお前達の利になることかは分からない」

「だあから！ あの男って誰なんだよ！」

竜司が我慢の限界だと言わんばかりに声を張り上げた。その声にようやく怪盗団の存在に気が付いたように、双葉シャドウは顔を上げた。

「認知訶学を追っている男。カイドウと名乗っていた」

「副会長!？」

双葉シャドウの告げた名前に杏が驚きの声を上げる。他の面々も仮面の奥で驚きに目を見開いていた。

「気を付ける。お前達の背後で動く何かに」

そしてその言葉だけを残して双葉シャドウは姿を消し、再び遺跡の中には耳の痛くなるような静寂が訪れるが、誰もが双葉シャドウの言葉に何かを言おうとしながらも何も言葉にならないもどかしさを感じていた。

「徹……何を知っているの……?？」

真の脳裏に過る同級生の姿。怪盗団の味方だと言いながら、それを追う存在と協力し、怪盗団とは別の切り口で精神暴走事件を追う人。彼らが思い出したのはカネシロパレスで金城シャドウが発した言葉。『お前らと同じ力を使って好き放題してる奴がいるんだよ。俺はソイツに見限られた。踏んじやいけない尾を踏んじまったからな』

怪盗団と同じ力を持つている何者か、そしてその何者かの逆鱗を金城は踏んだと言う。時系列を考えても、カネシロパレスに生じた変化とその直後に現れた徹のシャドウの言葉を考えても、金城が言う踏んではないけない尾とは彼のことだと蓮は確信していた。ただ蓮が解せないのは、何故徹が怪盗団と同じ力を持つているであろう精神暴走事

件の犯人が徹と何らかの繋がりを持っているということ。

その表面だけをなぞるのであれば、徹が言った怪盗団の味方という言葉は途端に怪しいものとなる。徹は精神暴走事件に何らかの形で関わっている。それも実行犯とかなり深い関係にあるというオマケつきだ。

「双葉の言っていたことが確かならあの男は俺達の敵ということか？」

「前々から怪しいところは多かったからな」

「いや、でもそうと決まったわけじゃ……」

祐介とモルガナが険しい表情になる中、真が徹を庇おうと口を開く。しかし、真自身も苦しいと感じているのか、その言葉は途中で尻すぼみに消えてしまった。

「でも副会長が本当に敵ならとつくに私達の正体バラされてるんじゃないの？」

「そ、そうよ！ 徹は私達の正体に感づいていても黙っていてくれるわ！」

「それも何か企みがあったのこともかもしれない」

「ワガハイ達を利用したいから野放しにしているのかもしれないぜ」

杏とそれに便乗した真の言葉にも祐介とモルガナの表情は晴れない。真達と違って徹と会話する機会が少なかった今の二人にとって、徹は不可解で怪しげな人物にしか映らなかった。

「……だあ！ もうワケ分かんねえ！ とりあえず今はパレスの攻略に集中しようぜ！ メジエドの他に怪盗団の偽物探しだってあるんだしよ！」

一行の間に立ち込める不穏な空気は、遂に頭から煙が上がりそうになっってしまった竜司の一言で霧散する。

「進もう。まだオタカラへのルートも確保できてない」

そして蓮の一言と共に、一行は再び歩を進める。確かにこの場は収まっただろう。しかし、怪盗団の中には確実に不穏の種が埋め込まれてしまったのだ。

## Expose invisible symbol

「次のニュースです。昨日、警視庁サイバー犯罪対策課に怪盗団を名乗る連絡がありました」

店に置かれたテレビから流れるニュースは昨日も速報であらゆるメディアが取り上げていた内容だ。

「そこにはメジエドを名乗るハッカーの情報が記載されており、更にその通報から今まで予告されていた新たなサイバー攻撃は行われていないことから、怪盗団によるメジエドへの報復であるという見方が……」

「これでまた、怪盗団は名を上げたわけね。これも誰かの思惑通りなのかもしれないけれど」

漏れ聞こえてくるニュースキャスターの声に顔を顰めながら、僕の前に座った冴さんは飲み物が入ったグラスを傾ける。

昨日、夕方のニュース速報で怪盗団によるメジエドへの報復が報道されてから、警察も検察も事件の裏取りに大騒ぎだったらしい。そもそも、メジエドの正体だとされる男の情報は警察だけでなく検察などにも無差別にばら撒かれていたらしく、混乱で情報共有も儘ならなかったらしい。それを冴さんと明智君が検察、警察両方で互いに連携を取りながら收拾をつけ、メジエドを逮捕して警察の取り調べの最中とのこと。

僕と言えば、そんな冴さんのガス抜き兼情報整理の為にこうしてまた冴さんが鼻肩にしている店に呼び出されたのでノコノコと足を運んでいるというわけだ。明智君と袂を分かってしまっている現状、僕の確実な伝手は冴さんだけになってしまっているのでこの繋がりは何とか保ちたいところだ。

「これで怪盗団の改心事件はますます畏怖を以て語られるようになる」

「怪盗団を名乗る特殊詐欺はまだ被害の鎮静化には至っていないようですよけどね」

むしろ、メジエド騒動によって世間の怪盗団熱が高まったことで、

より詐欺集団にとって稼ぎやすい状態になってしまったようにも感じる。何なら、僕のスマホにも怪盗団を名乗る不審なメールが届いたくらいだ。すぐに削除してアドレスを変えたけれど。

「怪盗団はメジエド相手にも有効な対抗手段を持っている。しかも改心以外の方法を。だったら何故詐欺の方には手を付けないの？ メジエドで手一杯だから？」

冴さんがそう言って少し苛立たし気にテーブルの上の料理を口に運ぶ。冴さんのお気に入りのお店は相変わらず学生の僕には少々高いので気後れしていたのだけど、冴さんがお構いなしに色々頼むものだからテーブルの上には様々な料理が並んでいた。遠慮する僕に気を遣ってくれているんだとは思うけど、冴さん自身もストレスが溜まっていたりするんだろうか。

「メジエドで手一杯、なのはそうかもしれないですけど。怪盗団はそもそも現状まだ詐欺集団に有効な対抗手段を持っていないのかもしれないですね」

遠慮せずに食べると目で促された僕は、それならありがたく頂く。と自分も料理を突きながら、ぼんやりと考えていたことを口にする。「サイバー攻撃を繰り返すメジエドよりもケチな詐欺グループの方が厄介だってこと？」

僕の言葉に興味を惹かれたように冴さんが少しこちらに身を乗り出して問う。

「あくまでも僕の勝手な想像ですけどね」

「それでも良いわ。聞かせてちょうだい」

冴さんに促されるままに、僕は一度飲み物で口を湿らせてから口を開く。

そもそも、今回のメジエドはこれまでの改心事件とは性質が異なる。今までの怪盗団が関わる事件とさえいえば、犯人がその罪を自身の口で自白、自首していた。怪盗団は何らかの方法で対象の心を変えてしまえるというわけだ。それに対し、今回怪盗団が用いた手段はメジエドと思しき人物の情報をばら撒くこと。犯人自体にはその謎の力は何ら影響を及ぼしていないことになる。つまり、

「怪盗団はメジエドを改心させたわけじゃない」

「……そうね、メジエドは自白なんかもしてない。だけど怪盗団はハッキングのような電子工作にも長けているというだけじゃないの？」

「もし本当にそうだとしたら、メジエドからの宣戦布告に対して怪盗団のアクションが遅すぎるとは思いませんか？　メジエドだけじゃない。自分達の名を騙る詐欺集団もいるのに、メジエドへの報復が実行されたのは宣戦布告から二週間後。更に詐欺集団はまだ放置です。ネット上では怪盗団への不信感を持つ人も出始めていた。まあ僕にはデジタルの知識なんか殆ど無いので、ハッキングには凄い時間が掛かって二週間でも早い方なのかもしれないけど」

だとするとメジエド本人の能力が凄まじい。大企業や官公庁のデータベースに不正アクセスし、それを数日おきに公表するまでしてみせていたのだから。

「怪盗団は最初からメジエドへの対抗手段を持っていたわけじゃない？」

「対抗手段を持つ人間を後から仲間に取り込んだ、とも考えられませんか」

僕のこの推理は冴さんの知らない情報も含めて読みを積み重ねたものだ。雨宮さんや高巻さん、坂本君、喜多川君、そして真がハッキングなんていうスキルを持っているだろうか。そして一色若葉について聞き込みにルブランに行ったあの日、直後に僕のスマホにアクセスしてきた謎の人物、アリババ。彼、ないしは彼女は彼女が怪盗団への接触を望むような言動を見せていた。怪盗団はアリババに接触し、何らかの取引の結果として今回のメジエドへの報復に至ったんじゃないかというのが僕の見立てになる。

僕の推理の裏付けになっているこれらの情報を冴さんに馬鹿正直に話すわけにはいかないので、これ以上突っ込まれたら何とか誤魔化すしかない。

「……特殊詐欺に有効な手立てが無いというのは？」

顎に手を添えた冴さんが鋭い目で僕に続きを促す。ひとまずメジ



エド関連についてはあり得ないと切って捨てるには惜しい程度の考察だったらしいと内心ほっと胸を撫で下ろした。それと根拠を深く聞かれなかったことにも。

「それは認知科学というものを冴さんが教えてくれたから思いついたことです。それと今回のメジエドの件も多少関係してますけど」

「どういふこと？」

丸喜先生から見せてもらった論文と、彼と話した内容からも、認知世界はその人の無意識の世界である以上、そこに干渉するにはその人物を知っていなければいけないだろう。場合によつては居所も把握している必要があるかもしれない。何故ならその人が見たこと無い場所がその人の認知世界に存在するとは思えないからだ。存在を知らないものは想像も出来ない。ということは認知世界は本人が認知している範囲に限って存在すると考えるのが自然じゃないだろうか。

そう考えると、顔も、名前も、居場所も分からないメジエドという存在は怪盗団の天敵だったのかもしれない。認知世界があるとしても、それがどこにあるのか、誰がターゲットなのか分からないから。だからこそ、怪盗団はメジエド本人ではなくメジエドに対抗しうるハッカーを仲間引き込んだ。

そしてより厄介なのは特殊詐欺グループだ。こちらは金城と違って名前すらまだ分かっていない。もちろん顔も、居場所も。メジエドの時のようにハッキングで何とかしようとしても、こういう詐欺に用いられる携帯やスマホは飛ばし携帯のように他人名義のものだったりして追跡しきれないんじゃないだろうか。今でも飛ばし携帯があるのかは僕には分からないけれど。

「……なるほどね。怪盗団は名前と顔、居場所の分かっている人間しか改心のターゲットに出来ない」

「あくまで僕の勝手な見立てです。怪盗団が本当はどのような手段で改心を行っているか分からない以上、妄想でしかないですよ」

「その前提となる認知科学の存在がある以上、そこらの専門家とかいうコメンテーターの言うことよりはよっぽど頼りになる妄想よ。あなたに情報を与えた私の目は曇っていないかったわ。……同時に、私自

身もろくでもない大人だつてこともハッキリしているけれど」

冴さんはそう言うかと自嘲するような笑みを浮かべて氷だけになったグラスを両手で包むようにして持った。

「いきなりどうしたんです？」

「明智君の言ったことは正しかったわ。このまま捜査を進めれば、私達は触れてはならない相手の逆鱗に触れることになる。そうなたたときにあなたを守ることが私には出来ない。それが分かっているのにこうしてあなたを巻き込み続けている」

「それについては僕が望んで巻き込まれているというのもありますけどね」

「あなたは以前言っていたわよね。精神暴走事件の背後には政治が絡んでいるかもしれないって。あなたの推理を聞いて、半信半疑だったそれが私の中で確信に変わったわ」

冴さんがそう確信するに至ったのは冴さん自身が先ほど言った言葉。

「改心は名前と顔、居場所の分かっている人間しか改心のターゲットに出来ない」

僕と冴さんの声が重なる。改心がそういった縛りの下で成立するのであれば、精神暴走も同じ前提が成立すると考えてもおかしくない。度重なる官僚や政治家の汚職暴露、大企業の不祥事、それらを引き起こしたのが精神暴走事件の犯人だとすれば、その犯人は一官僚の名前と顔を把握し、一企業の社員だつて把握できるような立場にいることになる。そんなことが可能な人間は一体どれだけいるのだろうか。それだけの個人情報も横流しして見逃されるような立場にいる、見逃さざるを得ない立場の人間は誰だ。

「私じゃあなたを守れないわ」

そう言った冴さんの顔は、酷く傷ついたように沈んでいた。

「明智君の言う通りだった。これ以上あなたを巻き込むわけにはいかない。だということに、あなたがいないと手詰まりになっていたかも知らんてね」

情けない、と小さく呟いて額に手をやった冴さん。僕が気にするな

と言っても社会的な立場がただの高校生である以上、僕は冴さんに守ってもらわなければいけない立場だ。安易に慰めの言葉をかけるのも躊躇われた。だからといって何も言わないままにいるのも不義理な話だ。

「とはいえ、僕は勝手に巻き込まれに行っただと思いますよ。冴さんがいなくとも、僕は僕の伝手を辿って」

これは事実だ。冴さんからの情報が無くとも大宅さんや岩井さんのように他にも様々な事情に通じている大人達がいて、その人達に僕は接触して情報を得ようとしただろう。ここまで深いところまで考えが及ぶような情報は得られなかったかもしれないけれど。

「高校生に慰められると余計に立場が無くなるわ」

「それならこの一連の事件の裏側にいる奴を捕まえて今まで以上の立場になりましょう」

「簡単に言うわね」

「冴さんなら僕の勝手な推理が無くたって同じような結論に辿り着いていたでしょうから。それに腹は決まってるんでしょう？　僕も一緒です」

「……さつきも言ったけど、守ってあげられないわよ？　これまで以上にあなたは危険に晒される。いつ精神暴走事件の被害者になってもおかしくない」

「それは冴さんも同じでしょう。一番確実に身を守るためには、一刻も早く真相を解明すること」

僕は既に明智君を通して敵から危険視されている。言ってみれば冴さん以上に危険な立場にいます。言ってみれば僕自身が身を守る為にも、冴さんと協力体制を続けていく以外の選択肢は実際には無い。「ここから先は一蓮托生になるわよ？　私か君、どちらがヘマをしても互いの首が絞まる」

「僕は最初からそのつもりですよ。だってワイルドカードなんですよ？」

覚悟を問うような冴さんの言葉に、僕がそう返すと冴さんは驚いたように目を丸くした後、呆れたように笑みを浮かべた。

「ちよつとした洒落だったんだけどね」

「ワトソンとレストレードの二人で、酔っぱらったホームズを追いかけてみましょうか」

僕はそう言っただけで空になったグラスを掲げる。その意図したところを察してか、冴さんも同じく空になったグラスを掲げた。

テーブルの上で合わさったグラスは、チンと軽い音を立て、溶けかけた氷がグラスの中でぐるりと回る。

「恰好がつかない乾杯ですが」

「どうせなら一杯だけでも飲んで行こうかしら」

You have no right to interfere

怪盗お助けチャンネルには日夜数多くの書き込みがされている。その数は金城の改心、メジエドの成敗と相まって膨れ上がっていた。多くはこれまでと同じく怪盗団という最後の綱を頼みとする悲痛な声だが、中には怪盗団というセンセーショナルな話題を面白がるような投稿も見かけられるようになってきた。そして何より、新たに怪盗お助けチャンネルに追加されたコンテンツ。次に改心させるターゲットを投票で決めるランキング。どんな狙いがあつてサイト運営者がこれを追加したのかは推測することしか出来ないけれど、悪趣味だ。

「信じていいんだよね、怪盗団。君達は、自分達の信念に従つてその力を振るうのだと」

心の中に僅かに過つた疑念を打ち払うように、僕は呟いていた。

八月のお盆休みに入る少し前。僕は担任の先生から相談があると、いうことで呼び出しを受け、うだるような暑さの中、制服を着て登校していた。

「修学旅行の引率補助、ですか」

「そうだ。今年はかなりごたついていて教師陣、特に二年の先生方への負担が重くなつていてね。鴨志田先生のこともあり、生徒達と教師の間にもまだ不信感が残っている。この状態で夏休み明けの二年生の修学旅行で何か問題を起こつては今度こそ秀尽学園は終わりだ。なので特例として三年生の中から引率補助を付けようという話になった」

三年の学年主任が僕と、このために呼び出されたであろう一人の生徒を前に説明を続ける。

まとめると教師の手が回らないし、生徒の監視役に生徒を充てるとうとうんでもないことを考えたのが今年の秀尽学園ということらしい。

「もちろん修学旅行にかかる費用は学校持ちになる。君達は成績も優秀だし、息抜きだと思ってくれたら良い」

取り繕うように同席していた二年の学年主任も付け加えるが、修学旅行って友人たちと普段とは違う環境に行くから楽しいのであって、そういうところに異分子である僕が行って楽しめると思っているんだろうか。いや、本当に行くとなったら相応には楽しむつもりだけだ。

「それで、どうだろうか。海藤君、新島さん」

回答を促してくる三年の学年主任の言葉に、僕は隣に座る真に目をやる。すると、彼女もこちらを見ていたのかぼつちりと目が合った。案の定、彼女も困惑したような表情でこちらを見ていたので、ここですぐに答えを出すのはあまり良くなさそうだと口を開く。

「これって今すぐに回答する必要がありますか？」

「出来れば早くしてほしいね。手続きのこともあるから」

学年主任にはそう言われたけれど、親への説明もあるし、個人的な予定もあると言ってお盆休みが明けるまでは回答を待ってもらおうようにしてもらい、僕と真は学校を出る。教師には教師の都合もあるかもしれないが、生徒にも生徒の都合というのがあるのだから。

「夏休みだっていうのに学校に呼び出されて、まさか修学旅行の引率の真似事なんてね」

「……そうね」

校門を出て、ひとまずは難を逃れたのかと真に話しかけるも、彼女の表情は浮かないものだった。

「どうしたの？ 修学旅行の引率がそこまで嫌だった？」

「それはそんなに……」

「……そっか。相談に乗れそうなことなら乗るけど、僕じゃあんまり助けになれそうに無いことなんだろうね」

「……ごめんなさい」

言い淀む真の表情を見て、彼女の悩みはそう簡単に他人に話せるようなものじゃないことを悟る。もしかしたら他人、というか僕に話るのが憚られることなのかもしれない。

「謝ること無いよ。またお盆明けに呼び出されるだろうし、またね」

僕が真の悩みの種になつていゝるであろうことはこれまでの自分の行動を振り返つてみれば、思い当たることが割とある。自覚しておきながらもますます悩ませていることに僕自身反省すべきことも多いけれども、止めようと思わないあたり僕も難儀な人間だと自分ながらに思う。

とりあえず今日のところは家に帰ろうと歩き出したところ、真にその腕を掴まれて僕の歩みは止められた。

「どうしたの、真？」

「え、えつと……、その……」

僕の左手を掴まえた真は、自分でも何を言おうか固まっていないうで僕の腕を掴んだまましばらく視線を右へ左へと泳がせていた。

「……せつかくだし、どこかで適当にお茶でもして帰ろうか」

「そ、そうね」

このまま放つておくと夏の暑さで僕も真も倒れちやいそつなのでひとまず涼しい所に行くことにする。学校を出て、駅前の適当なカフェに入った僕と真は、昼前ということもあつて軽食も頼み、冷たい飲み物で暑さを和らげた。

「八月に入つて夜も暑くて寝苦しくなつたよね」

「そうね」

「三年生が修学旅行の引率なんて先生方もとんでもないことを考えるよね」

「そうね」

「……悩んでるのは怪盗団関連のことかい？」

「そうね……えつ!？」

ズゾゾ、と心ここにあらずな状態でコーヒーを啜っていた真は、僕からいきなり投げかけられた質問の内容を遅れて理解したのか、言葉を発してから分かりやすくしまったという顔をした。

「僕が相談に乗れそうにないことで真の悩みと言つたら怪盗団絡みかな、と思つただけど合つてゐるみたいだね」

「い、いや、それは……」

真はしどろもどろに否定しようと顔の前で手を振っている。その様子に僕も真面目な顔を保つことが出来なくなってしまう。思わず吹き出してしまった。

「ごめんごめん、そこまで焦るとは思わなかった。安心して、詮索するつもりは無いよ」

「……やっぱり私には徹のことが分からないわ」

真は少し驚いたかと思うと、今度は拗ねたように口を尖らせては運ばれてきたポテトを摘まんで口に啜える。

「そんなにあからさまに悩んでますっていう顔されたら心配はするよ。友達なんだから」

「友達、そうね……」

僕の言葉に真は何とも言えない複雑な表情になったかと思うと、鋭い目でこちらを睨みつけてきた。口には出さないもののその雰囲気は冴さんそっくりで、思わず背筋が伸びてしまう。

「徹だって私に隠していることがあるんじゃないの？ 私が悩んでいるのはそれも原因なんだけど」

「僕が真の悩みの種だったんだね。まあ予想はしてたけど」

「そうよ。私達に隠れて何してるのか、今日こそ問い詰めてやろうかしら」

私達、と真が言うからにはやっぱり怪盗団絡みのことで僕が動いていることについて真は気になっているらしい。金城の件以降、僕が改心事件や過去の精神暴走事件について調べていることは真達には言っていないけれど、バレてしまっていたらしい。まあ佐倉さんに話を聞きに行ったりもしているからそこから話が伝わったとしてもおかしい話じゃない。僕の予想が確かだとすれば、以前僕に接触してきたアリババなる人物も怪盗団と接触しているだろうし、そこから漏れたと考えられるか。

「僕が真達に隠れてしていることか。アルバイトとかかな」

「それはセントラル街のファミレスでしょ、知ってるわよ」

冗談めかして言ったのだけど真は予想外に剣呑な目で僕を見てくる。思った以上に僕は真の深刻な悩みになってしまっているらしい。



しばらくはそんな感じに僕をジトつとした目で睨んでいた真だが、やがて諦めたようにため息をつくとき口を開いた。

「あなたには隠したってバレてそうだから無駄ね。徹の言う通り、怪盗団関連のこと。明智君やお姉ちゃんとは今でも繋がりを保持てるの？」

「明智くんと冴さん？」

「冴さん……、そうよ、その二人」

心なしか鋭さを増した真の視線から逃れるように僕はツイっと目を横に逸らす。

「どうして目を逸らすのかしら？」

「そりゃそんなに睨まれたらね……。まあ真の問いに答えるなら、明智君とはもう連絡を取ってないよ。向こうからこれ以上関わるなって言われちゃったからね」

「そうなの……。けれど、明智君は未だに怪盗団を追っているのよね？ どうしてあなたという情報源を手放したりしたのかしら？」

真がそう言つて顎に手を当てる。その仕草まで冴さんそっくりで、ほっこりとした気持ちになりながら、僕も思索する。このまま明智君のことを彼女に教えるべきだろうか。明智君は恐らく将来的に怪盗団と敵対することになる。そのとき、有利なのは強大な後ろ盾を持つ明智君の方だ。一般人には理解できない方法で改心を引き起こせる怪盗団も、同じ手段を用いる相手に対してはアドバンテージは無い。明智君とその後ろにいる相手は、狡猾に、そして残酷な方法で怪盗団を追い詰めていくことは容易に想像が出来た。

「徹も今でも怪盗団を追っているのよね？」

「そうだね。怪盗団というよりも、改心を引き起こすその方法を、と言うのが正しいかもしれないけれど」

「方法……？」

「心を変えてしまえる力。他の人には持ちえないその力が、思わぬ結果をもたらしたときに怪盗団はどうすべきか。周りはどうしてあげられるのか。僕が危惧していることは、多分起こっちゃうと思うから」

僕の要領を得ない言葉に、真は先ほどまでの表情を一変させ、何を言っているのか分からないと困惑したように僕の顔を見る。僕もどうしてこう迂遠な言い方しか出来ないのかと思うけれど。

「怪盗お助けチャンネル。前に真も気にしていたよね？」

「え、ええ……、それがどうしたの？」

「あれに最近追加されたのかな？ 改心させてほしい奴ランキング。前から僕はああいうサイトは好きじゃなかったけど、ますます好きになれなくなっちゃったよ」

あれほどまでに分かりやすく人の悪意が混ざり込んでしまうものを、僕は好きになれない。それが例えば掲示板の書き込みだけならまだ許せたかもしれない。そこには自分の心を、気持ちを文章にして晒すことが求められるから。だから顔も知れない誰かの悲痛な思いをそこから汲み取ることも出来た。だけど、あのランキングはそれらを捨て去ってしまった。残されたのは憎い誰かを改心させたいという無貌の願い。仮面の下に隠された悪意があっても、それを見抜くことが出来なくされてしまっている。

「真はあのランキングが怪盗団のターゲットの選定に影響を与えると思う？」

気付けば、問う立場と問われる立場が入れ替わってしまっていた。真は僕の顔を見て少し怯えたような表情を見せている。困ったな、真を脅かすつもりは無かったのに。

「わ、分からないわ。でも怪盗団は、いつだって誰かの為に……正義を……」

「その誰かの中に、黒い思惑を抱えている者がいたとして、あのランキングはそれを考慮なんかしてくれないよ」

掲示板には今もたくさんさんの悲痛な書き込みがあつて。中には怪盗団によって解決されたのだと言う書き込みもある。そしてその数はメジエドの件が解決してから増えている。怪盗団が積極的に活動しているからか、たまたまその人の抱えている問題が解決したからかは分からないけれど、前者の可能性は高いんじゃないだろうか。そしてそれに伴って上がっていく怪盗団の知名度と支持。

「僕は怪盗団のことを抜きにして、真や雨宮さん達のことを友人だと思ってるよ」

言うべきなんだろう。明智君のことも、その裏にいるかもしれない相手のことも。

「だから、一つだけ言わせて欲しい。君達が最も苦しいときに、最も必要としている助けをくれる相手をこそ疑うべきだとね」

だけど僕の口から出てきたのはそんな曖昧な言葉だけ。それは、雨宮さん達のことを心配するくせにまだ明智君のことを諦められない中途半端な僕の限界だったのかもしれないし、それ以上に何かに喉まで出かかった言葉を引っ込められたことによるものだったのかもしれない。

彼らのゲームにこれ以上干渉するのは得策じゃない。

そんな声が、どこからともなく聞こえたような気がしたのだ。

「夏休み中なのにごめんね、こんなことお願いして」

「気にしないで。僕に出来ることなら何でも協力するよ」

さて、お盆休みに入ったある日のこと。僕は今日も登校していた。これについては以前からお願ひされていたことだし、お盆休みということで学生も教師も殆ど校内に居ないタイミングを狙わないといけなかったことだ。

「無理はしちゃダメだよ、鈴井さん？」

「うん……、だけど避けてばかりじゃられないから」

隣り合って廊下を歩く僕と鈴井さん。夏休みに入る前に電話で相談されていたのだ。夏休みで生徒が居ないタイミングで、協力して欲しいことがあると。

体育館に足を踏み入れる練習。

鈴井さんに相談されたのは彼女のトラウマ克服の手伝い。鴨志田先生の一件以来、彼女は体育館に近付くことが出来なくなっていた。彼女にとってそこは自身が侵食された記憶しかない場所で、近付くと怖気が走って足が動かなくなるのだという。

けれど、バレーボールを嫌いになれなかった彼女はそのトラウマと向き合うことに決めた。その練習に他の部員達と顔を合わせるのも気まずい為、僕に白羽の矢が立ったというわけだ。

体育館に繋がる中庭の渡り廊下。そこに差し掛かったところで、彼女の足が止まる。部活に向かうときに必ず通ることになるこの渡り廊下は、彼女のトラウマの入り口でもあった。

「つ……い……ごめんね」

「大丈夫。ゆっくり深呼吸しようか。吸ってー、吐いてー」

見ている可哀想になる程に震える鈴井さんの肩に手を置いて、深呼吸を促す。僕の言葉に合わせて何度か吸って吐いてを繰り返した彼女は、まだ青ざめた顔色ながらも一歩を踏み出した。

「うん、大丈夫……。歩ける」

「強いね、鈴井さんは」

「副会長が居てくれるからだよ。本当にありがとう」

自身のトラウマと正面から向き合い、それを克服する。他人には計り知れないだろうその苦しみを、鈴井さんは今まさに乗り越えようとしている。彼女は僕のお陰だと言うけれど、これは間違いなく彼女自身の強さが成せることだ。

ゆつくりと、しかし確実に彼女は一步一步前進していく。トラウマの元凶となった体育館へ。自らの心に刻まれた傷痕へ。踏み出す度に彼女の胸の前で組まれた両手が真っ白になるくらいに強く握り合わされていくけれど、足を止めてしまうこともあるけれど、後退することは無かった。

普段なら一分も掛からずに渡りきれぬ廊下を、彼女はとてつもない時間を掛けて歩く。だけどそれを馬鹿に出来る人はいないだろう。馬鹿にすることを、僕は許さない。

「鈴井さん、手、痛めちゃうと良くないから握るなら僕の手とかにしない？」

掌に爪が食い込む程に握り込まれた彼女の手が痛ましく、僕はそう言って彼女の肩に置いた手を差し出した。

「え、えっと……」

「ああ、気まずいとかなら服の裾とか肘とか掴んでくれても良いから」  
「その……、じゃあ、失礼します」

鈴井さんは少し躊躇したものの、おずおずと僕の手を取った。真夏だというのに、血が通って無いのかと思ってしまうほどに冷たくなってしまう彼女の手を、しっかりと握り返す。こういう時、人の体温というのは案外緊張を和らげてくれたりするものだ。

「て、手汗とかかいてたらごめんなさい……!」

「緊張してても頑張ってるに進もうとしてる証拠。気にならないよ」

「な、なんか別の意味で緊張してきちゃいそう……!」

中庭の暑さからか、先ほどよりは血色の良くなった鈴井さんは、握った手にぎゅつと力を込めてまた一歩踏み出す。

そして遂に、体育館の扉の前に辿り着く。後は重い鉄の扉を開くだけだ。また少し、手が強く握られ、僅かな痛みを訴えたけれど僕はそれを無視した。

「ここまで来ただけでも物凄い進歩だよ」

だからここで扉を開けなかったとしても失敗なんかじゃない。そう伝えると彼女はこくりと頷いて、けれど手を扉にしつかりと掛けた。本当に強い。尊敬の念しか覚えない程に。

「手伝おうか？」

震える手で扉を開けようとする鈴井さんにそう申し出たけれども、彼女は首を横に振った。

「ここに来るまで助けられっぱなしで、今も助けられてる。ここから先くらいは自分で乗り越えたいの」

「……うん、分かった」

僕が見守る前で、鈴井さんは遂に体育館に足を踏み入れた。最後は自分の力だけで。

「お疲れさま。本当によく頑張ったね」

「うん……、あれ、誰かいる？」

鈴井さんの言葉に視線を体育館の奥に向けると、確かに先客がいるらしい。その人は、他に誰も居ない体育館の中を縦横に飛び跳ね、駆け回っている。

「……綺麗」

思わず口から漏れ出たであろう鈴井さんの言葉に、僕も内心同意する。手足の先、髪の方に至るまで意識を張り詰めさせたその動作は、軽やかで自由というよりも見る者に真に迫った緊張感を与えるものだった。

活発ではなく厳粛。

軽やかというより重々しく。

それがプロの目から見てどう評価されるのかは分からないけれど、少なくとも素人の僕から見たそれは強い印象を見る者に与える演技だと思えた。

集中しているのか、体育館の入り口に立つ僕達に気付かないまま演

技を終えたその人は、肩で息をしながらそこで初めて僕達の存在を認めて目を丸くした。

「副会長さんと、鈴木先輩？」

「邪魔しちゃうってごめんね、芳澤さん」

片手を上げて芳澤さんに挨拶すると、彼女は小走りでこちらに向かって来る。

「練習してると思わなくて、ごめんなさい」

「いえいえ、謝らないでください！ 私が勝手に体育館を使わせてもらってただけなので！」

申し訳なさそうな鈴木さんに、芳澤さんは慌てたように両手を振った。

「最近ちよつとスランプでして、人目につかないところで練習しよう」と無理を言って体育館を使わせてもらったんです」

そう言う芳澤さんによると、新体操のコーチから受けたアドバイスをどうにも上手く噛み砕くことが出来ず、試行錯誤していたのだという。とはいえ、教室でも学校でも普段は人の目があつて中々静かに集中することも出来ない、生徒も教師も少ない盆休みを狙って学校の体育館を使用して練習することを思い付いたらしい。

「凄いな、芳澤さんは。そこまで新体操に向き合ってる」

「そんなこと無いです。要領が悪くて……」

鈴木さんの言葉に、芳澤さんは落ち込んだ表情で肩を落とす。どうやらスランプは深刻らしい。

「ところで、先輩達はどうして学校に？」

芳澤さんの質問に僕の口からどう答えたものかと思っていると、鈴木さんが先に口を開いた。

「私がお願ひしたの。体育館に入れなくて、勇気が欲しくて」

その言葉で、芳澤さんは事情を察したらしく、気まずそうに頬を掻いた。それを見た鈴木さんは柔らかく笑う。

「大丈夫、気にしないで。もう大丈夫だと思うから。副会長に助けられて、ちよつとは乗り越えられた」

「そう、ですか。凄いですね、鈴木先輩は」

「そんなこと無いよ。芳澤さんの方が凄い。さっきの演技も、凄かった。素人だから大したことは言えないけど」

「ありがとうございます。そう言って貰えて嬉しいです！ あ、そうだ。お二人からもアドバイスを貰えませんか？」

芳澤さんは閃いた、とばかりの表情で僕達にそう申し出てくるけれど、新体操について何の知識もない自分達が有用なアドバイスが出来るとは思えない。

「いえ、先輩達から見て私の演技がどうか感想を教えてください。コーチから自分らしさを出せと言われて、でもそれが上手く掴めてなくて……」

渋る僕達を前にして、芳澤さんは切羽詰まった表情で言い募る。彼女の悩みはそれほど深刻だということだ。

その表情に気圧されるようにして、僕も鈴井さんも芳澤さんの演技を見学することになった。

「……いぎますー！」

大きく息を吐いて表情を引き締めた芳澤さんは、その言葉と共に演技を始める。彼女の耳に着けたイヤホンから流れる音楽に合わせて、体育館の中を飛び回る。僕らの耳には音楽は聞こえないけれど、僕ら以外に誰もいない静かな体育館の中、真剣な表情で演技を続ける彼女は、最初に一人で演技をしていた時よりも軽やかな印象を与えた。

それにどうにも違和感を覚えてしまうのは何故だろう。

彼女が演技前に言った自分らしさ。体育館を舞台に、妖精のように楽しげに、軽やかに跳ねる彼女の姿は、何故か無理をしているように見えてしまう。浮かべている表情は笑顔なのに、どうして痛々しく見えるのだろうか。先ほどまでのあの繊細で厳粛な演技の方が、僕の目を惹き付ける。

そう思っているうちに、芳澤さんの演技は終わりを告げ、額に汗を浮かべた彼女がこちらに駆け寄ってくる。

「如何でしたか？」

不安げな表情で聞いてくる芳澤さんを見れば、自分でも正解が分からなくなってしまうているのだということが分かる。



「私は、やっぱり凄いなとしか思わなかったけど……」

鈴井さんが少し申し訳なきように告げる。

「そうですか……」

芳澤さんが眉をハの字にして困ったような顔になってしまいうーん、素人が下手なことを言うべきじゃないんだろうけど、このままというのも気が引ける。

「素人意見だけど、良いかな?」

「良いです! どんな些細なことでも!」

僕がそう言えば、芳澤さんは鼻息も荒く詰め寄ってきた。どうしよう、本当に下手なことを言えないんだけど……。

「本当に大したことじゃないよ……? 僕はさっきまで一人で練習してたときの演技の方が好きかなって思ったからさ」

「さっきの演技の方が……」

「何だろうね、今の演技も軽やかで凄かったんだよ? でも、さっきの張り詰めたような、繊細な芳澤さんの演技が僕には印象に残ったんだ」

それは本当に僕の感想でしかない。けれど、芳澤さんは考え込むように少し黙ると、おずおずと上目遣いで僕を見る。

「副会長は、快活で明るい私と繊細で暗い私のどっちが私らしいと思いますか?」

聞かれたのは性格診断のような質問。どっちかと問われても、普段の芳澤さんをよく知っている訳でもないのどう答えたものかと頭を悩ませる。

明るい彼女と暗い彼女、一般論で言うとき暗いよりは明るい人の方が良いんだろう。

「……どっちが芳澤さんらしいかって問いには答えられないかな。それを言える程、芳澤さんを深く理解できていないと思うし」

「……ですよね」

「ただ、普段明るくて活発な女の子が実は繊細で物静かだっというのも魅力的だと思うよ?」

あんまりにも悄気た顔をしているので、冗談めかして付け足してお

く。自分で言っていて齒の浮くような台詞だと思っけれど、こういうのは恥ずかしかつた方が余計に気まずい。

僕の言葉に芳澤さんは少し目を見開き、その後照れたように僕から目を逸らした。

「副会長さんってそういうこと言うんですね……」

「普段から言う訳じゃないよ?」

「それって余計に質が悪いと思うよ」

鈴井さんもそう言っただけ息をつく。どうしてだろう。何か選択肢を間違えたような気になつてきた。

その後、もう少し自主練をしていくという芳澤さんと別れて僕と鈴井さんは校舎を出た。

「今日は本当にありがとう、副会長」

「どういたしまして。また何か手伝えることがあつたら言つてね」

「えっと、それじゃあまた頼みたいことがあるんだけど……」

何かと思えば、鴨志田先生の件で色々と助けてくれた高巻さんや雨宮さん、坂本君にお礼をしたいと言う。自分では男の子が好みそうなものは分からないので僕に見繕つて欲しいのだとか。坂本君なら何でも喜びそうだけどなあ。

「そういうことならお安い御用だよ」

「ありがとう、それじゃあまた連絡するね」

そう言つて鈴井さんは駅に向かっていく。それを見送りながら、さて僕も帰ろうかと足を踏み出したところで、誰かに左腕を掴まれてその歩みを止められた。

一体誰だろうと振り返つてみれば、そこにいたのは特徴的なパーマがかつた黒髪の女の子。何故かその目は剣呑な光を宿していて、何もしていないのに僕は犯行現場を押さえられた犯人のような心地になる。

「こんにちは、副会長」

「や、やあ、奇遇だね、雨宮さん」

「色々と聞きたいことがある。良い?」

「あんまり人のプライバシーに関わることはNGだけど……」

「大丈夫。副会長に関わることだから」

有無を言わさぬ迫力を備えた雨宮さんに連行されながら、これに逆らうのは不可能だと僕は大人しくついて行くことに決めた。

Interlude—To her annoyance

「海だー！」

燦燦と日光が降り注ぐ浜辺に元気な声が響く。その発信源は竜司だった。夏の日差しに眩し気に目を細めた祐介が煩そうに顔を顰める。

「朝っぱらから元気だな」

「海まで来てテンション上げないのもちがくね？　なあ、モナ？」

「ちよつと癩だがりユージにワガハイも同意だな。それにレンやアン殿の水着が楽しみだ！」

怪盗団の男手プラス猫一匹は女性陣の着替えを待つ間、そうして雑談に興じる。夏休みも終わりを目前に控えた8月29日。怪盗団の面々は、怪盗お助けチャンネルの依頼もひと段落したこともあり、こうして学生らしく夏休みを楽しむことに精を出していた。認知世界を利用する何者か、そして怪盗団の敵か味方か分からない徹のこともあれど、今日はそういった難しい話を考える場ではなかった。

「にしてもアイツら遅すぎじゃね？」

「女性の着替えには時間が掛かるものなんだよ。リユージは分かかってねえな」

「んだと！　猫のくせになに言ってるんだ」

「猫じゃねえし！」

「おつ待たせ〜！」

いつも通り、と言える竜司とモルガナの口論を遮るような明るい声だが、彼らの耳に届く。その声に視線を上げた竜司、祐介、モルガナの二人と一匹は目の前に広がる光景に言葉を失った。

「どうどう？　この前買ったばつかのおニュー！」

エメラルド色の下地に、トロピカルな花柄をあしらったビキニ。シンプルな形状故に着ている者のプロポーションを強調し、その魅力を最大限に引き出す。現役高校生モデルである杏の魅力は、ワーワー

ニヤーニヤー騒がしかった竜司とモルガナの口を閉じるのに十二分な威力を持っていた。

「待たせちゃってごめんね」

白一色ながら、胸の中央に配置されたりボンがアクセントになっているフリルスカートタイプのビキニに身を包んだ真。本人の真面目な性格を反映した色選びながら、素材の良さを引き出すその水着は、恥ずかしさからか少しぎこちない表情も相まって男子の脳を破壊する。祐介はほう、と呟いて女性陣を両手の人差し指と親指で形作ったファインダーに収めた。

「何を呆けてるの？」

そして怪盗団のリーダーである蓮。彼女は黒い生地には赤いラインの入ったハイネックビキニ。普段の物静かな彼女からは想像し難い装い、パレスやメメントスでの挑発的なジョーカーとしての側面を知っている怪盗団の面々もしばしば目を奪われる。

鼻の穴を膨らませて目を丸くしている竜司の表情が、男子二人と猫一匹の感想を言葉以上に雄弁に物語っていた。

「少しは見直したく？ このこの」

杏などは竜司のそんな表情にしてやったりな笑みを浮かべ、からかうように突いている。祐介は怪盗団の女性陣三人を見渡した後、首を傾げた。

「そういうえば、双葉はどこに？」

「……………」

祐介の言葉に蓮がスツと一步横に退ける。その後ろから現れたのはバスタオルで顔を完全に包んでプルプルと震えている双葉の姿。

黄色いフリルのついた可愛いビキニを身に付けているもの、てるてる坊主と化した肩より上の部分が余人には近寄りがたい雰囲気醸し出している。

「着替えまでしたのにここに来て恥ずかしがってる」

「びびび、ビビってなんかいいからな！」

呆れたようにため息をついた連に抗議するように、タオルの奥からくぐもった双葉の声が響く。それを見た他のメンバーは口元を緩め

ると、双葉のもとに集まる。

「大丈夫よ、双葉。誰も笑ったりなんかしないわ」

「そうそう、私が選んだんだし、バツチリ似合ってるよ！」

「う、うう〜〜！」

真と杏に促され、双葉はうめき声をあげて逡巡していたものの、タオルを解く真の手を払うことはしなかった。そしてタオルが完全に解かれた中から現れたのは、気まずげに伏し目がちになった双葉。

「わ、笑いたきや笑え……」

「誰も笑わない」

「笑うわけねーじゃん。頑張ったな、双葉！」

チラチラと何うのように蓮達を見る双葉に、蓮と竜司は柔らかく微笑んで彼女の健闘を称える。人前に出ることを怖れていた双葉が、ついに海水浴に参加するまでになった。自分達とそこまで絆を深めることが出来たと。

「よし！ それじゃ遊ぼうぜ！」

「賛成！ まだ人少ないうちにビーチバレーとかしちゃう？」

「まずは場所取りしましょ。もう人も増え始めて来てるし」

「早く日陰に入りたい……」

「いや早すぎるぞフタバ……」

「俺はこの景色を記憶という名のキャンパスに焼き付けなくては！」

それぞれが思い思いに話しながら、浜辺を駆けていく。それを見送るリーダーである蓮の表情は、彼らとは違って夏の海に相応しくない曇ったものだった。

思い出すのは数日前、秀尽学園の正門前でたまたま徹と出会った日のこと。

「真以外も引っ掛ける」

「引っ掛けてるって言い方酷くない……？」

鈴井と二人でいるところを偶然目撃してしまった蓮は、渋る徹を引っ張って駅前のカフェに連れ込んだ。徹が怪盗団の敵か味方か、信じたいと思う蓮と冷静に判断すべきだと囁くジョーカーが彼女の中に存在していた。それをはつきりさせたいという思いもあつたこと

は否定しないが、鈴井と二人で並んでいた徹の姿に、言い知れない焦燥感を覚えたのも確かだった。

「鈴井さんに頼まれたからね、ちよつとした手伝いで来てただけだよ」  
普段と変わらない様子で告げる徹に、また胸がざわつく蓮。

「真と気ままずくなつたつて聞いた」

「気ままずい、というよりはちよつとした意見の不一致だよ」

ちよつとした、で済ませるには蓮達の中に生じた疑惑の芽は大きすぎるものだ。喉まで出かかった言葉を蓮は何とか飲み下した。これまで徹は何度も蓮に自身は味方だと告げて来た。それを疑いたくはないが、認知世界で出会った他とは一線を画す存在感を放つ徹のシャドウ、意味深な発言、何より怪盗団と敵対する明智、冴との繋がりは、徹の発言の信憑性を失わせるのに十分な不安材料だ。

だからこそ、蓮は踏み込んだことを聞くことが出来ない。既に徹は蓮との会話を通じて怪盗団のことをそれなり以上に知っているが、怪盗団最大の秘密を、認知世界と改心方法を徹に知らせてしまえば、それが致命的な事態を引き起こすかもしれない。

信じたい、でも不安。

「少し目を離すとすぐに他の女の子の所に行く」

「その言い方は人間きが悪すぎる！」

蓮のジト目を前にしても流星に聞き流せなかつたのか、徹は頭を振って否定する。

「頼られたら出来るだけ応えてあげたいじゃない？」

「だからって副会長はお人好し過ぎる」

「自覚はあるけど、そういう性分だからね」

これは何を言っても無駄だと蓮は小さくため息をつく。徹のそういう所に自分も助けられていると分かっているが、それだけにもどかしくもある。どうして自分だけがこうやきもきした気持ちにならなければならぬのかと半ば八つ当たりのような怒りが蓮の中に湧いてきたため、自然、蓮のジト目は鋭くなり、徹の頬に冷や汗が伝う。

「副会長がそんなだから真も苦労する」

「あまり心配かけないようにしようとは思ってるんだけどね」

違う、そうじゃないと言いかけた口を嚙む。これ以上喋ってしまうと真に対して申し訳ないことになりそうだ。

「この手口で何人を落としてきたの」

「誰も落としたりしてないよ?」

嘘をつくな、と言いたかったが本当に本人としてはそんなつもりが無いのだから質が悪い。

「けど良かった」

「? 良かったとは」

ホツと息を吐いて不可解なことを呟いた徹に、蓮は首を傾げる。

「僕としてはあまり気にしてないんだけど、真と少しぎくしゃくしちゃったからね。それで雨宮さんともそうなったら嫌だったけど、こうして話してくれるっていうのは嬉しい。出来れば連行されたくは無かったけど」

「……本当に、そういうところが悪い」

どうしてそういうことをサラツと言ってしまうのか。人の気も知らないで。こつちが色々と複雑な気持ちでいるというのに、真つ直ぐな言葉で貫いてくる。だからこそどれほど疑わしく見えても信じたくなる。その言葉の裏に意図するところなど無いと。彼は純粹に善意の人なのだ。仮面ペルソナを厚く被った自分と違って彼は常に正直な人なのだ。

「……怪盗団は、副会長を信じきれない」

だから蓮に言える精一杯のことを伝える。疑いの目を向けられていることを。味方だと言うなら信じさせて欲しいと。

「だろうね」

しかし、徹からは蓮の期待する言葉は返ってこなかった。

「でも仕方ないかな。僕自身、怪盗団に敵視されるのも已む無しと思っただけで。僕は僕の事情で、一連の事件から手を引く理由を失ったから」

「それは何?」

「僕の友達が関わっているから、とだけ言っておくよ」

「友達というのは私や真のこと?」



「それもあるね」

ということとはそれ以外もあるということだ。蓮に心当たりは無いが、心に引つ掛かるものを感じる。徹が言うその友達に、蓮の中で嫌なざわつきが広がった。

「副会長は秘密主義過ぎる。それに、何も話してくれない」

「それはお互い様だよ。お互い限られたことしか言えない中でギリギリまで相手を信用するか、見限るかを迫られてる。僕は雨宮さんを信用すると決めてる」

そう言った徹の目は揺るぎなく蓮の目を捉えていて。蓮の目は徹の視線に絡め捕られたように動かせなくなる。何も確信に至ることを言っていない。なのに、どうしてこうもこっちの心を強く捕えて離さないのか。

「……なら、また一つ信用出来るように取引をしたい」

「……何だい？」

だから蓮は取引と口実を付けて切り出した。

「互いに名前で呼び合いたい、徹」

それは些細な取引。取引と言うまでもなく、友人として時間を過ごせば自然とそうなっていたかもしれない。けれど、蓮には徹がそうならないように一線を引いているように見えて、だからこそ取引という口実でその一線を今越えておかないといけないと思わされた。

「……分かったよ、蓮」

蓮の言葉に眉を少しだけ上げた徹だったが、すぐに表情を和らげて蓮の名前を呼ぶ。蓮の中に広がったざわめきが静まっていく。

「——ん？ ——蓮？」

「ッは」

蓮の意識は何度も名前を呼ぶ真の声に現在へと焦点を戻す。パラスルで作った日陰の下、砂が付かないようにと敷いたシートに腰を落ち着けた真が、隣に座ってぼんやりとしている蓮の肩を揺さぶっていた。遠くからは真と祐介、杏と双葉がビーチボールをぶつけあっている喧騒が聞こえてくる。

「どうしたのよ、ボーっとして」

「……なんでもない」

顔を覗き込んで来る真に、先ほどまで思い返していた内容もあつて  
気まずげに目を逸らす蓮。そこで、何故気まずさを感じているのかと  
蓮は内心首を傾げた。

「……真」

「なに？」

「……なんかごめんなさい」

「え、急にどうして謝るの!? 私が知らないうちに何かされたの!？」

自分でもどうしてか分からない罪悪感に促されるようにして蓮は  
頭を下げる。もちろん何も知らない真はオロオロとするばかりだ。

蓮はそつとスマホを取り出すと真の水着姿を写真に収める。

「お詫びに真の水着を副会長に送っておく」

「それは何のお詫びなのよ!」

「何してんだよ二人とも……」

唐突な蓮の奇行に一瞬呆気に取られた真だったが、すぐに気を取り  
直して自身の水着写真を送信されまいと蓮からスマホを取り返そう  
と動く。パラソルの下でわちゃわちゃと始まる二人のキャットファ  
イトに、本物のキャットであるモルガナが二人にしか分からぬ呆れた  
言葉を漏らした。

結局、蓮と真両方の水着写真が徹には送信され、唐突に送り付けら  
れたそれに首を傾げつつも良く似合っていると返事したのは徹のア  
ルバイトが終わる夕方のことであった。

## Timid impress

「え、修学旅行の引率断った!?!」

「そうだけど、そんなに驚くことかな……?」

夏休みも明けて一週間が経った頃、二年生が修学旅行でハワイに飛び立って校舎が少しばかり静かになった中で、僕はクラスメイトから何故か詰め寄られていた。

「でも会長と一緒に行くはずだったんだよな?」

「真だけに任せるのは申し訳ないとは思ってたんだけどね」

「おま……、マジで会長が可哀想になってきたぞ」

クラスメイトはそう言うって責めるような目で僕を見てくる。確かに悪いことをしたとは思う。同級生と行くならまだしも、下級生として、そして引率として行く修学旅行はお世辞にも楽しいとは言えないだろう。とはいえ、高巻さんや蓮といった真と仲の良いメンバーもいるのでまだマシだと思う。

放課後になり、生徒会室に行けばそこでも似たようなことを言われた。真と僕の人望の差なのだろうか。

周りからの冷たい目に耐えながら生徒会室でコーヒーを啜っていたら、今日は用事があるから他のメンバーは早々に帰宅してしまう。夏休み明けすぐということもあり、生徒会でやる仕事なんかあまり無いため、僕ものんびりと読書に勤しむことが出来た。

そうして一人で静かな時間を過ごしているところに、扉が開いて珍しい来客が現れる。

「あの、ちょっと相談したことが……」

そう言って現れたのは薄茶色のふわふわとしたショートボブが特徴的な少女。同級生の中ではちよつとした有名人でもある女子生徒だった。

「おや、珍しいお客さんだね、奥村さん」

入って来たのは同級生の奥村春さん。クラスメイトの男子達によれば、三年生男子の間では真と人気を二分すると言う。真はクールな第一印象と話してみれば天然な一面のギャップが堪らないらしく、反

対に奥村さんは見た目も話し方もふわふわとして周りを和ませられるとこの時期の男子特有の品評を耳にしたことがある。

「インスタントになるけど、コーヒーでも淹れようか」

「ありがとう、頂くね」

来客用のカップにインスタントコーヒーを用意して対面に座る奥村さんに手渡す。

「まだ暑いのにホットでごめんね」

「ううん、部屋の中だったら冷房効いてるからむしろ助かるくらい」

生憎と生徒会室にアイスコーヒの準備は無く、それを詫びれば奥村さんは柔らかく微笑んでカップに口を付ける。

「それで、早速だけど相談を聞こうかな」

「屋上に菜園を作れないかなって」

僕が話を切り出せば、屋上に菜園を作りたいと言う奥村さん。趣味の野菜作りのため、学校の屋上を利用して野菜を育ててみたいのとのこと。

「今でもプランターで色々育ててたよね？」

僕は奥村さんにそう質問する。彼女がこうして相談に来たのは初めてのことじゃない。去年にも、彼女はこうして屋上の使用許可を取りに来たことがある。その時は屋上にプランターを持ち込んでそこで植物を育てたいというものであり、スペース的にも余っているし生徒会としては特に問題ないと教師陣に相談し、屋上の使用許可を貰った。

「うん、あのときは色々と助けてくれてありがとう」

「屋上なんて誰が持ち込んだか分からない椅子と机もあつたりするし、気にすること無いよ」

本当に、誰があのかと椅子を持ち込んだんだろう。たまに屋上で昏昏ていた坂本君に聞いたこともあるけど、彼も自分が持ち込んだものじゃないと言っていたし、過去に誰かが持って行ったものが残り続けているのかもしれない。片付けるのが面倒だから放っているけれど。

「それで、菜園を作りたいって言うのは？」

「うん、プランターだけじゃなくて、もうちよつと広い面積を使えるよ

うにしたくて」

より面積の大きな菜園で規模を大きくしてみたらしい。野菜の中にはプランターではうまく育てられないものがあるのだとか。

「美化活動の一環、みたいな形で使用許可を貰えたりしないかなって」  
実際のお世話は私がするから、と言う奥村さん。屋上なんて生徒のたまり場としてくらいしか利用されてないし、構わないと言えば構わないのだけど。

「屋上の使用許可に関しては奥村さんの言う通り美化活動や緑化活動という名目なら許可を取れると思うよ。後は場所を用意する人手かな」

土を屋上まで運ぶとなると結構な重労働だ。流石に奥村さんだけにやらせるわけにはいかないし、生徒会メンバーと美化委員にも協力してもらった方が良さかもしれない。

そう考えていると、奥村さんはキョトンとした顔でこちらを見ていた。何か変なことでも言ったのだろうか。

「まさか本当に一人で準備しようとしてたなんて……」

「私の趣味に他の人を巻き込むのも悪いと思って……」

次の日、早々に教師陣から屋上の使用許可を取り付けたことを奥村さんに話せば、彼女の行動は素早かった。放課後になると早速菜園用のブロックと土を屋上に運び込むと言っていたので、気になって様子を見に行ってみれば彼女が一人で土の入った袋を抱えて階段を上っている姿。なんと一人で屋上菜園の準備をするつもりだったらしい。流石に見ているだけとはいかないので手伝いを買って出た。

「それにこう見えて私、結構力あるんだよ？」

並んで階段を上りながら、奥村さんはそう言って腕の中の土袋を抱え直した。表情を見ても、意外なことに余裕がありそうだ。結構僕は抱えている腕が辛いだけど……。流石にそれを口に出すのは情けないので我慢する。

「力持ちなのかもしれないけど、こういうときは誰かを頼っても良いと思うけどね。特にこういう力仕事だったら男子とか」

「そうかな……」

僕の言葉に奥村さんはピンと来ていない表情で首を傾げている。

「流石に迷惑じゃない？」

「奥村さんに頼られて迷惑だと思ふ男子ってあんまりいないだろうけどね」

そう言いながら今日早々に退散していった生徒会メンバーを思い出す。彼らみたいな例もあるにはあるか。でも奥村さんが頼めば嫌とは言わないんじゃないかな。三年生女子の二大人気の一人なんだし。

「副会長も？」

奥村さんはそう言つて僕の顔を見上げる。身長差のせいかな自然と上目遣いになり、なるほど、男子達がやられてしまうのもよく分かると思つてしまった。本人としてはそのつもりは無いんだろうけど、言われた側は色々勘違いしてしまうだろう。

「それ聞かれて本人の前で迷惑だつて言える人はそういないと思うよ？」

「……確かに、ちよつと意地悪な聞き方しちゃったね」

それからも他愛ない雑談を交わしながら屋上に土を運び、ブロツクを並べて土を敷き詰めるスペースを作つたりと作業を進めていく。奥村さんが発案だけあつて、彼女はきつちりと予習してきたらしい。僕はあまりこういう知識は無かつたのだけど、奥村さんがテキパキと指示を出してくれたのでスムーズに作業が進み、今日中には終わらないだろうかと思つていた菜園の準備だけど気が付けば土を入れる所まで終わつていた。

「ありがとう、副会長のおかげで思つたよりも早く終わつちやつた」  
「どういたしまして。うん、僕も良い運動になった、かな」

明日は筋肉痛かもしれない、という言葉は飲み込んだ。少しは僕だって女の子の前で見栄を張りたい気持ちもあるのだ。

「明日からは早速ここに植える野菜を持つてこないと」

「もう九月だけど、植えるとしたらどんなのがあるのかな」

「今の時期だとまだ暖かいからレタスも二十日大根も、変わり種だとルッコラなんかも育てられそう」

「いいね、……僕も手伝って自分で育てた野菜を食べてみようかな」  
「流石にそこまで手伝ってもらおうわけにはいかないよ」

奥村さんにはやんわりと僕の申し出を断られてしまった。作業の合間に話していたときも感じていたけれど、奥村さんは柔らかな物腰の中に、明確に一線を引いているように見える。誰にも立ち入らせないようにしている、踏み入れない一線があり、誰しもが持つその領域が彼女の場合は特に広い。それを簡単には感じさせない彼女の雰囲気、気が誰に対しても優しく見えるのかもしれない。

「まあ今日みたいに力仕事が必要なら気軽に生徒会に相談してくれたら良いかな。労働力はいくらでも余ってるから」

「うん、ありがとう。また何かあったら頼らせてもらうね」

「いつでもどうぞ。インスタントだけど、またコーヒーでも出すから」  
まだ屋上で作業していくという奥村さんを残して屋上を後にする。ちよつと疲れたし、生徒会室でのんびり休んでから帰ろうかな。

そう思いながら生徒会室に入れば、タイミングの良いことにポケットの中ですマホが震えるのを感じる。誰かから電話だ。

「もしもし」

「こんばんは……ってそっちはまだ夕方かしら」

電話の主は引率として修学旅行に同行している真からだ。ハワイとの時差を考えると、今頃向こうは夜中だろう。

「こんばんはで良いよ。真だけに引率任せることになってごめんね」  
「もう何回も謝ってもらったから良いわよ……」

真には先生方への回答期日であるお盆休み明けには修学旅行に同行しないことを告げていた。責任感の強い彼女は同行するつもりであつたらしく、僕も来るものと考えていたらしい。そのことでちよつと真の機嫌を損ねてしまったのだけど、電話越しに聞こえる声色的にまだ少し怒っているかもしれない。

「そんなに嫌だった？」

何が、とは言わなかったけれど、言いたいことはおおよそ予想が付いた。

「嫌な訳ないよ。ただバイト先の店長に泣きつかれたしね……」

修学旅行に同行しない理由の一つには僕の言った通りバイト先の店長に懇願されたというのもある。毎年、九月になると主戦力である大学生のバイトが夏休みの長期旅行に行ってしまう、シフトのやり繰りに苦勞しているため、夕方から夜にかけて戦力として数えられる人数を一人でも多く確保したいらしい。去年も同じようなことを言われたっつ、修学旅行だと告げたときの店長の絶望した顔が何とも哀れだったので今年はちよつと協力しようかと思つたのだ。

「それに、真なら任せられると思つたし」

「……そういうことにおいてあげる」

そう言えば、真は渋々といった声色ながらひとまずは矛を収めてくれたようだ。

「そつちは今日一日どうだった？」

「基本的に先生と一緒に引率だから楽しむ、というより氣疲れしたわ。自由時間も貰えたから蓮や杏と話したりも出来たけれど」

それから真が語るハワイでのあれやこれやを時折相槌を打ちながら聞いていく。ハワイにもビッグバンバーガーが出店していて、坂本君がハワイの大食いメニューに挑戦してグロツキーになつてたこと。飛行機が悪天候で飛ばなかったとかで喜多川君も急遽ハワイに修学旅行先を変更しており、奇遇にも出くわしたこと。ハワイの免税店で蓮ともども高巻さんに着せ替え人形にされたこと等。

「何故かあなたから目を離れたことを蓮から怒られたわ」

「それを聞かされて僕にどうしろと……」

電話口の真が困つたような表情をしているのが容易に想像できる。

「怪盗団はハワイでも名前が知られていたわ」

「……へえ」

真がふと呟いた内容に僕はうまく言葉を紡げなかった。高々日本のワイドショーを賑わせている怪盗団が国を越えて名前が売れる？

世界的に有名な日本画家である斑目画伯や世界的なハッカー集団



のメジエドくらいが話題になりそうな事件として思い当たるけれど。それでも国外でそれほど怪盗団が名を売るほどのことだろうか。コアな人間くらいしか知っていそうにないと思っただけだ。

「怪盗お助けチャンネルも連日支持の声で埋まってる」

「そうだね……」

ここ数日、というよりメジエドを打倒してからの怪盗団支持の風潮は強烈だ。今や怪盗団の予告状を模したグッズが作られ、道行く人がそれを当たり前に身に付けている。怪盗団を非難する者を許さない空気が世間に流れていた。

その中でも、メディアで怪盗団を堂々と非難する明智君に、世間の批判は集中していた。かつては探偵王子の再来と持て囃された明智君も、今やテレビへの出演もめつきりと減ってしまい、それでもSNS等で自身の考えを発信し続けては周囲から誹謗中傷を受けている。その様子は、それが演出なのかもしれないと思う身からしても目を背けたくなくなるような有様だ。

「ねえ、徹。今のこの流れって本当に怪盗団が正義だから支持されているものだと思う？」

「……少なくとも僕はそう思わないかな」

不安げな声で問う真に、僕は素直に心の内を告げる。怪盗団を支持している大衆の中で、真に怪盗団が正義だと信じている者がどれほどいるだろう。多くは何も考えず、お祭り騒ぎに便乗しており、ある者は非難されないように息を潜めている。そんな風に僕からは見えた。

「……そう、そうよね」

「僕は偉そうなことは何も言えないけれど、気を付けて欲しい」

この流れを作り出したものが何を狙っているのかは分からないけれど、確実に怪盗団を餌にかけようと手ぐすねを引いているだろうか。

ただ、そうした難しいことから解放されて純粹に楽しむ時間があったとしても良いと思うのだ。だって彼らはまだ学生で、子どもなのだから。

「ま、暗い話題はこれでおしまい。今は二度目の修学旅行を楽しんだ

方が良いと思うよ。留年でもしないと同じ経験は出来ないんだし。お土産は期待してるよ。」

「……ふふ、もう、分かったわよ。何か買って帰るわね。ありがとう、徹」

「お礼を言われるようなことは何もしてないけど、どういたしまして。それとおやすみ、真」

そう言って電話は切れる。思ったよりも長電話をしてしまったからもうバイトに向かわないといけない時間だ。

鞆を持って席を立てば、再びスマホが震える。今度は電話ではなく、メッセージアプリの通知だ。通知をタップしてアプリを起動すれば、真から画像が送信されてきていた。

「楽しそうで何より」

画像を開けば、そこには蓮達が集まって写っている写真。背景はハワイらしい白い砂浜に水平線まで綺麗な青色の海だ。坂本君なんかはアロハシャツを着て花の飾りを首に掛けた典型的な観光客の風貌だ。それを見て僕の口元が綻ぶ。そう、彼らだっけこうして難しいことと悩まず、楽しむ時間があつて然るべきなのだ。

# The premeditated murder

明くる日、今日が修学旅行最終日でやっと解放される、という真からのメッセージに労いの言葉を返しながら登校した僕は、早々に校長室に呼び出しを受けていた。

彼に呼び出されるのは本当に久しぶりのことだ。鴨志田先生の一件以降、僕は校長に目の仇にされていた。そのお陰と言うべきかそのせいと言うべきか、校長が頼りにしたのは真であり、それも金城の件を境に真からの協力も受けられなくなっていった。校長が今何をしているのか——恐らくは鴨志田先生の件についての説明と謝罪に追われているのだろうけど——を把握しておらず、僕としては今日の呼び出しの理由を図りかねているところがあつた。

「お呼びですか、校長先生」

部屋に入れば、相も変わらずふかふかの絨毯に照明を反射して艶やかな光を放つ革張りの椅子。ただ一つ、僕が最後に見たのと異なるのは、その豪華な椅子に腰かける人物の様相だ。

「……よ、ようやく来てくれたね」

丸い身体に、首と顎が完全に一体化してしまっている特徴的に過ぎるフォルム。そんな校長は、過度のストレスからか目は落ち窪み、隈がくつきりとできていた。それでもその目は鋭く僕を睨みつけていたのだけだ。

「君はこれで満足か……？」

「満足、とは？」

顔を合わせて早々、校長が何を言いたいのか判然とせず問い返す。

「あれ以来、ワシはずっと理事会から突き上げを喰らい続け、警察にも何度も事情聴取に呼ばれている。来年の学園への出資額も相当な縮小が決まった。ワシは遠からず首になる。……全て、全て君が企てたことだろう！　ワシを陥れようと、怪盗団などというものを立ち上げて！」

僕の返事が気に食わなかったのか、校長は最後はもう叫ぶように捲

し立てながら、席を立て僕を胸倉を掴み上げた。校長よりも僕の方が背は高い。けれど、鬼気迫る人間の迫力とでも言うべきか、今の校長は僕をその両手で吊るし上げんばかりの力を込めて襟を締め付ける。

「わ、ワシがここまで来るのにどれほどの犠牲を払ったか！ 分かるか！ たかが高校生の子どもじゃ想像もつかんような犠牲だ！ 金も、時間も、何もかもを費やした！ そうして築き上げたワシの今を、すまし顔で足蹴にして満足か、ええッ!?」

「……っ！」

眼前に詰め寄られ、血走って涙で潤んだ校長の目に僕の顔が映り込む。首が絞まり、苦し気に顔を歪める僕の顔。

「鴨志田を止められなかった？ ならば他に誰がこの学園を全国区に押し上げることが出来た!? その名声で、その実績でスポンサーからの出資を集められたのは誰のお陰だ!? ワシが、鴨志田を連れて来ることが出来たからだ！ その恩恵に与っておきながら、いざ不都合が起きたら全てワシの責任か？ どこまで都合の良い身分だ、子どもというのは！ そんな血も繋がらない子どもものに、何故ワシがこんな目に遭わねばならん！」

激情のままに力を籠め続ける両手に、僕の喉は絞め上げられ、ついにはまともに呼吸が出来なくなる。酸欠で目の前の校長の顔がブレて映り、手先が震えるような感覚を覚えながらも、僕は何とか彼に手を上げようとする自分を抑えつけていた。

今ここで手を出すべきじゃない。それはより一層、校長を刺激し、今度こそ取り返しのつかない事態を引き起こしてしまいかねない。僕は震える手を校長の両手に添える。

「ほら、どうした？ ワシを殴ってみろ！ 鴨志田にしたようにな！ そうすれば君だけでも退学に出来る！ ワシだけが墮ちると思っただか？ ワシだけが、君に良いようにあしらわれて終わるとでも思っただか？ いつもいつも全てを見透かしたような態度でこっちを見下して、ワシの何を理解したつもりだ！」

ギリギリ、ギチギチと掴み上げられた服から音が鳴る。そろそろ本

格的にマズくなってきた……。これ以上首を絞め続けられると意識を保てなくなる。そうなる前に最悪力づくで抵抗しようと思っても、既に僕の手足はその意思に反して脱力してしまっている。耳の奥でドクドクと音がする。校長を殴ってでも逃げるべきだった、だけど……。

その瞬間、校長の両手で絞め上げられたワイシャツが限界を迎えたのか、第一ボタンが弾け飛び、彼の額に勢いよく当たる。ペチン、と小さな音が鳴り、その微かな音と衝撃に我に返った校長の手から先ほどのまでの剣幕が嘘のように力が抜けた。

「っ！……げほっ、えほっ！」

床に倒れ込み、空咳と共に肺に必死で空気を取り込む。血がかなり頭の上っていたのか、息を吸いながら熱を持った頭を振る。

「わ、ワシは何を……？」

校長はと言えば、自分がやったことを上手く認識出来ていないのか、僕と自分の両手を見比べて先ほどの激昂が嘘のように顔を青くしていた。

「げほっ……、少しは冷静になれましたか……？」

息を落ち着かせながら、校長に問う。まだ視界が揺れているため、膝をつきながらだけれど、校長の目を正面から睨みつけて。

「ヒッ！」

校長はそれに怯えたように後退る。極度のプレッシャー、疲労からの情緒不安定、今は興奮状態が収まり、周囲に際限なく怯えてしまう状態になっているらしい。この分ならまたすぐに襲われることは無いだろう。そう思い、僕は一度深呼吸すると、努めて声音を穏やかにして校長へと話しかけた。

「落ち着いてください。先ほどは錯乱していた、そうでしょう？」

「そ、そうだ……。わ、ワシが生徒を手に掛けたり……など……」

「ええ、そうです。校長がそのようなことをまともな状態のときに行ったりするはずが無い。だから落ち着いて、深呼吸をしてから、ゆっくりと椅子に座りましょう」

両手で落ち着くようにジエスチャーをしながら、ふらつきそうな足

に鞭打って立ち上がり、校長の肩に手を置く。それに一度大きく身体を震わせた校長だが、僕の言う通りに深呼吸をすると顔中に脂汗を滴らせ、椅子に身を沈めてくれた。

「何があったかは僕には分かりませんが、よほど理事会とやらで追い詰められたのですね」

「……ワシはもう終わりだ」

そう言いながら、校長は今度は僕の手に縋りついてくる。先ほどとは打って変わって泣きそうな表情で。

「どうすれば良かった!? ワシは、一体どうすれば良かったというんだ!」

「……僕を怪盗団の最有力容疑者として理事会や警察に突き出すのではなかったのですか?」

「確たる証拠も無い中でそれをしたとしてどうなる……。間違っていればワシの立場が余計に危うくなるだけ。それにもし君が怪盗団なのだとすれば去年の段階で鴨志田を改心させていただろうに……」

この校長の話しぶりからすると、彼は僕を怪盗団容疑者として警察やその他に話したりはしなかったのだろう。そこには彼自身も語ったように自身の保身もあるだろうが、僅かなりとも教育者としての校長の姿があったとしたいのは、ただの僕の願望だ。

僕の両手を握り締める校長の手が、まるで氷か何かのように冷え切っているのは、彼の立場が今いかに危ういものになっているかを、言葉よりも雄弁に僕に伝えてくれた。

「もう話せることは全て話した……これ以上、何をすればワシは許されるんだ……。ワシに怪盗団の正体を掴むなど、到底不可能なことだった……」

「どうしてそこまで怪盗団のことを?」

憔悴したように呟く校長に、僕はふと浮かんだ疑問を口にする。思えば、校長は鴨志田先生の一件から、ずっと怪盗団の正体に執心していた。もちろん、学園の醜聞をセンセーショナルな形で世間に晒し、大衆の注目を必要以上に惹きつけることになった。それによって秀尽学園のイメージダウンが決定的なものになってしまった。校長と

しては、怪盗団を目の仇にする理由は十分ある。それにしても、校長の執着の仕方は病的だ。学園の為というよりも、もつと別の何かの為に情報を集めようとしていたみたいだ。それは違和感とも呼べないくらいの僕の幼稚な憶測でしか無いけれど。

「……言えない、言えばワシは終わりだ」

今の校長の言葉によって、僕の中にあつた違和感が形を為し始める。校長を動かして怪盗団を探っていた者がいる。それは校長を完全に支配下に置いていて。警察？ いや、警察ならこんな回りくどいことをする必要なんか無い。

「終わり？ 校長の背後には誰が、何がいると言うんです？」

「い、言えない……」

僕が聞き返せば、校長は分かりやすくしまったという表情になつて目を逸らし、口を噤んだ。その前に回り込み、顔を覗き込む。

「学園関係者ですか？ 理事会？」

「……」

縫い付けられたように口を閉ざしてしまう校長。けれど、その目は忙しくあちらこちらに向けられている。正面にいる僕の目から逃れようとするみたいに。目を合わせてしまうと、そこから何かを見抜かれてしまいそうだと怯えるように。しかし、その手は僕の両手を掴まえたままだ。

「終わり、というのは校長が校長でいられなくなるということですか？ それとも……、もつと別の意味ですか？」

別の意味、と言つた瞬間に身体が強張つた。同時に僕の手がより一層強く握られる。身体を小さく縮めようとする動き、本能的に自分を守ろうとする動きだ。

「怪盗団を追う警察以外の何者がいる？」

校長の背後にいる何かが、怪盗団と敵対し、明智君が所属しているであろう勢力と同じとは限らない。けれど、警察や芸術界、裏社会にまで根を張っているその何かが、校長ともその一端で繋がっていると考えるのはこじつけだと思っただろうか？ 怪盗団を付け狙い、なおかつ大きな影響力を保持する何者が、そこまで怪盗団に執着するよう

な者が、どれだけの数がいるというのか。

「……わ、ワシはもう終わりだ。こ、殺される……！」

「落ち着いてください！ そうと決まったわけじゃないでしょう」

「だ、ダメだ……！ もう価値が無くなったワシなど……」

僕の両手を離し、そのまま頭を抱えて椅子の上で丸くなってしまふ校長。汗と共に涙を流しながら、終わりだと何度も呟く。

「だ、助けてくれ……！」

かと思えば、再び顔を上げて僕の両肩を掴み、がくがくと揺さぶってくる。それを何とか押し留めながら、僕は今取り得る方法について考えを巡らせる。

冴さんに頼る？ それで校長の後ろにいる人物に冴さんまで狙われる。冴さんに誰かを守る余裕なんて無い。自身を守ることだけでも大変なはずだ。

怪盗団？ 校長をそこまで信用していいとは思えない。今は錯乱し、弱っているけれども、保身が頭を過るだろう。

じゃあ明智君？ あり得ない。もし僕の考えが正しければ、それは校長を地獄に叩き落とすのと変わらない。

他にも僕の面識のある人達の顔が浮かんでは消えていく。そのどれも、校長を守るには足りないか、校長自身を信用しきれないために採れない手になる。どこまで自身の身を削って校長を守るべきかという冷徹な思考もまた、僕の中には存在していた。

「……校長、警察に保護を求めましょう」

結局、僕の口から出てきたのは苦し紛れな案。妙案だなんて欠片も思っていない、ただ校長を安心させるためだけの誤魔化しだ。

「む、無理だ……！」

僕の案を校長も信じられないのか、力無く呟いた。

「警察にただ言ったところで無駄かもしれません。ですが、怪盗団に狙われていると言えば保護してもらえる可能性があります」

毛筋ほどに細い光明だけれど、校長が保護されようと思えばそう言うしか無いと僕は考えた。

怪盗団を追う警察も、その背後に在るであろう勢力も、怪盗団の



ターゲットになった人物は怪盗団に繋がる貴重な手がかりだ。そのハツタリがどこまで通じるかはやってみないことには分からないけれど、校長の利用価値を見せつつ、保護してもらえたとすればこの手しか今の僕には思いつかなかった。

それを彼に説明すれば、先ほどまでの身体の震えは幾分かマシになる。か細いけれど、可能性を見出したためだ。

「不安なら、放課後になります。警察まで僕も付き添います。どうせ事情聴取もされた身です。今更それが増えなくても構いません」

「わ、分かった……、警察に行く……！ だからワシを、ワシを助けてくれ……！」

「大丈夫です、大丈夫……」

そう言つて校長を宥めていると、僕のポケットからバイブレーション音がする。こんな朝に一体誰がと思い、校長に一言断つて画面を見てみれば、そこにはバイト先の店長の名前が表示されていた。

「副店長おー！」

「いきなり大声出さないでください。どうしたんですか、こんな時間に。普段は学校のある時間に電話なんかかけてこないじゃないですか」

何か大変なことでもあったのかと電話に出てみれば、店長の悲嘆の声が僕の耳にキーン、という耳鳴りをプレゼントしてくれた。

「それが今日のバイト君達が急に病欠病欠で人数が足りなくなったんだようー！ 他の子に連絡しても皆来れそうにないって言われてえ……。放課後で良いからヘルプで来てええええ！」

「ええ……、そう言われましても……」

なるほど、店長が慌てて連絡してきた事情は分かった。けれどこちらはこちらで放つておけない用事があるのだ。

「無理？ 無理かなあ？ ほんのちよつとでも良いんだよう……」

「あいにくと僕も今日は外せない用事が……」

そう伝えれば、電話口から店長がおいおいと泣く声が響く。そこまで追い詰められていたのか、ちよつと申し訳ないけれど、それでも今の校長を放つておくことは出来ない。

「……ホントに無理？」

「すみません……」

「そっか……。うん、それなら仕方ないね……。君の決めたことなんだから」

「店長……？」

「……いやー、ごめんね！ 急に無理言って！ こっちは何とかするよ。一年に三度しかない私の本気を出すしか無いねえ」

「それは普段からある程度頑張っただけなんです」

「言わないでよう……」

最後はしよぼくれた声音ながら、こちらは気にしないで言い残して店長との電話が切れる。どこか普段の店長とは違う様子に思ったけれど、あの人が変なことはいつものことだ。

「さて、気を取り直して。校長、では放課後、またここに来ます」

「あ、ああ……。頼む……」

最後に校長とそう言葉を交わし、僕は部屋を後にした。部屋を出てから気付いたけれど、もう朝のホームルームも終わっている時間だ。それどころか、一時限目の授業も始まっている。思った以上に校長と長く話し込んでしまったらしい。

「……どうか上手く行って欲しいな」

僕はそう呟いて、先ほど出て来た校長室に振り返る。扉の奥では、校長がまた重圧と恐怖に怯えているのだろう。僕と校長の間には確執もあるけれど、だからといって彼に不幸になれだなんて思っていない。反りの合わないところがあれど、校長が大人としての責任を果たしてくれるのなら、僕と校長にとって適切な距離感でいればいい。

「今入りました臨時ニュースです。先ほど、警察署前で男が血を吐い

て倒れ、救急搬送されました。男は倒れる前に怪盗団、と呟いたことが近くにいた警官からの証言で分かっています。一緒にいた男子学生と警官の救命活動が行われましたが、現在心肺停止状態となっております――」

## Dissonance between them

「このまま奥村を次のターゲットにしても良いのかしら……?」

修学旅行から帰った翌日、怪盗団の面々は溜まり場としているルブランの屋根裏、蓮の部屋に集まっていたものの、各々不安げな表情で手の中のスマホを覗いていた。

そこに映されていたのは怪盗お助けチャンネル、そこには匿名の投票によって怪盗団の次なるターゲットを希望する改心ランキングなるものが表示されていた。そのランキングのトップをここ数日独占している名前こそが奥村。

「なんか、変な圧力感じてるのは俺だけ、じゃねえよな……?」

疑問を感じているのは真だけでは無かった。竜司ですら、スマホを見ながら頬に汗を伝わせている。そこには怪盗お助けチャンネルの掲示板。

『早く奥村を改心させろー』

『次のターゲットは奥村で決まりか』

『これで奥村が改心したら怪盗団ヤベーな』

『何にせよ次はどんな風に改心が起こるか楽しみ』

掲示板に並ぶのはランキングトップを飾る奥村への改心の期待。そこには怪盗団の次のターゲットは奥村になるだろうこと、むしろ奥村でなければならぬという無形のプレッシャーで溢れていた。

国内外問わず急速な拡大を見せるオクムラフーズ、その社長に対し、大衆は黒い何かを嗅ぎつける。そこに信憑性の有無は関係なく、ただ無形の圧力となって怪盗団にのし掛かる。

「私達の改心がショーか何かだって思われてるみたい……」

修学旅行で向かったハワイ。そこでも怪盗団の名前が知れ渡っていることに杏の中に生じていた誇らしさは、気がつけば萎縮していた。

それは杏だけでなく、怪盗団の皆が感じていること。

「おいおい、何ビビってんだよ！　ワガハイ達が大衆に認知されてきた証拠じゃねえか！」

ただ一人、モルガナを除いて。

「モナ、でもこの掲示板の連中、ヤバイよ。私知ってる。これマジエドでも同じことになったんだ。新しい連中が増えれば増えるほど、勝手なことを言う奴らが出てきて。皆変になっていくの」

怪盗団の面々を叱咤するように声を上げたモルガナに、双葉は視線を床に落としながらそう呟く。

モルガナと双葉は修学旅行には行けなかった。だからこそ、その分長い間怪盗お助けチャンネルの掲示板に目を通すことが出来た。そこで両者が感じた印象は真逆。

方や大衆への認知が浸透してきたことへの満足感。

方や大衆の怪盗団への期待が暴走し始めたことへの言い知れぬ不安。

「だからってこの掲示板で苦しいって言ってる連中を無視するのか？

ワガハイ達は怪盗団で、それをどうにか出来るってのに？」

「だがこの掲示板の連中は俺達にとって顔も知れないまま、訳知り顔で俺達を論評する連中だ。画壇にも似たような奴らはいた。全員口クでもなかったがな」

モルガナがどうにか奥村への改心を他の面々に促そうとするが、祐介も否定的な色を隠すことはしなかった。

「それに、徹も言ってたわ。今の怪盗団支持の流れは何かおかしいって」

「……っ！ また、トオルかよ。ワガハイ達にとって今一番怪しい人間の言うことを真に受けるのかよ？」

真が口にした徹の名。それは今のモルガナにとっては地雷となる言葉だった。

怪盗団の前に、現実、認知世界問わず現れ、意味深なことを言っているのは核心を突くことは無いまま姿を消す男。何かを知っているだろうことは確実なのに、最も接点のある蓮や真はそこに切り込もうとはしない。蓮が肩に担ぐ鞆の中で、かつてこれほどまでに一般人に自身の言葉が通じないことを齒痒く思ったことはないくらいだ。

記憶が無いモルガナにとって、自身にとっての手がかりがあると目

されるメメントス深奥への足掛かりとなる大衆の認知を稼ぐことは死活問題だ。怪盗団による改心、世直しは、そのまま自身の目的を達成することに繋がる。逆を言えば、怪盗団の活動が鈍化し、大衆の認知が薄れてしまえば、今まさに足を踏み入れることが出来ているメメントスの階層からも弾き出されてもおかしくない。そうなったとき、モルガナ単独で再び同じ階層に辿り着くことはほぼ不可能だろう。

そしてそれ以上に、モルガナにとって怪盗団は唯一の居場所だ。そこに紛れこんだ異分子が、怪盗団の秘密を共有してもいない部外者が自分達にこうして影響を与える。それはモルガナにとって許しがたい侵略だった。自分の居場所だと思っていた場所が、気付けば自分の知らない場所に変わろうとしているように。

「お前らどうしちまっただよ！ いったいいつから怪盗団は腰抜けの集まりになっちまっただよ!?!」

だからこそモルガナは蓮達に足を止めて欲しくなかった。それも、徹などというモルガナの世界にいない人物のために。

「おい、何だよその言い方……!」

だが、その焦りはモルガナから強い言葉を引き出す結果となり、それに反応してしまう人間がここには居た。

「リ्यूジは良いよな。カモシダが改心して学校に居場所も出来た。そしたらそれでハイ終わりか？ 他に困ってる奴を助けるよりも今くらいに有名になってチャホヤされたら満足なんだもんな!」

「モナ！ てめえ!」

「竜司落ち着いて！ モナも!」

モルガナの言葉に激昂した竜司を杏が悲鳴のような声を上げて押さえる。

「何だよ、凶星突かれて怒ったのか」

「お前……!」

一度火が着いてしまえば、もう口を閉じることは出来なくなった。普段から煽り合うようなコミュニケーションを取ることが多いモルガナと竜司。互いのボタンが僅かに掛け違えてしまえば、仲間としての信頼に基づくラインが崩れてしまえば、残るのは尖った言葉の投げ

つけ合いしかない。

「そうやって単純な人間だからトオルとかいう奴に簡単に丸め込まれちまうんだよ！」

「ふざけんな！ お前が何知ってんだよ！ 鴨志田の野郎に陸上部が潰されそうだってときにあの人だけが味方になってくれたんだぞ！」

お前が一人で何も出来ない間に、副会長は何とか解決しようとしてくれてたんだ」

竜司にとって、蓮が来るまで唯一の拠り所となった人間。自分が鴨志田に手を上げたばかりに陸上部を廃部にされかけたところを、なんとか活動の一時自粛という形に収めた。そのことは、竜司の中では消えない恩として残り続けている。そこに不用意に手を突っ込まれることは、自分の仲間を、周囲の人を自分以上に大事に思う竜司だからこそ許せなかった。

その一方、自身の力不足を薄々感じていたモルガナにとっても、竜司の言葉は抜けない棘となって突き刺さる。

「何も出来ない、だと？ ワガハイの助けがなきゃカモシダパレスで何も出来ずに死んでたのはお前の方だろ！」

「牢屋に捕まっていたのを俺達が助けなきゃ何も出来なかったのはそっちも同じだろうが！」

「二人とも、止めて」

これ以上は言葉の応酬では終わらなくなる。そうなりかけたところで、蓮の小さいながらもハッキリとした声で竜司とモルガナの口が閉じられる。

怪盗団の女リーダー。複数のペルソナを操るワイルドの力を持ち、言葉少なながらも、常に怪盗団の中心となって全員を引っ張ってきた。

「ジョーカー、お前はどうすべきだと思う？ 怪盗団のリーダーはオマエだ」

モルガナはそうやって蓮の意見を仰ぐ。モルガナにとって、蓮は常に一緒にいる相棒と言っても差し支えない。怪盗団という居場所が、徹の存在に侵食されているのであれば、今のモルガナの拠って立つ場

所は蓮の相棒としての居場所しかない。蓮は自身と意見を同じくしてくれる。怪盗団の足を止めるようなことをしない。徹よりも自分の味方だと思う、思いたい。

他の面々も、蓮の言葉を待つ。戦力的にも、心情的にも、全会一致を原則としているがリーダーの蓮の言葉は他よりも重たい意味を持つのだから。

「……怪盗団は有名になるために改心を始めた？」

暫しの間を空けて蓮が発したのは問い掛け。

「私は困っている誰かを助けるために、怪盗団を始めたつもり。その困っている誰かは、顔も知らない誰かじゃない」

鴨志田のときには竜司、杏、志帆を。班目のときには祐介を。金城のときには真を。その他の改心も、蓮が絆を繋いだ誰かを助けるために。掲示板に投げ掛けられる切実な依頼も、聞き込みを重ねて。いつだって怪盗団は自分達の周囲の人たちを助けるために改心を起こしてきた。

「私達は、私達の美学に従う。そこにランキングの結果は関係ない。違う？」

いつか、徹と交わした会話が蓮の中に甦る。怪盗団は、自分達の為にしたことに責任を持つ必要がある。その結果が望むものであろうとなかろうと。

かつての徹との会話は短くとも、蓮の怪盗団としての自分を律する言葉となって残っていた。だがそうであっても、蓮が発した言葉は紛れもなく蓮自身の考えである。

しかし、モルガナにとってはそうではなかった。蓮が、ジョーカーが、秘密を共有する自身の相棒すらもが、怪盗団以外の人間に深く侵食されてしまったことを印象付ける結果となってしまう。

「……そう、そうかよ。結局、レンもトオルって奴の言いなりかよ」

「モナ、それは違う」

「いや、違わないね！ さっきの言葉だってトオルって奴の受け売りだろ!? なんだよ、揃いも揃って情けないよな！」

モルガナはそう言ってテーブルから窓枠に飛び移り、怪盗団を一瞥



する。

「見損なつたぜ。怪盗団が敵かもしれない奴の言葉を真に受けて二の足を踏んじまうような腰抜けだったなんてな。ワガハイは一人でもやる」

メメントスの深奥に近づいていることは感じている。このまま行けば、霞掛かった自分の正体に、アイデンティティに手が届くかもしれない。空っぽの自分に、何も確たるものの無い自分を満たす答えに指先が掛かった状態で、足踏みをしろと言われて待てるような人間はそうはいない。

モルガナはそうして他のメンバーが止める間も無く窓から飛び降りて姿を消した。

「……………どうすんだよ、モナ行っちゃったぞ」

双葉が心配で瞳を揺らしながら、ベッドで膝を抱える。

「……………悪かったよ、俺がケンカ売っちゃったから」

双葉の言葉に、竜司が罰が悪そうに頭を搔く。

「モナの言葉にも言いすぎな面はあった。次に顔を合わせたときに謝れば良いだろう。それより、これからどうする?」

祐介は分かりやすく悄気てしまった竜司をそう言ってフオローしながらも、怪盗団の次なるアクションを決めようと話を振る。

「どうするって言っても……………」

「……………奥村を次のターゲットにするかどうかはともかく。情報を集めておいて損は無いと思うわ。パレスがあるかだけでも、とかね」

口ごもる杏に対し、真は指針を示す。竜司とモルガナの言い合いを止めなければと思いつつ口を出せなかった。口を出してしまえば、どうしても徹に傾いてしまうと自覚していたから。そうすれば、モルガナを更に追い詰めてしまいかねないと考えた故、真は沈黙を選んだ。

「怪盗団は全会一致で動く。モルガナが帰ってくるまではターゲットを決めない。だが、そうして足踏みをすることが副会長の、敵の狙いかもしれんぞ」

「祐介……………」

「状況を考えれば副会長が敵に近しいと考えることはおかしくない」

徹を仮想敵として話を進めようとする祐介に、竜司が再び火が着きそうになるが、それよりも先に祐介の鋭い目が竜司を貫いた。

「神出鬼没、なのにメモントスでは影も形も見当たらない。パレスも探したが無い。俺達の行く先々に現れ、何かを知っていきそうなのにそれを伝えない。あまつさえ、俺達を追う明智に協力しているときた。これを信用出来るわけがない。個人的に、そうではないと思いたいが。だからといって頭から信用できる人物じゃないのは確かだろう」  
その上で、と祐介は言葉を続ける。

「今、怪盗団が簡単に動けないようにする。それこそが向こうの目的だとすれば、俺達がこうして仲間割れをしている分、向こうに時間を与えることになる。情報を集めるのは良いが、何か次の段階に移るトリガーを決めておくべきだろう。……こういうのは真の領分だと思っていたが」

芸術家としての感性に寄っているため、普段の言動はどこかズレてしまいがちな祐介だが、頭が悪いわけではない。むしろ、自他の内面をキャンバスに表現する芸術家であるからこそ、人一倍鋭い観察眼を持つている。だからこそ、真が常の頭の冴えを發揮できていないことを見抜き、その原因も半ば掴んでいる。ならばこそ、今の自身に求められる役割を祐介はこなす。

「……………めんなさい」

祐介の言わんとするところを理解した真が、そう言って俯く。

「情報は集める。奥村の明確な被害者が出たら、戻ってきたモルガナを含めて怪盗団としてどうするか決める。後はメモントスの探索もする。今はそれくらいしか出来ない」

蓮がそう締め括り、怪盗団の集まりは苦い結末となって終わった。皆が帰った後、いつもは傍らに寄り添っている小さな温もりの代わりに、双葉と並んでベッドに腰かける蓮。

「モナ、帰ってくるかな……」

「大丈夫、帰ってくる。今日はお互いに熱くなっただけ」

沈んでしまった双葉の肩を抱いて蓮は励ます。怪盗団というコミュニケーションティシカ知らないのはモルガナだけじゃなく双葉も一緒だ。

故にモルガナとの決裂は双葉にとっても大きな衝撃を与えていた。

「なあ、蓮。さっきは言えなかったんだけど、あのランキングの動き、私おかしいと思うんだ」

「どういうこと？」

双葉がポツリと溢した言葉に蓮は首を傾げる。

「ここ数日、投票が右肩上がりに増え続けている。それも全部奥村に投票されてる。皆が面白がって票を入れてるのかもしれないけど。こんなバラけないのってあり得るか？ 皆が修学旅行に行ってる間、私とモナはランキングを見てたんだ。時間はバラバラだけど、まとめて大量の票が入ってる時間がある」

それは双葉だからこそ気付けた違和感。ハッキングの知識があるからこそ、まさかと思いついても頭を過る可能性。

「……あのランキング、操作されてるかもしれない」

「……だとすると、本当に誰かが怪盗団を利用しようとしている？」「分からない。ちゃんと調べてみないと。だからさっきは言えなかった。……ごめん」

自分の違和感を共有していれば、モルガナと竜司はケンカすることも無かったかもしれない。だからこそ双葉はずっと落ち込んでいたのかと蓮は腑に落ちる。かといって、あの場で双葉が意見を言えたかといえば、それは難しいとも理解している。人とのコミュニケーションをまだ恐れる気がある双葉に、あの険悪な空気の中で確証もないことを言わせることは出来ない。だからこそ、双葉は蓮には打ち明けてくれた。それで十分ではないか。

「大丈夫、言ってくれてありがとう。ランキングの操作がされていたか、調べてくれる？」

泣きそうに肩を震わせる双葉を抱き寄せて蓮は言う。腕の中で、双葉が頷いたのを見て蓮は口元を少し緩めた。

「大丈夫、モルガナは戻ってくる。怪盗団はこのまま終わったりなんかしない」

大丈夫、そう繰り返して双葉の頭を撫でる。その言葉は、双葉だけに向けられたものではないと自覚しているけれども。

多少元気を取り戻した双葉を見送った蓮は、スマホを取り出してメッセージアプリを立ち上げる。そして画面に映る名前をぼんやりと眺めた。

海藤徹。

何を知っているのか、何を隠しているのか。不安な気持ちは蓮の中にもある。けれどそれを表に出すわけにはいかない。怪盗団のリーダーとして。何よりも、信じると決めた。

そう考えを新たにしていたところに、新たなメッセージの着信を告げる通知。送り主は怪盗団を追うと公言する高校生探偵。その彼が送ってきたメッセージに、蓮は更なる混乱に陥れられることになる。

『海藤くんが怪盗団絡みの事件の重要参考人として取り調べを受けている』

## Deep dealings

警察署に向かう道すがら、もう後ほんの数歩というところで、校長は足を止めた。まだ残暑もあり、さつきまでは汗をダラダラと流していただろう校長の顔からは血の気が引き切っていた。

「校長……？」

「そ、……………んな……………」

右手で左胸を抑えながら、苦悶の声を上げた彼を不審に思つて近づけば、次の瞬間には校長は血の気の引いた顔で僕の肩に縋りつくように掴みかかつて来た。

「か、怪盗団……………たす、け……………」

目が飛び出さんばかりに見開かれ、目玉はぐるりとひっくり返つて息が出来ないと喘ぐ様に大きく口を開いた表情。目と鼻と口からどす黒い血を垂れ流しながら、僕の服が千切れそうなほどの力で握り締めながら、校長はそう言つて地面に倒れ込んだ。

何度思い出しても身震いしてしまいそうになる。あれは、この上なく残酷な死に様だ。

「……………えているか？ 大丈夫かい！」

どこか遠くに揺蕩っていた僕の思考は、そんなドスの利いた声で現実を引き戻された。ハツとして前を見れば、気遣わしげな表情をした警官が僕を睨みつけている。

「大きい声を出して申し訳ない。だが、少しぼうつとしていたようだからね」

「ええ、すみません」

「あんなことがあった後だというのにすまないね。ただ、現場にいた関係者として話を聞かないわけにはいかないから……………」

校長が警察署を前にして倒れてしまった後、僕は近くにいた警官に声を掛けると、救急車が来るまで救命活動に没頭していた。そのときは、何とか助けなければという使命感で目の前の衝撃的な出来事から半ば無理やり目を逸らしていた。けれど、校長が病院へと搬送され、僕が関係者として事情聴取を受ける段になってようやく先ほどの出

来事が現実感を持って僕へと迫ってきたようだった。

「それで、君は署に出頭しようとした被害者の付き添いだったと？」

「そう、ですね。校長に付いて来てほしいと頼まれましたから……」

僕の視界の隅では、もう一人の警官が黙々と僕の話す言葉を書き綴っていた。鴨志田先生の件でこうした事情聴取は何度か受けたものの、それとは空気がまるで違うと感じさせられる。

「そうか、被害者は一体……」

僕の対面に座る警官が何かを聞こうとしたところで、部屋の扉が無遠慮に開かれる。

「失礼する。ここからの取り調べは我々が引き継ぐ」

そう言って部屋に入って来たのは険しい表情をしたスーツ姿の若い男、それと少し白髪が混じり、薄く笑みを浮かべた細目の男の二人組。

取調室の警官は、二人を見ると揃って立ち上がり敬礼をする。

「ハッ。しかし、現在はまだこちらの聴取が済んでおらず……」

「我々が引き継ぐと言った。退出したまえ」

「……了解、しました」

有無を言わせぬ口調で警官達から聴取書を奪い取った二人組は、警官を追い出すと僕の前にどっかりと腰を下ろした。

「単刀直入に言おう。先ほど、病院で被害者が息を引き取った」

「!? ……そう、ですか」

若い男が机に片肘をつき、僕へと顔を寄せながらそう言う。

「正直に言うのだ。我々は彼が怪盗団によつて殺害されたものだと思っている。そして君が怪盗団の関係者であるとも疑っている」

「……唐突ですね」

自分でもまだ混乱している中、いきなりぶつけられたのは怪盗団関係者としての嫌疑。とはいえ、心当たりがある以上、完全に否定できないのも確かなのだけれど。

「我々は以前から怪盗団の改心事件を追っていた。鴨志田の件からだ。そこで君が被害者と対立していたことも調べが付いている。鴨志田との確執もあり、事件を起こす動機もあった」

男はそう言うのと脇に抱えたファイルをこれ見よがしに開いてみせる。僕の目からは中身を見ることは出来ないけれど、そこには僕に関する情報が全て書かれているのだと言わんばかりに、既に頭に入っているだろう情報ばかりであろうそのファイルに目を通しながら、男は言葉を続けた。

「斑目事件の時も、君は個展において二度、斑目と接触している」

そう言いながらも一枚、ペラリとページを捲る。

「金城についてもだ。金城の携帯から君に対して脅迫メールが送信されている。それも改心事件を起こす時期と近いタイミングにな！」

その言葉と共に、男は分厚いファイルをボタンと閉じると、大きな音を立てて机に叩きつけた。

「どれもこれも、怪盗団の起こす大きな事件にはお前の関与がある！」  
そして僕に叩きつけられる怒鳴り声。まさにドラマで見えるような取り調べだ。だけど、こんな恫喝のような取り調べ、明確に犯人だと分かっている人間じゃないと出来るわけが無い。ここまで高圧的な取り調べを、普通の高校生が受けたらよほど肝が据わっていない限り耐えられないだろう。

「お前は怪盗団、ないしはその関係者だな」

つまり、これは僕を怪盗団かその関係者として吊し上げるための取り調べになったということ。そうして重圧を掛けようとする魂胆なんだろう。こんな強引で恫喝みたいな行為、一般人にするにはリスクが大きすぎる。それを気にもしていないということは、ここでの出来事は全て握り潰せると判断してのこと。それが出来るだけの力を持った人物が背後にいる。

これは、恐らく僕は怪盗団を追う何者かに限りなく近づいている。そしてその尾を踏んでいる状態だ。だからこそ、国家権力をちらつかせて直接的に脅しつけてきた。

「お前は確執がある被害者を脅し、警察署の前で何らかの手段で殺害した。被害者が今日接触したのはお前だけだということも分かっている」

男はなおも言い募り、僕と額を突き合わせんばかりの距離にまで迫

る。

「……警察を舐めるなよ、ガキ」

その声はまるでヤクザか何かのようで、心構えはしていたとはいえ、背筋につうつと冷や汗が一筋伝うのを感じた。

「まあまあ、あまり脅かすものじゃない」

そこで、先ほどまで沈黙を保っていたもう一人の細目の男が宥めるように若い男の肩に手を置いた。

「すまないね。まだ君が怪盗団だと決まったわけじゃないのに、こいつ、若いから血気盛んでね」

そう言いながら、机を回り込んで僕の座る椅子の隣にまで来ると、しゃがみ込んで僕と視線を合わせようとする。そこで細く閉じられた瞼の奥に、口元の笑みとは似つかわしくない鋭い光を湛えた目が僅かに覗いた。

「けれど、君が何らかの情報を持っているのは確かなんじゃないかと思っっている。君が怪盗団じゃないと言うなら、何か知っっていることを教えてはくれないかな?」

なるほど、と思う。典型的な恐い警官、優しい警官だ。ここまで脅かされて、自分の身に覚えのないことで責め立てられて、そこに蜘蛛の糸のように垂らされた優しさ。緊張状態から一気に弛緩させ、心の隙を作るやり方だ。僕が本当に何も知らなければ、知っっていることを何もかも話していたかもしれない。

「話すことは何もありません」

「おや? そうかね、そうは見えないが……、まあ良い。時間はたつぷりあるからね」

そう言っつて細目の男は一見すると柔和な、しかし蛇のような笑みを浮かべて僕を見た。

時計も置いていない部屋の中ではどれだけ時間が経ったのかも分からない。あれから、あの手この手で口を割らせようと言い募ってくる二人の取調官に対して無言を貫き通した。時には怒鳴り、時には諭すようにこちらから発言を引き出そうとする二人。なるほど、こんなものを、それも年長者が二人がかりで長時間受けてしまえば誰だつて



参ってしまふ。僕だつて表面上は黙っていたけれど肉体的にも精神的にも消耗していた。

「……これ以上は時間切れかな」

細目の男が腕時計を確認しながらそう言う。

「善意の事情聴取があまり長引くのもよろしくないからね」

あくまでも事情聴取だという体でこの場を終わらせようとするらしい。つまりこの取調室に設置されているカメラは機能していないか、あるいは録画映像が何らかの理由で表に出ないということなのだろう。とはいえ、ここで僕を完全に拘束しないのは向こうだつてこれ以上打つ手が無いから。

こちらを窺うように視線を投げかけてくる細目の男を努めて無視しつつ、僕はこの時間が早く終わつてくれないかと思考をあらぬ方向に飛ばすことにする。

するとその時、取調室の扉がノックされる音。面倒な表情を浮かべた若い取調官を見るに、この来客は二人にとっては予想外のものだったらしい。けれど扉を開いて出て行つたかと思うとすぐに若い取調官は部屋に戻つてきて、細目の取調官に何やら耳打ちをする。

「……ふむ、後は引き継いでもらうしか無いか。海藤君、我々の取り調べはここまでだ」

その言葉を聞き、ようやく終わるのかと思つたのもつかの間。

「後の取り調べは彼に引き継ぐことになる」

そう言つて開かれた扉の向こうにいた人物に、僕は目を瞠る。

「ご苦労様です。無理を言つてすみませんね」

どこから見ても完璧な人好きのする笑み。だからこそどこか嘘っぽく見えるそれを湛えて、明智君は僕へと視線を移した。

「随分と疲れているようだね」

「理由は言わないと分からないかな？」

「まさか」

和やかにも思える言葉のやり取りは、けれど明智君の目に宿る冷たい光によつてただの雑談ではないと思わせる。

「……僕は何度も警告したはずだ」

少し黙ったかと思うと、明智君はそう告げた。

「君が今ここにいるのは、僕が何かをしたからじゃない」

むしろ、僕にとつても意外なことだった。そう言う明智君は口元に歪んだ笑みを浮かべている。それは僕を嘲るようにも、どこか諦めたようにも見える笑みだった。

「君の存在はもう軽くなつたつてことだよ」

「今までは君が庇つてくれていたんだね」

ここでの会話は表に出ることは無いという僕の予想はやはり正しかった。そうでなければ、ここまで明智君が開けっ広げに僕との関係を口にするはずが無いからだ。僕を庇い続けてくれていた明智君自身の立場が危うくなるはずで、それでもここでその話をしたということは、ここでの会話は僕と明智君だけのものになるということ。

「勘違いするなよ、庇っていたのは利用価値があつたからつてだけだ」  
そう言つて明智君は身体の陰に隠すように左手を動かすと、親指で扉を指して見せた。なるほど、カメラは死んでいても耳は死んでいないということらしい。

「で、君が出て来たということは僕の利用価値は無くなつたつてこと？」

「それこそまさかだよ。……教授は次でイレーナにチェックを掛ける」

「それは一通目の手紙だと受け取つても？」

「二通目があるかは君次第だ」

明智君が教授と呼称する相手が狙う人物とさえも、現状は一人だけだろう。そしてイレーナと言うあたり明智君はもう正体に辿り着いている、と。

「僕は手紙を出した。それなら君からも何かを受け取らないとフェアじゃない」

明智君はそう言つて腕を組み、僕を鋭く睨みつける。

「君はどうしてか廃人化させることが出来ない」

廃人化、その言葉に僕は校長がああなった原因に思い至った。校長の最期が脳裏に蘇り、自然と視線が鋭くなってしまう。

「彼を、校長を廃人化させたな？ 何らかの方法を以て精神暴走を起こした」

「彼の利用価値が無くなった、それだけの話だ。君があの場合にいたことだけが想定外だった」

「それじゃあ君が……」

「今質問する権利があるのは君じゃない」

僕の言葉は明智君によって遮られた。

「君の秘密、それを教えてもらおう。そうすれば君は解放される」

そう言つてこちらに手を差し出す明智君。高圧的にも思える口調でありながら、その表情は取り調べをしている者とは思えない。

どうして、君の方が辛そうな顔をしているんだ。今追い詰められているのは僕の方じゃないか。優位に立っているのは君のはずなのに、そんな顔をするなよ。

「君が欲しがっている情報について、僕が話せることは何も無いよ」

「それが君の答えかい？」

視線を机に落とした明智君は、酷く傷ついた表情でため息を吐く。

「教授に伝えなよ。あなたの欲しい情報は直接聞きにくければ良いと」

けれど次に僕が発した言葉に、明智君の表情は驚愕に歪んだ。

「……その言葉の意味、分かっている？」

「もちろん。前にも言っただろう、僕は君を諦めちゃいないんだ」

「勝ち目の無い勝負なのにかい」

明智君の背後にいるのは一介の高校生じゃ相手にもならない人物なのは確かだろう。けれど勝ち目が無いと言われるのは心外だ。僕は一人で戦いに行こうなんて思っっちゃいないんだから。

「僕だけじゃ勝ち目は無いかもね。だけど、一人じゃない」

「冴さんの命もチップにすると？」

「違うさ、僕は今でも、ホームズの帰りを待つてるんだ」

そう言つたときの明智君の表情は見ものだった。驚いたような、

怒っているような、けれどどこか嬉しそうな、最後に感じた印象が僕の勘違いでなければの話だけど。

「……それに値する何かを、君は出せるのかい？」

「どうだろう、君がどう感じるかだよ。僕を君の伝記作家にしてくれるかい？」

明智君はチラリと扉の向こうへと視線を送る。しばしの逡巡の後、こちらに向かい合った明智君は氷のように冷たい表情に戻っていた。「僕の真の目的を知ったとしても、それが言えるかい？」

外に漏れないように潜められた声、けれどそこに籠められた情念は先程までとは一線を画していた。明智君の言う真の目的、それは明智君だけが知る、彼だけが目指しているもの。他の誰にも聞かれたいくないであろうもの。

「だけど、それでも。」

「いつだって言うさ」

君が言ったんじゃないか。僕は君の助手なんだろう。

「……良いだろう、取引だ。ワトソン君」

## G l e e d y   e y e s

「……この前は随分と大変な思いをしたみたいだね」

あの取り調べを受けた日から数日後、僕は放課後になると丸喜先生のところを訪れていた。僕が警察で取り調べを受けたというのは誰の口から漏れたのか校内のある程度の人数には知れ渡っていたらしく、登校してすぐに取り囲まれてあれこれと詮索を受けた。普段はあまり気にしないのだけど、ストレスが多少溜まっていたのか、放課後になる頃には取り調べを受けていたときくらいには疲れを感じていたからだ。

丸喜先生はと言えば、僕の顔を見るなり一言言ったかと思うと、こちらを気遣うように飲み物とお菓子を出してくれた後は何も言わずに自身もカップを傾けている。僕も何も言うことなく、しばらくは沈黙の時間が部屋に流れていた。こういうとき、やはり丸喜先生がカウンセラーとして優れているのだと感じさせられる。相談者の心理的なストレスを見抜き、話すことを強要しない。こうしてゆったりとした時間を過ごさせてくれることが、自分のような人間にとって癒しになることを丸喜先生はしっかりと把握している。

「助かりました」

丸喜先生に甘えてしばしの沈黙に癒された後、僕はそう言って彼に頭を下げた。

「僕はお茶とお菓子を出すくらいしかしてないよ。それに、今は慰めだろうが他人からの言葉が重たく感じられるだろうからね」  
「そう、ですね」

校長の死、それから間髪入れずに警察の取り調べと明智君との交渉。あの日のことを思い出すと少し頭が重く感じられるくらいには、僕も精神的にストレスを感じていた。

「君がどんな目に遭ったのかは想像しか出来ないけれど、こうして学校に来ることが出来ているだけでも凄いことだよ」

「どうなんでしょうね。まだ現実感が無い、のかもしれない」

「……出来れば、そのままその記憶が風化して行って欲しいね。現実

感を伴ってしまうと、君の心にかかる負担は計り知れない」

丸喜先生はそう言って僕の顔を心配そうな表情で覗き込む。

「どうだろう、君さえ良ければ一度僕の治療を受けてみる気は無いかい？」

「治療、というのとは？」

今のところ、僕は自分が病んでいるという自覚は無いのだけれど、丸喜先生から見ると僕の様子はそこまで深刻だったのだろうか。

「治療というような大袈裟なものじゃないんだけどね。一種の催眠術のようなものだよ。記憶の言語化を利用して、トラウマの一部をよりインパクトの弱い印象に改変する」

いわば、自分を騙すというのに近いと丸喜先生は説明してくれた。もう少し記憶が風化して、衝撃を受け止められるくらいに心が回復してくるまで、記憶を軟化した形にして置いておくというのが彼の言う治療らしい。

カウンセラーというのはそんなことまで出来るのかと驚いていると、丸喜先生は恥ずかしそうに手で後頭部を掻きながらこれは自分が独自に考えた治療だと言う。

「ほら、一色博士の認知訶学があるだろう。あれの理論を少し応用しているんだ。人は自分の認知で世界を歪んで捉えている部分がある。だったら、意図的に認知を歪めてトラウマ治療にも役立つんじゃないかって思ってたね」

「なるほど、そんなことが」

「それで、どうかな？　少しでも君の心労が軽くなるなら、試してみても良いと思う。あつ、もちろん、無理強いはしないよ！」

丸喜先生は最後に慌ててそう付け足す。僕を臨床試験の被験者にするつもりじゃないと言いたいのだろうけど、その焦りようは逆に怪しく思われても仕方ないんじゃないかな。

丸喜先生も混じりつけなしの善意で提案してくれているんだろう。ただの高校生が人の死に目、ショッキングなそれに出くわしてしまったのだ。僕だって友達がそんなことになってしまったら、丸喜先生のような信用できるカウンセラーに連れて行くと思う。だけど、

「厚意は嬉しいんですが、止めておきます」

「そうかい……、無理は禁物だよ？　自分が大丈夫だと思っているときほど、人は疲れているものだから」

「そうですね。でも、覚えておかなくちやいけないと思いますから」  
あの日、僕が見たもの、感じたことを無かったことにしてしまうわけにはいかない。

「……あまりにも辛いことを抱え込もうとするのは、僕は反対だよ」  
「それでも、僕はその手段をとるわけにはいきませんから」

目の前で起きたことから目を逸らしてしまえば、僕は彼と正面から相対する資格を失うだろう。

僕の言葉に、丸喜先生は少し悲しそうな顔をしたかと思うと、次の瞬間には穏やかな表情に戻ってチョコレートを僕に差し出した。

「君は強いね。なら治療は止めておこうか。代わりに、これを食べたい欲しいな。甘いものは、生理的にも心理的にも良い効果があることが分かっているからね」

「頑固な性分ですみません。ありがたく頂きます」

丸喜先生から受け取ったチョコレートの包装を開くと、四角いそれを口に運ぶ。口に広がるカカオの香りと、じんわりと沁みるような甘みが丸喜先生の言う通り、心と体をリラックスさせてくれたらしい。この部屋に来るまで感じていた頭の重さは消えていた。

「こうして何気ない話をするだけでも、僕はすごく楽になりました。やっぱり丸喜先生は凄いですね」

「まさか。君自身の力だよ、それは。僕はそれをほんの少し支えただけ。……皆が君のように強ければ、ね」

「僕が強い、ですか？」

彼の言葉に僕は首を傾げる。あまり自分が強い、と思うことは無かった。僕が強ければそれこそ鴨志田先生にあそこまでボロボロにされなかったと思うのだけだ。

「強いよ、とても。見ていて眩しいくらいにね」

「そうですか……。あまり自分ではそう思ったことは無いですが」

「弱い人にとっては、眩しくて見ていられない程さ」

丸喜先生は、他ならぬ彼自身が弱いのだと言うように目を細めて僕を見る。

「君には確かに僕のようなカウンセラーは必要が無いのかもしれないね」

「どうなんでしょう。少なくとも僕は今日先生と話が出来て助かりました」

「……そう言ってもらえて嬉しいよ。さ、今日はもう遅いし、そろそろ帰った方が良いんじゃないかい？」

丸喜先生が指した時計は、確かにもう夕方を示していた。もうすぐ日も沈んでしまう時間だ。

「そうですね、今日は帰ります。それじゃあ先生、ありがとうございます」

「うん、またいつでもおいで。君とこうして話すのはいつも楽しいからね」

そう言っ僕を送り出した丸喜先生の顔は、穏やかな表情のままだったけれど、その目の奥にはどこか強い色の光が宿っていたようにも見えた。それは疲れた僕の勘違いだったのかもしれないけれど、学校を出てしばらくの間、僕の脳裏に残ったのだった。

学校を出た僕は、そのまま真っ直ぐ帰る気分にもなれず、渋谷駅で降りた後はセントラル街をブラブラとアテもなく散歩していた。こんなことをするのは我ながら珍しい、と思いながら歩いていると、肩に押し掛かる衝撃。

「副店長じゃん。どうしたのさ、もしかしてヘルプ来てくれたり？」

「……副店長じゃないです。最近面倒で訂正もしてませんでしたけど」

誰かと思えばバイト先の店長だ。店の外なんだから当たり前だけにドファミレスの制服姿ではなく、Tシャツにジーンズとラフな格好で、けれどぼさつとした髪の毛とどこか間延びしたような雰囲気は間



違えようが無い。

「そういえばこの前は急に電話なんかしてごめんね？」

「それほど切羽詰まっていたんでしよう？　こちらこそ行けなくてすみませんでした。あの日は大丈夫だったんですか？」

「人を掻き集めて私も久々に本気を出してどうにかしたよう。いやあ、人間やれば出来るね」

肩を組んだまま、店長は最初は、申し訳なきそうに最後は疲れたように笑いながら言う。これは、結構修羅場だったんだろうな。

「ま、君も大変だったんだろうし。こっちは気にしないで」

「店長？　それはどういう……」

「違ったかい？　疲れた顔してたし、何かあったのかと思ったけど」

「……意外と店長って人のことよく見てますよね」

「意外ってひどくない……？」

丸喜先生のところで大いぶ回復したつもりだったのだけど、店長には何故かバレているみたいだ。接客業をしているからこそその観察眼なのだろうか。この人がホールに出ているところなんてまあ見ないのだけど。

「これでも君とは結構長い付き合いだからねえ。そりゃ分かるよ。刎頸かんけいの交わりってやつ？」

「店長との付き合いってバイト始めた頃からなんで精々二、三年なんですけど……」

いつから僕と店長は互いに首を刎ねられても後悔しないような仲間になったんだろうか。

「あれ、そうだっけ？　副店長って私の親友ベスト4には入ってるんだけど。まあ君以外の三人は最近全然会えてないんだけどさ」

「店長の交友関係って……」

いや、それ以上は何も言うまいと口を嚙む。もしかしたら僕だけでも彼女にもう少し優しく接するべきなのかもしれない。

「違うからね？　他の友達は色々飛び回ってたりで会えてないだけだから。私が寂しい奴みたいな目で見るのは止めておくれよう」

「はいはい、そうですね」

その後もやいのやいのと言いながら纏わりついてくる店長をいなしている、

「――！」

「――やー！」

路地の方から何やら言い争うような声が耳に入って僕の足が止まる。店長の方を見れば、彼女も視線をそちらに向けていた。

「今の、男女の声でしたね」

「痴話げんかでもしてるのかもねえ」

痴話喧嘩、にしては少し声が大きかったが。声のした方向は街灯が少なく薄暗い路地だ。喧嘩の末に何かマズいことでも起こる可能性だってある。

「店長、近くの交番まで行ってきたもらえますか？」

「それは良いけど、君はどうするのさ？」

「ちよつと様子を見てこようかと」

「止めなよ、怪我するかもしれないんだから！」

店長にしては珍しく焦ったような口調で僕の肩に回した手に力が籠る。心配してくれているのは分かる。だけど、誰かが見ているという心理的な抵抗感が無いとエスカレーターしたときにどこまでも酷いことが起こるかもしれない。そうなったときに、女性である店長を向かわせるといふ選択肢は僕には無かった。

「すみませんが、警察お願いしますね！」

「あ、ちよつ、海藤君!？」

僕は店長の腕を振り解くと、そのまま路地に向かって走っていく。もう日もすっかり落ちてしまった時間だ。暗い路地を言い争う声を頼りに走って行けば、暗闇に慣れ始めた目に映るのは白いスーツの後姿とその向こうにいる誰かの二人組。こうして走って向かっている最中にも声のトーンは激しさを増していた。

「楽しいこと、僕にもしてくれよ？ なあ？」

「痛っ……！」

白いスーツの男が剣呑な雰囲気ですら奥にいる女性の腕を掴み上げた。このままだと危惧していた通りのが起こると思った僕は、思わず

男と女性の間に割って入っていた。

「部外者ですみません。ちよつと落ち着きましょう！」

「っ、何だお前!!」

「か、海藤君!」

急に現れた僕に驚いたのか、男は女性から手を離して僕を睨みつける。そこまでは良かったのだけど、僕の背後から聞こえた声に、妙に聞き覚えがあるのは何故だろう。そう思って振り返ってみれば、そこにいたのはふわりと横に広がった薄茶色のショートボブが特徴的な知り合い、奥村さんその人だった。

「春と知り合い……お前か、春の男は?」

「えつと……?」

僕を親の仇か何かのように睨みつけてくる男。奥村さんと知り合  
いだから何か誤解されているようだ。

「違う、海藤君は何も……」

奥村さんがそう言って否定しようとしている。痴話喧嘩、にしては  
ちよつと奥村さんが怯え過ぎてしまっているような気もする。

「関係が無いと言うなら身内の話だ。黙っていて貰いたいな! 春、  
こつちに来るんだ!」

奥村さんの言葉に男がまた彼女に詰め寄ろうとする。流石にさつ  
きまでの様子を見て黙って通すわけにもいかないものでそれを遮るよ  
うに間に入れば、男の顔が怒りに歪んだ。

「さつきから……!」

今にも殴りかかつて来んばかりの剣幕だけど、鴨志田先生のような  
ガタイでも無ければ、スーツの仕立ても上等で、あまり運動や格闘技  
をやっているような雰囲気でも無い。なら一発二発は殴られても構  
わないかと思っていると、僕の背後からバタバタと複数の足音が迫っ  
てくるのが聞こえた。

「奥村さん!」

聞き覚えのある声が奥村さんの名前を呼ぶ。

「何してやがる、てめえ!」

これもまた耳馴染みのある声だ。声の方に視線を向ければ、坂本君

が怒りに満ちた表情で僕の前に立つ男を睨みつけていた。

奥村さんの名前を呼んだ真は、そのまま彼女を背中に庇っていた。他にも雨宮さんに高巻さん、喜多川君と眼鏡をかけた小柄な女の子も一緒だ。

人数が増えたことで少し頭が冷えたのか、スーツの男は一度咳払いをすると、表情を取り繕ってこちらへと向き直る。

「……お騒がせして悪かったね。フィアンセとの……ただの痴話ゲンカだ」

フィアンセ、という言葉に僕も含めて雨宮さん達の顔が驚きの色を滲ませる。

「フィ……え？　で、でも奥村さん嫌がってんじゃない！」

「痴話ゲンカ、にしては穏やかじゃない雰囲気でしたよ」

高巻さんと僕の言葉に形勢が不利なことを悟ったのか、スーツの男はため息を吐くと、真の後ろに庇われている奥村さんを睨んだ。

「……よくも恥をかかせてくれたな。奥村さんにも報告しとかないと」

それからその視線は僕の方にも向けられた。

「それと春の男、カイドウとかって言ったか？　顔、覚えたからな」

そう吐き捨てる、足早にその場を去っていった。何だか誤解されたままだったような気がするけれど、仕方ない。誤解を解く暇だつて無かったし。

「真、奥村さんは任せても良いかな？　多分もう少ししたら警察も来ると思うし、僕はそっちに事情を説明しに行くから」

「え、ええ……、つて待つて、奥村さんの男ってどういう……」

「それについてはまた今度で。今は奥村さんをどこかで休ませてあげて」

奥村さんは真達に任せることにして、僕はそろそろ店長が呼んでくれたであろう警察への事情説明をしなくちゃいけない。最近は何かと警察に縁があるな、僕は。

# I, m y o u r W i l d c a r d

「朗報かどうかは分からないけど、調べてきたよん」

そんなメッセージと共に僕はいつも彼女が入り浸っている店、バーにゆうカマーへとやって来ていた。

まだ日も沈んでいない時間だけど、店の扉はあっさりと開く。

「アンタ……、そろそろホントに怒るわよ？」

入り口に立つ僕を見た店主のララさんは、呆れたような怒ったような目でこちらを睨む。

「すみません。学生が入り浸るなんてお店の評判にも良くないとは思ってるんですが」

「そうじゃないわよ。危ないことに首突っ込んでるのに怒ってるの。友達や家族に心配ばっかかけて」

頭を下げる僕に向かってララさんは今度こそ呆れた様子を隠さずに口を開いた。そして店の奥を指差す。

「二子があっち。珍しく酒も飲んでないわ」

それに従って進めば、店の入り口からは見えにくい席に大宅さんが座っているのが見えた。机には、彼女のものであろうスクラップブック開かれている。そこには彼女が集めたのであろう新聞記事やネットニュースの印刷が貼り付けられていた。

「ご無沙汰します。大宅さん」

「や、海藤くん。待ってたよお」

いつも通りの飄々とした様子でこちらにグラスを掲げて挨拶する大宅さんだったけれど、そのグラスに入っているのはビールでは無くウーロン茶。真面目な話ということだろう。

「これまた面倒な依頼だったけど、きっちり調べてきてあげたんだからね」

大宅さんに促されて隣に腰を下ろせば、彼女は早速とばかりにスクラップブックを膝に載せてパラパラと捲る。全国紙だけでなく地方紙まで、果ては週刊誌の切り抜きまで。そこには、小さな文字でびっしりとメモ書きが加えられている。実際に彼女が足で集めた貴重な

情報だ。

「この一年の裁判記録と、それに付随する大小の記事。後はあたしが接触できた証言者の記録。とはいえ、証言者の方は全員って訳じゃ無いから注意ね」

どうしてゴシップ誌の記者をやっているのか不思議になるくらい、彼女の集めて来た情報は精緻なものだった。

「本っ当に掻き集めるだけ掻き集めたから関係なさそうなものも混じってて見辛くてごめんねえ」

見辛い、とは言うものの、関連しそうな情報を近くに配置し、色分けも駆使して分類している。ただの謙遜か、はたまた彼女の記者としてのプライドか、自身に対する採点が厳しい。

「それで完全に調べきれないけど、なあんかおかしいんだよね、最近の事件は。ひき逃げ、通り魔、誘拐事件、ニュースにもなるような事件に大体顔を出すのが明智吾郎」

彼女の説明に従ってスクラップブックが捲られ、そこに貼り付けられていた新聞記事にはインタビューを受けているであろう明智君の写真。

「これだけならまだ分からなくもない。探偵王子の再来ってね。でも」

検挙された犯人が獄中でことごとく変死っておかしくない？

その次のページには、新聞の片隅に掲載されたような小さな記事。獄中で起こった変死事件。検挙されて日が経ってから、自らの行いを悔いるかのように獄中で自殺、あるいは全身から出血しての変死。

ここ最近から遡るように記録されていたスクラップブックを閉じると、彼女はそれを僕に差し出す。それを受け取ろうと掴んだものの、スクラップブックを持った彼女の手が離されることは無かった。「この一年って君は言ってたけど、もっと根深いよこの問題は」

そこには普段の飄々とした大宅さんはいない。敏腕記者としての大宅一子が、鋭い視線で僕を射貫いている。

「はつきり言うけど、ただの高校生が手に負えるものじゃない。君は怪盗団じゃないんでしょ？」

どこか確信を持ったような口調で、彼女は僕が怪盗団じゃ無いと言った。その言葉に、そういえば最初に出会ったきっかけは彼女だったっけと思ひ出す。

「怪盗団でも無い君が、ただの高校生でしかない君がこんな危ない橋を渡る必要は何?」

今の彼女に対して嘘は通用しない。それに、嘘を言う必要も無いと思う。

スクラップブックを互いに手に持ったまま、僕は彼女の目を正面から見つめ返した。

「友達の為ですよ」

「怪盗団の為じゃなく?」

「僕は欲張りですから。怪盗団だけじゃ満足できません」

「……怪盗団だけじゃ、つてことは」

彼女の目が驚きで見開かれる。視線が僕の顔をスクラップブックを行き来する。

「相手は大量殺人犯だよ?」

「それでも、僕の友達なんです。それだけじゃない」

そんな彼を利用してのうのと逃げようとしている人物がいる。色んな人を巻き込んで、その上で逃げおおせるつもりでいる。自分だけは沈みかかった船から逃げ出せると、そう思っている黒幕がいる。

「預けて頂けませんか」

「……死なないですよ?」

その言葉と共に、スクラップブックから彼女の手は離された。

「それと、ついでにもう一つ情報あげる」

スクラップブックから手を離れた大宅さんは、そう言うといつもの掴みどころのない雰囲気に戻って僕に一枚のメモを渡してきた。

それを開いて中身に目を通せば、今回の調査の中で彼女が手に入れたもう一つの情報。

「本当だとすれば、救いようが無いよねえ」

「……ええ、本当に」

「いきなり呼び出したりしてごめんなさい」

大宅さんと別れた後、僕のスマホにメッセージが入っていた。指定された場所に足を運んでみれば、そこに停まっていた一台の車。僕の姿を見つけたのか、運転席の窓が下がり、顔を出したのは冴さんだった。

乗ってと促された僕が助手席に乗り込めば、彼女は膝の上にノートパソコンを開いていた。

「この前は大変だったわね」

夥しい数のファイルと、精神暴走事件に関わっただろう人々をまとめた資料。それをスクロールしながら、彼女はそう言った。この前、その言葉が指すのは僕が取り調べを受けた日のことだろう。

「収穫がありました」

そう伝えれば、冴さんは少し口元を緩めた。そして目的の情報を見つけたのか、僕にノートパソコンを手渡してくる。

「これがあなたの情報と私の情報をもう一度分析し直した結果。これまでの精神暴走事件、役人や企業重役の不祥事。それによって利益を得たと考えられる者たちのリスト」

画面には個人名から企業名まで、ずらりと並べられたリスト。普段の業務の傍らこれを整理しなおしたというのだから、冴さんの恐ろしい程の捜査能力が垣間見える。

「捜査線上に浮かびあがった一つ、オクムラフーズが第一候補よ。近年海外進出も順調で、急速に頭角を現している企業。それに更にきな臭いのは怪盗団のターゲット候補になっていること」

冴さんの言葉に、僕はスマホの画面を操作する。画面に表示されたのは怪盗お助けチャンネル、その中のコンテンツの一つ。

「改心ランキングの現在一位が、奥村邦和」

「怪盗団が次のターゲットにするとしたら、敵はどう動くと思う？」

怪盗団人気に押されて、怪盗団は動かざるを得ないとしたら」

冴さんの問いに、少しだけ沈黙する。今の怪盗団に対する支持は過



熱している。日夜、掲示板には怪盗団に助けを乞う声が寄せられているほど。その中には、ムカつく相手を懲らしめて欲しいであったり、些細な喧嘩で友人や親の改心を求めるものといったこれまでのような切実な声以外のものも散見されるようになっていた。僕はそれを見て顔を顰めてしまう。

怪盗団は、大衆の些細な不満のはけ口にされてしまっている。

怪盗団が何故鴨志田や斑目、金城を改心させてきたのか。それは改心対象によって消えない傷を負わされた誰かを救うためだったはずだ。それが気付けば、大衆が無責任に自身のストレスを吐き出す為の対象にされてしまった。これを怪盗団への支持が高まっていると見ることも出来るのかもしれない。大衆に認知され、怪盗団という存在が認められたが故の現象だと。しかし、僕には怪盗団がただのコンテンツとして消費されているように思えてしまう。今の怪盗団を支持している声の多くは、何となく、周囲が噂していることに乗っかっているだけのもの。であれば、怪盗団の敵はどう動くか。法で裁けぬ悪を裁く義賊という、大衆の好む偶像を敵はどう利用したいか。

「怪盗団を正義の座から引き摺り下ろすと共に自らの罪を擦り付けるでしょうね」

「私も同じ意見よ。怪盗団のやり方は敵に既に知られている。予告状を出して、改心させる。それなら最悪のタイミングで事を起こせる」

僕の言葉に、冴さんは頷いてノートパソコンを操作する。先ほどまでのリストが閉じられ、続いて表示されたのは僕がスマホで見っていたものと同じページ。怪盗お助けチャンネルのランキングだ。

「連日ランキングのトップを独占している奥村邦和。あからさまにだけど、怪盗団は動くと思う?」

「……正直に言えば分かりません。怪盗団も不自然さを感じていると思います。思いますが、それはそれとして動かなければいけない理由が出来たとしたら」

怪盗団は動くだろう。彼らの信念に従って、目の前で傷つく誰かを助ける為に。それが罫だと疑っていたとしても。

「そう、あなたの意見は分かった。もう一つ聞かせて頂戴。あなたは、

怪盗団の味方か、私の味方か、どっち?」

「冴さん……?」

突然投げかけられた冴さんの質問の意図が掴めず、膝に置いたノートパソコンの画面から顔を上げれば、冴さんは真剣な表情で僕を正面から見つめていた。

「ここまで協力関係にあるあなたには正直に言っておくわ。私は精神暴走事件の背後にいるであろう敵を引きずり出す為に怪盗団を利用することも厭わない。たとえ怪盗団が明智君の推理通り秀尽生だったとしてもね」

その言葉に籠められていたのはただ己の出世だけを目指す欲望だけでは無かった。一連の事件を引き起こした相手に対する憤り、冴さんの正義感だった。

「怪盗団のやり方は間違っている、これは確か」

「だけど殺人の罪を着せられる謂れは無いはずです」

「それでも、私は奥村を泳がして怪盗団が動き、それに敵が乗じるのを待っても良いと思ってる」

「冴さん……、でもそれは被害が出るのを黙って見過ごすことになりますよ。また一人、あんな凄惨な目に遭わせてしまう」

僕と冴さんに改心や精神暴走を止める手段は無いのだ。怪盗団や敵が動くのを許せば、それはすなわち被害者が出ることを黙認することに他ならない。

僕と冴さんの間に気まずい沈黙が流れる。僕が言ったことくらい、冴さんだって分かっているはずだ。だけどそれを考慮しても尚、精神暴走事件の黒幕への手掛かりが掴めることの価値が大きいと、冴さんの中の天秤は傾いたのだろう。

「怪盗団が窮地に陥り、焦って動いたところを敵は絡め捕ろうとする。その時こそ、私達にもチャンスが巡って来るわ」

「だけどそれは、僕達が採るべき手段では無いでしょう。正しい手段で、正しい目的を果たす。それが僕と冴さんの目指すものです」

「だから選んで。あなたは怪盗団か私、どちらの味方かを」

その目はどっちつかずの答えを許さないと暗に物語っていた。選

べるのはどちらかだけだと。

「僕は……」

そう口を開いてから、少しの葛藤が僕の喉を絞め、言葉を詰まらせる。けれど、僕を見つめる冴さんの目は、そんな僕の言葉をいつまでも待っているようにこちらを捉え続けていた。少なくとも僕にとって冴さんの味方であること怪盗団の敵であることはすなわち雨宮さん達の敵であることを意味しない。僕にとっての敵は、冴さんでも怪盗団でも、ましてや明智君でも無い。僕は一度閉じかけた口を開いた。

「あなたの切り札という言葉を変えるつもりはありません」

「……そう」

「ですが、だからこそ奥村を泳がせ続けるのは反対です」

僕の言葉を聞いてホツとしたように緩んだ冴さんの表情が、再び怪訝なものに変わる。しかし僕は怪盗団の味方であろうと冴さんの味方であろうと、このまま座して待つことを選ぶつもりは無かった。

「奥村が精神暴走の被害者になり得る。それが分かっている見過ごすべきじゃない、それは僕達の心に明確な傷を残します」

「不用意に動いて警戒させれば敵の尻尾を掴めないまま、もっと多くの被害者が出るわ」

「出させません」

僕はそう言い切って足下に置いた鞆に手を入れ、中を探る。

「その為の武器を、手に入れました」

「……それは」

「冴さん、今度は僕の話聞いてくれますか。僕はあなたの切り札なんですよっ……」

「怪盗団に私が狙われる可能性がある、と?」

「はい。これまでの傾向からしてその可能性は高いかと」

週末、再び冴さんに呼び出された僕はあれよあれよと言う間に車に乗せられた僕は、今こうしてどこか呆れたような顔で僕と冴さんを見る眼鏡を掛けた男性の前にいた。彼の顔を見て、僕はここに来る前の「なんとかアポを取れたわ」という冴さんの言葉の意味がようやく理解出来たのだった。

「こんな誰が作ったたもしれん馬鹿げたサイトのランキングがそこまで強い根拠になるとも? まったく、馬鹿馬鹿しい」

冴さんの説明を聞き終えた男性、奥村邦和の第一声はそれだった。奥村氏の自宅と思われる閑静な住宅街に佇む豪邸。その一室に通された僕と冴さんは、上等な革張りのソファアームに腰掛け、机を挟んでこちらを半ば睨みつけるような奥村氏と向かい合っていた。

「検察庁から改心事件に関する重要な案件だからと時間を割いたのに、それがこのお粗末な調査結果かね」

「怪盗団に関して今現在、もっとも捜査が進んでいると言えるのは私達であると自負しています」

「そうであれば警察も検察も職務怠慢と言うしかないな」

眼鏡の奥から厳しい目をこちらに向ける奥村氏の口調は刺々しい。

「それに横に連れているのは何だ? えらく若い助手を連れて」

「彼はあの高校生探偵、明智吾郎の助手です。多忙な明智君に代わって調査に協力してもらっています」

冴さんは僕を手で示しながらそう紹介する。今はもう連絡を取ることすら出来ていないが、明智君の弟子という対外的な立場は未だに有効だ。僕は笑みを浮かべて奥村氏に向かって頭を下げた。

「……あの探偵王子の」

「海藤徹といえます」

明智君の名前が出た瞬間、奥村氏の眉が微かにピクリと動いた。そのの意味するところは、恐らく様々だろう。

とはいえ、その様子もすぐさま鳴りを潜め、再び奥村氏の表情は陰しいものとなる。

「検察も余程人手不足ということか、学生にまで頼るとは」

オクムラフーズという大企業を率いる社長だけあり、奥村氏の醸し出す迫力は相当なものだ。学校の先生などとは比べ物にならない、ともすれば、ついこの前に受けた取り調べを彷彿とさせるほど。僕は背筋が自然と伸びるのを感じた。

「どう言われようと、彼の調査能力、推理は今回の捜査において非常に助けになったのは事実です」

そんな奥村氏にも怯む様子を見せず、冴さんは淡々と机の上に資料を並べながら話を進める。

「怪盗団は少なくともこのサイトの情報を閲覧している。私達はそう考えています。少しお話しさせて頂いても？」

冴さんがそう言うと、奥村氏は無然とした表情のままであるものの、続きを促すように顎をしゃくった。

それを見た冴さんがこちらに目配せをする。ここに来るまでは整えた。この先は僕にも働いてもらうということだろう。それを受け僕は並べられた資料を奥村氏に向かつて示し、口を開いた。

「このサイトの掲示板には日夜様々な書き込みがされています。その中にはストーカー等、警察に相談してもどうにもならず、藁にも縋るような思いで書かれたものもいくつか」

冴さんが用意してくれた資料は怪盗お助けチャンネルの掲示板に寄せられた書き込みをプリントアウトしたものだ。

「そしてその書き込みがあつてから数日後、投稿者が抱えていた問題が嘘のように解決したという書き込みがされています。それも複数」

「そんなもの、怪盗団が解決した証拠にはならんだろうに」

僕の説明に奥村氏がそう吐き捨てる。もちろんそう思うのも尤もだし、何も知らなければ僕だってそう考える。だけどそこで黙ってしまえば、この場を用意してくれた冴さんに申し訳が立たない。

「解決の報告があつた書き込みで特徴的なことがあります。それは被害者が皆、東京在住だということ。怪盗団の知名度が上がるにつれて

地方からの書き込みも増えていますが、それらに対しては目立った解決報告がありません」

更に言えば、怪盗団による改心事件は鴨志田事件をはじめ、斑目、金城とどれも首都圏で発生している。唯一メジエドのみはインターネット上での対決となったことから所在地を絞るヒントにはなり得なかったが、それでもこれまでの三件を鑑みれば、

「怪盗団は首都圏を拠点として活動しています。そしてこの掲示板の解決報告も首都圏、東京で発生したと思われるものが主に解決されている。たとえ直接の関係は無いとしても、何らかの繋がりはあると考えました」

「その程度であればニュースを追っていけば考えつくだろう。それに、こんなサイトは昨今溢れかえっているよ」

「このサイトが設立されたのは鴨志田事件が発生してから間もなくです」

そう言えば、奥村氏は閉口してこちらを値踏みするような目で見つめる。怪盗団の知名度が高くなったのは斑目事件、金城事件が終わってから。以降は怪盗団の情報を集める様々なサイトが開設されたし、SNSでも怪盗団の足取りを追う投稿は鰻登りに増えた。しかし、鴨志田事件直後は怪盗団のネームバリューは皆無。その存在を知っているのは事件の舞台となった秀尽学園の生徒くらいのもの。

「このサイトは怪盗団を利用して人を集める為のものじゃない。むしろその逆、怪盗団をより有名にするために開設されたサイトです。であればこのサイトがすることは怪盗団への改心ターゲット情報の提供」

ニュースになるような改心事件の裏で、この怪盗お助けチャンネルに投稿された悩みを怪盗団が解決していたとすれば、それは中々の件数になるだろう。そして怪盗団の改心によって実際に救われた者が、その周囲にそれを語って聞かせれば怪盗団の強固な支持基盤となる。「サイト設立時期、投稿された悩みとその解決報告が他のSNSサイトよりも多いこと、か細い可能性ですが、それでも何のヒントも無い中である程度頼り出来るものはこれくらいです」

「……」

奥村氏は依然として難しい顔をしたままだったが、それでも僕の話  
を荒唐無稽と切って捨てるのではなく、顎に手を当てて何か思案して  
いるようだった。オクムラフーズという会社は奥村氏が三代目社長  
として就任してから急速に飛躍した。

冴さんの調べで、その裏には精神暴走事件による競合の不祥事が  
あったとしても、常人では見逃してしまいそうな些細な違和感やチャ  
ンスを見抜き、商圈を拡げてきた彼の能力は本物だ。

「馬鹿馬鹿しいのは変わらんが、こじつけにしてはまだ良く出来てい  
る。学生にしては良く話せるものだ」

そんな奥村氏が一笑に付すこと無く、少なくとも頭の片隅に可能性  
を過らせた。そこまで持って行けただけで只の高校生としては大金  
星だろう。

これで自分はある程度の仕事は出来ましたかと隣の冴さんに目を  
やれば、冴さんもこちらを見て微かに、されど満足そうに頷いた。

「そんな怪盗団の情報源と思いきサイトで、ここ最近奥村社長を次の  
ターゲットにと言う声が増えています」

冴さんが僕から説明を引き継ぐ。きっかけは冴さんが作ってくれ  
た。僕はそれに乗っかって少し口先を回しただけだが、それでも多少  
は助けになっただろうか。

「この程度であれば毎日のように受けているがね」

「かもしれないが、警戒するに越したことは無いかと。もしこれで  
思い過ごしであれば私達のことを無能だと宴席の話題にして頂けれ  
ば。怪盗団が心を盗もうとしていると大真面目な顔でふざけたこと  
を検察が言っただけだ」と

「……」

怪訝な表情を隠そうともしないまま、それでも奥村氏は冴さんの言  
葉をすぎさま否定しなかった。それどころか、そのこめかみがピクリ  
と僅かに反応を見せる。

「……は」

奥村氏は何を言おうとしたのだろうか。一度閉じられた彼の口が

もう一度開こうとした瞬間、僕達のいる部屋にノックの音が飛び込んできた。その音に、奥村氏は顔を少し顰めると視線を僕達から逸らす。

「誰だ？」

「僕です。少しお話ししたいことがあります」

扉の向こうから聞こえたのは若い男の声。その声に、どこか引つ掛かるものがあった。

「少し失礼する」

男の声に奥村氏は腰を上げると扉へと向かう。奥村氏がこちらに背を向けたのを確認してから、冴さんが僕の肘を微かに小突いた。

「……食いつくかしら」

「どうでしょうね。不発に終わるかもしれません」

「不発に終わったなら当初の予定通りよ」

「そうならないことを祈ります」

そう言っただけに落ちていた視線をチラリと冴さんの方に向けてみれば、僕の予想に反して冴さんの表情は柔らかいものだった。

今日のこの場を設けてもらったのも、半ば僕のワガママのようなものだ。冴さんには要らぬ苦勞を掛けたし、何より下げる必要のない頭を下げることになったことは想像に難くない。そうすることが、今の冴さんの立場では弱みになり得ることだと分かっている。それをおお、それを求めておいて成果を確約出来ない僕に対し、冴さんがそんな表情を向けるとは想像していなかった。

「損な性分ね。私を気遣う必要なんて無いでしょうに」

「要不要じゃないですよ。そうしたいってだけです」

横で冴さんが微かに肩を揺らして笑っているのが分かる。そんなに笑えるようなことを言っただろうか。

首を傾げそうになった僕のもとに、荒々しい足音が近づいてくるのが聞こえる。それに視線を上げてみれば、何やら見覚えのある白いスーツが目に入る。

「コイツ！ コイツですよ奥村社長！」

「あなたは……」



座る僕を憎々し気に睨みつけていたのは、いつだったか路地で奥村さんと揉めていた男。

奥村さん、奥村春。思わず目の前の男をまじまじと見つめてしまった。どうして思いもしなかったんだろう。奥村春は奥村邦和の娘。婚約者なんて話が出てくるのも彼女がオクムラフーズの社長令嬢だからだ。どこか浮世離れしたフワフワとした印象を彼女に持っていたのは、本当にお嬢様だったからだ。

「コイツが春の男、海藤です！」

そして僕にとっては最悪なことに、怪盗団は奥村氏を改心させてしまっただろう。それは大衆の圧力もあるだろうがそれ以上の理由がある。

怪盗団は、いつだって目の前の困っている誰かの為に動いて来たのだから。

「結局、あの後はまともに話にならなかったわね。こっちの目的は達したから良いけど」

帰りの車の中、呆れたように冴さんは肩を竦めて言う。奥村さんの婚約者という男は、こちらの話を聞くこともせず、奥村氏に一方的に「これは裏切りだ」、「春はオレのものはずでしょう」と言い募るばかりだった。僕が何を言おうと火に油を注ぐことになると思えなかった。冴さんになんとか取りなしてもらいながら奥村氏の自宅を後にすることになった。

「ところで、あの男の言っていたことは本当なの？」

「誤解ですよ。彼と奥村さんが揉めているところに通りかかったから仲裁しただけです。そしたら何故か彼氏と誤解されたんですよ」

「仲が良い人間でも無ければ喧嘩の仲裁をしようなんて思ったりしないもの。誤解されても仕方ないかもしれないわね」

「だからって知り合いが絡まれているのを無視するのはダメでしょう。それがここでこうして繋がるなんて思ってもみなかったですが」

僕はため息を吐いてシートに身体を沈める。それを横目に冴さんは少し微笑んだかと思うと、ドリンクホルダーに差し込まれていた未

開封の缶コーヒーをこちらに差し出す。

「今日はありがとう。お礼、にしては安いけれど。今日のところはこれで」

「僕からお願いしたことですから。むしろ無理を言っすみませんでした」

「構わないわ。あなたの為、と言いながら私にとつても有益だった」

缶コーヒーを手に取れば、ひんやりと冷たい。指先に微かに触れた温かさは冴さんの手だろうか。

「あなたは私の切り札よ。あなたのくれた情報、無駄にはしないわ」「ええ、お願いします」

その言葉と共に車が目的地に着いたのか停止する。そこは渋谷駅の近く。僕はお礼を言うと言と扉を開ける。九月も半ばをとつくに過ぎたのに、まだまだ夕方は暑い。

「家まで送って行くわよ?」

「大丈夫です。ちよつと歩きたい気分なので」

冴さんの気遣いをやんわりと断って別れた後、冷えた缶コーヒーを片手にセントラル街を歩く。少し何も考えずに歩きたい気分だった。

怪盗団は奥村氏を改心させるだろう。そしてその先に、敵による罠が待っている。過熱する怪盗団人気は、反転してしまえば容易に苛烈な排斥に繋がる。

「……僕はどうしたいんだろうなあ」

ふと口を衝いて出た言葉は益体も無い自問自答だった。怪盗団の味方だと嘯きながら、こうして彼らの邪魔をしようとしている。それは僕にとつて譲れないものの為であるはずで。

「オイ」

僕の取り留めの無い思考は、無遠慮な声によって遮られた。しかし、僕の前には人影は無い。

「下です」

続いて聞こえたのは感情の起伏が読み取れない平坦な声。それに従って視線を下げていけば。

「……双子?」

「キサマか、妙な来訪者というのは」

「なるほど、不可思議な気配を感じます」

青いシャツに黒いネクタイ、黒い半ズボンと年齢に見合わぬ服装。鏡合わせのようにそっくりな容姿の二人の女の子、それも右目と左目にそれぞれ眼帯をした金色の一对の目がこちらを見上げていた。

「……ハロウィンには一か月早いんじゃないかな？」

What is pointed out by  
La Force ?

「はも、はも……」

眼帯をした青いシャツの双子、その片割れが僕の目の前でその両手にはやや大きいサイズのハンバーガーを持ってかぶりついている。

「やはり興味深いですね、これが多くの人間が虜になるという食べ物」  
右側に視線を向ければ、ポテトを一本摘まんだもう一方が平坦な声でそんなことを言いながらチマチマと兎のようにポテトを食べている。

「……君達、保護者の方はどこにいるのかな？」

セントラル街でこの双子に絡まれ、もし迷子だったら無視して帰るのも良くないと目についたビッグバンバーガーに入ったは良いものの、当然のように二人はハンバーガーのセットを注文するとテーブル席に腰掛けて腹ごしらえを始めた。

あまりに自然な流れでそれが行われたものだから、怒るタイミングも失って僕は自分の分の飲み物だけ購入すると、この二人の保護者が現れるまでは相手をしようと席についたのだった。

「保護者？ 我らを子ども扱いするな！」

僕の言葉に語気も荒く反論してきたのは右目に眼帯をし、髪を丸くツインお団子とでも言うべき形で纏めている方。

「身の程知らずですよ」

そして平坦ながら冷たい雰囲気を漂わせているのは左目に眼帯をし、髪を三つ編みで纏めている方。

その容姿も性格も、雰囲気からして鏡写しにしたように対照的な二人だが、僕の言葉が気に入らなかったという点は一致していたらしい。根っここのところは似た者同士ということなんだろうか。

「大人だって言うならまずは自己紹介しようか。僕は海藤徹。二人の名前を覚えてもらえるかい？」

僕がそう言えば、二人は痛いところを突かれたようにぐぬ、と僅か

に顔を歪めた。

「カロリーヌだ」

「……ジュステイーヌ」

「カロリーヌにジュステイーヌね。よろしく」

二人の名前を聞けばやはりというか二人とも日本人と言うわけでは無さそうだ。にしてはかなり自然に日本語を話しているけれど、まあその辺は人によって事情があるのだろうと考えるのをやめた。

「ところで、二人が僕に会った時に言っていた妙な来訪者っていうのはどういうことかな？」

自己紹介も済ませ、二人がどういった人間か垣間見えたところで出会ったときに聞いた気になる言葉について質問してみる。

カロリーヌは僕を妙な来訪者と評し、ジュステイーヌは不可思議な気配をしていると言った。まるで僕のことを前から知っていたようだ。僕は二人のことを知らないのだけだ。

僕がそう思っていると、ハンバーガーを平らげたカロリーヌが子どもらしくない笑みを浮かべた。

「そのままの意味だ。お前は奇妙な不穏分子、招かれざる客。我が主がそう仰っていた」

「如何にも何か知っていると聞いたげですが、カロリーヌも私も主の言っていることを理解出来ていません。ですからこうして直接見に来たというわけです」

「わ、私は理解出来ていたからな！」

ジュステイーヌの援護射撃という名の誤射に貫かれたカロリーヌが頬を少し赤くしてジュステイーヌの言葉を否定するが、彼女はそれに対して相も変わらず冷めた視線をちらと返すと、僕を見上げた。

「ですが、実際に会ってみれば不思議なものです。不穏どころか、私達や、ましてや主にとって害があるようには思えない」

ジュステイーヌの言葉にカロリーヌも先ほどまでの慌てた様子から一転、少し考え込むような素振りを見せる。

「そうだ。だからおかしい。主が不穏だと、害があると言ったのなら、我らが見ても分かるはず」

「けれど実際に抱いた印象は真逆」

「その通り、むしろどこか安心……ってそんな訳があるか！」

自分で言いかけたことを掻き消すようにカロリーヌが頭を振って否定する。

「カロリーヌの言う通り、安心やどこか懐かしさすら感じます」

「言っていないからな！」

しかしカロリーヌの抵抗も虚しく、ジュステイーヌがそう言っただけを傾けて僕を見る。そんなに見られても何を言われているのか僕にはさっぱりだ。

「ワイルドの素養も無く、主が警戒するような怪しさも感じられない。主とは全く異なる気配なのに、何故か懐かしさを感じるのは一体何故でしょう」

「隠し立てしていることがあるなら早く言っただ方が身のためぞ！」

「そう言われてもなあ……」

お人形さんみたいで綺麗な双子だなあ、くらいしか考えていない。隠すも何も初対面だし。そう考えていると、ジュステイーヌに顔を両手で挟まれてぐつと寄せられる。

「不思議です……」

蜂蜜のように金色に輝くジュステイーヌの目が僕の間を通り頭の上まで覗き込もうと言わんばかりに。

「ジュ、ジュステイーヌ、何をしている!？」

むに、と頬を挟み込まれて顔を寄せられている横で、カロリーヌの焦ったような声が聞こえる。僕としても人目を集めそうなので離して欲しいのだけど、予想外に強い力のせいでそれも出来ない。

「あなたからは反逆の意味も、力ある者の気配も無い。それなのにどうして……」

「反逆の意味?」

ジュステイーヌの言葉を思わず復唱する。彼女とカロリーヌの持つ独特な雰囲気の違いだろうか、二人の言葉が子どもの悪ふざけだと切り捨ててしまえそうもない。

「反逆の意味、それを導くのが我らの使命」

「君達は一体……?」

僕の言葉は最後まで紡がれることは無かった。ドタドタと焦った気配を感じさせる荒い足音がに、ジュステイーヌの金色の瞳も、僕の顔もそちらを向くことになったからだ。

「どうして二人が徹と一緒に……?」

久しぶりに見たように思うフワフワと天然パーマがかかった黒髪。そういえば最近あまり話せていなかったような気がする。

「や、蓮。二人と知り合いかい?」

珍しいことに、驚きに目を丸くした蓮がそこに立っていたのだ。た。

「……つまり、歩いていたら二人に声を掛けられたと?」

「そういうことだね。迷子だったらマズいかと思ってちよつと話し相手になつていたところ」

事情を説明すれば、頭痛がすると言わんばかりにこめかみに指を添えて蓮がため息を吐く。

「オイ！ 我らが迷子だど!?!」

「不敬ですよ、海藤徹」

僕の前に座るカロリーヌがそう言って机に小さな手を叩きつけ、遺憾の意を示す。その隣に座るジュステイーヌも剣呑な目で僕を睨んでいた。ちなみに先ほどまで僕の隣に座っていたジュステイーヌは蓮の手によりカロリーヌの隣に席を移されてしまっている。「生意気な囚人ですね」と言うジュステイーヌの冷たい瞳も蓮は物ともせず、普段からは考えられない迫力を醸し出していた。

「蓮は二人の知り合い?」

「知り合い……の子どもみたいなもの」

二人の抗議を聞き流しながら蓮にそう聞いてみれば、何とも煮え切らない回答。けれど嘘を言っているわけでも無さそうだ。

「おい囚人！ 何を生意気なことを言っている!」

「むしろ我らの方が貴方を世話しています。そういう意味では貴方の方が子どもです」

シユウジン、とはまた変なあだ名だ。秀尽に通っているから付けられたのだろうか？ まさか囚人という意味では無いだろうし。

「……蓮も結構大変なんだね」

「分かってくれてありがとう」

少し話ただけでもこの双子は一筋縄ではいかなさそうな気配がする。この二人とよく顔を合わせていそうな蓮は苦労しているのかもしれない。

「フン、我らとの特別刑務でスマホを見ては恋しそうに名を呼ん……」「っ!？」

「もがーっ!？」

そんな僕と蓮を見て何かを言いかけたカロリーヌだったが、目にも止まらぬ速さで反応した蓮によってその口に大量のポテトを突っ込まれていた。

「何をする!？」

「今度余計なことを言うとポテトじゃ済まさない……!？」

「二人とも、席を立たないようにね」

今にも飛び掛かりそうなカロリーヌと蓮を宥めつつ、コーヒーをまた一口啜る。

「海藤徹、あなたの飲んでいるそれは美味しいのですか?？」

それを見ていたジュステイーヌが首を傾げてこちらに手を差し出している。飲んでみたいのだろうか？ だけど砂糖もミルクも入っていないからあんまりオススメは出来ないけれど……。

「良いから、寄越しなさい」

それを伝えてみればジュステイーヌは不機嫌そうに顔を歪めたかと思うと、バシツと僕の手からカップを奪い取ってしまい、ズズと口に含む。

「……こんなものを好んで飲むのですか、人間は」

そしてそんなことを言いながらうげえ、と言いたげな顔で僕にカップを突き返してくる。



「だからオススメしないと云ったのに」

ジト目でこちらを睨みつけてくるジュステイーヌからカップを受け取れば、その肩に手が置かれる。

「妙に仲が良いようで……」

「いや、カロリーヌもジュステイーヌも遠慮が無いだけじゃないかな？」

カロリーヌとの睨み合いを終えた蓮が僕の肩に手を置いてジュステイーヌのように僕をジトつとした目で射貫いていた。

「そもそもどうして二人は徹と会おうと？」

「主が警戒していたからです」

「我らがこの目で見定めようと思ったのだ」

蓮の言葉にジュステイーヌとカロリーヌの二人はそう云って僕をまた不思議なものを見るような顔で見上げる。

「だが、何の変哲もない一般人でしかない」

「少なくとも主が警戒する必要があるとは思えません」

かと思えば、二人はため息を吐いてやれやれと首を振った。何だろう、ガツカリさせてしまったのかもしれない。

「期待に応えられなくてごめんね……？」

「むしろ応えなくて良かった」

僕の隣で何故か蓮がホツとしたように胸を撫で下ろしていた。

「ところで、その割には二人と仲が良い」

けれどすぐに剣呑な目に戻り、僕を睨んで来る。最近何故か蓮や真からこうして睨まれることが増えた気がするな……。

「二人とも僕を見て懐かしいと言っていたから親戚に似たような人でもいたのかもね？」

「親戚……？」

僕の答えに、蓮は要領を得ないような顔をして今度は二人に視線を移す。その視線を受けたカロリーヌとジュステイーヌも、言葉に窮したように蓮から目を逸らした。

「わ、分からん！」

「理由は不明ですが、この人間に警戒心が湧かないのです」

「警戒心が湧かない……」

ジュステイーヌの言葉を繰り返して、僕と二人の間で視線を行ったり来たりさせていた蓮。少しの間そうしていた蓮だったけれど、意を決したように表情を引き締めると、姿勢を正して僕と正面から向かい合う。

「徹、一つ聞かせて欲しい」

「何だろうか？ 僕に答えられることで良ければ答えるよ」

その様子から、少なくとも彼女にとって大事なことを聞こうとしているのだと察した僕もカップを机に置き、彼女に向き直る。

「パレス、メメントス、イセカイ。この言葉を知ってる？」

「パレス？」

彼女の口から飛び出したのはいずれも耳に馴染みの無い言葉。

「英語の質問って訳でもないよね？ 異世界とか言ってるし」

「……知らない？」

彼女の目は真剣そのもので、妙なことを言って僕を揶揄っている様子でも無い。ということはこの言葉は彼女にとっては重要な意味を持つ言葉であるには違いない。けれど、それが何を指しているかについては。

ああ、いけない。このゲームはあくまで君達がプレイヤーなんだ。ここで彼がこれ以上直接的な関わりを持つのはよろしくない。

何だ、これ……。

「……徹？」

「悪いけど、それを聞くことはあまり良くない結果になる。これは彼を思っていることだよ。君達はまだゲームの途中なんだから。偽りの牢獄から解き放たれるその時に、君達の言う異世界でまた会えるさ。また双子にもきちんとか挨拶するよ。だから」

その時までには、この言葉もまだ覚えておく必要は無いよ。徹

僕の目の前で蓮が驚いたように目を見開いている。視線を横に向けてみれば、カロリーヌとジュステイーヌも同じだ。動きを忘れたように硬直して僕をじっと見つめていた。

「ごめん、蓮。少しボーっとしてたみたいんだけど……、何を聞かれ

「ていたんだっけ？」

無意識に何か変なことでも呟いていただろうか。蓮が何か聞かせて欲しいと言っていたはずなんだけど、聞き逃してしまっていたなら申し訳ない。

「……いや、何でも無い」

けれど、蓮はそれだけ言うとかかを考え込むように押し黙ってしまった。

「おい、囚人。さっさと出るぞ」

「我々の目も曇ったものです」

カロリーヌとジュステイーヌが先ほどまでの和やかな雰囲気から一転、どこか冷たさすら感じさせる様子で蓮をそう言っていて促す。

蓮もそれに文句を言うでもなく黙って頷くと席を立った。

「二人を見てくれていてありがとう。後は私が送って行く」

それだけ言って双子を連れて店を出て行く蓮。僕はと言えば、やっぱり何か変なことでも言ってしまったんじゃないかと不安になりながら残ったコーヒーを飲み干すと、少しだけ時間を置いてから店を出ることにした。何故だか、様子の変わった三人を追い掛ける気にはなれなかった。

# Cinderella or Pretender ?

結局、冴さんの助けで奥村氏と顔を合わせられたことだけが9月の主な成果となり、10月を迎えてしまった。

世間は相変わらず怪盗団に熱狂しているし、奥村氏への掲示板でのバッシングは留まるところを知らない。スマホの画面に流れる文字を眺めながら、僕は苦々しい思いでそれを見つめていた。

「あれ、副会長さん？」

昼休み、僕にしては珍しいことに中庭の渡り廊下でぼんやりしていると、少し久しぶりな気がする声を聞いた。

「や、芳澤さん。今からお昼ごはんかな？」

振り返ってみれば、そこにはお弁当箱であろう大きな包みを抱えた芳澤さん。いや、お弁当にしては大きすぎない？

「そうです！」

僕の言葉に笑顔で包みを掲げて見せる芳澤さん。まさかそれが全部今日の昼ごはんでも言うのだろうか。出来れば違うと思いたいけれど。

「もしかしてそれ、全部今日のお昼に？」

「食べないと身体がもちませんから！」

僕が恐る恐る尋ねてみれば、彼女は笑顔で頷いた。凄いな、体育会系ってというのは。一応僕も育ちざかりの高校生のはずんだけど、見ているだけでお腹がいっぱいになりそうだ。

「副会長さんはもうお昼済ませたんですか？」

「そうだね。今日は暖かいから中庭でポーっとしてたんだ」

本当はあまり食べる気もせず、自販機の缶コーヒーだけで済ませてしまっていた。

「そうなんです…、良ければ一緒にと思ったんですけど」

芳澤さんはそう言って少し残念そうに肩を落とす。

「まだ食後のコーヒーを飲んでなかったんだ。芳澤さんが良ければ、

お昼の話し相手になってもらっても良いかな？　このままだと日向ぼっこくらいしかすることが無かったから」

「はい！　喜んで！」

僕がそう言えば、芳澤さんはパアツと顔を輝かせて頷いた。前に話したのは夏休みのおきだったはずだけど、その時とは打って変わって明るい表情だ。いや、明るすぎる気がする。どこか無理をしているようにも見えるくらい。

「なんだか気を遣わせてしまったみたいですね……」

「気にしないで、むしろ僕がお邪魔させてもらうんだから」

恐縮したように肩を縮める芳澤さんをそう言っただけだと、渡り廊下の向こうからこれまた見覚えのある白衣がこちらに向かって来るのが見えた。白衣の主は、僕と芳澤さんを見ると少し目を見開いたかと思うと、すぐに穏やかな笑みを浮かべてこちらへと歩みを進めてくる。

「やあ、海藤君、芳澤さん。今からお昼かい？」

「あ、丸喜先生。こんにちは！」

「こんにちは丸喜先生。先生もお昼ですか？」

彼の手に提げられたコンビニの白いビニール袋を見て言えば、丸喜先生は少しきまり悪そうに笑った。

「コンビニ弁当だから、あまり褒められたものじゃないけどね」

「そうだ、丸喜先生も一緒にどうですか？」

「おや、良いのかい？　それならぜひ一緒にさせてもらいたいな」

眩しいくらいの笑みを浮かべて丸喜先生を昼食に誘った芳澤さん。そのまま僕達は中庭の一角、自販機とベンチが並んでいる場所まで言っただけで昼食を摂ることになった。僕が自販機で缶コーヒーを買おうとしたら、「それくらいなら僕が出すよ」と丸喜先生がさっさと自販機にお金を入れたのでありがたく甘えることにする。

三段重ねの重箱を広げた芳澤さんが中のおかずやご飯をパクパクと口に運んでいくのを見ながら、僕と丸喜先生は他愛もない雑談に興じていた。

「そういえば丸喜先生は11月までの期限付きで秀尽にいらしてまし

たよね。この後はまたどこか別の学校に行ったりするんですか？」

「いや、一旦は論文作成に集中しようと思っっているよ。ここでカウンセラーをやらせてもらって、色々な人と話していく中で僕も刺激を受けたからね、特に海藤君、君にはね」

「そうなんですか、やっぱり副会長さんは凄いですね！」

「ただ雑談してただけだと思えますけどね」

僕は丸喜先生と相談や雑談をしていただけで、そこから何かを汲み取ったというならそれは丸喜先生が優秀だからだ。ふと芳澤さんを見てみれば、彼女のお弁当箱が半分は空になっていた。食べるの速いね、芳澤さん。

それからもお弁当を食べ進める彼女を時折り交えながら、取り留めのない話を続けていた。その途中途中で、どこか沈んだ表情を一瞬浮かべる彼女に少し気がかりなものを感じながらも、僕がそれを話題に出せたのは彼女がお弁当を食べ終わる頃だった。

「ところで、芳澤さんは何かあったのかい？」

「何か、というの？」

「なんだか無理しているように見えたから」

僕がそう言えば、芳澤さんだけでなく丸喜先生の顔も曇った。丸喜先生も何か知っているという事だろうか。

「……副会長さんに隠し事は出来ませんね」

「無理に聞こうとは思ってないよ」

僕はそう言ってコーヒーを飲み干した。芳澤さんが浮かかない顔をしているのが気になったのは確かだけど、あまりプライバシーに踏み込むものでも無い。

「……すみません」

「謝ることないよ。むしろせっかくのお昼休みに嫌なことを思い出させてごめんね。興味本位で聞くことじゃなかったね」

それに、深く聞かなくともおおよその検討はつく、ついてしまう。夏休みに深刻なスランプに悩んでいた様子の彼女。恐らくは新体操に関係するもの。期待していた成果を得られなかったか、周囲から更なるプレッシャーを掛けられてしまっているか。

そう思つて丸喜先生の方を見れば、彼は僕から目を逸らした。まるで、目を合わせたら心を覗かれてしまふと言わんばかりに。

「……最近、少しは新体操が前より辛くはなくなつたんです。スランプからもちよつとは抜け出せたとも思つたり」

でも、と彼女は続けた。

「人の期待に応えるつてとっても難しいなつて思わされたんです」

「芳澤さん、君がそこまで思い詰める必要は無いんだ。以前より前に進んでいる、それだけで十分だと僕は思うよ」

沈んだ表情の芳澤さんに、丸喜先生が優しく声を掛ける。ともすれば芳澤さん本人以上に心を痛めていそうな表情をしているのは、彼が芳澤さんのカウンセラーをずっと務めていて彼女の努力を知っているからだろうか。

「海藤君、君だつてそう思うだろう?」

丸喜先生が僕に同意を求めるように話を振ってくる。確かに彼女はとても努力をしている。夏休みだつて自主的に練習をしているし、少しでも前に進もうと足掻き続けている。それを間違つているだなんて言えるわけがない。ないのだけれど、それを肯定する気には何故かなれなかつた。

「……以前僕に聞いたよね。快活で明るい君と繊細で暗い君。どっちが芳澤さんらしいかつて」

僕の脳裏を過るのは、以前丸喜先生と交わした会話や認知訶学のこと。どうして芳澤さんがここまで自分らしいという言葉に悩まされるのか。そして二つの対極な性格を、自分らしさの選択肢として挙げたのか。既に彼女の中では答えがあるんじゃないだろうか。けれど、それを直視出来ない。それは何故?

「それは……!?!」

僕の言葉に、何故か丸喜先生が目を丸くして驚いていた。僕がチラリと丸喜先生に視線を向けてみれば、彼はまたついつと目を逸らした。あまり踏み込むべき領域じゃないということは今の丸喜先生の反応で分かつた。けれど、彼も僕を止めようとまではしなかつた。なら、もう少しだけ芳澤さんに話をしてみよう。

僕はベンチに座る芳澤さんの前に立つと、視線を合わせる為にしがみ込む。俯いてしまっている芳澤さんを下から見上げるような格好だ。

「芳澤さんは、今自分がどっちだと思う？」

「今の私……？」

困惑したように芳澤さんが僕を見つめ返す。快活で、ハキハキとしていて、周りを明るくするような人。芳澤さんに対して周囲が抱いているイメージはそうだと思う。それが本当に芳澤さんがそうであろうと思っていて、無理のない姿なのだとしたらそれに越したことは無い。けれど、それならどうして芳澤さんは今辛そうな顔をしているのだろうか。

「なりたいたい姿と今の自分にギャップがあるかもしれない。それで苦しんでいるんだとしたら、一旦立ち止まって、今の自分を少しだけ認めてあげても良いんじゃないかと思う」

「でも……でも、それじゃダメなんです……！」

「それじゃダメ？」

「私は、私は明るくて、いつも元気です……」

「明るくて、いつも元気なのが君？」

彼女が発した言葉を繰り返す。今の彼女は僕を見ているように見えていない。痛みに耐えるような表情で、膝の上に置いている手はきつく拳を握り締めていた。

「だって、だって私は芳澤かすみなんですから……！」

絞り出すようなその言葉に、僕は思わず目を見開いてしまう。

「す、すみません。私、戻りますね！」

僕が驚いている間に、芳澤さんはそう言うのと慌てたようにお弁当箱を片付け、ベンチを立って行ってしまった。

「やはり、まだ彼女には受け止めきれないんだよ」

それを見送る僕の背中に、丸喜先生の重たく沈んだ声が掛かる。

「前にも言ったかな。皆が君のように強ければ、って」

振り返った視線の先にいた丸喜先生は、僕ではなく地面をじっと見つめていた。自販機の光が彼の眼鏡に反射して、その奥の瞳を窺うこ



とは出来ないけれど、今の彼の表情と同じように痛ましいものを見るような目をしているのだと思う。

「丸喜先生は、以前言いましたよね。トラウマを受け止めやすくするために、少しだけ認知を変えろ」

「……ああ、言ったよ。やっぱり君は気付いていたんだね」

「あれが、その結果ですか？」

「……そうしないと、彼女の心は壊れてしまっていた」

春先に僕が感じていた違和感、出来れば勘違いであって欲しかったそれは、生憎と勘違いでもなんでも無かったらしい。

「どうして彼女が自分を芳澤かすみだなんて言うんですか？」

少し調べたいことがあって確認した学生名簿。そこには確かに芳澤の名前はあった。だけど、かすみという名前じゃない。

「芳澤すみれに、一体何をしたんですか」

「やはり、君はとても優秀だよ。そして強くて、眩しい。僕らみたいな弱い人間じゃとても直視出来ない」

ようやくこちらを見た丸喜先生の顔は、能面のように表情が抜け落ちていた。その目は、普段の彼からは考えられないくらいに冷え込んでいる。

「今の彼女は芳澤かすみなんだよ。少なくとも、彼女の中ではそうなっている」

それが彼女にとっても良い治療になったんだ。と丸喜先生は呟いた。

芳澤かすみと芳澤すみれ。僕がまだ中学生の頃、ニュースにもなっていた。将来を嘱望される新体操界の星、芳澤姉妹。一時期、新聞やニュースがこぞって彼女たちの活躍を取り上げたこともあった。けれど、その活躍は程なくして急速に世間から忘れられていくことになる。

芳澤かすみの交通事故による死。

新体操界の未来を担うとまで言われた彼女の死は、ニュースで数度目にしたこともある。

「死人は生き返らない。ましてや死人と入れ替わることなんて出来る

はずが無いんです」

「彼女の認知では、死んだのは芳澤すみれだ」

僕の言葉に、丸喜先生はそう返してくる。だけど僕は知っている。芳澤さんの中では、芳澤すみれも死んだことになんかなっていない。「彼女は以前言っていましたよ。いつか妹と二人でオリンピックに出るのが夢だと」

彼女は芳澤かすみだと自分を思い込んでいただけじゃない。彼女の中では芳澤すみれもまだ生きているんだ。だけど、彼女がかすみとして生きる限り、すみれは眠ったままになる。

「いつか夢は覚めます、いやもう覚め始めているかもしれない。そのとき、彼女は芳澤かすみの死だけじゃない。今まで自分が芳澤すみれという存在を殺そうとしていた事実も受け止めなくちやならなくなる」

「それは……」

「先生は言っていましたよね。トラウマを緩和して、より受け止めやすくするための処置だと。でも、これじゃ逆効果ですよ」

むしろ時を経てしまっているほど、これは彼女にとって消えない傷になりかねない。そして何より、彼女を見ている周囲の人がどれだけ痛ましい思いをしているだろう。

「両親はこのことを知っていますか……？」

「……知らないと思うよ」

ということは、芳澤かすみとして振る舞う彼女を、彼女の両親はどのような気持ちで見守っているのだろうか。

「だけど、今しばらくは彼女には芳澤かすみのままでいさせてあげべきだ。そうじゃないと、辛すぎるじゃないか」

「それで救われるのは誰なんですか……？」

「皆が君のように強くなれるわけじゃない。それに君だって、もし鈴井さんが本当に取り返しのつかない被害を受けていたとしたら、それでも救うことが出来たと思うかい？」

丸喜先生にそう言われ、僕は言葉に詰まる。

「今の鈴井さんが立ち直れているのは、もちろん彼女自身の頑張りや、

周囲の支えがあつてのものだ。だけど決定的な事態が起こつていたとき、今の彼女のようになり直れていたとは……僕には思えないね」彼の言う通りかもしれない。鈴井さんが今も学校に通うことが出来るのは、本当にギリギリのタイミングで僕が間に合ったからなのかかもしれない。決定的なことが起こつてしまつていたときに、僕が彼女を助けることが出来たかと言われると頷くことなんて出来る訳がない。だけども。

「だからって、今の芳澤さんは立ち直る機会すら奪われてる」

「……あの頃の彼女を知らないからそう言えるんだよ、君は」

そう言つて僕を睨みつけた丸喜先生は、怒りすら滲ませるような口調だった。

「直視するどころか、意識の片隅に残るだけでも辛い記憶というものもあるんだよ。そんなとき、人の心というのは容易く壊れてしまふんだ」

丸喜先生が口にしたその言葉に滲む怒りは、僕に向けられたものじゃない。それは他ならぬ丸喜先生自身に向けられたものに思える。

「……芳澤すみれを芳澤かすみにすることによつて救われているのは、彼女じゃなくて丸喜先生なんじゃないですか？」

「……………彼女にとつても救いになっている。僕のやつていることがその場のしぎでしかないと言うなら。だからこそ君の助けも借りたんだ」

彼女を真の意味で立ち直らせたのなら、協力してほしい。

そう言つて僕に差し出された右手、それが示す重みは丸喜先生にとってはいかほどのものだろうか。僕を見つめる丸喜先生の瞳に、切実な光を見て取れたような気さえしてしまう。だけど、僕にとつてその手はとても遠い距離にあるものだ。

「ごめんなさい、丸喜先生。僕はあなたの手を取るわけにはいきません。あなたのそれは、人の持つ強さを損なつてしまうやり方だ」

「そうか……、だけど、僕は君にも分かつてもらえると信じ続けるよ」

僕を見つめる丸喜先生は、ずっと僕を正面から捉え続けていた。